令和４年度

研究集録

付 研究論文集

『　たからさがし　』
熊谷市立久下小学校 第１学年
小　川　拓　美　さん

『　みんなで運動　』
戸田市立戸田東中学校 第１学年
竹　内　え　り　さん

埼玉県連合教育研究会

ホームページ
QR コード

あ　い　さ　つ

埼玉県連合教育研究会
会長　澤　田　純　一

会員の皆様におかれましては、日ごろより埼玉県連合教育研究会の各事業に対しまして、ご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

さて、我が国を取り巻く社会情勢は、「平成の敗北」「失われた30年」など、経済成長もしないまま時間が失われています。そして、そこに誰も経験したことのない新型コロナウイルス感染症の蔓延で国家100年の計といわれる教育までもが大きな打撃を受けました。

さらに、ウクライナ情勢はデフレスパイラルからスタグフレーションを生み、先行き不透明な社会情勢に一層拍車をかけています。このような急速に変化していく時局における教育の役割を念頭に、GIGAスクール構想により整備されたICT機器等を活用しながら、教科等における授業改善を図っていくことが喫緊の課題となっています。

本研究会におきましても、ICT機器の活用を図るため、本年度より各教科等研究団体の予算に「ICT運用費」を追加し、オンラインによる会議の実施やホームページによる情報提供、メール等による文書収受など先生方の働き方改革に貢献できるようにしています。

そのような急激な変化を求められる状況下でも、教科等研究団体及び地域教育研究団体並びに研究論文入賞者の皆様のご協力を得て、『研究集録付研究論文集』が年度内に刊行できましたことに心より感謝申し上げます。

本年度の『研究集録』は、新型コロナウイルス感染症対策を万全にしながらICT環境を有効に活用し、研究を続けようとする各研究団体及び会員の皆様方の努力と叡智を収録することができました。

具体的には、19の教科等研究団体及び埼玉大学教育学部附属小・中学校並びに17の地域教育研究団体が掲げた研究主題に向け、感染症対策を適切に講じ、組織的で計画的な研究活動の概要を集録しています。対面形式での会議等を徐々に再開する中で、研究協議会に向けてのホームページからの資料の事前配付や研究協議会の小集団化をはじめ、オンライン等による会議等の開催、活動時期の変更等、これまでの２年間の経験を基に創意工夫を加え研究を推進する姿が具体的に記されています。

研究論文は、44年前の昭和53年度から募集を始め、入賞された研究論文を『研究論文集』として発刊していました。平成14年度から平成20年度までは『研究集録』とは別に別冊として論文集として刊行していましたが、平成21年度からは、『研究集録』と『研究論文集』を合冊とし、『研究集録付研究論文集』として発刊しています。

研究論文の応募数は、昨年度よりも７編多く、計18編の研究論文の中から、厳正な審査を経て入賞されました研究論文（最優秀賞・入選・佳作・新人奨励賞）５編の論文を掲載しました。応募されました18編の研究論文は、日々の授業の中での児童生徒の目線にたった課題解決の実践であり、指導と評価の一体化を重視した授業改善の研究であり、独自性・独創性のある創意に満ちた研究論文の数々でした。会員の皆様におかれましては、今後も、日々の授業改善の足跡を積極的に研究論文としてご応募くださるよう期待しています。

会員の皆様には、是非、この『研究集録付研究論文集』に目を通していただき、学習指導の改善や組織体としての研究推進の在り方の検証を進めながら、「令和の日本型学校教育」を担う学び続ける教師の実現に向けた教育研究活動を推進してほしいと願っています。

なお、この『研究集録付研究論文集』は、各学校等に1冊ずつの配付となりますが、本研究会のホームページ【URL　https://sairenkyou.jp】の「刊行物案内」からスマートフォン等でも気軽にアクセスすることができますので、ご覧いただき、日々の研究活動をより一層充実したものにしていただけますことを期待しております。

結びに、新型コロナウイルス感染症の収束を祈念しつつ、本研究会のために常に温かいご指導、ご支援を賜りました埼玉県教育委員会及びさいたま市教育委員会並びに公益財団法人日本教育公務員弘済会埼玉支部の皆様方に衷心より御礼申し上げ、刊行のあいさつといたします。

目　　次

あ い さ つ……埼玉県連合教育研究会会長　澤田　純一……1

研 究 集 録

Ⅰ　教科等研究団体等の研究

1　国語教育……埼玉県国語教育研究会……4
2　書写教育……埼玉県書写教育研究会……8
3　社会科教育……埼玉県社会科教育研究会……12
4　算数・数学教育……埼玉県算数数学教育研究会……16
5　理科教育……埼玉県理科教育研究会……20
6　音楽教育……埼玉県音楽教育連盟……24
7　図画工作・美術教育……埼玉県美術教育連盟……28
8　保健体育教育……埼玉県保健体育研究会……32
9　英語教育……埼玉県英語教育研究会……36
10　道徳教育……埼玉県道徳教育研究会……40
11　特別活動……埼玉県特別活動研究会……44
12　進路指導・キャリア教育……埼玉県進路指導・キャリア教育研究会……48
13　視聴覚教育……埼玉県学校視聴覚教育連絡協議会……52
14　教育心理・教育相談……埼玉県教育心理・教育相談研究会……56
15　特別支援教育……埼玉県特別支援教育研究会……60
16　学校図書館教育……埼玉県学校図書館協議会……64
17　中学校技術・家庭科教育……埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会……68
18　小学校家庭科教育……埼玉県小学校家庭科教育研究会……72
19　生活科・総合的な学習の時間教育……埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会……76
20　本校の研究の取組について……埼玉大学教育学部附属小学校……80
21　埼玉大学教育学部附属中学校……埼玉大学教育学部附属中学校……84

Ⅱ　関東地区教育研究発表大会　埼玉大会の報告

1　第56回関東小学校道徳教育研究大会埼玉大会、第61回埼玉県道徳教育研究大会さいたま大会……90

Ⅲ　地域教育研究団体の研究

1　さいたま市教育研究会……92
2　川口市教育研究会……94
3　草加市教育研究会……96
4　新座市教育研究会……98
5　伊奈町教育研究会……100
6　飯能市教育研究会……102
7　日高市教育研究会……104
8　越生班教育研究会……106
9　玉川班教育研究会……108
10　川島教育研究会……110
11　秩父教育研究会……112
12　児玉郡本庄市教育研究会……114
13　熊谷市教育研究会……116
14　加須市教育研究会……118
15　春日部市教育研究会……120
16　八潮市教育研究会……122
17　宮代町教育研究会……124

研究論文集

Ⅰ　令和４年度研究論文入賞者・応募者等一覧……128

＜　最 優 秀 賞　＞《個人研究》
「ＳＯＳの出し方に関する教育」の実践
～児童・保護者を対象とした「自殺予防教育」の研究～【学級活動】……130
上尾市立東小学校　教諭　大久保　裕和

＜　入　　選　＞《個人研究》
小学校外国語科の「話すこと（発表）」における「思考・判断・表現」の評価に関する研究
～比較可能性に基づいたより信頼性の高いルーブリックの開発を目指して～【外国語科】……136
さいたま市立下落合小学校　教諭　有江　　聖

＜　佳　　作　＞《個人研究》
小学校第３学年における投能力向上の実践
～「走・跳の運動」領域に横断的に取り入れたヴォ―テックスフットボールの有効性の検討～【体育】……142
吉川市立三輪野江小学校　教諭　楠　聖次郎

＜　佳　　作　＞《個人研究》
運動好きを育て、学習機会の保障と協働的な学びを実現する
～カリキュラム開発と評価基準表（ルーブリック）の作成～【体育】……148
越谷市立越ケ谷小学校　教諭　寺川　耕平

＜　新人奨励賞　＞《個人研究》
「書く意欲」と「書く技能」を高める指導法の研究
～意見文の授業実践を通して～【国語科】……154
熊谷市立新堀小学校　教諭　小川　祐太郎

Ⅱ　令和５年度研究論文募集要領等……160

令和４年度埼玉県連合教育研究会役員等名簿……164

あ と が き……編集委員長　越智　宏明……169

○　**表紙絵**　「令和４年度身体障害者福祉のための第64回埼玉県児童生徒美術展覧会」埼玉県連合教育研究会会長賞受賞
・「たからさがし」　熊谷市立久下小学校　　第１学年　小川　拓美　さん
・「みんなで運動」　戸田市立戸田東中学校　第１学年　竹内　えり　さん

○　**表紙の題字**　埼玉県連合教育研究会　上亟　啓介　元会長

令和４年度

研究集録

Ⅰ　教科等研究団体の研究

1　埼玉県国語教育研究会 …… 4
2　埼玉県書写教育研究会 …… 8
3　埼玉県社会科教育研究会 …… 12
4　埼玉県算数数学教育研究会 …… 16
5　埼玉県理科教育研究会 …… 20
6　埼玉県音楽教育連盟 …… 24
7　埼玉県美術教育連盟 …… 28
8　埼玉県保健体育研究会 …… 32
9　埼玉県英語教育研究会 …… 36
10　埼玉県道徳教育研究会 …… 40
11　埼玉県特別活動研究会 …… 44
12　埼玉県進路指導・キャリア教育研究会 …… 48
13　埼玉県学校視聴覚教育連絡協議会 …… 52
14　埼玉県教育心理・教育相談研究会 …… 56
15　埼玉県特別支援教育研究会 …… 60
16　埼玉県学校図書館協議会 …… 64
17　埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会 …… 68
18　埼玉県小学校家庭科教育研究会 …… 72
19　埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会 …… 76
20　埼玉大学教育学部附属小学校 …… 80
21　埼玉大学教育学部附属中学校 …… 84

1　国　語　教　育

埼玉県国語教育研究会

Ⅰ　研究主題と事業

1　研究主題

［生活に生きて働く国語の能力の育成をめざす授業の創造］

2　事業

・国語教育夏季研修大会 （オンライン開催）
・国語教育研究発表大会 （オンライン開催）
・地区別国語科授業研究会
・研究委嘱校授業研究会
・中学校国語学力向上対策事業（学力調査）
・「令和４年度国語教育研究集録」の発刊

Ⅱ　活動状況

1　新旧合同理事研修会　６月１日㈬

⑴　令和３年度会務報告
⑵　令和３年度決算報告
⑶　令和３年度監査報告
⑷　新役員及び常任理事の選出
⑸　令和４年度研究主題案及び研究方針案についての審議
⑹　令和４年度事業内容案及び事業計画案についての審議
⑺　令和４年度予算案についての審議
⑻　講　演
三郷市立早稲田中学校　校長　檜垣　幸久　先生

2　国語教育夏季研修大会提案者・司会者打合せ会　７月８日㈮

3　国語教育夏季研修大会　８月５日㈮

⑴　分科会　小学校３　中学校２　分科会
⑵　講　演
文教大学教育学部
学校教育課程国語専修
教授　甲斐　雄一郎　先生
演　題　「その先の、もっと先まで」
⑶　参加者数　約 180名

4　地区別国語科授業研究会

⑴　三郷市立丹後小学校　２月７日㈫
⑵　川越市立寺尾中学校　２月１日㈬
⑶　鴻巣市立馬室小学校　11月４日㈮
⑷　寄居町立男衾中学校　10月28日㈮

5　研究委嘱校研究発表会

・春日部市立幸松小学校　10月４日㈫

6　国語教育研究発表大会発表者・司会者・指導者打ち合わせ会　12 月 13 日㈫

7　国語教育研究発表大会　２月 14 日㈫

⑴　分科会　小学校３　中学校１　分科会
⑵　講　演
教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官　大塚　健太郎　先生

Ⅲ　研究内容

1　国語教育夏季研修大会

⑴　提案者・提案主題名・指導者・司会者

○小学校　①分科会
・提案者１
小田木　香純　上尾市立原市小学校
「自ら学び、考え、生き生きと自分自身を表現できる児童の育成～言葉で表現できる力を高める授業・活動を通して～」
・提案者２
新井　司　川越市立今成小学校
「自ら学ぶ姿勢をもち、進んで表現しようとする児童を育てる国語科指導～学ぶ・広げる楽しさを味わえる授業づくり～」
・指導者　青木　大亮　熊谷市教育委員会
・司会者　井上　直美　秩父市立南小学校

○小学校　②分科会
・提案者１
關根　敏史　深谷市立幡羅小学校
「自らの思いや考えを表現することができる児童の育成～「読むこと」「書くこと」を関連させた学習指導の工夫～」
・提案者２
中立　裕子　久喜市立久喜北小学校
小澤　綾華　春日部市立武里南小学校
「子どもが自分の思いや考えをのびのびと表現できる指導の工夫」
・指導者　橋爪　優　南部教育事務所
・司会者　野澤　由理　東松山市立桜山小学校

○小学校　③分科会
・提案者１
郷　紫織　さいたま市立高砂小学校
「学び続ける子どもを育む教育課程の工夫・改

善～みんなが取り組み、みんなで好きになる学びの創造～」

・提案者２

宮本　麻紀子　　川口市立並木小学校

「自力で読み、自分の考えを伝え合う児童の育成～思考力・判断力・表現力を高める、国語の授業づくり～」

・指導者　伊藤　秀一　　狭山市立入間川小学校

・司会者　野呂　章子　　幸手市立幸手小学校

□中学校　①分科会

・提案者１

内田　翔太　　越生町立越生中学校

「自分の考えを伝え合い、共に学び合う授業実践～主体的・対話的で深い学びを目指して～」

・提案者２

吉野　泰司　　熊谷市立富士見中学校

「自ら進んで考え、学び合い、ともに高め合える生徒の育成～相手を意識した効果的な伝え方、話し方を考える授業～」

・指導者　本橋　幸康　　埼玉大学

・司会者　山崎　晧陽　　上里町立上里中学校

□中学校　②分科会

・提案者１

山田　奈穂　　加須市立加須東中学校

「自分の思いを相手に伝えるために言葉や表現を工夫する生徒の育成～加須東中生と川口東中生で短歌を創作し、鑑賞し合う活動を通して～」

・提案者２

成田　和基　　さいたま市立土呂中学校

「国語科における効果的なＩＣＴの活用方法について～日常的にＩＣＴを活用する方法とその実践～」

・指導者　小山　裕之　　宮代町立東小学校

・司会者　小澤　拓馬　　川越市立大東中学校

⑵　講演概要

文教大学教育学部学校教育課程国語専修

教授　甲斐　雄一郎　先生

演　題　「その先の、もっと先まで」

◎発端

学校教育に関連した様々な行事への参加を通し、世界の第一線で活躍されている方の話を聞く中で、活躍の場こそ異なれど、仕事に対する構えやゴール設定の仕方に共通点があることに気が付く。

①発端１　小学校の研究主題

・春日部市立備後小学校

研究主題

「豊かに伝え合う力を高める国語教育の充実」

→児童が幸せな言語生活を送るために、どんな国語の力を身に付けたいか協議した。

②発端２　筑波大学附属学校教育局兼務の経験から

・山海　嘉之　氏　ロボットスーツの開発→目指すのはロボットスーツを普及させること、困っている人を幸せにすることであり、完成はゴールではない。

・清水　孝雄　氏　疫病対策の薬開発→目指すのは本当に必要としている人へ薬を届けることであり、完成はまだゴールではない。

（共通点）国語教育の充実、ロボットスーツの開発、疫病対策の薬の完成はゴールではなくプロセス。自分が成し遂げたことで人々を幸せにすることがゴールである。

→このようなゴール設定の仕方は私たちの仕事の在り方にも新たな奥行きをもたらすだろう。

１　国語教育の新しい課題

①新しい課題１　－学習指導要領から、国語教育の奥行きについて考える－

・第７次（1998）・第９次（現行）学習指導要領の比較を行い、共通点と新しく加わった点を挙げることで、国語教育の意味、目標の拡張等、目指しているものがクリアに見えてくる。

→倉澤　栄吉（1949）『国語教育の方法』

「ことばの三角形」との共通点を指摘

・契機としてのPISA

読書活動　日本の教育行政に相当の影響を与えたPISA2000では学習をめぐるさまざまな質問項目があるが、その一つ「本の内容について人と話すのが好きだ」（表2.5.11）という問いがある。この結果については、総合読解力得点において大きな開きがあった。 国語の授業時数の増大が見込めない以上、読解力の向上のためには国語の授業時間以外においても「本の内容について人と話すことが好きだ」という学習者として育てることが国語科の新しい課題として浮上する。

＊PISAにおける「読解力」の定義　国立教育政策研究所（2010）『生きるための知識と技能4－OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2009年調査国際結果報告書』

「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、これに取り組む力」

・PISA出題の典型例

＊テキストの目標・目的を読み取る　正答率高い

＊理由の読み取り　正答率低い／無回答率高い

＊どちらの意見が良いか評価する
正答率低い／無回答率高い。
→ポイントが低かった論の進め方・評価が学習指導要領に反映されている。

2　目的と内容をめぐって　情報の扱い方
―全国学力学習状況調査から―

A　意見と根拠　（考えと理由や事例）など
小３・４／中１
B　比較や分類の仕方など　小３・４／中１
C　具体と抽象など　中２・３

①「A　意見と根拠」
小学校2014Ｂ「卒業文集はパソコンを使ってつくるか、手書きにするか」
＊パソコン派、手書き派ともに「取り組みやすい」という意見の根拠を具体化する

②「B　比較や分類の仕方など」
2009年度Ｂ「最近の六年生は、家の中のそうじや整頓によく取り組んでいる」という立場からの発表
＊どこに注目して論を立てているのか自覚する

③「C　具体と抽象など」
中学校2008年度Ｂ３「全然」の用法
／中学校2014年度Ａ４
＊具体的な意図・内容　自分が相手から「何を聞くか」を知っていること

3　古典化への参加

①「古典への参加」とは：外山　滋比古（2003）『外山滋比古著作集３　異本と古典』みすず書房
＊「作者の手を離れたときに古典作品となったのはかつて存在しない。古典は後になって現れる読者によってつくられる。」
＊「諸説紛々の中をくぐってきて初めて作品は古典となる。ひとときはどんなにもてはやされようと、構成の人が新しい意味を読み取ることができなくなったような作品は、歴史の中でおのずから姿を消す。古典は本来、異説を怖れない。それどころか、それによって、雪だるまのように大きくなっていくのである」
→読者の一人一人が古典に「新しい意味を読み取ること」によって、古典は歴史に埋没することなく新しい時代においても読者を獲得し続ける。

②作品の翻訳と「古典化」『星の王子さま』
翻訳者により解釈に幅（異説）が出る→古典化しつつある作品。

③文化的実践に向けての文化的実践としての参加
東アジアの共通教材「論語」と共通する指導内容（と壁）
→内容を現代の生活や社会に当てはめてみる（論語から新しい意味を見出す営為に相当する）
・「論語」を読みエッセイを書く（中国、台湾、日本の中学生）　※（　）内は国ごとの傾向
＊中国大陸　中学生のエッセイ
（議論型：論説文的）
＊台湾　中学生のエッセイ
（説明型：ある言葉・事柄について定義しようと試みている）
＊日本　中学生のエッセイ
（物語型：おおむね時系列に進む。筆者にとっての「事件」がある）
→各国にそれぞれのエッセイを読ませるも、自国のエッセイを好む声が多かった。評価は国境を超えない印象。各国の作品交流を通して物の見方を広げることを目指す。
・国境を越える学習　漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」鑑賞文
＊中国と日本の鑑賞文を交流→他国の鑑賞文のよさを見付けていた。
・佐伯胖（1983）『わかるということの意味』岩波　書店
＊「上下関係」と「三角形の関係」より
→上下関係（トップダウン型）の学習ではなく、三角形の関係の学習が必要となってくる。

4　これからの課題

中国／日本、中学生／大学生
…学習比較（諸説紛々の様相）
・古典に親しみ学習成果の交流を実現させようとする長期的な展望（ゴール）
→そのためには作品群を分析し、日本・中国、それぞれでの指導に生かすための枠組みを見出し、身に付ける必要がある。
→しかし、新しい学習指導要領では随筆を書くことが指導事項に挙げられているものの、その具体的な方法について、現状では国語教育界に定まった方法はない。分析法・指導法などを構想していく。
→中学生より大学生の作品の方が、当然レベルが高い。中学生、大学生の作品を比較することによって、違いを明らかにし、どのようにレベルを引き上げていくかも構想していく。

２　国語教育研究発表大会

⑴　発表者・研究主題名・指導者・司会者
〇小学校　①分科会
・発表者

林　佑理可　　上尾市立大石北小学校
「『自分の考えを書いて表現できる児童の育成』
～論理的思考力の向上を目指して～」
・指導者　中村　ひとみ　県立総合教育センター
・司会者　森谷　美伸　　越谷市立南越谷小学校
○小学校　②分科会
・発表者
小津　裕介　　新座市立野寺小学校
「『単元を貫く言語活動』を通し、『資質・能力』を育む国語科の授業～「主体的・対話的で深い学び」を実感しながら「知識・技能」を獲得する子をめざして～」
・指導者　戸田　　功　　埼玉大学
・司会者　大澤　理恵　　川越市立山田小学校
○小学校　③分科会
・発表者
山田　将司　　川口市立里小学校
「『問い』からはじまる国語科授業づくり
－「見取る」ことを大切にして－」
・指導者　細田　達也　　鴻巣市教育委員会
・司会者　松嶋　静香　　鴻巣市立鴻巣北中学校
□中学校分科会
・発表者
富樫　勇介　　寄居町立男衾中学校
「生徒が主体的に取り組む古典指導」
・指導者　小野塚　祐一　鶴ヶ島市立富士見中学校
・司会者　今井　祐輔　　秩父市立大田中学校

3　中学校国語学力調査（第 62 回）

⑴　ねらい

中学生一人一人の国語学力の実態や問題点を把握し、学習指導の工夫・改善に役立てる。

なお、本年度より中学校第２学年のみの実施となっている。

⑵　調査の分野・領域・資料文

①文学的文章の読解・鑑賞
＜資料文＞
『スネークダンス』　　（佐藤　まどか）
◎文章中の登場人物の心情や展開を、表現に即して読み取る力を確かめる問題を出題した。

②説明的文章の読解
＜資料文＞
『やらかした時にどうするか』（畑村　洋太郎）
◎文章内容や構成、要旨等を、正しく読み取る力を確かめる問題を出題した。

③放送による問題（話合い音声を聞く）
＜テーマ＞
お昼の放送についての放送委員の話合い
◎話題の中心となる内容や意見の根拠等の話し合いの概要を聞き取る問題や、話合いの特徴や工夫をつかむ問題を出題した。

④言葉の特徴や使い方に関する事項
＜漢字の読み取り＞
皆無・就く・謝る・幾日・縁取る
＜漢字の書き取り＞
群がる・照明・収める・茨城・乾く
＜文法＞
修飾・被修飾の関係を問う問題を出題した。
＜情報の扱い方＞
文章から読み取った内容を基に、座標軸を用いて整理する問題を出題した。

⑤課題作文
＜テーマ＞
ビデオ通話やウェブ会議で気を付けること
→グラフを読み取り、事例や根拠を挙げて自分の考えを構成に注意して書く。
◎生徒にとって身近な話題や場面を設定し、資料から読み取ったこと等を踏まえて、自分の意見を述べる問題を出題した。

⑶　参加校状況

①参加校 ７校
②地域別参加校数
さいたま…１　　南　　部…１
西　　部…１　　北　　部…１
東　　部…２　　国県私立…１
③参加生徒数　921名

⑷　国の教育施策との関連

調査結果を国の教育施策（全国学力・学習状況調査）と関連させ、より実生活に即した問題を作成した。

文学的文章の読解では、表現の効果について授業中の話し合いのやりとりを取り入れ、説明的文章の読解では、文章から読み取った内容を実生活に置き換えて考える問題を作成した。

放送による問題、課題作文では、生徒にとって身近なテーマを設定し、国語の資質・能力が実生活に生かされていることが実感できるような問題づくりを行った。

⑸　結果の報告

埼玉大学、県教育委員会の指導・助言を得て集計処理し、問題ごとの正答率、誤答分析、指導のための方策等を含めて報告を行う。また、報告書（Ａ４判）を実施中学校宛に送付する。

２　書　写　教　育

埼玉県書写教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

１　研究主題

「書字文化を育む書写教育」

２　主題設定の理由及び方針

コロナ禍に伴う新しい生活様式への移行、ＤＸの急速な進展、働き方改革など、社会はめまぐるしく変化しています。この変化の激しい社会を生き抜いていくためには、これまで蓄積してきた教育財産を継承しつつ「不断の学び」による新たなことへの挑戦が求められています。平成29年告示の学習指導要領がすでに全面実施となっておりますが、書写については、新たに小学校第１・２学年で「水書用筆」、中学校第３学年で「文字文化」が加わりました。学校では、新学習指導要領に基づいた指導について、不断の学びをしながら授業改善を行っていることと存じます。その一方で、国のGIGAスクール構想による一人一台端末の導入等により、児童生徒が文字を書く機会が減少しており、書字文化が失われてしまうのではないかという懸念も拭い切れません。そこで、本年度の研究主題を昨年度に引き続き、「書字文化を育む書写教育」としました。

本年度、本研究会では、特に小学校低学年の水書用筆を用いた指導方法と小学校・中学校、さらに高等学校の国語科、芸術科書道へと繋ぐことができる文字文化に興味をもたせる書写教育を目指し、実技研修会や授業研究会などを通して教員の指導力の向上を図りました。

８月３日㈬には、三郷市立彦糸小学校を会場に、夏季実技研修会を３年ぶりに開催しました。参加人数を制限するなど、新型コロナウイルス感染防止対策を講じながら、冷房の効いた広い体育館で実施することができました。午前中は「書写指導の基本」として、書写授業の進め方、水書用筆を使った授業、毛筆による筆使いの練習などの研修を行いました。タブレットの効果的な活用方法についても示唆がありました。午後は、「書きぞめの基本」という内容で、本年度の書きぞめの課題の書き方について、実技を中心に研修を行いました。

なお、授業研究会については、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本年度も研究集録での誌上発表としました。

結びに、平素より埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会の皆様に御指導と御協力を賜り、また、各地区の先生方の御協力に厚く御礼申し上げます。

今後も、新学習指導要領の趣旨に沿った書写授業の創造と効果的な指導方法の普及を目指し、本研究会の取組を充実させていく所存です。

Ⅱ　活動状況

１　役員会の概要

⑴　４月27日㈬ 理事会　　県民活動総合センター
　〇県硬筆展覧会開催要項・審査規程審議

⑵　５月13日㈮ 総会・研究協議会・講演会　【リモート】
　〇総会・研究協議会・講演会

⑶　６月1日㈫ 常任理事会　【リモート】
　〇県硬筆展覧会本部・開催地区協議会
　〇本部事務分担及び計画
　〇県書きぞめ展覧会語句選定・開催要項案作成

⑷　６月24日㈮ 理事会　　戸田市文化会館
　〇県硬筆展覧会作品審査会
　〇県書きぞめ展覧会開催要項案審議

⑸　10月４日㈫ 理事会　　県民活動総合センター
　〇県書きぞめ展覧会開催要項・審査規程審議

⑹　11月16日㈬ 常任理事会　　飯能市民体育館
　〇県書きぞめ展覧会本部・開催地区協議会
　〇県硬筆展覧会語句選定・開催要項案作成

⑺　１月25日㈬ 書きぞめ審査会　　飯能市民体育館
　〇県書きぞめ展覧会作品審査会

２　研究発表会の概要

⑴　小中高等学校書写書道教育研究協議会　【リモート】
　〇期　日　令和４年５月13日㈮
　〇研究発表者・発表テーマ
　　①「小学校低学年の水書指導について」
　　深谷市立常磐小学校教諭　　下山　幸子　先生
　　②「主体的・対話的で深い学びの具体化を図る書写授業の実践」
　　川口市立安行東中学校教諭　　大野　絵美子　先生
　〇講　演
　　・講師　文教大学非常勤講師　荻田　哲男　先生

３　研修会の概要

⑴　実技研修会　【三郷地区】

⑵　埼玉県書写教育研究会委嘱授業研究会

【北本地区】 中止

４　展覧会の概要

⑴　第60回硬筆展覧会　【誌上展】

〇出品点数

・特別賞	小学校	７７点
	中学校	３６点
・推薦賞	小学校	１７８点
	中学校	８３点
・特選賞	小学校	1,０３１点
	中学校	４７４点
・優良賞	小学校	1,２９０点
	中学校	５９４点
	合　計	3,７６３点

〇課　題　11頁参照

⑵　第75回書きぞめ展覧会　飯能市民体育館

〇出品点数

・特別賞	小学校	３４点
	中学校	２２点
・推薦賞	小学校	８０点
	中学校	４９点
・特選賞	小学校	４５６点
	中学校	２８６点
・優良賞	小学校	５７２点
	中学校	３５８点
	合　計	1,８５７点

〇課　題　11頁参照

⑶　令和４年度教職員書道展覧会［中止］

５　研究刊行物

⑴　「研究集録」第60号の発行

※令和４年度硬筆展覧会参考手本揮毫者

小１	幸手市立上高野小学校	中島奈緒子	先生
小２	幸手市立上高野小学校	中島奈緒子	先生
小３	所沢市立牛沼小学校	三上　陽照	先生
小４	さいたま市立泰平小学校	齊藤　裕子	先生
小５	さいたま市立泰平小学校	齊藤　裕子	先生
小６	所沢市立牛沼小学校	三上　陽照	先生
中１	杉戸町立杉戸中学校	関根　祐介	先生
中２	ときがわ町立玉川中学校	福田　英正	先生
中３	杉戸町立杉戸中学校	関根　祐介	先生

※令和４年度書きぞめ展覧会参考手本揮毫者

小３	幸手市立上高野小学校	中島奈緒子	先生
小４	ときがわ町立玉川中学校	福田　英正	先生
小５	ときがわ町立玉川中学校	福田　英正	先生
小６	北本市立東小学校	熊切　優子	先生
中１	所沢市立牛沼小学校	三上　陽照	先生
中２	埼玉県書写書道教育連盟	新井　和徳	先生
中３	杉戸町立杉戸中学校	関根　祐介	先生

Ⅲ　研究内容

三郷支部研究発表

研究テーマ

「書字文化に親しみ、尊重する態度を育てる書写指導」

１　はじめに

インターネットが発達した現代において、手書きで文字を書くという機会は著しく減少している。授業においてもICT機器の導入が始まり、教員でさえ板書よりパワーポイント等を使うことが増えている。社会的にも文書作成や連絡はICT機器を使用する場面がほとんどで、社会に出るにつれ、手書きで文字を書く機会はより少なくなっている。

しかし、手書きの文字には、それでしか表現できない人間らしい温かみがあり、忘れてはならないものである。教育基本法、学校教育法にあるとおり伝統と文化を尊重する態度を養うために書写の指導は欠かせないものである。

近年、タブレット端末等の電子機器類の普及により、「紙に絵を描く」「紙に文字を書く」機会が減少傾向にあるためなのか、小学生では、筆圧が極端に弱かったり、力を入れすぎて波を打ってしまったり、力の加減が分からず苦戦する児童も多かった。姿勢を正して、正しい鉛筆の持ち方で書いている児童は、初めから整った文字を書くことができている傾向が見られた。

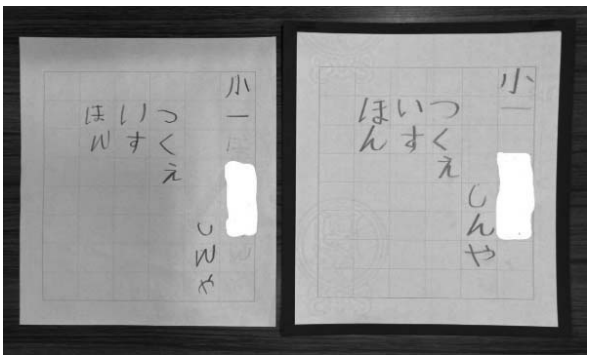
書写の指導は各学年で行われるが、姿勢や鉛筆の持ち方については主に小学校第１学年及び第２学年で行われている。小学校学習指導要領国語科の第１学年及び第２学年の『書写に関する事項』においては、「ア姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。」と記されている。

小学校第１学年の国語科の教科書では、先頭ページに姿勢や鉛筆の持ち方について記載されている。このことから、書写を学習するに当たり、姿勢や鉛筆の持ち方は基本であり、学習のはじめにしっかりと指導することが大事であることが分かる。

２　取組内容

⑴　硬筆展・書きぞめ展への参加

基準、指導のポイントを基に指導を行い、書写の授業の中核を担っている。



⑵　学年別の指導

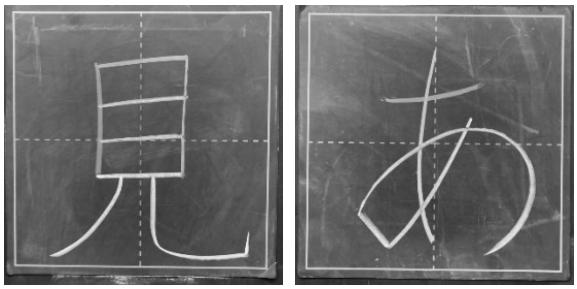
①小学校低学年における基礎指導

・正しい姿勢の指導

・鉛筆の持ち方の指導

・筆順・字形の取り方の指導

・運筆指導



②中学校における指導

○１学年硬筆：楷書ではっきりとした字を書く

○１学年書きぞめ：楷書と行書の違いを意識して書く

○２学年硬筆：横書きを意識して書く

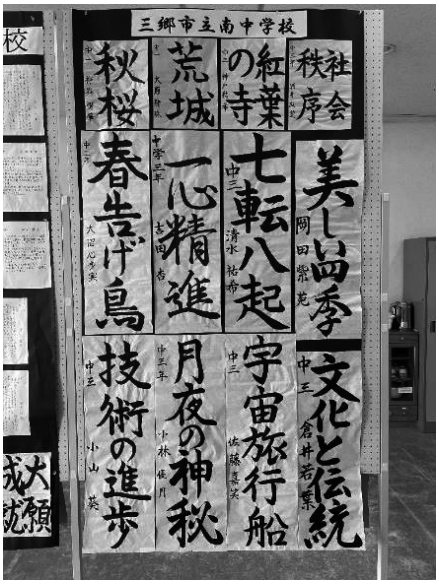
○２学年書きぞめ：点画の連続や筆脈、文字と文字のつながりを意識して書く

○３学年硬筆：行書体の特徴を理解して書く

○３学年書きぞめ：文字がバランスよく収まるように、配列や余白を意識して書く

⑶　地域の行事へ参加

中学校では、生徒の作品を三郷市で行われる市民文化祭に出展し、地域の行事に参加、発表の場とし、生徒の作品を三郷市で行われる市民文化祭に出展し、地域の行事に参加、発表の場としている。校内で有志を募集し、自由なテーマで書かせることによって、お手本のとおりに書く書写の授業とは雰囲気の異なる書道を楽しんでいる。



３　終わりに

児童生徒は硬筆、書きぞめの二つの取組から書写文化に触れ、親しんでいる。静かな落ち着いた環境で正対して文字に向き合うことで、日常的に使っている文字を書くことについて、改めて興味・関心をもたせることを目標とした。

小学校生活において、鉛筆を正しく持つことは学力を支える基本であるとともに、日本の伝統文化の一つである「書」の基本である。小学校生活の第一歩である１年生の間に基本的な指導を徹底し、次の学年につなげていくことが必要である。また、低学年の児童は、文字を書くことが楽しいと感じることでより、丁寧に書こうとする様子も見られる。これからも、細かい部分でもよさを見付け、児童に伝えていくことで自信へと繋げる。そして、美しい字形で整った文字を書いていきたいという意識の向上を図っていく。

一方、中学校の書写の授業は、国語の授業内で行わなければならない特性上、十分な時間が確保できているとは言い難い。その結果、年に２回の硬筆展、書きぞめ展のための書写になってしまっている現状がある。文字は、ほぼすべての人にとって一生書き続けていくものである。生徒が書写にもっと興味をもち、その楽しさに触れられるよう、工夫した指導や、書写と国語を横断した授業を模索していく必要があるだろう。

令和４年度　硬筆・書きぞめ展覧会課題

第60回硬筆展覧会課題

小一　しみず　ゆうき

つくえ
いす
ほん

小二　ながやま　いおり

友だちと　土手を
さん歩しました。
シロツメクサの　ふ
さふさした　花が　き
れいでした。

小三　太田　ゆうすけ

六月七日（火）
そうじの時間に、まどを
ピカピカにしました。
教室が明るくなったよう
な気がしました。

小四　鳴海広幸

理科の時間に作った
モーターカー
電池の向きや
数を変えると
走り方が変わる
電気のふしぎな力

小五　高橋英一

わたしたちが毎日使っている
漢字は、今から三千年以上も前
に、中国で生まれました。
日本では、その漢字をもとに
して、ひらがなやカタカナが作
られました。

小六　大和風香

草木染めは、天然の素材を用いた
染色です。野菜やフルーツの皮、花
や葉などの身近な物で染めること
ができます。
材料によって仕上がりの色合いがち
がい、家庭でも手軽に楽しめます。

中一　佐藤英樹

拝啓
色彩あふれる紅葉の美しさに心弾む季節となりました。杉田先生は元気でお過ごしでしょうか。
私は、楽しい学校生活を送っています。
さて、私たち吹奏楽部は、十一月三日に町の文化祭で演奏することになりました。吹奏楽部の一大イベントです。もし、お時間がありましたら、いらしてください。
またお会いできる日を楽しみにしております。
敬具

中2　川村和実

2015年に国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）には17のゴールが設定されています。
すべての人たちにとってよりよい世界をつくるために、貧困や健康、教育、気候変動による影響などさまざまな分野での取組が始まっています。
私たちの未来を守るために、自らの行動を見直して美しい地球を守っていきましょう。

中三　中村美紀

はるばると海を越えて、この島に着いた時の私の憂愁を思いたまえ。夜なのか昼なのか、島は深い霧に包まれて眠っていた。私は目をしばたいて、島の全貌を見すかそうと努めたのである。裸の大きい岩が急な勾配を作っていくつもいくつも積み重なり、ところどころに洞窟の黒い口の開いているのがおぼろに見えた。これは山であろうか。一本の青草もない。
（太宰治「穂ヶ島」より）

第75回書きぞめ展覧会課題

小三　高野美歩　しぜん

小四　和田洋平　なの花

小五　田中広子　明るい声

小六　森川美香　緑の大地

中一　古田和哉　書の文化

中二　滝口勇太　満天の星

中三　栗田桃子　豊かな感性

３　社　会　科　教　育

埼玉県社会科教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

○ 小学校

「社会がわかり、社会にかかわる子供を育てる社会科学習」

○ 中学校

「よりよい社会の創り手を育てる社会科学習」

社会科教育の今日的課題は、当面する社会的事象を自分のこととして受け止め、習得した知識や技能を活用して問題の解決にあたり、社会における自分の在り方を確かにしていく能力をいかに身に付けるかである。

また、社会科の本質は、単に社会的事象に関する事項を数多く覚えることではなく、社会的事象のもつ社会的意味を追究することによって社会認識を深め、自らの生活の在り方を確かなものにしようとすることである。

本県の社会科教育は、戦後まもなく全国に先駆けて発表された川口プランに始まり、その精力的な実践研究は今日に受け継がれ、数多くの成果を挙げてきた。

本研究会は、社会科教育の今日的課題と本質的課題に対し、これまでの研究成果を生かして研究・実践を行っている。

小学校では、平成12年度に研究主題を「人・夢…21世紀」と掲げ、「全国小学校社会科研究協議会」を開催した。平成17年度には、研究主題を「ゆたかな社会をつくりだす、生きてはたらく力を育てる社会科学習」と掲げた「関東地区小学校社会科研究協議会」を開催し、それぞれ成果を挙げた。

これらの研究成果を踏まえ、平成30年度に「社会がわかり、社会にかかわる子供を育てる社会科学習」を主題とし、10月25日㈭・26日㈮に川口市の４会場で、「第56回全国小学校社会科研究協議会研究大会埼玉大会」を開催し、埼玉県から最新の研究を発信することができた。そして、本年度も、これらの成果を引き継ぎ、さらに深めるべく、ブロック別研究授業会や研究発表大会等を通して、県内の多くの先生方によって熱心な実践が行われた。

中学校では、平成13年度に研究主題を「生徒がつくり自ら学ぶ社会科学習の在り方」と掲げた「関東ブロック中学校社会科教育研究大会」（加須市）を、平成21年度には、研究主題を「学ぶ楽しさを味わい、わかる喜びを体感できる社会科学習」と掲げた「関東ブロック中学校社会科教育研究大会」（熊谷市）を、平成29年度には、「追究する力を育てる社会科学習―主体的・協働的に学ぶ学習の充実―」と掲げた「関東ブロック中学校社会科教育研究大会」（川越市）をそれぞれ開催し、成果を挙げた。それをさらに発展させるべく、令和５年度に「よりよい社会の創り手を育てる社会科学習―社会的な見方・考え方を働かせた深い学びの追究と評価の一体化―」を主題に、本県を会場とする第41回関東ブロック中学校社会科教育研究大会（久喜大会）が開催予定である。

本年度は、プレ大会を無事に実施し、さらに研究を発展させている。

Ⅱ　活動状況

１　理事研修会

第１回理事研修会

○期日　令和４年６月17日㈮

○会場　別所沼会館ヘリテイジ浦和

○講師　玉川大学　教授　　樋口　雅夫

演題　「現在求められている社会科授業における指導と評価の一体化」

２　第54回小・中学校地域学習研修会

県内の公立小・中学校教員を対象に、自分たちの住む市町村や県を社会科の授業の中で指導するのに必要な基礎的内容について研修し、教員の資質の向上を図ることを目的としている。

具体的な資料や実際の施設を活用して研修を進める点に大きな意義がある。

⑴　主催　埼玉県社会科教育研究会
　　後援　埼玉県教育委員会

⑵　期日　令和４年８月５日㈮

⑶　場所　さいたま市立岩槻人形博物館

３　第51回埼玉県社会科教育研究会研究発表大会

⑴　発表者

①「自分の考えをもち、根拠をもとに
伝え合う指導法の工夫」
さいたま市立日進北小学校　作田　丞
②「よりよい社会の創り手を育てる社会科学習」
さいたま市立城北中学校　髙野　隼
(2) 指導者
さいたま市教育委員会指導１課
指導主事　高見澤　悠　氏

４　ブロック別授業研究会

本年度のブロック別授業研究会は、中学校において関東ブロック中学校社会科教育研究大会（久喜大会）の開催を見据え、本研究部員が中心となり実施した。

＜小学校＞

(1) 東部ブロック
○会場　加須市立大越小学校
○授業者と単元名　小椋　優希　５年
「わたしたちの生活と工業生産」
(2) 西部ブロック
○会場　入間市立東町小学校
○授業者と単元名　飯田　太一　３年
「市のうつりかわり」
(3) 南部ブロック
○会場　新座市立新開小学校
○授業者と単元名　神﨑　凌　５年
「わたしたちの生活と森林」
(4) 北部ブロック
○会場　熊谷市立長井小学校
○授業者と単元名　櫻澤　爵良　６年
「明治の国づくりを進めた人々」
(5) さいたま市ブロック
○会場　さいたま市立宮前小学校
○授業者と単元名　眞光　信太　５年
「自然災害とともに生きる」
(6) 指導者
東部教育事務所　指導主事　神田美佐子　氏
入間市教育委員会　指導主事　小椋　亮太　氏
所沢市立牛沼小学校　校長　原　雅一　氏
南部教育事務所　指導主事　熊倉　秀幸　氏
新座市教育委員会　指導主事　吉田　泰生　氏
北部教育事務所　指導主事　矢島　弘一　氏
さいたま市教育委員会指導１課
主任指導主事　小林孝太郎　氏
さいたま市立仲町小学校
校長　河野　秀樹　氏
埼玉県社会科教育研究会長、副会長、役員

＜中学校＞

(1) 東部ブロック
○会場　越谷市立光陽中学校
○授業者と単元名　建石　圭　１年
「世界の諸地域　～アフリカ州～」
(2) 西部ブロック
○会場　川越市立城南中学校
○授業者と単元名　鈴木　憲之　１年
「世界の諸地域　～アフリカ州～」
(3) 南部ブロック
○会場　川口市立芝東中学校
○授業者と単元　柿沼　直樹　３年
「市場の働きと経済」
(4) 北部ブロック
○会場　深谷市立花園中学校
○授業者と単元名　井瀬　拓哉　１年
「中世の日本」
(5) さいたま市ブロック
○会場　さいたま市立大砂土中学校
○授業者と単元名　色摩　大輝　３年
「市場の働きと経済」
(6) 指導者
埼玉県教育委員会義務教育指導課
指導主事　歌代　圭介　氏
川越市教育委員会教育指導課
指導主事　中條　信裕　氏
川口市教育委員会指導課
指導主事　天野　亮　氏
北部教育事務所　指導主事　丸橋　直樹　氏
さいたま市教育委員会指導１課
指導主事　高見澤　悠　氏
埼玉県社会科教育研究会長、副会長、役員

６　中学校基礎学力調査

生徒の基礎学力調査の実態を調査し、社会科指導の改善・推進の資料にすることを目的として実施し、52回目を迎えた。

(1) 基礎学力問作委員会
(2) 基礎学力分析委員会
○会場　さいたま市立土呂中学校

○内容

学習指導要領解説社会編（平成29年告示）に基づき、新たに地理５問、歴史５問、公民５問の計15問にわけ、思考力、判断力、表現力等を育む社会科の学習評価問題作成に取り組んできた。

本年度は、３年間計画の１年目として地理的分野２問、歴史的分野２問、公民的分野１問を作成し、これまで作成した問題と合わせ学習指導要領掲載順に整える計画であった。

また、問作委員の所属校の３年生で調査、任意に抽出した生徒の応答傾向を分析・考察する１年目の活動を行った。

〈第52回基礎学力調査委員会〉

委 員 長　大原　照光（さいたま市立土呂中学校長）
問作代表　渡邉　涼太（さいたま市立本太中学校）
委　　員　渡邉　　陽（行田市立長野中学校）
土岐　　瞳（羽生市立西中学校）
佐田　洋輔（春日部市立豊野中学校）
畑村　大樹（川越町立霞ヶ関東中学校）
山本　雅敏（ふじみ野市立大井中学校）
中西　　覚（鳩山町立鳩山中学校）
杉原　慎一（上尾市立原市中学校）
伊東　祐馬（伊奈市立伊奈中学校）
一之瀬雄介（草加市立瀬崎中学校）
笠原　宏介（熊谷市立三尻中学校）
内田　大河（熊谷市立荒川中学校）
木村　祐哉（深谷市立南中学校）
大越　一殻（さいたま市立与野西中学校）
渡邉　涼太（さいたま市立本太中学校）
岡本　眞東（さいたま市立大宮西中学校）
石髙　吉記（埼玉大学教育学部附属中学校）
細野　悠司（埼玉大学教育学部附属中学校）
髙橋　佑樹（埼玉大学教育学部附属中学校）

7　第41回関東ブロック中学校社会科教育研究大会研究部会

○期日　全体会：令和４年７月・８月・11月
各部会：随時

○内容

埼玉県では、令和５年度の関東ブロック中学校社会科教育研究大会開催に向けて、令和元年度より研究推進委員会が組織され、令和２年度には、新学習指導要領及び川越大会の研究を基に授業研究会での実践をさらに積み重ね、研究主題を決定した。

令和３年度は、前大会の成果と課題を受け、本県の生徒の実態から目指す生徒像を明らかにして研究主題を固め、副題を決定した。

さらに、社会情勢を鑑みながら、これまでの本県での研究を継承し，さらなる発展を目指した研究体制の整備に力を注いだ。生徒の実態調査から変容を基に総論を固めていくとともに、分野論に生かした。

本年度は、11月25日㈮ 全体会、公民的分野授業公開を久喜市立久喜中学校、地理的分野授業公開を久喜市立栗橋東中学校、歴史的分野授業公開を久喜市立鷲宮東中学校のそれぞれを会場とし、第41回関東ブロック中学校社会科教育研究大会埼玉大会プレ大会を開催し、地理、歴史的分野で２本、公民的分野で１本授業公開をすることができた。

プレ大会で得られたことを基に、さらに研究を深化させ、埼玉県内外に発信するべく、令和５年度、本大会に向けて、準備を進めているところである。

＜令和４年度研究部会＞

研 究 部 長　宮澤　好春（伊奈町立小針北小学校長）
研究副部長　清水　利浩（行田市立埼玉中学校）
鈴木　和博（さいたま市立上木崎小学校）
佐藤　元治（加須市立水深小学校）
研 究 主 任　大竹　一史（深谷市立深谷中学校）

＜地理的分野＞

指 導 者　吉澤　達也（北本市立石戸小学校）
大原　照光（さいたま市立土呂中学校）
藤﨑　顕孝（羽生市立新郷第二小学校）
分 野 長　岩田　哲哉（上里町立上里中学校）
副分野長　小川紗世子（川越市立山田中学校）
津田　茂彦（さいたま市立浦和中学校）
部　　員　青柳　慎一（久喜市立栗橋西中学校）
関根　雅哉（行田市立行田中学校）
鈴木　憲之（川越市立城南中学校）
山本　雅敏（ふじみ野市立大井中学校）
外山　洋太（東松山市立松山中学校）
浅野　志帆（和光市立第二中学校）
吉村　岳史（北本市立宮内中学校）
水村　友音（戸田市立戸田中学校）
黒澤　一慧（深谷市立岡部中学校）
小澤　晃司（久喜市立栢間小学校）
立川　敦史（久喜市立栗橋東中学校）

＜歴史的分野＞

指 導 者　藤井　真仁（加須市立花崎北小学校）
吉田　　元（桶川市立桶川小学校）

齊藤耕太郎（さいたま市立原山中学校）
分 野 長　市川　慶太（さいたま市立白幡中学校）
副分野長　鬼塚　　勲（伊奈町立小学校小針中学校）
井瀬　拓哉（深谷市立花園中学校）
部　　員　大名　拓史（久喜市立鷲宮東中学校）
菅谷　優子（加須市立騎西中学校）
中井　　享（川越市立川越第一中学校）
嶋　　淑乃（狭山市立中央中学校）
増田　拓真（狭山市立入間野中学校）
江畑　友規（川口市立安行東中学校）
長谷川亮介（伊奈学園総合中学校）
小杉　　元（熊谷市立富士見中学校）
小谷　勇人（春日部市立武里中学校）
笠原　宏介（熊谷市立三尻中学校）
江森　大貴（さいたま市立三室中学校）
菊池　宏行（越谷市立城ノ上小学校）
丸山　美穂（久喜市立鷲宮東中学校）

＜公民的分野＞

指 導 者　井上淳一郎（秩父市立秩父第一中学校）
鈴木　　茂（所沢市立柳瀬中学校）
分 野 長　岩元　　響（八潮市立潮止中学校）
副分野長　中屋　啓子（川口市立里中学校）
髙野　　隼（さいたま市立城北中学校）
部　　員　駒田　哲朗（久喜市立久喜中学校）
神崎　士龍（朝霞市立朝霞第一中学校）
髙橋　賢徳（滑川町立滑川中学校）
小松　裕人（上尾市立大谷中学校）
久保田紘弥（朝霞市立朝霞第二中学校）
柿沼　直樹（川口市立芝東中学校）
久保　貴史（熊谷市立富士見中学校）
佐藤　紗李（さいたま市立指扇中学校）
島村　　勲（熊谷市立大幡中学校）
舩津　需遙（さいたま市つばさ小学校）

＜事務局＞

事務局長　石髙　吉記（埼玉大学教育学部附属中学校）
細野　悠司（埼玉大学教育学部附属中学校）
髙橋　佑樹（埼玉大学教育学部附属中学校）

８　研究刊行物

会誌44号

埼玉県社会科教育研究会研究発表大会、ブロック別授業研究会について、一年間のあゆみ（活動報告）として編集した。

会誌は、本研究会ホームページ上で公開し、県内教育関係機関に送付し、同時に本研究会の理事を通じて、県内の全公立小・中学校に広報した。

９　その他

⑴　全国大会・関東ブロック大会

①第55回全国中学校社会科教育研究大会
名古屋大会
○主題「人間の生き方を問い続ける社会科学習
～『多様化する社会』を生き抜く生徒を育てる授業の追究～」
○日時　令和４年11月10日㈭・11日㈮
○会場　ウインクあいち

②第40回関東ブロック中学校社会科教育研究大会
群馬大会
○主題「未来を切り拓き、たくましく生き抜く生徒を育てる社会科学習
～他者と協働し解決に結びつける力の育成～
○日時　令和４年11月18日㈮
○会場　高崎市立大類中学校　他２校

⑵　役員一覧

会　　長　増田　正夫（加須市立加須小学校）
副 会 長　佐々木　清（越谷市立蒲生小学校）
五十嵐和彦（所沢市立宮前小学校）
嶋　　徹（朝霞市立朝霞第七小学校）
諏訪　愼一（本庄市立児玉小学校）
髙田信太郎（さいたま市立宮前小学校）
幹　　事　鈴木　一徳（埼玉大学教育学部附属小学校）
村知　直人（埼玉大学教育学部附属小学校）
村橋　直樹（埼玉大学教育学部附属小学校）
石髙　吉記（埼玉大学教育学部附属中学校）
細野　悠司（埼玉大学教育学部附属中学校）
髙橋　佑樹（埼玉大学教育学部附属中学校）

Ⅲ　今後の課題

これまでの本県で実施されてきた研究大会の成果と課題を、これからの社会科教育を担う先生方に効果的に広め継承していくことが重要である。

その中でも、新学習指導要領を踏まえた授業づくり、校種間の系統性を踏まえた授業実践研究を図ること、授業におけるICTの効果的な活用について実践研究を計画・実施し、先生方の研修の充実に貢献できるようにしていきたい。

４　算数・数学教育

埼玉県算数数学教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

学ぶ楽しさを味わう算数数学の学習をめざして、学習指導要領の趣旨を踏まえ、教材研究を深め、指導内容の系統を明らかにし、数学的活動を重視した学習指導が展開できるようにする。そのとき、児童生徒の学習意欲を喚起し、数理的な処理のよさや数学的な見方や考え方のよさに気付き、活用できるよう学習過程や指導の工夫に努め、指導と評価の一体化を図る。

Ⅱ　活動状況

１　小学校（主なもの）

⑴　総務部活動状況

①埼玉県算数数学教育研究会役員研修会

・令和４年６月１日㈬
ビデオ通話アプリ「Zoom」を使用し、オンラインにて開催

・令和３年度事業報告、同決算報告

・令和４年度役員について

・令和４年度事業計画、同予算案　審議

②第104回全国算数・数学教育研究（島根）大会
ビデオ通話アプリ「Zoom」を使用し、オンラインにて開催

・８月４日㈭・５日㈮

③第77回関東甲信静数学教育研究山梨大会
ビデオ通話アプリ「Zoom」を使用し、オンラインにて開催

・10月28日㈮

④日本数学教育学会総会　　（春期研究大会）

・令和４年６月５日㈰　オンライン開催
（宮城教育大学）

⑤研究集録の発行

令和４年度の研究成果を集約した研究集録として編集し発行した。本年度は、日々の授業実践に活用できるよう、埼玉県算数数学教育研究会小学校部会ホームページに掲載した。

⑥算数教育研究発表会

・令和５年２月１日㈬
ビデオ通話アプリ「Zoom」を使用し、オンラインにて開催

・講演

「算数・数学科における創造的な活動と創造的問題解決の指導」

埼玉大学　　准教授　松嵜　昭雄　氏

・研究発表

「『数学的な見方・考え方』を働かせる算数指導～『問い』を視点として～」

発表者　桶川市立桶川小学校　教諭
森田　麻実　氏

司会者　上尾市立原市小学校　教諭
中尾　美鈴　氏

「『主体的・対話的に学び合う授業づくり』～見通しをもち、筋道を立てて考え、伝え合う活動～」

発表者　さいたま市立浦和別所小学校　教諭
塩原　　渉　氏

司会者　さいたま市立浦和別所小学校　教諭
中島　綾香　氏

「『児童が問題場面を捉えるための具体物の操作に関する一考察』～特別支援学級での実践を通して～」

発表者　秩父市立吉田小学校　教諭
北堀　榛花　氏

司会者　秩父市立尾田蒔小学校　教諭
飯塚　康友　氏

「『算数科の授業改善』～ICTを活用した協働的な学びと個に応じた算数科指導～」

発表者　東松山市立青鳥小学校　教諭
岩崎　慶一　氏

司会者　東松山市立青鳥小学校　教諭
町田　裕樹　氏

「『主体的、対話的で深い学び』につなぐ学習指導法の研究～非認知能力を伸ばす指導を通して～」

発表者　行田市立太田東小学校　教諭
大迫　哲也　氏

司会者　行田市立太田東小学校　教諭
荒井　美穂　氏

⑵　研修部活動状況

①小学校算数教育研究協議会

テキスト第55集を中心に県下10地区で研究協議をした。各地区の会場校等は次のとおりである。

北足立南部 10月18日㈫ 川口市立上青木小学校
北足立北部 11月15日㈫ 鴻巣市立共和小学校
さいたま市 1月25日㈬ さいたま市立大門小学校
入　　間 12月9日㈮ ふじみ野市立元福小学校
比　　企 12月6日㈫ 川島町立中山小学校
秩　　父 12月1日㈭ 皆野町立皆野小学校
児　　玉 10月27日㈭ 本庄町立本庄南小学校
大　　里 12月1日㈭ 熊谷市立別府小学校
北　埼　玉 11月17日㈭ 行田市立太田東小学校
埼　　葛 11月9日㈬ 春日部市立正善小学校

②算数教育夏季研修会

・令和４年８月２日㈫
ビデオ通話アプリ「Zoom」を使用し、オンラインにて開催

・講演
「学力・学習状況調査を活用した授業改善」
県教育局市町村支援部義務教育指導課
指導主事　中里　こず恵　氏
「数学的な見方・考え方を働かせる算数の学び」
筑波大学　准教授　蒔苗　直道　氏

・研究発表
「算数科における主体的・対話的で深い学びの実現―思いつきから数学的な着想への昇華に焦点を当てて―」
令和３年度　さいたま市長期研修教員
さいたま市立木崎小学校　教諭
清水　武蔵　氏
「数学的な見方・考え方を働かせる数学的活動についての研究―第５学年「四角形と三角形の面積」を通して―」
令和３年度　埼玉県長期研修教員
深谷市立藤沢小学校　教諭　　加島　佳子　氏

⑶　編集部活動状況

○算数教育研究協議会用テキスト第55集作成

「統合的・発展的に考察する力を育てる算数指導」をテーマに掲げ編集を行った。

第１章では、理論編を埼玉大学教育学部教授の二宮　裕之　先生にご執筆いただいた。主な概要としては、以下に示したとおりである。

また、第２章では、各学年３編ずつ指導例を載せた。資料編では、付録として「算数の授業におけるICT端末の活用や児童の評価について」を載せた。調査研究部の教員意識調査の結果から得られた課題を基に、指導のポイントを示した。

〔テキストの内容〕

第１章　統合的・発展的に考察する力を育てる算数指導
1　はじめに
2　「数学的な考え方」における統合的な考え方・発展的な考え方
3　現行の学習指導要領における統合的な考え方・発展的な考え方
4　算数･数学の学習過程のイメージにおける位置付け
5　具体的事例の考察

第２章　学習指導の実際
第１学年　ひきざん
おおきい　かず
ながさ　くらべ
第２学年　かけ算
三角形と　四角形
水の　かさの　たんい
第３学年　小数
円と球
重さ
第４学年　わり算の筆算
垂直・平行と四角形
角の大きさ
第５学年　偶数と奇数
単位量あたりの大きさ
帯グラフと円グラフ
第６学年　分数のかけ算
円の面積
比例と反比例

【資料編】
「算数の授業におけるICT端末の活用や児童の評価について」

⑷　調査研究部活動状況

○教員の意識調査
授業改善に向けた取組の一環として、教員の意識調査を行った。

○研究報告
小学校算数教育研究発表会全体会にて、教員の意識調査を基に、研究報告を行った。

⑸　研究委嘱校発表

委嘱校　さいたま市立中尾小学校
主題　「確かな学力を目指した授業の創造～算数科における読解力の活用を通して～」
期日　令和４年11月２日㈬

①研究仮説

読解力を「正しく解釈し、それを評価・熟考し、論理的に相手に伝える力」と定義し、このことを算数科の単元や１単位時間の授業で実現できるように手立てを講じることで、読解力を習得したり活用したりし、児童の「確かな学力」の育成につながるのではないか。

視点１　問題・課題を解決するために必要な情報をとりだす力を高めるために

手立て　○導入の工夫　○問題提示の工夫　○課題提示の工夫

視点２　つなげたり比べたりして考える力を高めるために

手立て　○伝え合いの工夫　○練習問題の工夫　○自力解決における工夫

視点３　考えたことを、数学的な表現を用いて、筋道立てて説明する力を高めるために

手立て　○伝え合いの工夫　○練り上げの工夫　○学習のまとめの工夫

②研究の取組

○授業づくりパート

・指導案検討

・他学年との情報交換

・仮説・手立ての検討

・プレ授業、本発表指導案検討

○統計資料・GIGAパート

・児童用アンケートの実施

・アンケートの分析

・分析結果のフィードバック

・GIGAスクール構想に向けた授業実践

・算数アンケートの実施及び集計

○基礎学力向上パート

・算数タイムの計画及び実践

・家庭学習の手引きの修正及び配付

・基礎学力向上に向けた取組

・算数検定の級が進めない児童への対応

○読解力向上パート

・読解力を活用した（する）問題の作成及び子どもへの実施

・読解力向上に向けた問題の年間指導計画への位置付け

・読解力向上を見取るための問題の実施

③研究授業

２年１組　「かけ算」

授業者　三宅　志保　氏

４年１組　「計算のきまり」

授業者　清正　　翼　氏

６年３組　「比例と反比例」

授業者　清野　玄太　氏

２　中学校（主なもの）

⑴　理事研修会

令和４年６月１日㈬

・令和３年度事業報告、会計報告、監査報告

・平成４年度役員、事業計画、予算案審議

・算数数学教育研究協議会について

※　オンラインで実施。

⑵　数学教育研究協議会用テキスト第 52 集作成

「数学的な見方・考え方を働かせる学習指導」という主題を設定し、理論と実践の結び付きを図るように編集したものである。

【理論編】

○数学的な見方・考え方を働かせる数学的活動とその評価

－メタ認知、自己評価、形成的評価に着目して－

埼玉大学教育学部　教授　二宮　裕之　氏

【実践編】

「理論編」で述べた考え方を基に、各学年の＜関数・データの活用＞領域の授業実践例を載せている。各学年で５編の実践例をまとめ、数学的な見方・考え方を働かせる数学的活動の具体を示し、その活動によってどんな力を育成するのかを明示した。また、学習指導において適切に振り返る場面を位置付け、学習活動と自己評価の一体化が図られていることを示した。

「題材について」において、本時の授業を展開するに当たって、数学的な見方・考え方を働かせた学習指導に向けた具体的な活動を、学年と領域の内容に即して明確に示した。

また、「４．本時の計画（１）」は、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性の三つの資質・能力から分析した。

さらに、「４．本時の計画（２）」については、埼玉県中学校教育課程指導・評価資料（令和３年３月）での指導案の形式に則り、以下のような形式にした。

・「学習活動」

学習活動の流れについて簡潔に示す

・「教師の発問、予想される生徒の反応」

学習の展開について、教師の発問と予想される生徒の反応を中心に概観を示す。

・「評価、支援、指導上の留意点」

学習活動の中で生徒の学びを把握し、指導に生かす評価と、その中でも特に総括的評価につなげていくために記録し指導に生かす評価に大別した。

また、形成的評価によって、支援が必要な生徒の学びを「おおむね満足」に高めるための手立てを明記した。さらに、指導上の留意点をまとめるとともに、特に本テキストの主題と関わる部分についてゴシック体で表記した。

【特集編】

今回の学習指導要領改訂において、充実が強調されている統計教育について焦点を当て、３か年計画での特集を構成している。

１年次は指導要領や先行研究を基に、現代の統計教育において求められる資質・能力を明らかにしながら、データの活用領域の重点課題をまとめた。これらを受け、

２年次にあたる本作では、具体的な授業実践に結びつけていくために、単元全体の構成を計画し、育成を目指す資質・能力と関連付けながら、指導案の形式にまとめた。

３年次は、育成を目指す資質・能力が適正に身に付けられたかを、どのように評価していくのかについてまとめ、データの活用領域における、評価の在り方について提案する。

⑶　数学教育研究協議会

⑵のような内容で作成された数学教育研究協議会用テキスト第52集を基にして、県内10地区で、実践授業を通して研究協議会を実施した。新型コロナウイルスの感染拡大防止についての対策を徹底した上で、本年度については、基本的に参会型を中心として実施を行った。昨年度までのコロナ対応で得た情報発信、共有の方策は維持しながら、多くの参会者と共に、充実した協議の時間を過ごした。

会場校等は、次のとおりである。

〇南部地区

・10月12日㈬　戸田市立新曽中学校

・11月４日㈮　上尾市立東中学校

〇さいたま市

・11月17日㈭　さいたま市立大谷中学校

〇西部地区

・11月９日㈬　ふじみ野市立大井中学校

・11月２日㈬　東松山市立北中学校

〇北部地区

・11月22日㈫　神川町立神川中学校

・11月２日㈬　秩父市立尾田蒔中学校

・10月12日㈬　熊谷市立富士見中学校

〇東部地区

・11月30日㈬　羽生市立西中学校

・11月18日㈮　八潮市立八潮中学校

⑷　数学教育研究発表大会

〇令和５年２月８日㈬

浦和コミュニティセンター及びオンライン

〇ハイブリッド型（参会兼オンライン）による埼玉県高等学校数学教育研究会と合同の研究発表大会

３か年任期による数学教育研究推進委員会の３年次の発表である。四つの分科会に分かれ研究主題、研究仮説、実践例、今後の課題などを発表した。

〇講演会

「新学習指導要領に基づく数学の授業づくりについて」

岩手大学　准教授　佐藤　寿仁　氏

〇分科会

・領域　データの活用部会

主題　データの分布の傾向を読み取り、批判的に考察し、判断する力を育成する指導

－四分位範囲･箱ひげ図の指導を通して－

・領域　活用・表現部会

主題　数学を活用する力の育成を目指して

－日常的な事象を数理的に考察し表現する活動を通して－

・領域　学習指導法部会

主題　問題を自立的に解決する生徒を育てる指導法の工夫

－ストラテジーと出会い、価値付け、活用する－

・領域　数学的な考え方部会

主題　数学的な考え方を深めることができる生徒の育成

⑸　中学校部会ホームページを活用した情報発信

中学校部会のホームページでは、各事業についての最新情報を発信するとともに、各校には、その更新を随時FAX等で通知する等している。

ホームページでは今後、過去のテキストや基礎学力調査などをデータベース化して、県内外へ発信し、さらに活用をしていく方向で検討を進めている。

５　理　科　教　育

埼玉県理科教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

１　研究主題

「自然を主体的・科学的に探究する
資質・能力の育成」
～主体的・対話的で深い学びとそれを支える
ICTの活用～

２　設定の理由及び方針

小学校においては、小学校学習指導要領で示されている、学習の基盤となる資質・能力「情報活用能力」に着目した。「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）においても、ICTの活用に関する以下のような基本的な考え方が示されている。

・「令和の日本型学校教育」を構築し、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するためには、ICTは必要不可欠。
・これまでの実践とICTとを最適に組み合わせることで、様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことが必要。
・ICTを活用すること自体が目的化しないよう留意し、PDCAサイクルを意識し、効果検証・分析を適切に行うことが重要であるとともに、健康面を含め、ICTが児童生徒に与える影響にも留意することが必要。
・ICTの全面的な活用により、学校の組織文化、教師に求められる資質・能力も変わっていく中で、Society5.0時代にふさわしい学校の実現が必要。

本年度は、理科の学習においてICT を“すぐにでも”“どの教科等でも”“誰でも”活用できる環境を整え、日常的に活用することで、児童がICTを一つの「文房具」として、自由な発想で活用できるようにすることを目指してきた。そして、問題解決の過程で、児童がどのようにICTを活用すれば、小学校理科で目指す資質・能力の育成につながるのか、自分の身の回りにある自然の事物・現象との距離を近付け、理科における学びを自分事として捉えることができるのかを、第３～６学年の領域、単元を通して研究を進めている。

中学校においては、これまで新学習指導要領の基、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る授業の実施とその改善方略を研究し、その成果を蓄積してきた。さらに、令和３年１月の答申において、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。未来の社会を見据え、児童生徒の資質・能力を育成するに当たっては、このような学習指導要領や答申の趣旨を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことを目指す必要がある。そのための主な手立ての具体を、以下のように捉えている。

＜個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実＞

□指導の個別化の観点から、一定の目標を全ての子供が達成することを目指し、異なる方法等で学習を進めること
　・子供一人一人の特性・学習進度・学習到達度等に応じ、教師は必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行うこと。

□学習の個性化の観点から、異なる目標に向けて、学習を深め、広げること
　・子供一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、教師は一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行うこと。

□協働的な学びの観点から、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出すこと
　・子供一人一人のよい点や可能性を生かし、多様な他者と協働する学びの場面をつくること。

また、これらの手立ては、子供が自己調整しながら学習を進めていくことができるようにすることが前提であり、そのための振り返りの工夫も欠かせない。

本研究会は、よりよい授業の在り方を追究する中で、振り返りを活用し、児童生徒の学びの実相を個別的かつ具体的に把握していく取組を継続していく。それらを全県に発信していくことが理科教育の発展につながると考える。

Ⅱ　活動状況（理事会・総会・委員会・研究発表会等）

1　事務局打ち合わせ会

期　日：令和４年３月31日㈭

形　式：Zoom MeetingsによるWeb会議

議　題：年間事業計画、予算案の作成、総会準備

2　第１回常任理事研修会

期　日：令和４年６月１日㈬

形　式：Zoom MeetingsによるWeb会議

議　題：令和３年度事業・決算報告、令和４年度事業・予算案審議

3　総会

期　日：令和４年６月22日㈬

形　式：Zoom MeetingsによるWeb会議

議　題：令和３年度事業・決算報告、令和４年度事業・予算案審議、役員の承認、退任役員への感謝状贈呈

講演会：

○演題　「小学校理科の授業と学習評価～学力・学習状況調査から見えてきたこと～」

○講師　文部科学省国立教育政策研究所　教育課程研究センター研究開発部　学力調査官・教育課程調査官　　川上　真哉　先生

4　理科教育研究発表会（教員の部）開催

本行事は、隔年開催のため、本年度は開催なし。

5　第69回全国中学校理科教育研究会三重大会参加

本年度は、環境教育分科会において、研究会さいたま支部より下記の発表者を推薦した。

期　日：令和４年８月９日㈫・10日㈬

発表者：さいたま市立指扇中学校教諭　　野口　祥太

題　目：「プログラミングを組み入れた中学校理科ESDの実践　～『パラレルストーリー型カリキュラム』を用いた授業実践～」

6　第２回常任理事研修会

期　日：令和４年８月24日㈬

形　式：Zoom MeetingsによるWeb発表

議　題：科学教育振興展覧会（中央展）の計画、理科教育研究発表会（児童生徒の部）の計画審議

7　科学教育振興展覧会（中央展）開催

⑴　審査会

期　日：令和４年10月21日㈮

形　式：参集・対面型審査

会　場：麗和会館（県立浦和高等学校敷地内）

⑵　表彰式

期　日：令和４年10月31日㈪

形　式：参集・対面型表彰式

会　場：埼玉会館

8　理科教育研究発表会（児童生徒の部）開催（予定）

期　日：令和５年２月７日㈫

形　式：参集・対面型発表会

会　場：さいたま市青少年宇宙科学館

9　第３回常任理事研修会

期　日：令和５年３月１日㈬

形　式：Zoom MeetingsによるWeb会議

議　題：科学教育振興展覧会（中央展）の反省、理科教育研究発表会（児童生徒の部）の反省、令和５年度事業計画審議

Ⅲ　各種委員会活動

1　小学校理科指導法研究委員会

本年度は、「指導と評価の一体化」をテーマに研究を進めてきた。全国学力・学習状況調査の結果より「知識」「技能」「分析・解釈」「構想」「検討・改善」を研究の視点として、理科の資質・能力を育成するための授業改善に取り組んだ。

また、個人研究として、各自の実践を基に、研究内容の発表を通して協議し、深めることができた。委員の先生方に御執筆いただいた実践事例は、埼理研のホームページにて紹介している。

＜構成委員＞

顧　問	柿沼	宏充	県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事
	松本	真治	さいたま市教育委員会学校教育部指導1課主任指導主事
委員長	郡	豊	川口市立芝西小学校校長
副委員長	丸山	典雄	蓮田市立蓮田中央小学校長
川口	牛山	昇竜	川口市立芝西小学校
〃　蕨	野口	亮平	蕨市立中央東小学校
草加	末木	俊雄	草加市立新田小学校
鴻巣	栗原	慧	桶川市立加納小学校
委　上尾	原島	圭	上尾市立原市南小学校
さいたま	新海	智哉	さいたま市立大宮北小学校
さいたま	髙野	智大	さいたま市立浦和大里小学校
さいたま	八嶋	麗	さいたま市立上小小学校
入間	市川	亮	所沢市立柳瀬小学校
員　入間	大舘	良明	所沢市立若松小学校
比企	阿彦あかり		東松山市立新宿小学校
秩父	野口	暁史	秩父市立西小学校

児玉　江口　正良　美里町立大沢小学校
大里　大工廻朝晴　深谷市立花園小学校
∨　北埼　木鋪　　祐　加須市立岩瀬小学校
埼葛　山田　　葵　蓮田市立蓮田中央小学校
埼葛　柿崎　　惇　白岡市立白岡東小学校
幹　　事　塩盛秀雄　肥田幸則　関根達也（埼大附小）

２　中学校指導法研究委員会

本年度は、各委員が考える「よい授業」を具体化することを通して、効果的な授業改善を行うための要素について検討した。本研究の成果と今後の課題をまとめた研究報告書を、埼玉県理科教育研究会のホームページ上に掲載し、公開する。

＜構成委員＞

顧　問　　大澤　正樹　県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事
　　岩﨑雄二郎　さいたま市教育委員会学校教育部指導１課指導主事
委員長　　郡　　豊　川口市立芝西小学校校長
副委員長　　竹田　　聡　鶴ヶ島市立藤中学校長
以下，委員
川　口　　村田涼太郎　川口市立高等学校附属中学校
蕨　　越湖　貴久　戸田市立戸田中学校
草　加　　髙橋　　心　草加市立谷塚中学校
朝　霞　　山下亜季子　朝霞市立朝霞第二中学校
鴻　巣　　坂田　昂也　鴻巣市立赤見台中学校
上　尾　　志村　正好　上尾市立大石中学校
さいたま　　酒井　佑太　さいたま市立土屋中学校
入　間　　坂本　悠輔　狭山市立西中学校
比　企　　大澤　　悠　東松山市立北中学校
秩　父　　西　　恭平　横瀬町立横瀬中学校
児　玉　　秋元亜依香　本庄市立本庄東中学校
大　里　　富田　真人　深谷市立深谷中学校
北埼玉　　冨田　健人　行田市立長野中学校
埼　葛　　増子　貴太　白岡市立白岡中学校
幹　事　　山本　孔紀　谷津勇太　伊藤悠昭（埼大附中）

Ⅳ　理科教育研究発表会

１　児童生徒の部

⑴　期　日　令和５年２月７日㈫
⑵　会　場　さいたま市青少年宇宙科学館
⑶　指導者　埼玉大学教員他
⑷　備　考

令和２、３年度はコロナウイルス感染症の影響でオンラインによる発表会だったが、児童生徒同士が研究内容について交流しづらいという課題があった。そこで令和４年度は、従来の参集型の発表形式にすることにした。

（発表形式）

・小・中学校の発表の形式は、口頭発表を中心とする。ただし、コンピュータや掲示物等の方法は自由とする。発表１件について10分間以内とする。
・高等学校の部の発表の形式は、ポスターセッション、口頭発表のいずれかとする。口頭発表については発表１件について発表８分、質疑・講評２分間の合計10分間以内とする。ただし、発表本数等によっては変更の場合がある。ポスターセッションは、指定された時間帯に発表を行うこととする。

Ⅴ　科学教育振興展覧会

１　地区審査

⑴　期間　９月下旬～10月中旬
　　（各地区により異なる。）
⑵　出展数　1,049点（小・中・高合計）

小・中学校においては、南部地区・さいたま地区・西部地区・北部地区・東部地区の五つの地区から優秀作品を中央展へ推薦した。高等学校と合わせて、111点が中央展へ出展された。

２　中央展

⑴　審査会
①期　日：10月21日㈮
②会　場：麗和会館（県立浦和高等学校内）
③出展数：小・39点　中・42点　高・30点
④審査員：
埼玉大学教育学部
教　授　金子　康子　　岡本　和明
　　小倉　　康　　大向　隆三
准教授　松岡　圭介　　日比野　拓
⑤形　式：

埼玉県理科教育研究会ホームページ上にアップロードした作品について、審査員に採点していただいて最優秀賞を小・中・高等学校ともに選出した。

埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課 指導主事　柿沼　宏充
埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課 指導主事　大澤　正樹
さいたま市教育委員会学校教育部指導１課 主任指導主事　能見　郁永
埼玉県総合教育センター 指導主事　古畑　隆憲
埼玉県理科教育研究会 副会長　吉田　伸吾
埼玉県理科教育研究会 副会長　丸山　典雄

⑵　受賞作品

◎　埼玉県知事賞

・ふわふわ真下に落ちるパラシュート作り
　パート２（無風の中での研究から
　　風がある中での研究へ）
　　さいたま市立上木崎小学校　五十嵐康介
　　五十嵐美歩

・トマトが湯むきできる原理について　パート２
　　さいたま市立城南中学校　科学部

・フッ化物イオン添加による硫化亜鉛ナノ粒子の発光
　　県立熊谷西高等学校　吉澤　　慶
　　他２名

◎ 埼玉県議会議長賞

・バッタの生態を探る！Part3
　～オリジナル図鑑を目指して　深まる謎とバッタの魅力～
　　杉戸町立杉戸小学校　芳井　優仁

・「発泡スチロールグライダーの飛行性能 Part4」
　　さいたま市立春野中学校　科学部

・界面活性剤を用いたパラジウムめっき
　－グルコース型・メタノール型・炭酸型燃料電池への応用－
　　大妻嵐山高等学校　藤野美沙希

◎ 埼玉県教育長賞

・蝶の鱗粉の残った謎を明らかにせよ！！
　～チョウのりんぷん大研究　partⅣ～
　　志木市立志木第二小学校　西本　明道

・上谷沼に生息する鳥と環境の変化との関係
　　川口市立小谷場中学校　薩田　哲史
　　他14名

・セイヨウミツバチの集める花粉荷を用いた花粉の種類、蛍光及び行動範囲
　　大妻嵐山高等学校　山下　麻美
　　他２名

⑶　備考

小学校の最優秀賞３点を全国児童才能開発コンテスト、中学校の最優秀賞６点を日本学生科学賞へそれぞれ推薦した。

令和元年度までは、９月末～10月中旬ごろに県下10会場で地区展が実施され、選出された優秀な作品を10月末に集めて中央展を開催していた。出展作品は間口、奥行がそれぞれ１ｍ、高さが２ｍの直方体に収まるパネル展示作品であった。本年度もコロナ禍の中でも、埼玉県やさいたま市との主催として実施することができた。

実施形式については、まず、南部地区・さいたま地区・西部地区・北部地区・東部地区の５地区において地区審査を行った。その後、地区審査を通過した作品（小学校39点、中学校42点）を対象に県審査として審査を実施し、上位大会に推薦する最優秀賞を決定した。出展作品はオンラインでの審査が可能なように、令和元年度までのパネル展示作品ではなく、昨年度と同様にＡ４判レポート形式とした。

本年度における昨年度以上の成果としては、審査会及び表彰式を参集・対面型で行えたこと、出展作品及び指導講評を研究会ホームページ上に掲載し、広く普及することに努めたことである。

来年度以降も、より充実した展覧会となるよう試行錯誤していく。

Ⅶ　今後の課題

本年度もコロナウイルス感染症の影響で様々な変更や改善が図られた１年間であった。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や中教審の答申における令和の日本型教育、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をキーワードとしたVUCA時代に向けての新たな指導法の研究が地道に蓄積されてきている。

次の時代の担い手づくりのために、本研究会から新たな理科教育を発信できるよう、各種委員会で研究を深めたり、総会で大学や教科調査官の先生の講演会を開催したりするなどして、研究と発信の場を確保していく必要がある。

最後に、昨今の働き方改革の流れも受けて、理科教育研究会の事業についても見直しを進めている。参集型とオンライン型のそれぞれの集会形式のよさの吟味も終わり、より適切な形式にて理事会や各行事が企画・運営されつつある。理科教育に携わる先生方、何よりも理科を学習する児童生徒にとって、本会で実施している行事がその資質・能力の向上に寄与し、本県の理科教育の振興につながるものとなるよう引き続き、工夫を凝らしていく。

併せて、事務局の在り方についても、一極集中型とならないよう、クラウド上での円滑な情報共有システムを新たに構築するなど、県内全域で一丸となって活動を進めていきたい。

6　音　楽　教　育

埼玉県音楽教育連盟

Ⅰ　研究主題と方針

1　研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した指導の工夫」

～個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指して～

2　研究主題について

昨年度の研究では、一人一台端末を効果的に活用することで、音楽を形づくっている要素の働きを捉え、そこから感じ取ったことについて個の学びを深めることができた。

一方で、思考、判断の過程において、協働的な学びを充実させることに課題が見られた。一人一台端末を活用しつつ、音楽を中心に据えた学びの実現を目指す必要があると考える。

そのため、研究の視点を「個別最適な学び」と「協働的な学び」とし、本年度は、子供たちの個別最適な学びや協働的な学びの具体を探るとともに、これらの学びを支え、充実させる指導の工夫について、研究を進めた。

折しも、令和３年１月、中央教育審議会より「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が示された。これは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながるものである。

以上のことから、本研究主題を設定した。

3　研究の方針

本連盟の研究推進にあたっては、研究委嘱校研究発表大会、役員研修会、埼玉県小・中学校音楽会、実技研修会、会報（研究紀要）のそれぞれの場において実施されるようにした。本年度も、感染症拡大防止に努めつつ、よりよい研究推進のために開催方法を検討しながら活動を実施し、成果と課題を探った。それについては以下のとおりである。

⑴　研究委嘱校研究発表大会

研究委嘱校研究発表大会は、本連盟の研究推進の中核を担う事業である。研究主題を具現化する授業実践を目指すとともに、研究協議において音楽教育に携わる教師の資質向上を目的として実施されるものである。

本年度も、感染症拡大防止のため、対面とオンラインのハイブリッド開催で実施した。埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課主任指導主事　佐藤　太一　先生を指導者に招き、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した指導の工夫について、実際の授業場面を基に活発な協議がなされた。

⑵　役員研修会

役員研修会は、本連盟における研究内容や方法についての共通理解が図られる、研究推進において重要な研修会である。事業内容厳選にかかわる指導の下、年間３回（６月中旬、夏季休業中、２月中旬）役員研修会を開催している。本年度は、感染症拡大防止のため、第１、第２回をオンライン開催とし、第３回を対面とオンラインのハイブリッド開催で実施した。

第１回役員研修会では全体会にて、昨年度の事業報告があった。また、本年度の活動内容について計画立案、報告があり、本連盟の役員が一丸となって活動する方向を提示することができた。

第２回役員研修会では、埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課主任指導主事　佐藤　太一　先生を招いて講演会を開催した。その他、各部会の活動や研究委嘱に関する指導案検討や役割分担等が活発に行われた。

第３回の役員研修会では、本年度の活動の総括として各地区活動報告と来年度に向けて準備を行った。また、埼玉県立総合教育センター指導主事　永井　基生　先生を招いて講演会を開催した。

⑶　埼玉県小・中学校等音楽会

本年度は、令和元年度以来の実施となった。感染症拡大防止のため各会場でガイドラインを設けて、地区音楽会を県内10地区で開催した。

⑷　実技研修会

本連盟で実施している実技研修会は、次のとおりである。

〇県内10地区ごとに行われる研修会

（実施計画、運営は各地区に一任）

○小学校管楽器指導に関する研修会

○合唱指導に関する研修会

これらの研修会は、児童生徒一人一人が豊かな音楽経験を積むことができ、そのことを通して「音楽性」「豊かな感性」を確実に育てていくために、音楽教育に携わる教師の資質向上を目的として実施されるものである。

このことの共通理解を図りながら、実施内容や方法について研究を進めていくようにした。

Ⅱ　活動状況

1　役員研修会

⑴　令和４年６月24日㈮

会場：オンライン開催

・令和３年度事業・決算及び監査報告

・令和４年度役員について

・令和４年度事業案・予算案審議　等

・専門委員会

⑵　令和４年８月18日㈭

会場：オンライン開催

・専門委員会

・教育講演会

講師　埼玉県教育局市町村支援部

義務教育指導課

主任指導主事　佐藤　太一　先生

「今さら聞けない新学習指導要領Part2」

～目指すべき音楽教育を考える～

⑶　令和５年２月14日㈫

会場：さいたま市　プラザウエスト

・地区活動報告

・専門委員会活動報告

・教育講演会

講師　埼玉県立総合教育センター

指導主事　　永井　基生　先生

「埼玉県の音楽教育の今」

～センター勤務１年目から見えてきたこと～

2　音楽会

＜日程及び会場＞

地　区	期　日	会　　場
さいたま市	11月４日㈮ 11月９日㈬	さいたま市文化センター
南部・南	11月18日㈮	戸田市文化会館
南部・北	11月16日㈬	鴻巣市文化センター
西部・南	11月18日㈮	飯能市民会館
西部・北	11月11日㈮	東松山市民文化センター
秩　　父	11月11日㈮	秩父宮記念市民会館
北部・西	11月11日㈮	本庄市民文化会館
北部・東	11月16日㈬	熊谷市江南総合文化会館
東部・北	11月16日㈬	パストラルかぞ
東部・南	11月11日㈮	春日部市民文化会館

＜実施委員長＞

さいたま市　：　宮本江津子（さいたま・河合小）

南部・南　：　中根　隆弘（川口・戸塚西中）

南部・北　：　熊坂由美子（上尾・尾山台小）

西部・南　：　高橋　成己（鶴ヶ島・杉下小）

西部・北　：　大木　聖子（東松山・松山第二小）

秩　　父　：　坂本　　勉（皆野・皆野小）

北部・西　：　前田　芳江（神川・渡瀬小）

北部・東　：　江原　　誠（熊谷・妻沼東中）

東部・北　：　清水乃理子（羽生・羽生南小）

東部・南　：　木村　信之（久喜・久喜中）

＜指導助言者＞

さいたま市　：　宮本江津子（さいたま・河合小）

清水　一司（さいたま・桜木中）

南部・南　：　藤川　英子（戸田・美谷本小）

南部・北　：　金澤　勇一（新座・東野小）

西部・南　：　大舘　直美（所沢・伸栄小）

西部・北　：　岡島　一恵（川越市教育委員会）

秩　　父　：　江原　　誠（熊谷・妻沼東中）

北部・西　：　新井　麻紀（熊谷・成田小）

北部・東　：　新井　麻紀（熊谷・成田小）

東部・北　：　木村　信之（久喜・久喜中）

東部・南　：　清水乃理子（羽生・羽生南小）

3　夏季地区研修会日程、内容、会場

＜さいたま市＞

○期　日　２月24日㈮

○会　場　さいたま市立教育研究所

○講　師　志民　一成　先生

（文部科学省　教科調査官）

○内　容　これからの音楽教育が目指すもの

＜南部・南（旧北足立南部地区）＞

【蕨市】

○期　日　11月29日㈫

○会　場　蕨市立北小学校

○内　容　ICTを活用した音楽授業研究会

【戸田市】

○期　日　９月28日㈬

○会　場　戸田市立戸田南小学校

○講　師　永井　基生　先生

（埼玉県立教育総合センター指導主事）

○内　容　ICTを効果的に活用した音楽の授業づくり

【草加市】

○期　日　８月23日㈫

○会　場　草加市立谷塚小学校

○講　師　竹原　英里　先生

（埼玉県教育局南部教育事務所指導主事）

今井　規雄　先生

（草加市教育委員会生涯教育課主幹専門員）

○内　容　音楽づくり、創作活動について

日本の伝統芸能―能楽―

【朝霞市・志木市・和光市】

○期　日　２月２日㈭

○講　師　鈴木　直樹　先生

（志木市立志木第二中学校　教諭）

○内　容　器楽合奏の工夫

【新座市】

○期　日　２月１日㈬

○会　場　新座市立大和田小学校

○講　師　竹原　英里　先生

（埼玉県教育局南部教育事務所指導主事）

○内　容　研究授業を通した研修会

＜南部・北（旧北足立北部地区）＞

○期　日　８月17日㈬

○会　場　上尾市立尾山台小学校

（一部オンライン参加）

○講　師　小梨　貴弘　先生

（戸田市立戸田東小学校　教諭）

○内　容　音楽科ICTワクワク活用講座

～令和時代の新しい「音楽の学びのカタチ」を創造する～

＜西部・南（旧入間地区）＞

○期　日　７月22日㈮

○会　場　飯能市市民会館小ホール

○講　師　勝山　幸子　先生

（港区立御成門中学校　教諭）

○内　容　音楽科の授業づくり

＜秩父地区＞

○期　日　11月25日㈮

○会　場　秩父市立秩父第一中学校

○講　師　粟飯原　喜男　先生

（音楽の授業をつくる会　代表）

○内　容　“児童生徒が最後まで聴きたくなる鑑賞指導”

～クラスの誰もが楽曲に集中して取り組む魔法のプロセス～

＜北部・西（旧児玉地区）＞

○期　日　８月４日㈭

○会　場　本庄市立本庄東中学校

○講　師　小梨　貴弘　先生

（戸田市立戸田東小学校　教諭）

○内　容　ICTを活用した音楽科授業の研究

＜東部・北（旧北埼玉地区）＞

○期　日　７月28日㈭

○会　場　行田市教育文化センター「みらい」

○講　師　小梨　貴弘　先生

（戸田市立戸田東小学校　教諭）

○内　容　音楽の授業におけるICTの活用

＜東部・南（埼葛地区）＞

○期　日　７月28日㈭

○会　場　久喜市栗橋文化会館イリス

○講　師　粟飯原　喜男　先生

（音楽の授業をつくる会　代表）

○内　容　児童生徒が最後まで聴きたくなる鑑賞指導の授業例

～教科書教材を使って模擬授業形式で～

※以下の地区は、本年度は実施しなかった。

西部・北（旧比企地区）

北部・東（旧大里地区）

Ⅲ　研究

1　令和４年度研究委嘱校研究発表大会

⑴　期　日

令和４年11月30日㈬

⑵　会　場

富士見市立ふじみ野小学校

（市外参会者はオンライン参加）

⑶　授業者

富士見市立ふじみ野小学校　　小林　理沙　教諭

⑷　指導者

埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課

主任指導主事　佐藤　太一　先生

⑸　題　材

「日本の音楽を使って旋律をつくろう」

（第５学年　音楽づくり）

⑹　成　果

○ワークシートへの記譜の仕方を工夫したことで、児童が自分の表現したい旋律を簡単に書き記せるようになるとともに、旋律の動きが視覚的にわかりやすくなったため、児童が主体的に学習に取り組むことができた。

○ＩＣＴの活用により、同じ旋律でも音色を複数の中から選ぶことができるようにしたことで、児童が自分の思いや意図に合わせた音色について試行錯誤しながら選ぶことができた。

○旋律の動きや曲の構成について根拠を明らかにして音楽づくりをすることで、自分の旋律について自信をもって説明できる児童が増えた。

⑺　課　題

○個人でつくった旋律をグループで組み合わせる際に、イメージの共有を図ることが難しい様子が見られた。テーマを絞ったり、組み合わせる際のポイントを明確に示したりすることが重要である。

○旋律からイメージを想起させる際に、画一的なイメージになってしまった。児童は、経験した以上のイメージを得ることはできないため、実態に合わせてテーマを絞るなどすることで、より音楽の要素とイメージを具体的に関連付けて音楽づくりをすることができると考える。

2　第64回関東甲信越音楽教育研究会茨城大会

【大会主題】

共に感じ　共に楽しみながら　心むすぶ音楽を求めて

～学習のゴールを明確にした音楽科学習の工夫･改善～

【期日】

現　地　開　催：令和４年11月11日㈮

オンデマンド配信：令和４年11月４日㈮

～12月10日㈯

【提案授業】

○第１分科会　小学校３年

「曲のかんじを生かそう」

授業者　水戸市立城東小学校　　秋山　敦子　教諭

○第２分科会　小学校２年

「くりかえしを見つけよう」

授業者　水戸市立笠原小学校　市川　久美子　教諭

○第３分科会　小学校４年

「いろいろな音のひびきを楽しもう」

授業者　水戸市立三の丸小学校　栗股　靖典　教諭

○第４分科会　中学校１年

「アルトリコーダーで奏法の特徴を生かして思いや意図を伝えよう」

授業者　水戸市立赤塚中学校　鴨志田　佳織　教諭

○第５分科会　中学校１年

「音のつながり方の特徴を生かしてイメージに合った旋律をつくろう」

授業者　水戸市立内原中学校　市毛　美沙季　教諭

○第６分科会　中学校１年

「人々の暮らしの中で受け継がれてきた民謡のよさや美しさを味わおう」

授業者　水戸市立第五中学校　　前島　麻美　教諭

【研究演奏】

○水戸室内管弦楽団メンバーによる吹奏楽セミナー

【講師】

文部科学省教科調査官　　志民　一成　氏

元東京学芸大学准教授　　石上　則子　氏

Ⅳ　今後の課題

音楽活動における児童生徒の姿に、より一層の表現する喜びや音楽と関わる楽しさが現れるような授業を県内全体に広げていくことが、本連盟における次年度以降の課題である。

そのため、今後も同研究主題の基、学習指導要領の趣旨を踏まえ、実践を行っていく。

7　図画工作・美術教育

埼玉県美術教育連盟

Ⅰ　研究主題と方針

埼玉県美術教育連盟は創立74年を迎えた。この永きにわたる歴史は埼玉県の図画工作・美術教育の歩みでもある。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、このような状況下においても、子供たちの活躍の場と教員の図画工作・美術に関する研修の場をできるかぎり確保し、安全第一で運営していくという方針の基、様々な事業についての検討を行い、実行に移してきた。

本年度は、来年度に開催予定である第62回関東甲信越静地区造形教育研究大会埼玉大会に向けて、例年の造形大会という形ではなく、８月に夏季研修会、11月に令和５年度関ブロ埼玉大会に向けた経過報告会を開催した。（こちらを第63回埼玉県造形教育研究大会という位置付けにしている）大会を通じて、来年度の関ブロに向けた成果報告だけに止まらず、研究の成果が県内各学校の図画工作・美術教育の進展に大きな役割を果たしてきた。

夏季研修会では、研究部が主体となり、オンラインで開催された。内容は、①研究チームによる取組の紹介、②参会者同士の研究協議、③文部科学省教科調査官の講演が行われた。内容の濃い講演や研究成果の発表、参会者による研究協議は、参会者からの評判も高かった。

令和５年度関ブロ埼玉大会に向けた経過報告会でも、研究部が主体となり、オンラインで開催された。内容は、各研究チームからの研究内容の説明や紹介、それに対する指導者の方々からの指導や助言であった。こちらも来年度の関ブロ埼玉大会に向け、参会者の意識が更に高まる機会となった。

今後も、先輩諸氏が永年にわたって築き上げてこられてきた実践と研究が基盤となって本県の造形教育が発展してきたことを確認し合い、時代の流れを正確に捉えて改善を行っていくとともに、図画工作・美術がもつ可能性を広げていきたい。

1　研究主題

「きらめく感性　つくりだす喜び
～新時代への扉　Life with Art～」

（２年次）

○　新時代への扉

背景として以下の５点が挙げられる。

⑴　デジタルイノベーション、デジタル文化の発展とテクノロジーの高度化
- Society.５、DX（デジタルトランスフォーメーション：進化したデジタル技術を浸透させることで人々の生活をより良いものへと変革すること）

⑵　アナログ文化の復権、原始の力
- 自然欠乏症候群
- 「原体験」（火、草、動物、石、水、木、土、ゼロ体験）の必要

⑶　地球的・宇宙的な時空観
- 望遠顕微（ミクロからマクロまでを見通す目）
- 地球時代（地球人としての視野）

⑷　人類が地球に与えている影響の深刻さ、人間中心主義への警鐘
- 人新生（地質学）
- 持続可能な社会 SDGs
- 脱炭素革命、グリーンディール、グリーンリカバリー

⑸　新型コロナ禍からポスト〝コロナ〟へ

○　Life with Art

Life with Artについて、以下の背景が挙げられる。

- 「様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切りひらき、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」（新学習指導要領前文）
- 「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待させる児童に、生きる力を育むことをめざす」（新学習指導要領 総則）
- 社会、生活との関わりが重視されるように
- Life（生命、生活、人生）生きること、豊かな人生につながる造形教育へ
- 様々な現代的課題に立ち向かい、高度なテクノロジーを調和的創造的に生かす力が必要。
- 造形活動の底流を成すプリミティブなもの（原始的、根源的、身体的、素朴な、実空間）の意義も再確認される必要がある。
- アートの力、図工・美術教育の力、「造形的な見方・考え方」、「STEAM教育」、「アート的思

考」、「ESD 教育」

これらの背景から、以下のことについて研究を進めていく。

追究観点１「受け止めよう　子供の心」

①子供たち一人一人の心 （感性、表現の思いなど）をしっかりと受け止め、励まし、豊かな心を培うこと。

②自分の心を見つめ、他者と心を通わせ合うことを大切にすること。

追究観点２「育てよう　確かな力」

①「確かな力」を生きて働く力としてとらえ、育てたい力を具体的に明らかにし、学びを深めていくこと。

②造形的な見方や考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質や能力を育成すること。

追究観点３「深めよう　生き生き授業」

①子供たちの実態に適した授業、子供たちが生き生きと活動できる授業を構想すること。

②「主体的・対話的で深い学び」という視点も生かしながら、授業づくりのための手立てを豊かにすること。

課題１　これまでの研究成果を継承、発展させ、未来社会を豊かに創造し、生きていく心と力を育む図工・美術教育を探求すること

課題２　次代の図工・美術教育の担い手を育てるとともに、図工・美術教育のさらなる拡充と浸透を図ること。

課題３　造形教育研究大会の刷新を図り、年間の活動の在り方、進め方を整備すること。

以上の追究観点と課題を設定することで、研究を進めた。

☆　第62回関東甲信越静地区造形教育研究大会埼玉大会に向けた取組

１　研究主題「造形教育の新天地！
ワイワイ埼玉　Artlearntis」

２　大会コンセプト

⑴　子供が主役！きらめく感性 つくり出す喜び。

⑵　作品主義を乗り越え資質･能力の育成を中心に。

⑶　今こそ Art 豊かに生きる力を育む造形教育へ（造形的な視点、創造力、生活や社会と関わる力）。

⑷　共同と対話を広げ、冒険的な授業づくりを。

３　具体的な分科会

⑴　Spring・・・幼稚園での実践

⑵　Play・・・・造形遊びを中心に

⑶　Create・・・自己表現を中心に

⑷　life　・・・・豊かな生活づくり

⑸　Wonder　・・新しい試みや鑑賞

⑹　Link・・・・様々な連携を図る

⑺　Flying・・・はばたく美術教育

２　活動方針

⑴　研究テーマは、時代の要請を受けて設定する。

⑵　本年度は、例年の埼玉県造形教育研究大会は行わず、８月に夏季研修会、11月に令和５年度関ブロ埼玉大会に向けた経過報告会をどちらもオンライン形式で開催した。

また、昨年度に引き続き、美術教育連盟の事業の見直しを図りながら、造形教育の広がりと発展を期す方法について模索した。

来年度は、11月に関東甲信越静地区造形教育研究大会埼玉大会が開催されるため、８月に関ブロに向けた研究大会を計画的に決定・準備していく予定である。

⑶　時代や社会の変化を見据えて、その要請に応える研究を推進する。

Ⅱ　活動状況

会則に基づき、次の事業を行った。

５月11日㈬　役員研修会（常任理事会）
開催方法：書面による開催

６月10日㈮　総会
開催方法：書面による開催

６月11日㈯　関東甲信越静地区造形教育連合都県代表者会議　参加
開催方法：オンライン配信（Zoom）

８月４日㈭　夏季研修大会
開催方法：オンライン配信（Zoom）

８月18日㈭　令和４年度身体障害者福祉のための第64回埼玉県児童生徒美術展覧会中央審査会
会場：埼玉県障害者交流センター

10月12日㈬　郷土を描く児童生徒美術展中央審査会
会場：蓮田パルシー

11月５日㈯・６日㈰　令和４年度身体障害者福祉のための第64回埼玉県児童生徒美術展覧会
会場：本庄市民文化会館

11月11日㈮　第61回関東甲信越静地区造形教育研究大会　新潟大会（オンライン）参加

11月16日㈬　令和５年度関ブロ埼玉大会に向けた経過報告会
開催方法：オンライン配信（Zoom）
12月24日㈯　第57回郷土を描く児童生徒美術展
・12月25日㈰　会場：埼玉県立近代美術館
12月１日㈭　第63回埼玉県小・中学校等児童生徒
～２月８日㈰　美術展　県下10会場で開催
２月17日㈮　役員研修会（理事会）
会場：埼玉県立近代美術館
２月18日㈯　第63回埼玉県小・中学校等児童生徒
・19日㈰　美術展　第15回中央展

Ⅲ　研究内容

１　夏季研修会

⑴　ねらい

埼玉県では、図画工作・美術の授業を通して、どんな子供を、どのように育てていくのかということを共通理解すること。

⑵　研修内容

・研究部の取組の発表
・分科会研究チームの取組の発表
・文部科学省教科調査官２名による講演

⑶　主催　埼玉県美術教育連盟

⑷　期日　令和４年８月４日㈭

⑸　開催方法　オンライン開催（Zoom）

⑹　日程

受　　付	12：45 ～ 13：00
開会行事	13：00 ～ 13：10
研究部の取組について	13：10 ～ 13：35
研究協議	13：35 ～ 14：30
講演①（小林恭代調査官）	14：40 ～ 15：25
講演②（平田朝一調査官）	15：35 ～ 16：20
閉会行事	16：20 ～ 16：30

【講演の内容】

⑴　演題

「未来に生きる資質・能力
―今、授業で大切にしたいこと―」

⑵　演題について

目の前にいる子供たちが社会に出たとき、今自分が行っている授業によって子供たちに身に付けられた資質・能力がどう生きていくのか。このことを考えること無しには、資質・能力の育成はできないと考えている。来年度、埼玉県の図工・美術教育を県外に広く提案していくにあたって、もう一度図工・美術の根本について考え、私たちが今、何を大切に授業していくのかを考える機会にしていきたいと考えている。

２　令和５年度関ブロ埼玉大会に向けた経過報告会

⑴　大会テーマ

「造形教育の新天地!ワイワイ埼玉 Artlearntis」

⑵　期日　令和４年11月16日㈬

⑶　開催方法　オンライン開催（Zoom）

⑷　日程

受　　付	12：45 ～ 13：00
開会行事	13：00 ～ 13：10
経過報告１	13：10 ～ 15：10

	分科会テーマ	発信場所	報告概要	チーム名
Aブロック	②Play	所沢市立和田小学校	子供の活動を子供自身や大人はどう見ているのか、活動の過程を覗いてみるにはどうしたらよいかの取組の報告	GALAポン
	②Play	羽生市立東中学校	図工・美術の授業における教員の悩みを明らかにし、その解消のための地区の取組の報告	北埼チーム
	③Create	春日部市立上沖小学校	ＭＴＧを活用した話し合いや、実技研修等を通して「自分事になる授業とは」をテーマにし たこれまでの取組の報告	Art Base
	指導者　武蔵野大学教育学部特任准教授 大杉 健 先生			

	分科会テーマ	発信場所	報告概要	チーム名
Bブロック	⑤Wonder	各所属校	ICTを活用した子供たちがワクワクする新たな挑戦の実践アイデアの報告	Art×ICT TODA
	⑤Wonder	各所属校	造形実験を通じて育む教師と生徒の関わり方の変容の報告	さいたま市チーム
	⑥Link	各所属校	カリキュラム・マネジメントに係る美術の教科を超えた取組の紹介	朝鑑賞チーム
	指導者　武蔵野美術大学教授 三澤 一実 先生			

	分科会テーマ	発信場所	報告概要	チーム名
Cブロック	③Create	上尾市立大石中学校	実践を共有し、対話する中で見えてきた「発想や構想についての課題」とその解決の見通しの報告	図美好場

Cブロック	③Create	新座市立新座第二中学校	工芸やデザインの授業において生徒が主体的に取り組むための評価と工夫の情報共有	ART SWAN
	⑤Wonder	鴻巣市立吹上北中学校	地域とのつながりを考えた造形活動について考えたこと、実践したことの報告	のすっ子アートひなちゃんず
	指導者　埼玉大学教育学部教授 石上 城行 先生			

経過報告２　15：10 ～ 16：20

○川口市内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の紹介と図画工作、美術教育の報告

指導者　矢生　秀仁　先生
（こども環境デザイン研究所代表）
采澤　　敬　先生
（埼玉県教育局市町村支援部
義務教育指導課指導主事）
山岸　啓介　先生
（さいたま市教育委員会指導１課
指導主事）

閉会行事　16：20 ～ 16：30

Ⅳ　関ブロ大会への参加

１　第61回関東甲信越静地区造形教育研究大会
新潟大会

⑴　大会テーマ
「未来につながる学びをひらく造形教育の今」

⑵　期日　令和４年11月11日㈮

⑶　実施方法　オンライン開催

⑷　埼玉県の発表者

発　表　者	分科会テーマ
大島　伸夫 （上尾市立大石中学校）	中学校 Ｂ鑑賞

Ⅴ　児童生徒美術展の開催

１　令和４年度身体障害者福祉のための
第64回埼玉県児童生徒美術展覧会

⑴　主催・共催
主催　社会福祉法人、埼玉県身体障害者福祉協会
共催　埼玉県美術教育連盟

⑵　地区審査
県下10会場で地区審査が行われ、入選・特選作品が選ばれた。

⑶　中央審査会
令和４年８月18日㈭　埼玉県障害者交流センターで、地区審査特選作品750点の中から、特別賞の作品68点が選ばれた。

⑷　展覧会会期・会場
会期　令和４年11月５日㈯・６日㈰
会場　本庄市民文化会館

２　第57回郷土を描く児童生徒美術展

⑴　主催・共催
主催　埼玉県校外教育協会、埼玉県教育委員会
埼玉県、埼玉県芸術文化祭実行委員会
共催　さいたま市教育委員会、埼玉県美術教育連盟
埼玉県市町村教育委員会連合会

⑵　地区審査
県下10会場で地区審査が行われ、入選作品8,798点・特選作品1,009点が選ばれた。

⑶　中央審査会
令和４年10月12日㈬　蓮田パルシーにおいて、地区審査で選ばれた特選作品1,009点の中から、埼玉県知事賞等120点が選ばれた。

⑷　展覧会会期・会場
会期　令和４年12月24日㈯・25日㈰
会場　埼玉県立近代美術館

３　第63回埼玉県小・中学校等児童生徒美術展

⑴　主催・共催
主催　埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会
埼玉県美術教育連盟
共催　埼玉県市町村教育委員会連合会

⑵　会期　各会場において１月下旬～２月上旬に実施

⑶　会場　県下10地区会場で開催

⑷　第14回中央展
①会期　令和５年２月18日㈯・19日㈰
②会場　埼玉県立近代美術館
③内容　平面作品50点・立体作品50点
④表彰　県知事賞
県議会議長賞
県教育委員会教育長賞
さいたま市教育委員会教育長賞

Ⅵ　今後の課題

図画工作・美術科として、学力の重要な要素である①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力・人間性等の三つの資質・能力、そして、「造形的な見方・考え方」を重視した研究を推進していく。

また、「子供の心」「確かな力」という観点を生かしつつ、研究主題に位置付けて、追究観点を中心に、さらに「主体的・対話的で深い学び」を視点に研究を深めていく。

８ 保 健 体 育 教 育

埼玉県保健体育研究会

本研究会は、小学校部会と中学校部会から成り立ち、互いに連絡を取り合いながら活動をしている。

以下、本年度の両部会の研究方針や活動状況について概略を報告したい。

Ⅰ　小学校部会

本部会の主な活動の中心は、「県小学校体育研究協議会」である。本研究協議会は、決められた研究テーマに基づき、個人あるいは共同で研究した結果を発表し合って研究協議を重ね、より優れた体育科教育の指導法や資料を得ようとするものである。

従って、研究については実践的で、日々の指導に直接役立つものが求められている。

１　研究主題の決定

理事会を年度当初に開催し、県教育委員会の指導をいただき、どの学校にも共通した課題として次のような研究主題と三つの領域を決定した。そして、領域ごとに分科会を組織して研究協議を進めている。

２　研究主題

第１主題（運動領域）

「運動の特性や魅力に応じた楽しさや喜びを味わうとともに、資質・能力をバランスよく身に付ける授業の工夫」

第２主題（保健領域）

「健康・安全に関する内容を実践的に理解する保健教育の工夫」

⑴　器械運動系

①鉄棒を使った運動遊び　（１・２年）
②鉄棒運動　（３・４年）
③鉄棒運動　（５・６年）

⑵　陸上運動系

①跳の運動遊び　（１・２年）
②幅跳び　高跳び　（３・４年）
③走り幅跳び　走り高跳び　（５・６年）

⑶　保健

①健康な生活　（３年）
②体の発育・発達　（４年）
③心の健康　けがの防止　（５年）
④病気の予防　（６年）

３　研究主題と方針

生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するためには、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱をバランスよく、育むことが大切である。資質・能力を育成するためには、以下の視点を踏まえて授業実践を行うことが重要である。

①児童の発達の段階、能力や適性、興味や関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの授業実践。

②児童が身近な生活における健康・安全に関心をもち、自ら考えたり、判断したりしながら、健康に関する課題を解決する授業実践。

③学習規律の確立を図り、人間関係が温かく、助け合い、励まし合い、教え合い、高め合う学習集団を育て、安全で効率的に行う授業実践。

このことにより、生涯にわたって運動やスポーツを日常生活に積極的に取り入れ、生活の重要な一部とすることや、現在及び将来の生活において、健康に関する課題に対して、自己の健康を保持増進するために的確に思考し判断するとともに、表現することができるような資質・能力を目指すものである。以上のことから、令和４年度の研究主題を設定した。

４　活動状況

⑴　資料交換の実施

研究協議会の参会者が他地区の研究資料をホームページよりダウンロードすることにより、研究を深め、よりよい協議ができるように行っている。

⑵　指導者・司会助言者打ち合わせ会

研究協議の内容を高めるため、また、運営を円滑にするために行っている。

⑶　研究協議会

協議会においては、意見交換や協議が充実できるように、分科会をそれぞれ小集団（９分科会）に分けている。ここでは、研究協議が深められ、実り多い討議ができるように工夫している。

⑷　指導者

○ 県教育局県立学校部保健体育課指導主事
○ 県教育局教育事務所指導主事
○ 県総合教育センター指導主事
○ さいたま市教育委員会指導主事

○ 市町村教育委員会指導主事
○ 県小学校体育連盟役員

5　研究の視点

本年度は、各運動領域の次のことに視点を当てて研究を進め、協議する。

⑴　器械運動系

器械運動系（「鉄棒を使った運動遊び」「鉄棒運動」）は、「回転」、「支持」等の運動で構成され、様々な動きに取り組んだり、自己の能力に適した技や発展技に挑戦したりして技を身に付けたときに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。

低学年の「鉄棒を使った運動遊び」では、回転、支持、逆さの姿勢、ぶら下がり、振動などの基本的な動きができるようにすることや、遊び方を工夫したり、これらを友達に伝えたりすることができるようにすることが大切である。また、児童が鉄棒を使った多様な動き方や遊び方を考えることができるように図で掲示したり、集団で取り組める遊びを工夫したり、児童が創意工夫した動きを評価したりすることも必要である。

中・高学年の「鉄棒運動」では、低学年の「鉄棒を使った運動遊び」等で経験して身に付けた体の動かし方や運動感覚を、「鉄棒運動」の技の学習に生かすように学習過程を進めることが大切である。それぞれの運動に集団で取り組み、一人一人ができる技を組み合わせ、調子を合わせて演技する活動を取り入れることもできる。また、「できる」、「できない」がはっきりした運動であることから、全ての児童が技を身に付ける楽しさや喜びを味わうことができるよう、自己やグループの課題を見付け、その課題の解決の仕方を考えたり、練習の場や段階を工夫したりすることができるようにすることが大切である。運動を楽しく行うために、一人一人が自己の課題の解決のために積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにすることが求められる。

⑵　陸上運動系

陸上運動系（跳の運動遊び、幅跳び・高跳び、走り幅跳び・走り高跳び）は「走る」、「跳ぶ」などの運動で構成され、自己の能力に適した課題や記録に挑戦したり、競走（争）したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。

低・中学年「跳の運動遊び、幅跳び・高跳び」では、走ったり跳んだりする動き自体の面白さや心地よさを引き出す指導を基本にする。体力や技能の程度にかかわらず競走（争）に勝つことができたり、勝敗を受け入れたりするなどして、意欲的に運動（遊び）に取り組むことができるように、楽しい活動の仕方や場を工夫することが大切である。また、最後まで全力で走ることや思い切り地面を蹴って踏み切るなど、体全体を大きく、素早く、力強く動かす経験をすることができるようにすることも大切である。

高学年の「陸上運動」では、合理的な運動の行い方を大切にしながら競走（争）や記録の達成を目指す。記録を達成する学習活動では、自己の能力に適した課題をもち、適切な運動の行い方を知り、記録を高めることができるようにすることが大切である。競走（争）では勝敗が伴うことから、できるだけ多くの児童に勝つ機会が与えられるように指導を工夫するとともに、その結果を受け入れることができるよう指導する。また、最後まで全力で走ることや思い切り地面を蹴って踏み切るなど、体全体を大きく、素早く、力強く動かす経験をすることができるようにすることも大切である。

⑶　保健

第３学年「健康な生活」　健康な生活については、健康の大切さを認識するとともに、家庭や学校における毎日の生活に関心をもち、健康によい生活を続けることについての課題を見付け、それらの解決を目指して基礎的な知識を習得したり、解決の方法を考えたりできるようにする。

第４学年「体の発育・発達」　体の発育・発達については、年齢に伴う変化及び個人差、思春期の体の変化などについて課題を見付け、それらの解決を目指して基礎的な知識を習得したり、解決の方法を考えたりできるようにする。

第５学年「心の健康」　心の健康については、心は年齢とともに発達すること及び心と体には密接な関係があることについて理解できるようにすること並びに、不安や悩みへの対処について課題を見付け、それらの解決を目指して知識及び技能を習得し、解決の方法を考え、判断できるようにする。

第６学年「病気の予防」　病気の予防については、病気の発生要因や予防の方法、喫煙、飲酒、薬物乱用が健康に与える影響などについて課題を見付け、それらの解決を目指して知識を習得し、解決の方法を考え、判断できるようにする。

学習指導上の留意点として、学習のねらいと内容を明確にすることが重要である。身近な健康の保持増進について話し合うことなど、コミュニケーショ

ン能力や論理的な思考力の育成を促すための言語活動を積極的に行うようにする。指導に当たっては、多様な指導方法の工夫を行うよう配慮する。

６　研究の推進

⑴　県小学校体育連盟各支部においては、必ず２領域の研究に取り組む。なお、「保健」に取り組む支部は「器械運動系」「陸上運動系」のどちらかを合わせて２領域とすることができる。

⑵　研究は個人ではなく、学校内、地域、支部等で組織的に取り組むものとする。

⑶　研究対象学年は、器械運動系と陸上運動系は全学年、保健は第３～６学年の中から選ぶ。

⑷　研究の仮説を基に、具体的な単元の学習指導計画を作成し、授業を実践して結論を導き出すようにする。

⑸　研究の結果については、単元の目標と評価規準に照らし合わせた指導の成果を踏まえ、児童の具体的な変容（数値等）を示して考察を進める。

７　令和４年度の新型コロナウイルス感染症防止等への対応

令和４年度においては、新型コロナウイルス感染症防止のため研究協議会をオンラインで開催することとした。埼玉県立総合教育センターのサイトに研究資料を掲載していただき、その資料を基にオンラインで研究協議会を行った。

Ⅱ　中学校部会

本部会の主な活動である「県中学校保健体育研究協議会」では、学習指導要領の趣旨を踏まえ、中学校における保健体育指導の充実と一層の進展を期するため、教科保健体育の指導及び学校における体育・健康に関する指導上の諸課題から研究主題を設定し、各校の実践を通して得られた成果を持ち寄り研究協議をする。

このことにより、一層充実した研究実践を進め、心身共にたくましい生徒の育成を期するとともに、指導者の資質の向上を図ることをねらいとしている。さらに、県の研究協議会に至るまでの各学校における実践、各地区での資料の作成など研究活動の充実を図る上からも重要な研究協議会である。

１　研究主題の決定

本年度の研究主題は、学習指導要領に基づく体育授業の実践を目指し、昨年度のアンケート調査の結果を参考にし、研究常任委員会で検討を加え、その話合いでの問題点を県教育委員会・県中学校体育連盟・県保健体育研究会の三者で調整を図り、次に示すように決定された。

２　研究主題と方針

研究主題

「生徒一人一人を確実に伸ばす保健体育指導の実践」

＜第１主題＞

「陸上競技の特性に応じた効果的な学習指導の工夫」

⑴　研究の趣旨

陸上競技は、「走る」「跳ぶ」「投げる」などの運動で構成され、記録に挑戦したり、相手と競争したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。

第１学年及び第２学年では、「記録の向上や競争の楽しさや喜びを味わい、基本的な動きや効率の良い動きを身に付けることができるようにする」ことをねらいとし、第３学年では、「各種目特有の技能を身に付ける」ことを学習のねらいとしている。

学習指導要領の趣旨に基づき、生徒一人一人の自発的・自主的な運動への取組を引き出し、指導内容をバランスよく身に付けさせるとともに、運動の特性や魅力に触れる楽しさや喜びを味わわせるための学習指導の工夫をする必要がある。

⑵　研究の観点

陸上競技の運動種目は、競走種目（短距離走・リレー、長距離走またはハードル走）から１種目以上を、跳躍種目（走り幅跳びまたは走り高跳び）から１種目以上をそれぞれから選択して履修できるようにすることとしている。特に、３学年は、これらの中から自己に適した運動種目を選択できるようにするとともに、第１学年及び第２学年の学習を一層深められるよう配慮することが必要である。

これらのことを踏まえて、これまでの取組を見直すとともに、改めて各学校や生徒の実態を的確に把握し、生徒一人一人を確実に伸ばす「陸上競技」の学習指導について研究する。

⑶　研究協議の方向

研究の観点に基づき、研究の柱を焦点化して研究を進め、生徒一人一人を確実に伸ばす「陸上競技」の学習指導について研究協議を行う。

＜第２主題＞

「体つくり運動の特性に応じた効果的な学習指導の工夫」

⑴　研究の趣旨

体つくり運動は、自他の心と体に向き合って、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、 心と体をほ

ぐしたり、体の動きを高める方法を学んだりすることができる領域である。

第１学年及び第２学年では、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体つくり運動の意義と行い方、体の動きを高める方法などを理解するとともに、目的に適した運動を身に付け、組み合わせることができるようにすることをねらいとしている。

第３学年では、体を動かす心地よさを味わい、運動を継続する意義、体の構造、運動の原則などを理解するとともに、健康の保持増進や体力の向上を目指し、目的に適した運動の計画を立て取り組むことを学習のねらいとしている。

学習指導要領の趣旨に基づき、生徒一人一人の積極的・主体的な運動への取組を引き出し、運動の特性や魅力にふれる楽しさや喜びを味わわせるための学習指導の工夫をする必要がある。

⑵　研究の観点

体つくり運動は、各学年において全ての生徒に履修させることとされており、各学年の授業時数が７時間以上を配当されていることから、十分考慮して指導計画を作成する必要がある。また、評価に当たっては、「体ほぐしの運動」については、技能の習得・向上をねらいとするものではないこと、第１学年及び第２学年の「体の動きを高める運動」については、ねらいに応じて運動を行うこと、第３学年の「実生活に活かす運動の計画」については、運動の計画を立てることが主な目的となることから、技能の評価規準は設定されていないことを踏まえた学習活動指導の展開が求められる。これらのことを踏まえて、新たな時代に求められる「体つくり運動」の学習指導の在り方について研究する。

⑶　研究協議の方向

研究の観点に基づき、研究の柱を焦点化して研究を進め、生徒一人一人を確実に伸ばす「体つくり運動」の学習指導について研究協議を行う。

＜第３主題＞

「生涯を通じて心身の健康を保持増進するための資質・能力を育てる保健教育の工夫」

⑴　研究の趣旨

保健分野においては、社会の変化に伴う現代的な健康に関する課題の出現や、情報化社会の進展により様々な健康情報の入手が容易になるなど、環境が大きく変化している中で、生徒が生涯にわたって正しい健康情報を選択したり、健康に関する課題を適切に解決したりすることが求められる。 そのため、現在及び将来の生活において、健康・安全に関する課題に対して、科学的な思考と正しい判断の下に意思決定や行動選択を行い、思考力、判断力、表現力等を育成する必要がある。

⑵　研究の観点

小・中・高等学校を通じて系統性のある指導ができるように、小学校における「身近な生活において実践的に理解する」という指導内容や学習状況を把握した上で、子供たちの発達の段階を踏まえて、指導内容を明確にすることが大切である。

指導に当たっては、資質・能力をバランスよく育成するために、自他の健康に関心をもてるようにするとともに、健康に関する課題を解決する学習を積極的に行うことが重要である。

これらのことを踏まえて、生徒の興味や関心を生かして主体的に活動させる指導方法や評価方法を工夫した保健教育の在り方について研究する。

⑶　研究協議の方向

研究の観点に基づき、学校や地域における授業実践を通して、実践力を育てる学習指導の在り方について研究協議を行う。

３　活動状況

⑴　資料交換会

埼玉県立総合教育センターのサイトに研究資料を掲載していただき、その資料をダウンロードできるようにした。

⑵　指導者・司会者打ち合わせ会

研究協議の内容を高めるため、また、運営を円滑にするためにオンライン（Zoom）で開催した。

⑶　研究協議会

分科会においては、意見交換や協議することが充実できるように、分科会をそれぞれ小集団（各３グループ）に分けている。ここでは、研究協議が深められ、実り多い協議ができるように工夫している。

⑷　指導者

○県教育局県立学校部保健体育課指導主事
○県教育局教育事務所指導主事
○県総合教育センター指導主事
○さいたま市教育委員会指導主事
○市町村教育委員会指導主事
○県中学校体育連盟役員

４　本年度の対応

本年度は、新型コロナウイルス感染防止のためオンライン（Zoom）による開催とした。

５　今後の課題

○小学校や高等学校の研究協議会と連携するなど研究協議会の充実を図る。

９　英　語　教　育

埼玉県英語教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

１　研究主題

「21世紀を逞しく生き抜く日本人の育成を目指した英語教育
～コミュニケーションを大切にする生徒の育成～」

２　主題設定の理由及び方針

知識基盤社会化やグローバル化が加速度的に進展するこれからの社会において、子供たちが豊かに逞しく生きるために、語学を駆使し協力して課題を解決できるようコミュニケーション力の育成が求められている。このような状況の中、令和２年度からは小学校高学年で外国語が必修教科となり、小学校・中学校とも上級学校との連携を一層進めるとともに、上級学校での英語学習の土台作りを行い、学年が上がるごとに英語の学習意欲が向上するよう、コミュニケーションの必要性と楽しさを体得させる指導を計画的に進めることが求められている。

本県英語教育研究会においては、学習指導要領における外国語科の目標に照らし、これまでの実践を基に、児童生徒一人一人が主体的にコミュニケーションを大切にする英語教育を進め、21世紀を逞しく生き抜く人材の育成を目指すために本研究主題を設定した。

Ⅱ　活動状況及び研究内容

１　行事計画

６月17日㈮　理事・幹事会
（年間の方針、決算、予算、役員選出、事業報告、事業計画についての審議）
於：さいたま市プラザウエスト

６月29日㈬　埼玉県中学校英語学力調査
問題作成委員研修会
（問題作成にあたっての研究協議①）
於：さいたま市プラザウエスト

８月３日㈬　埼玉県中学校英語学力調査
問題作成委員研修会
（問題作成にあたっての研究協議②）
於：さいたま市プラザウエスト

８月５日㈮　英語教員研究発表会
（講演、研究成果発表等）
於：オンライン

８月17日㈬　埼玉県中学校英語学力調査
問題作成委員研修会
（問題作成にあたっての研究協議③）
於：さいたま市プラザウエスト

９月21日㈬　英語弁論大会準備会
（大会実施に向けての準備・役割分担）
於：越谷市中央市民会館

９月28日㈬　第74回高円宮杯英語弁論大会
埼玉県予選
（生徒による英語弁論大会）
於：越谷市中央市民会館

11月11日㈮　第46回関東甲信地区中学校
英語教育研究協議会群馬大会
（大会参加及び代表者による提案）
於：群馬県内各中学校
（県外参加者は、オンラインによる参加）

11月24日㈭　埼玉県中学校英語学力調査実施
（全学年実施）
於：各参加校

３月２日㈭　埼英研だより発行（広報誌の発行）

３月７日㈫　常任理事会
（年度末反省及び次年度全体研究）
於：埼玉大学教育学部附属中学校

３月20日㈪　研究紀要発行

２　役　員

６月17日㈮にさいたま市プラザウエストで行われた理事・幹事会において、本年度の役員が次のように選出された。

・会　長　　青野　　保（蓮田・黒浜西中校長）
・副会長　　福島　　実（上里・七本木小校長）
伊藤　幸男（熊谷・熊谷東中校長）
笠井　誠司（草加・青柳中校長）
加藤　秀樹（北本・西小校長）
菅野　誠一（富士見・東中校長）
粕屋　英之（ふじみ野･大井西中校長）
内山　真二（久喜・栗橋西中校長）
福沢　仁恵（白岡・南中校長）
遠藤　敏江（さいたま・城北中校長）
榎本　孝之（さいたま・原山中校長）

・監　事　　城崎　克恵（幸手・吉田小校長）
　　高田ひろみ（戸田・笹目中校長）
・支部長
さいたま市　田村　浩司（さいたま・土屋中校長）
北足立南部　及川　祐一（草加・川柳中校長）
北足立北部　池田　耕司（鴻巣・赤見台中校長）
入　　間　北野　　晃（入間・豊岡中校長）
比　　企　茂手木直人（ときがわ・玉川中教頭）
秩　　父　矢口　岳人（秩父・吉田中校長）
児　　玉　川田　博樹（本庄・金屋小校長）
大　　里　西澤　　淳（熊谷・大原中教頭）
北　埼　玉　吉田　匡男（行田・南河原中教頭）
埼　　葛　檜田　勝巳（八潮・八條小校長）

３　専門部組織

・行事部　総会、英語弁論大会を担当
部　長　　深須　英昭（深谷・深谷中教諭）
副部長　　直井　海斗（上里・上里北中教諭）
・研修部　教員研究発表会を担当
部　長　　城　由美（戸田・戸田中教諭）
副部長　　須田　　聡（戸田・美笹中教諭）
・調査研究部　埼玉県中学校英語学力調査問題の作成及び結果分析担当
部　長　　嶋村　　淳（さいたま･美園南中教諭）
副部長　　小山　協子（狭山・柏原中教諭）
・広報部　研究紀要、広報誌の発行
部　長　　出口　智康（行田・長野中教諭）
副部長　　山腰　文郁（さいたま・木崎中教諭）
・庶務部　庶務、会計等を担当
部　長　　蓬澤　　守（埼大附属中教諭）
副部長　　森　　菜摘（埼大附属中教諭）

４　活動の状況

⑴　総会・研究協議会
・期日　　令和４年６月17日㈮
・会場　　さいたま市プラザウエスト
本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため授業研究会を中止し、以下の内容について理事・幹事会において協議した。

【理事・幹事会　議題】
①令和３年度事業報告及び承認
②令和３年度決算報告
③監査報告及び承認
④令和４年度役員の承認
⑤令和４年度活動方針案審議
⑥令和４年度事業計画案審議
⑦令和４年度予算案審議

⑵　埼玉県中学校英語学力調査
現行学習指導要領に基づく教育課程実施に伴う英語学力を調査して、その実態を把握し、学習活動の指針とするとともに、言語活動の在り方についての資料とすることを目的に実施しているものである。調査は県内全域の中学生を対象とし、学年ごとに実施している。本年度は、現行学習指導要領となってから初の作問となった。問題作成方針や出題の方向性について検討した上で、「知識・理解」を問う問題だけでなく、「思考・判断・表現」を問う問題に特に重点を置き、作成・実施した。２年ぶりの再開となり、本年度の参加校数は21校と例年よりも少ない参加校数となってしまった。実施までの計画及び経過は以下のとおりである。
・６月29日㈬
埼玉県中学校英語学力調査問題作成委員研修会
（さいたま市プラザウエスト）
問題作成委員の委嘱、方針・計画・分担等についての研究協議
・７～８月　問題作成委員会　　（各地区）
担当組織ごとに開催
（１年：北足立南部、　２年：北埼玉、
３年：秩父、スピーキング：調査研究部）
・８月３日㈬・17日㈬
第１・２回問題作成委員会
（さいたま市プラザウエスト）
問題の検討及び完成
・８月23日㈫　放送による問題音声録音
（埼玉大学教育学部附属中学校）
・11月24日㈭～12月19日㈪
学力調査実施（各参加校）
・12月27日㈫　学力調査結果の分析（各担当組織）
・３月20日㈪　分析結果報告　　（研究紀要）

⑶　教員研究発表会
英語教育に関する個人またはグループによる研究成果を発表し、県下英語科及び外国語活動担当教員の資質の向上をねらい、開催されるものである。
・期日
令和４年８月５日㈮
・会場
オンラインによる開催
・内容

○全体研修

「新学習指導要領における授業デザイン
－指導と評価の一体化を目指して－」
新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科
准教授　阿部　雅也　先生

○各分科会での研究発表及び研修

＜第１分科会＞

「英語の授業を通して生徒に身に付けさせたいこと
～育成世代への適切なアプローチ～」
皆野町立皆野中学校　宮原　史明

「主体的に情報を読み取り、統合し、発信につなげる英語リーディング指導」
八潮市立大原中学校　櫻井　亮太

＜第２分科会＞

「バックワードデザインを意識した指導」
本庄市立児玉中学校　畠山　宣子

「小学校からの接続を意識した言語活動」
嵐山町立玉ノ岡中学校　加島　絹江

「KUMAGAYA ROUND SYSTEM 全校実施から７年～子どもの姿に寄り添い、指導の工夫・改善ができる教師に～」
熊谷市立熊谷東小学校　堀川　大介
熊谷市立玉井中学校　岡村　賢一
熊谷市立玉井中学校　落合　千裕

＜第３分科会＞

「即興的な言語活動の充実を目指して
～互いの考えや気持ちを伝え合うようになるための指導の工夫～」
さいたま市立大宮南中学校　井上　弓子

「生徒が参加しやすい活動を目指して
～宗岡中学校の取り組み～」
志木市立宗岡中学校　三上　恭子

＜第４分科会＞

「小学校段階での『「思考力・判断力・表現力」を評価するペーパーテストの試み』について」
上尾市立原市南小学校　松崎　奈穂

「『目的』『場面』『状況』『相手意識』に着目した言語活動」
飯能市立加治小学校　永島　小夜香

「積極的にコミュニケーションを図るための場の設定」
羽生市立岩瀬小学校　小島　涼子

⑷　埼玉県中学校英語弁論大会

・期日　令和４年９月28日㈬
・会場　越谷市中央市民会館
・目的　県内中学生の英語を話す能力、聞く能力の向上を図るとともに、諸言語活動の発表の場とする。
・審査員（敬称略）

大東文化大学教授　静　哲人
埼玉大学教授　及川　賢
大東文化大学准教授　淡路　佳晶
埼玉大学・神奈川大学・早稲田大学大学院非常勤講師　肥沼　則明
埼玉大学英語教育開発センター教授　Stacey Vye
埼玉大学英語教育開発センター准教授　Leander Hughes
東京理科大学講師　Debjani Ray
埼玉県県民生活部国際課国際交流員　Bethany Paju

・日程

９：20～９：35	受付
９：40～10：00	開会行事
10：10～12：30	予選の部発表
12：30～13：30	昼食・休憩
13：30～14：20	決勝の部発表
14：20～14：50	審査・休憩
14：50～15：30	閉会行事
15：30～16：00	諸連絡等

・入賞者

１位　木村　奈乃　蕨市立第二中学校
It’s Not His or Hers, It’s OURS.

２位　増田　千穂　さいたま市立大宮東中学校
Not guns, but books

３位　髙橋　文花　上尾市立上平中学校
Save the World by Proper Eating

４位　石隨　知華　さいたま市立浦和中学校
“Girly” Girl

５位　笹岡　祐仁　鴻巣市立鴻巣南中学校
My Thoughts on Language and Culture
柳下　苺唯七　草加市立草加中学校
Never Give Up

７位　園部　璃南　東松山市立南中学校
What Color Is the Sky?

８位　河内　晴輝　所沢市立山口中学校
Education and Me

８位　古賀　杏奈

さいたま市立大宮国際中等教育学校

To say nothing and do nothing, stops nothing

本年度も、質の高いスピーチの発表であった。なお、上位３名は、高円宮杯第74回全日本中学校英語弁論大会中央大会に出場した。

(5)　第46回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会群馬大会

本年度は、群馬県で開催された。

本研究会からも多数の参加を得ることができ、英語教育に対する各界からの質の高い提言がなされた。

概要は以下のとおりである。

①開会行事

②全体会

・大会主題提案

「主体的に学び、英語で豊かにコミュニケーションを図る生徒の育成

～生徒の学びの質を高める指導の工夫を通して～」

③公開授業

④分科会

・第１分科会

「生徒の自主的自律的な学びを生み出す指導と評価の工夫」

於：前橋市立南橘中学校

・第２分科会

「生きて働く知識及び技能の定着を目指す指導と評価の工夫」

於：高崎市立新町中学校

・第３分科会

「生徒の思考を促しコミュニケーションを通して課題解決を図る指導と評価の工夫」

於：伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

・第４分科会

「外国語科の学びのつながりを踏まえた指導の工夫」

於：藤岡市立小野中学校

本研究大会では、埼玉県からは第３分科会にて、指導助言者の埼玉大学教授　及川　　賢　氏のご指導の下、埼玉大学教育学部附属中学校　蓬澤　　守教諭が誌上提案を行った。

(6)　研究紀要の発行

本年度の本会の活動の総括として以下のような内容の紀要を作成、発行するとともに、来年度以降の研究推進の基礎としたい。

・教員研究発表会記録

・英語学力調査全問題、解答及び全学年分析結果

・英語弁論大会結果と入賞者及び弁論原稿

・埼英研だより等

Ⅲ　今後の課題

８月に行われた教員研究発表会では、県内各地で行われている研究や授業実践などが発表されたが、それらについての質疑応答や意見交換なども活発に行われ、大変意義深いものとなった。本年度は、初の試みとしてオンラインによる開催となり、運営準備に時間がかかってしまった。

しかし、全体会講師の先生に新潟県から配信を行っていただけたことのほか、遠距離にいる教員の参加が可能となったことは特筆すべきことである。

６月から12月にかけて行われた英語学力調査は、２年ぶりの実施となった。問題作成の場においては、県内各地区の教員の意見を出し合い、問題内容の精選や評価との対応について理解を深める機会となった。

令和２年度より実施となった現行学習指導要領を踏まえ、従来の聞くこと、読むこと、書くことに加え、話すことにおいては［やり取り］と［発表］を図る形式としてテストに盛り込み、効率的に調査を行うことができた。

しかしながら、参加校数の減少が喫緊の課題であり、広報・周知の手段に工夫が必要である。

本年度、研究主題としていた「21世紀を逞しく生き抜く日本人の育成を目指した英語教育」について、今後も、コミュニケーションを大切にする児童生徒の育成を目指すことが大切である。その達成のために、本会の諸活動を通じ、学習内容の深化や主体的な学びの工夫等に関する研修を深め、県内外国語活動及び英語科教員の資質・能力の向上を図っていきたい。

10 道 徳 教 育

埼玉県道徳教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

1　研究主題

【研究主題】

「人としての生き方について考えを深め、よりよく生きる児童生徒を育てる道徳教育の創造」

～学習指導要領が求める道徳教育の実践を通して～

2　研究方針

人間は、だれもが人間として生きる資質をもって生まれてくる。その資質は、人間社会における様々なかかわりや自己の対話を通して開花し、固有の人格が形成される。その過程において、人間は様々に夢を抱き、希望をもち、また、悩み、苦しみ、人間としての在り方や生き方を自らに問いかける。この問いかけを繰り返すことによって、人格もまた磨かれていくと考えられる。人間は、本来、人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。この願いの実現を目指して生きようとするところに道徳が成り立つ。道徳教育とは、人間が本来もっているこのような願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動であるといえる。

本研究会では、このような道徳教育本来の在り方を重視し、内なる自己との対話を通して他者や人間社会集団、自然、そして目に見えない崇高なものとの関係性においてよりよい生き方を求め、実践できる子供たちを育む視点を重視し、本主題を設定した。

特に、学習指導要領が求める道徳教育の実践を通して、「道徳科」が学校の教育活動全体で行う道徳教育の要として、それらを補充、深化、統合する役割を果たすことから、「人間とは何か」ということや、人間としての生き方について、探求する機会としての「道徳科」の充実を模索していくこととした。また、本年度、「第56回関東地区小学校道徳教育研究大会埼玉大会」及び「第61回埼玉県道徳教育研究大会さいたま大会」を開催するにあたり、運営のための実行委員会を立ち上げ、「授業で勝負する埼玉県の道徳教育」を合言葉に取り組んだ。当日は、特別支援学級を含めた全学級で13本の公開授業を行い、それぞれの授業で参観の視点をもとに協議を深めた。また、各都県からの六つの課題別分科会、文部科学省調査官による記念講演を実施し、大きな成果を得ることができた。

3　令和４年度組織

現役顧問：島方　勝弘（幸手市立幸手中学校長）
会　　長：藤澤美智子（さいたま市立本太小学校長）
副 会 長：関本　由美（杉戸町立杉戸第二小学校長）
　　藤間　隆子（加須市立加須西中学校長）
　　森田　昌孝（熊谷市立男沼小学校長）
　　正籬　洋子（春日部市立八木崎小学校長）
監　　事：須山恵美子（川口市立里小学校長）
　　閑野　千鶴（桶川市立日出谷小学校長）
総務部長：森田　昌孝（熊谷市立男沼小学校長
授業開発部長：栗原　利夫（行田市立見沼中学校長）
企画推進部長：福田　和己（羽生市立西中学校長）
事務局長：清水　良江（鴻巣市立広田小学校長）

Ⅱ　活動状況

1　本年度の主な事業

⑴　理事会（総会）・専門部会及び全体研究協議会

日　時：令和４年６月３日㈮ 13:45～
会　場：さいたま市文化センター
出席者：役員（幹事を除く）
全体研究協議会（講演）
演題　『個別最適な学びと協働的な学びをはぐくむ道徳教育』
講師　横浜商科大学商学部
教授　東風　安生　先生

※総会資料の郵送送付により、本年度の計画等了承済み。

⑵　夏季研修会

日　時：令和４年８月５日㈮ 12:00～
会　場：幸手市立幸手中学校（オンライン）
内　容：教材吟味と学習指導案の作成（基礎基本、小学校低・高学年、中学校部会）
指導講評（埼玉県教委）
記念講演
講師　文部科学省初等中等教育局
教育課程課
教科調査官　浅見　哲也　先生

⑶　「第56回関東地区小学校道徳教育研究大会埼玉大会」及び「第61回埼玉県道徳教育研究大会さいたま大会」

期　日：令和４年11月11日㈮
会　場：さいたま市立本太小学校

内　容：授業研究会 （13学級）
課題別分科会 （６分科会12ルーム）
記念講演
講師　文部科学省初等中等教育局
教育課程課
教科調査官　浅見　哲也　先生

⑷　会報第103号編集発行（令和５年２月発行）
※掲載内容を精選し、８ページでの発行

⑸　道徳教育の研究第53集
（道徳教育指導資料集35集）編集発行

⑹　各研究大会への参加等
①全国小学校道徳教育研究大会福井大会
②全日本中学校道徳教育研究大会山形大会
（オンライン開催）
③関東甲信越中学校道徳教育研究大会群馬大会
（紙面開催）
④全国小学校道徳教育研究会研究発表大会
⑤全国小学校道徳教育研究会夏季中央研修講座
（参集またはオンライン開催）
⑥道徳教育推進教師育成講座（中学校）
（参集またはオンライン開催）

Ⅲ　研究内容

１　総会・専門部会及び全体研究協議会（講演）

演題『個別最適な学びと協働的な学びをはぐくむ
道徳教育』
講師　横浜商科大学商学部
教授　東風　安生　先生

【講演の概要】

⑴　個別最適な学びと協働的な学び

○教える側は刻々と変わっていく社会の課題に対して的確に変わっていかなくてはならない。
○教師自身が学び続ける。
○どの授業、学びにおいてもICTをコミュニケーションツールとして活用する。
○「個別最適な学び」と「協働的な学び」は一緒の学びに融合させていくような方向に変化している。
○ICTの活用により、子供一人一人が自分のペースを大事にしながら、共同で作成、研修等を行う活動で多様な意見を共有しつつ、合意形成を図る。
○個別最適な学びと協働的な学びはより一体的に。

⑵　道徳教育と道徳科における個別最適な学びと協働的な学び

○自己調整学習とはメタ認知能力のこと。
自ら目標をもち、何を学んだかを確認して自己評価し、軌道修正しながら新たな目標に向かう学びである。
○自分のこれからのよりよい生き方に向け、今日の学びはどのように参考になったかという視点で個別最適な学びを進めていく。
○自分の生活やキャリア形成の方向性と関連付けながら学習を振り返り、納得しながら次に繋げる。
○道徳科における「学びの連続性」と「一体的な充実」が求められている。

＜東風先生　ご講演＞

２　夏季研修会

教材吟味と学習指導案の作成
（基礎基本、小学校低・高学年、中学校部会）

【指導講評】

埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課
指導主事　芳賀　一行　様

⑴　道徳科の指導と評価の一体化について

○授業における児童生徒の具体的な学習状況を学習活動全体を通して見取る。
○評価の視点が定まると、どのような指導をすればよいのかが見え、指導方法の工夫ができる。
○指導方法の工夫や授業改善を進めることで学習活動が焦点化され、評価もしやすくなる。
○指導と評価の一体化は、児童生徒の成長につながる。
○授業者はどのような多面的・多角的な見方をさせたいのか、どのようなことを自分と重ねて考えようとさせるのか、評価の視点として明確にもつ。

⑵　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について

○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が「考え、議論する道徳」である。
○「考える」とは、道徳的価値や道徳的価値に関わる諸事情等を主体的に自分との関わりで考えることであり、「議論する」とは一面的ではなく多面的・多角的に考える中で、協働的に多様な考え方・感じ方と出会い交流すること。
○話合いを重視するという本質は変わっていない。

⑶　「家庭地域との連携」と「規律ある態度」について

○家庭・地域と学校が一体となって推進する。
○授業公開やお便り等での道徳教育の取組を発信、

「家庭用彩の国の道徳」の活用を図る。

○「規律ある態度」の最重要課題は、「話を聴き、発表する」ことである。

○先生方一人一人の実践の積み重ねが埼玉県の子供たちの心を着実に育てている。

【記念講演】

演題　『子供一人一人の可能性を引き出す道徳教育』

講師　文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター
教育課程調査官　　浅見　哲也　先生

⑴　はじめに　―道徳教育が充実しない背景と対策―

①教育活動全体で行う道徳教育の目標設定

②重点内容項目

③重点内容項目を指導する機会や時期などの計画

④道徳科の授業の年間指導内容については、学校が独自で決めなくてはならない。

○校長のリーダーシップの下、学校の課題は何かを考え、一つずつ進めることが大切である。

⑵　道徳教育と道徳科の授業

①カリキュラム・マネジメント

○育てたい子供像を明確にして目標を設定し、計画を立て、教職員が共通理解・実践する。

○道徳教育推進教師の役割の大切さについて。

②道徳教育と要となる道徳科の授業（補充・深化・統合）

○道徳教育は、特別の教科　道徳（道徳科）を要として、学校の教育活動全体を通じて行うものである。要とは、「補充」「深化」「統合」による。

③全ての子供たちの可能性を引き出す―道徳科の授業―

○道徳の時間の課題は「主題やねらいの設定が不十分な単なる生活体験の話合いの指導」「読み物教材の登場人物の心情理解のみに終始する（自分ごとになっていない）指導」「望ましいと分かっていることを言わせたり、書かせたりすることに終始する指導（教師の価値観の押し付け）」である。

○授業の質的転換を図るために、ねらいとする道徳的価値の三つの意義を理解する。

⑶　令和の日本型学校教育について

○全ての子供たちの可能性を引き出し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する。

○自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となる資質能力を育成する。

○ICTの効果的活用で誰一人取り残さない授業を行う。

⑷　まとめ

○全教育活動を通じて行う道徳教育と道徳教育の要となる道徳科の授業に意識をもつ。

○道徳教育は、子供たちの未来への投資である。

３　委嘱校　さいたま立本太小学校の研究概要

「第56回関東地区小学校道徳教育研究大会埼玉大会・第61回埼玉県道徳教育研究大会さいたま大会」会場校となったさいたま市立本太小学校の取組

⑴　研究主題

「人としての生き方について考えを深め、
よりよく生きる児童を育てる道徳教育の創造」
～学習指導要領が求める道徳教育の実践を通して～

⑵　研究主題設定の理由

本校の児童は、学力が高く、知っていることやできることに対しては自信をもって取り組む児童が多い。一方で正解が一つではない問いに答えを出すことに苦手意識が高く、自分の思いを言葉で表現したり、他者と話し合って解決策を導いたりすることに課題がある。そこで、先行き不透明と言われるこれからの時代に、確かな学力ともに心の力を育むことで、幸せな生涯を自らの力で切り拓いていってほしいという願いを込め、本主題を設定した。

⑶　目指す児童像

・多様な意見や考えを出し合い、自分と異なる立場や考えを認めようとする子

・自己を見つめ、他者と豊かにかかわれる子

⑷　研究の内容

①研究の視点とその取組

視点１　ねらいとする価値にせまるための指導方法の工夫

タブレットやゲストティーチャー活用、心情可視化

視点２　児童が考え議論するような発問の工夫

発問、問い返しの精選、学習指導要領の読み込み、教材吟味、授業構想の練り上げ

視点３　児童の意欲を引き出し指導に生かすための評価の工夫

アンケートの再提示、考えの記録、教師の見取り

＜本太小学校　職員室の様子＞

②パートごとの取組

調査研究パート

児童・教員のアンケート結果から教育活動全体を見据えた取組を再設定し、全員で共有

地域連携・情報発信パート

校内環境の整備、地域や家庭に向けた情報発信、全教職員で教育活動全体を通した道徳教育の推進

⑸　研究大会における公開授業

本太小学校における研究大会では、特別支援学級を含めた全学級で13本の公開授業を行った。それぞれの授業で参観の視点を設定し、協議会ではその視点を中心に協議を深めた。

⑹　成果と課題

道徳授業を要とした道徳教育の実践を積み重ねていくことで、思いを出し合い、自分と異なる立場を認めたり、友達の考えを聞き、仲間と話し合って納得解を見付け出そうとしたりする児童の姿が多く見られるようになった。今後も、１時間１時間の授業を大切にし、自己研鑽を重ねながら、児童にとってよりよい教育活動を目指していく。

⑺　記念講演

演題　『子供一人一人の可能性を引き出す道徳教育』

講師　文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター
教育課程調査官　　浅見　哲也　先生

【講演の概要】

○一つの内容項目を手がかりとし、ねらいとする道徳的価値のよさや大切さを理解できる。

○全教育活動を通じて行う道徳教育と、要となる授業としての道徳の両方の教育があって、初めて子供たちの道徳性が養われていく。

○様々な内容項目の指導を様々な教育活動の中で行う中で、その先の目指す子供像などの目的を考えることで、教師の指導の意識がつながり、子供の意識も変わってくる。

○学校の教育活動の中で、道徳教育に関わらないものは一つもないからこそカリキュラム・マネジメントを行い、全教職員がどんな子供たちを育てたいのかという共通理解を図ることで、育てたい子供たちが育ち、それが学校の組織力となる。

○「考え、議論する道徳」は、まず「道徳的諸価値を理解する」こと。

○道徳的価値の理解を基に授業を行うことは、「道徳的価値の意義及び大切さを理解する」ということになり、価値理解、人間理解、他者理解の三つの理解があって「道徳的価値の理解」となる。

○「自己を見つめる」とは三つの理解を自分との関わりで捉えること。自己理解を深めていく。

○「多面的」とは、学習対象が様々な面をもっているということ、「多角的」とは、学習対象を様々な角度から考察し、理解すること。

○道徳的価値を基に学んでいくと、理解から自覚になっていく。

○子供の成長の状況を総合的に捉え記述する評価が、全教育活動における道徳教育に関わる評価になる。指導方法を工夫することは、評価にも生かすことができる。

○教師自らの授業を振り返るための評価の観点、子供の学習状況を見取る評価の視点、この二つは指導に生かされ子供の成長につながるもの。

○「令和の日本型学校教育」は、学習指導要領の着実な実施とICTの活用が学校教育を支える基盤的なツールになり、効果的な活用が全ての子供たちの可能性を引き出す授業の実現に向かうこと。

○ICT端末の活用による一人一人の子供の心の可視化は、子供の可能性を引き出す道徳科の授業を可能にする。そして、ICT端末等の活用により生み出された時間で、自己の生き方についての考えを深めることができる。

○デジタルとアナログのバランスを考え授業を構想する。

○「人間性」をしっかり育てるのが道徳教育、道徳科の授業である。指導は、子供が自らのよさを実感できるように工夫するものであり、評価は子供の成長を願って行われるもの

＜浅見調査官　ご講演＞

Ⅳ　次年度にむけて

本年度もコロナウイルス感染症拡大の影響により活動の一部変更を余儀なくされたが、研究大会（さいたま大会）では通常により近付けた運営を行うことができた。

今後も内容や方法の検討を重ねるとともに、多くの先生方と学ぶ場を提供し、本主題の研究を深め「授業で勝負する埼玉県の道徳教育」を発信していきたい。

11　特　別　活　動

埼玉県特別活動研究会

Ⅰ　研究主題と方針

1　研究主題

「多様な他者と協働する力を育む特別活動」

2　主題設定の理由

「子供たちの学びを止めない」これは、現在の日本の学校教育に課せられた大きな使命である。GIGAスクール構想により１人１台端末が整備され、ICTを活用することで、オンライン学習等による「学びの保障」と、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善といった「学びの充実」との両面から成果を挙げている。そのことは、「令和の日本型学校教育」が掲げる個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて着実に歩みを進めていると言える。

一方で、令和３年度の全国学力・学習状況調査では、「学校に行くのは楽しいと思うか」の質問に「当てはまる」と回答した児童生徒が前回調査よりも減少し、小学校では調査を開始して以降初めて５割を切った。また、小・中学校の不登校の児童生徒は、前年よりも約１万５千人増加し、過去最多となった。これらの結果には、友達との触れ合いや関わり合いが制限されたり、学校行事等が削減されたりしたことなど「コロナ禍」が一因であると考えられる。しかし、我々教師は、「コロナ禍」を言い訳に子供たちの学びを止めるわけにはいかない。学校は、子供たちにとっての社会である。その社会である学校は、教師の指導・支援によってすべての子供たちにとって、楽しく、居心地のよい魅力ある場所でなくてはならないのである。

今、社会では、自分とは異なる考え方や価値観を受け入れることができず、他者と距離をおこうとする風潮も見られる。また、インターネットやSNS等の普及は生活を便利にしてくれている一方で、匿名で対面せずに画面上で簡単にやり取りできてしまうことから、相手を安易に批判してしまうという現状もある。しかし、異なる考え方や価値観との出会いこそ、自分の考えを広げるきっかけとなるはずである。

このような現状を受け、学校教育においても、多様な他者や価値観を尊重することが求められている。今こそ、同じ空間で時間を共にすることを通して、互いの感性や考え方等に触れ、刺激し合うといった「リアルな人間関係」の形成が必要である。

さらに、違いを受け入れ、異なる意見を認め合い、生かし合って活動することは、よりよい人間関係を築き、他者と協働しながら未来を拓く力の育成にもつながる。この点からも、自分も他者も大切にし、協働する経験を積み重ねることは重要であると考える。

本会では昨年度、「よさや可能性を発揮し合い、確かな資質・能力を育む特別活動」を研究主題に掲げ、一人一人のよさや可能性を発揮し合うための手立てや、確かな資質・能力を育むための指導と評価の方法について研究を深めた。その成果として、①子供が自分のよさや可能性に気付き、発揮し合うための手立てが明確になったこと、②教師が子供一人一人のよさや可能性を見つける視点を明確にすることで、指導と評価の方法についての工夫・改善ができたこと、③一人一人がよさや可能性を発揮し合えるようにすることで、よりよい人間関係の形成につながることの３点が明らかになった。

その一方、課題として、①確かな資質・能力について、より具体的にし、実践を積み重ねること、②よさや可能性を発揮し合うためには、多様な他者と協働する力を育むことが重要であることの２点が確認された。

以上のことから、自分も他者も価値のある存在として尊重し、多様な他者と協働することができる子供たちを育成していくことが重要であると考え、研究主題を「多様な他者と協働する力を育む特別活動」と設定した。

3　研究の目標

多様な他者と協働する力を育むための指導と評価の方法について明らかにする。

「多様な他者と協働する力」とは、「協働するための基盤となる力」を含め、以下のように考えられるが、どのような力が必要なのかについて、さらに研究を進めていく。

- 人によって考え方や価値観に違いがあることを認識できる
- 自分の考えをもち、相手に伝えることができる
- 他者の考えを認めたり、他者の立場に立って物事を考えたりすることができる
- 目標を理解し、達成するために他者と協力することができる
- よさや可能性を発揮し合い、高め合うことができる

4　研究の内容

研究を進めるにあたり、次に示す二つの内容を中心に、専門委員会ごとに研究の視点を設け、それぞれの実践において、身に付けさせたい資質・能力を明確にし、その育成のための手立てや方法について研究を深めていく。

⑴　多様な他者と協働する力を育むための指導計画

子供たちの今の実態と将来の姿を見据え、年間や学期、あるいは、各実践の中で、発達の段階に応じた活動を展開していくための指針となる指導計画について研究していく。以下は、そのポイントである。

①　「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた指導計画を作成する。
②　多様な他者と協働する力について明確にした指導計画を作成する。
③　発達の段階を考慮し、学年間の系統性やつながりを意識した指導計画を作成する。

⑵　多様な他者と協働する力を育むための指導と評価の方法

指導については、集団活動のよさを生かしながらも、事前・本時・事後それぞれの活動における実践上の留意点にも目を向けていく。また、評価については、一人一人の変容を見取るために、自己評価に留まらず、よりよい相互評価の方法にも重点をおいて研究していく。以下は、そのポイントである。

①　「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた指導と評価の在り方を考える。
②　一人一人が集団の中で多様な他者と協働することができる具体的な手立てを工夫する。
③　学年間や活動間のつながりを踏まえた指導と評価の方法を工夫する。

なお、⑴⑵において、ICTやキャリア・パスポートの効果的な活用についても研究を深めたい。その際、多様な他者と協働する力を育むために有効に活用できる方法について、ねらいを明確にした上で、ねらいに迫るために活用するという視点を大切にする。

今、学校の魅力が問われている。「子供たちの学びを止めない」この言葉の意味を我々教師は改めて重く受け止め、今一度真剣に考えなければならない。子供たちは、学校を含めた社会の中で、様々な人と関わりながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできることを実感する。

学校の魅力とは、「関わる楽しさ」や「学ぶ楽しさ」を実感し、人として成長できることではないだろうか。その成長した姿が持続可能な社会の創り手となる。「なすことによって学ぶ」を方法原理としている特別活動こそが、止めてはならない学びなのである。

特別活動の理念を共有し、基礎・基本を大切にしながら実践を積み重ねるとともに、コロナ禍に関わらず子供たちに確かな資質・能力を育成するための指導を持続可能にしていくことが求められている。それはまぎれもなく今である。

5　研究の方針

⑴　各専門委員会を中心に、研究主題に関わる実践研究を深める。

⑵　総会や講演会を通して、理論研究を深める。

⑶　各支部の活動を通して、また、各支部間の連携、協力を通して、地域に根ざした実践の情報交換を行うとともに、会報や研究集録を通して、県内への情報提供を行う。

⑷　特別活動に係る様々な全国組織との連携、協力を通して、他県との情報交換を行うとともに、会報や研究集録を通して県内への情報提供を行う。

⑸　ホームページを通して、会員に関わらず情報提供を行うとともに、会の運営に係る事項で本会関係者が見通しをもって取り組むことができるようにする。

Ⅱ　活動状況

1　支部長・専門委員長・理事等合同研究協議会

○日　時　令和４年５月６日㈮
　　15時00分～16時30分

○会　場　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンライン会議システムによる開催

○内　容　支部活動、役員選出・承認総会議案等の審議

2　定期総会並びに講演会

○日　時　令和４年５月18日㈬
　　13時50分～16時30分

○会　場　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンライン会議システムによる開催

○講　演　演題　『多様な他者と協働する力を育む特別活動』
　　講師　文部科学省初等中等教育局
　　視学官　安部　恭子　様

3　地区別研究協議会

○期　間　令和４年６月～令和５年２月まで

○実　施　各地区

4　役員研究協議会

⑴　第１回役員研究協議会

○日　時　令和４年５月31日㈫
15時00分～16時30分

○会　場　さいたま市プラザウエスト

○内　容　令和４年度の専門委員会等の研究・運営計画について

⑵　第２回役員研究協議会

○日　時　令和５年３月７日㈫
15時00分～16時30分

○会　場　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンライン会議システムによる開催

○内　容　令和４年度の専門委員会等のまとめ及び次年度の事業計画について

5　専門委員研究協議会

⑴　第１回専門委員研究協議会

○日　時　令和４年６月８日㈬
13時15分～16時30分

○会　場　嵐山町ヌエック

○内　容　研究主題についての共通理解と各専門委員会の研究の視点の確認

⑵　第２回専門委員研究協議会

○日　時　令和４年９月７日㈬
13時15分～16時30分

○会　場　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンライン会議システムによる開催

○内　容　本年度の研究方針に基づいた５分野の専門委員会による研究協議

⑶　第３回専門委員研究協議会

○日　時　令和５年１月18日㈬
13時15分～16時30分

○会　場　川越市ウェスタ川越

○内　容　本年度の研究方針に基づく５分野の専門委員会による研究協議、本年度の研究のまとめ

6　第26回夏季研究協議会

○日　時　令和４年８月３日㈬
９時40分～16時20分

○会　場　川越市ウェスタ川越及びオンライン

※　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため運営関係者のみ参集、一般参加者はオンライン会議システムによる参加

○内　容

①パネルディスカッション

テーマ　「もっと特活！　今こそ特活！」

パネリスト

越谷市立千間台小学校長　木場　真理　先生

加須市立加須平成中学校長　向後　健一　先生

白岡市立白岡東小学校教諭　和久　展大　先生

春日部市立春日部中学校教諭　岩崎　貴久　先生

コーディネーター

さいたま市立浦和大里小学校教頭

和久井　伸彦　先生

②分科会

分科会Ａ【　小・中学校　学級活動（１）　】

提案者

本庄市立本庄東小学校教諭　山﨑　樹彦　先生

行田市立太田中学校教諭　佐藤　遙陽　先生

指導者

久喜市立青葉小学校校長　白石　昌孝　先生

司会者

川口市立上青木小学校教頭　岡　和香子　先生

記録者

所沢市立所沢小学校教諭　長廻　見空　先生

分科会Ｂ【　小・中学校　学級活動（３）　】

提案者

川口市立十二月田小学校教諭

大田　俊平　先生

羽生市立東中学校教諭　中村美由希　先生

指導者

川越市立霞ヶ関北小学校校長
大澤　　崇　先生
司会者
さいたま市立芝原小学校教諭
佐藤　三喜　先生
記録者
富士見市立水谷小学校教諭　岡畠みどり　先生

分科会Ｃ【　小学校　学校行事、クラブ活動　】
提案者
本庄市立仁手小学校教諭　　髙橋　　学　先生
提案者
東松山市立松山第一小学校教諭
久保　充弘　先生
指導者
さいたま市立慈恩寺小学校校長
笠原　芳美　先生
司会者
さいたま市立上落合小学校教頭
日比　圭都　先生
記録者
深谷市立榛沢小学校教諭　　鈴木　真紀　先生

分科会Ｄ【　児童会・生徒会活動　】
提案者
所沢市立南小学校教諭　　内野　　恵　先生
加須市立加須平成中学校教諭
山中　　優　先生
指導者
さいたま市立大谷場東小学校校長
船田　敦史　先生
司会者
鶴ヶ島市立新町小学校教頭　小井川　聡　先生
記録者
ふじみ野市立駒西小学校教諭
佐藤絵里香　先生

７　現地研修会

○日　時　令和４年11月29日㈫
○会　場　羽生市立東中学校
○授業公開
特別支援学級を含む全13学級にて
学級活動の授業を公開

○全体会　研究の取組状況報告
指導助言
○講　演　演題　『小・中学校の特別活動の現状と経営（指導実践）の在り方』
講師　共栄大学教育学部長　濱本　一　様

８　退職記念講演会

○日　時　令和５年３月11日㈯
○会　場　さいたま市文化センター
○講　話　演題『特別活動と私』
講師　川口市立朝日東小学校前校長
熊谷　茂樹　様
演題『特別活動と私』
講師　越谷市立千間台小学校校長
木場　真理　様
演題『特別活動と私』
講師　春日部市立内牧小学校校長
中島　　剛　様

12　進路指導・キャリア教育

埼玉県進路指導・キャリア教育研究会

Ⅰ　研究の概要

1　令和４年度『研究の柱』

令和４年度、あの衝撃的な全国一斉臨時休業から３年が経過し、コロナ禍に対する社会的対応も徐々に「動き」が伴う形となってきた。

本会においても研究推進に向けて、コロナ前の体制回復を視野に入れて進めたいところであったが、２年間の空白のダメージは予想以上に大きく、すべての研究推進を図るまでに至らなかった。

このように本会の研究実践が停滞する現状ではあるが、研究主題はここ３年間の継続研究である『未来を見据え、主体的に生き抜く力を育てるキャリア教育の推進』とし研究を進めた。

令和４年度研究主題
未来を見据え、主体的に生き抜く力を育てる キャリア教育の推進 ―小中一貫を円滑に進めるための 協働的な取組を通して―

しかしながら、本会のコロナ禍に対する３年間の空白への対応の遅れや実践研究の停滞等、研究が遅々として進まなかったのも事実であり、研究委嘱校をはじめ各方面にご迷惑をお掛けしてしまい、改めてお詫び申し上げたい。

そのような状況下ではあったが、本会の研究の基本中の基本でもある『25地区進路指導・キャリア教育研究協議会』については、研究委嘱各校の「生徒のキャリア発達育成への想い」と「進路指導・キャリア教育にかける熱意」、また、「その必要性を重要と考える教職員の情熱」により、各校の実態に合わせた進路指導・キャリア教育研究を進めることができた。まだまだ研究を進める上で、感染拡大状況等の社会的環境が整わないなか、委嘱校の創意と努力により、各地域の実態に即した研究が進められたことに、誌面を借りて改めて感謝申し上げたい。

令和４年度における研究の中核には、この『25地区進路指導・キャリア教育研究協議会』の実践とまとめを据えつつ、令和３年度に発刊することができた研究紀要『明日へつなぐキャリア教育ベーシックプラン／埼玉県進路指導・キャリア教育研究会【編】』の継続的実践検証及びキャリア教育の汎用性を捉えた「道徳におけるキャリア教育」にポイントを絞り、実践研究を進めてきた。

埼玉県進路指導・キャリア教育研究会 令和４年度研究の四つの柱
□ 25地区進路指導・キャリア教育研究協議会の実践とまとめ
□ 研究紀要『明日へつなぐキャリア教育ベーシックプラン／埼玉県進路指導／キャリア教育研究会【編】』の実践検証
□ 道徳におけるキャリア教育の研究 〇資料作成の実践
□ 副読本『中学生活と進路』埼玉県版改訂

そして、四つ目の柱が例年継続的に研究を進めている、副読本『中学生活と進路（実業之日本社）』埼玉県版改訂の作業となる。

他にも、令和６年度関東甲信越地区中学校進路指導研究協議会埼玉大会を見据えた準備等、その環境整備を進めているところである。

2　研究の推進

⑴　25 地区進路指導・キャリア教育研究協議会

コロナ禍の影響にまだまだ配慮を要するなかではあるが、昨年度より県内の24地区（川口地区は中止）において研究協議会を実施した。

ただし、各地域における様々な実態に配慮し、発表形式等は「公開授業＋研究協議」「参会者なしの研究授業」「誌上発表」等、各校に委ね工夫あるパフォーマンスを展開していただいた。どの発表にフォーカスを合わせても、すべて創意あふれる発展的な研究となっていた（詳細については「**Ⅱ研究の実践**」にて示す）。

委嘱校の取組に対し、重ねて敬意を表し衷心よりお礼を申し上げます。

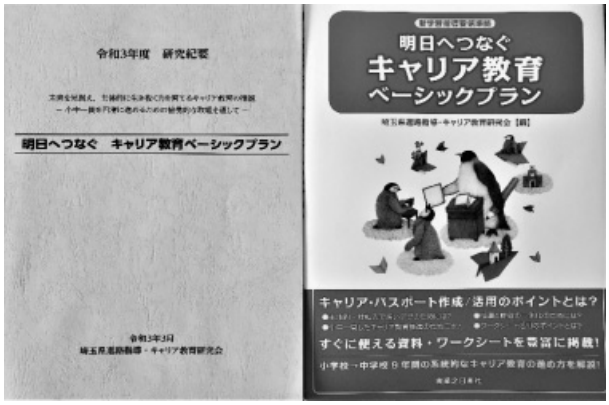
⑵　研究紀要『明日へつなぐキャリア教育ベーシックプラン／埼玉県進路指導／キャリア教育研究会【編】』の実践検証

令和３年度の中学校新学習指導要領完全実施を見据え、今までの研究成果と「キャリア・パスポート」及び小中一貫に焦点化した研究紀要を令和２年度に作成した。

しかしながら、コロナ禍における職場体験学習への影響や体験学習を中心としたキャリア教育推進の停滞等、その障壁はあまりにも高かった。人との人

間関係形成を中核と据えた学習プログラムが多く掲載されている中で、ここ２年間は、あまり大きな普及を得ることができなかったのが正直なところである。

本年度においては、コロナ禍においても創意工夫によりリアリティあるキャリア教育を推進する傾向も見えてきている。また、GIGAスクール構想により、全国の学校で一般化したICTの活用もキャリア教育推進の一つのツールとなっている。そのようなプラス・アルファも含め本紀要の検証研究により、埼玉県のキャリア教育の広がりを期待したい。



▲『明日へつなぐキャリア教育ベーシックプラン／埼玉県進路指導／キャリア教育研究会【編】』（左）埼玉県版研究紀要／（右）全国普及版（実業之日本社出版）

⑶　副読本『中学生活と進路』埼玉県版改訂

令和５年度版『中学生活と進路（埼玉県版）／実業之日本社』の改訂を実施した。３年前に全国版全面改訂を受けて県版でも大幅改訂を実施していることや、感染拡大防止の観点からの編集会議削減等もあり、本年度もデータ等の変更に改訂を留めた。

しかながら、研究紀要部分でもふれたように、ICT活用が一般化されている時代において、キャリア教育の授業においてもツールとしての積極的活用を図っていかなくてはならない。今後は、ICT活用によるデジタル化に重きを置いた副読本の改訂が必要不可欠となる。

⑷　道徳におけるキャリア教育の研究

特別の教科道徳として道徳科が中学校で完全実施されてから、早５年が経とうとしている。各出版社の道徳教科書を見ていると「生きること」や「生き方」を共通観点と捉え、キャリア教育の視点を題材として扱う道徳教科書も少なくない。それにより、教科書によっては道徳の内容項目の分類以外に、キャリア教育の観点により、資料分類や教材提示を行っている教科書もある。

本会では、テストケースとして、今後の研究に反映させるべく、「日本教科書」との協働での資料作成研究を実施した。

今後、キャリア教育の視点から、より「生きること」に重心を置いた資料が道徳の授業で展開できるよう期待がもてる。

▲『中学道徳通信（日本教科書）』にキャリア教育と道徳を掲載（本会会長と金沢工業大学白木教授との対談）

⑸　その他

令和６年度は、本県７回目の関東甲信越地区中学校進路指導研究協議会の開催を予定している。

本会にとって大きな研究の節目となるが、実情として、予算の確保、リモート開催等大きな課題が山積している。現状においては、この実態に応じたコンパクトでシンプルな関東甲信越地区中学校進路指導研究協議会埼玉大会の実施を模索している。

Ⅱ　研究の実践

このような状況下であっても、前述のとおりいくつかの研究について工夫を凝らしながら進めてきた。ここでは、本年度研究の中心的取組である「25地区進路指導・キャリア教育研究協議会」、「研究紀要／『明日へつなぐキャリア教育ベーシックプラン』の検証」、「キャリア教育と道徳」についてふれる。

１　25 地区進路指導・キャリア教育研究協議会

⑴　25 地区研究協議会の概要

昨年度、委嘱校の尽力の下、２年ぶりに開催した研究協議会であるが、本年度は各校による更なる工夫の下、県内24地区で開催された。

発表形式においては、各地域の実態を考慮して様々な創意に実施されていたが、本年度は半数以上の14校が、従前の形式で生徒の学びを直接目の当たりにしながらの授業研究を中心とした学校での発表という形式を採用してくれた。中には授業研究を計画していたものの、感染拡大が増加し授業発表を中止するという忸怩たる思いをしてしまった発表校もあった。しかしながら、誌上発表も含めた研究報告（１月末時点で編集中）を熟読すると、各校の創意工夫の跡をうかがうことができ、その実践力には、ただただ頭が下がるのみである。

誌上発表の学校においても、校内研修の枠組で研究授業を実施し、指導者による指導等を受けた学校であったり、市町村の教育研究会との接続による授業研究等の実践や、今までの研究の累積を評価し振り返るチェック機能を活かしたりする学校も少なくなかった。

また、ゲストティーチャーの体験学習やICT機器の積極的活用、講師招聘による校内研修も多く実施されつつあり、次年度に向けての更なる充実が期待される。

令和４年度
25地区進路指導・キャリア教育研究協議会
開催校一覧

□①	さいたま(東)	／さいたま市立柏陽中学校
□②	さいたま(西)	／さいたま市立日進中学校
□③	川口	／中止
□④	蕨・戸田	／戸田市立戸田東中学校
□⑤	草加	／草加市立青柳中学校
□⑥	朝霞・志木・新座・和光	／志木市立宗岡第二中学校
□⑦	上尾	／上尾市立原市中学校
□⑧	鴻巣・北本・桶川・伊奈	／伊奈町立南中学校
□⑨	川越	／川越市立寺尾中学校
□⑩	所沢	／所沢市立東中学校
□⑪	狭山・入間	／狭山市立柏原中学校
□⑫	飯能・日高	／日高市立高萩北中学校
□⑬	坂戸・鶴ヶ島・越生・毛呂山	／越生町立越生中学校
□⑭	富士見・ふじみ野・三芳	／三芳町立三芳東中学校
□⑮	比企郡市・東秩父	／東松山市立北中学校
□⑯	秩父郡市（東秩父を除く）	／秩父市立影森中学校
□⑰	本庄・美里・上里・神川	／上里町立上里北中学校
□⑱	熊谷	／熊谷市立奈良中学校
□⑲	深谷・寄居	／深谷市立川本中学校
□⑳	行田・羽生・加須	／行田市立西中学校
□㉑	春日部	／春日部市立豊春中学校
□㉒	越谷・八潮	／越谷市立南中学校
□㉓	三郷・松伏・吉川	／松伏町立松伏中学校
□㉔	久喜・蓮田・白岡	／蓮田市立平野中学校
□㉕	幸手・杉戸・宮代	／杉戸町立杉戸中学校

⑵ 本年度の 25 地区研究協議会の研究の特徴

本年度開催された25地区進路指導・キャリア教育研究協議会発表校の研究の特徴を、１月末現在で掌握できているものについて以下にまとめる。

■ ICT 機器やデジタル教材等デジタル環境の積極的活用

GIGAスクール構想による１人１台端末の環境をキャリア教育に、確実に活かしている学校がほとんどであった。

特に、特徴的な活用方法として、ゲストティーチャーのリモートによる授業参加に活用してる学校が見られた。今までは、ゲストティーチャーからの直接体験によりキャリアに関するリアルを学ぶことができたが、ディスプレイを通しての体験ではあるが、人間関係をつなげる一つの切っ掛けとなっていた。

１番のメリットは、選択肢の広がりであろう。今までは、ゲストティーチャーの活躍する地域の限定があったが、時間的条件が許せば地球のどこでも（今後は宇宙も）、聴きたい人の話を聴くことができることである。また、多用で人気の職種であっても、時間的スケジュールが許せば、生徒との交流は可能である。

また、交流ツールとしてのICT機器活用だけではなく、プログラミング教育やICT産業従事者等による直接的な情報教育の知識・技能の習得によりキャリア教育を推進している取組も見られた。

キャリア教育の基本的体験学習の一つでもある多様な社会人との交流による人間関係形成能力の構築に益々の期待が高まる。

■職場体験学習、社会人講演会、職業調べ等、生徒と社会人の直接的なふれあいを介した学習活動の再開

コロナ禍前にキャリア教育の中核を担っていた人とのふれあいを中心とした体験学習だが、その取組は全国的に停滞状況にあった。

しかしながら、コロナ禍３年目となり、各地域の状況に合わせて、各校での感染防止の創意工夫により再開される傾向が見られてきた。

社会人講演会の実施、様々な職種の社会人を招聘しての働くことを学ぶ会、生徒のプレゼンテーションに対する社会人の方の評価、生徒の活動の地域の方々の参観等、少しずつではあるが社会人との直接体験を柱とした学習活動が、この25地区研究協議会の発表でも再開してきている。

職場体験学習が難しい状況となり、改めてその学

習の重要性が全国的に見直されてきている。次年度は、従前の職場体験にこの３年間で培われた教職員のエッセンスがプラスされた新しい形の職場体験学習の実践に期待したい。

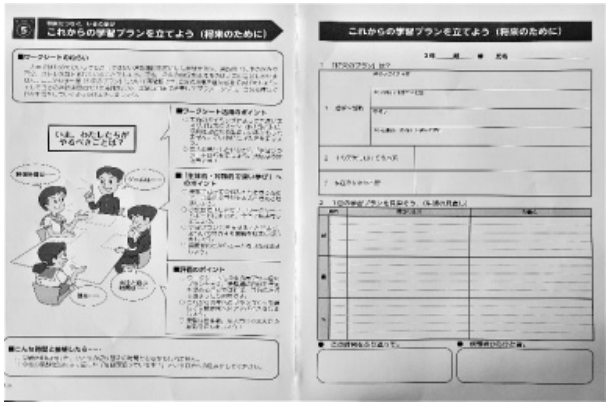
■キャリア教育の授業実践は学級活動と道徳で機能している

全教職員で取り組めるというメリットや比較的授業公開がやりやすさという点からか、本年度の協議会においても、特別活動と道徳での授業実践が半分以上を占めていた。

キャリア教育は、教育課程のすべてで実施されるものなので学校の実情に合わせての実施でかまわないのだが、ここのところ道徳におけるキャリア教育の実施が目立つ傾向にある。もともと道徳の内容項目とキャリア教育における価値観には共通点が多く、従前からも取り上げられてきたが、ここ数年、道徳の教科書等においても、その資料をキャリア教育と分類し銘打つ出版社も多い。このような環境も道徳においてキャリア教育を推進する一つの追い風になっていると考えられる。

現学習指導要領では、キャリア教育の一つのステージとして学級活動が挙げられている。原点回帰ではないが、学級活動でのキャリア教育について、小学校も含めた実践に期待をしたい（最近、小学校でこの協議会を実施できるかという問い合わせが増えている。もちろん、地域での合意があれば小学校からの発信を広めてもらいたい）。

２　研究紀要『明日へつなぐキャリア教育ベーシックプラン／埼玉県進路指導／キャリア教育研究会【編】』の実践検証



▲「キャリア・パスポート」作成展開例（左）とオリジナル「キャリア・パスポート」例（右）

本紀要は、現学習指導要領完全実施に合わせて作成されたものである。特に、大きな特徴となっているのは、「小学校のキャリア教育の参考事例」と「キャリア・パスポートのカスタマイズ資料」の掲載である。

各校においては、キャリア・パスポートについて定着はしてきたものの、様々なサンプル例を活用して、総括ポートフォリオのみ実施しているという現状が散見される。今後、このキャリア・パスポートが本来の目的である「子供たちのキャリア形成の一助」や「キャリア教育充実に貢献」するためには、カスタマイズを含めてポートフォリオそのものの在り方について研究を進めなくてはならない。

３　道徳におけるキャリア教育の研究

前文でも述べたが、道徳の教科化以来、キャリア教育の視点による道徳の実践がとても活性化されてきている。本会では、キャリア教育の観点を更に強めた道徳資料を研究作成し、道徳におけるキャリア教育の充実を目指し研究を進める。

▲中学道徳通信（日本教科書）、『キャリア教育と道徳』金沢工業大学白木教授との対談

Ⅲ　研究の成果と課題

□研究の成果

○25地区進路指導･キャリア教育研究協議会の実践

○ICT活用、道徳におけるキャリア教育等の推進

○研究紀要による小・中学校におけるキャリア教育連携の推進

○キャリア・パスポートの在り方についての模索

■研究の課題

●コロナ収束後のキャリア教育の具体的な在り方

●更に機能的なICT活用の推進

●小学校におけるキャリア教育の更なる推進と普及

コロナ禍が収束したとしても、３年前のような形での学校教育の推進はあり得ない。ICT機器の活用、職場体験、体験学習、キャリア・パスポート等どれを取っても、大きな課題に直面する。

働き方改革等を含め学校教育の考え方が揺さぶられるなか、キャリア教育そのものを根本から考えなくてはならない時代なのかも知れない。

13 視 聴 覚 教 育

埼玉県学校視聴覚教育連絡協議会
・埼玉県学校視聴覚教育連盟
・埼玉県放送教育研究会
・埼玉県教育機器研究会

Ⅰ　研究主題と方針

国際化、情報化、少子高齢化など、社会が急激に変化する中で、各学校においては教育基本法をはじめとした学校教育法等の法令の示すところに従い、新学習指導要領の下で児童生徒の人間として調和のとれた育成を目指し、心身の発達の段階や特性及び地域の実態を十分考慮しつつ主体的・対話的で深い学びの実現に向けて「生きる力」の育成に努力している。

情報活用能力の育成にあたっては、ICT機器や情報通信ネットワーク等の環境整備、これらを適切に活用した学習活動の充実、各種視聴覚教材や教育機器の適切な活用等が不可欠である。高度情報通信社会を迎え、我が国が提唱するSociety5.0の一層の推進を視野に入れると、「授業におけるICT活用」「教職員の指導力向上」「情報モラル、情報セキュリティの重要性」「プログラミング教育の推進」等々、早急に対応すべき学校の情報化に関わる教育課題が山積している状態にある。

このような中、ここ数年に渡る新型コロナウイルス感染症の問題は学校教育に大きな変革をもたらし始めており、特にICTを活用した教育については、GIGAスクール構想が一気に推し進められたことで児童生徒一人一端末の環境が整い、これらを活用した新時代に適合した教育を推進することが喫緊の課題となっている。

以上のことから本連盟では、教育メディアを積極的に活用した学習を研究･展開することで、児童生徒に『自ら学ぶ力』と『主体的に問題を解決する力』を身に付けさせ、生きる力を育成することを方針としている。

新型コロナウイルス感染症が流行する直前までは各学校におけるPCの配置数は本県の場合一人当たりに換算すると0.15台であり、これは愛知や千葉と並んで全国で最も低い水準であった。しかし、その後、コロナウイルス感染症の流行により学校教育には大きな変化がもたらされた。以前は実現が難しいと思われていた児童生徒一人一台端末の環境が整ったのもその一つである。これまで視聴覚教育がターゲットとしてきたPC教室の端末や教室の電子黒板を使った授業は、一人一端末環境の出現により大きく変わろうとしており、当連盟が期待される役割も今後大きくなるものと思われる。

Ⅱ　活動状況

1　役　員

顧　　問	安藤　義仁	
	蓮田市立黒浜中学校	校長
会　　長	中村　公一	
	飯能市立飯能西中学校	校長
副 会 長	鷲林　潤壱	
	松伏町立松伏小学校	校長
	小田　誠	
	入間市立藤沢南小学校	校長
	関根　達郎	
	熊谷市立石原小学校	校長
	西田　真吾	
	本庄市立旭小学校	校長
事務局長	久保田　勇士	
	所沢市立北野中学校	教頭
会　　計	飯島　　学	
	所沢市立北小学校	教頭

2　主な活動

(1)　令和４年５月25日㈬
埼玉県県民活動総合センター
・埼玉県学校視聴覚教育連盟総会
並びに第１回役員・理事研究協議会
・関ブロ埼玉大会結果報告

(2)　令和４年６月10日㈮　オンライン開催
・関放協・関視連第１回合同理事会

(3)　令和４年６月30日㈭　オンライン開催
・日本学校視聴覚教育連盟全国理事会

(4)　令和４年８月教育メディア活用研究大会中止

(5)　授業研究会中止

(6)　令和４年11月12日㈯　オンライン開催
・視聴覚教育総合全国大会

・放送教育研究会全国大会

⑺　令和４年12月７日㈬ オンライン開催

・関東甲信越放送・視聴覚教育研究大会

・第２回合同理事会

・公開授業視聴（栃木県鹿沼市）

・全体会及び基調講演　　12月８日㈭

⑻　令和４年12月10日㈯　　オンライン開催

・日本学校視聴覚教育連盟全国理事会

⑼　令和４年３月上旬

埼玉県県民活動総合センター

・埼玉県学校視聴覚教育連盟

第２回役員・理事研究協議会

３　支部の活動

⑴　埼葛学校視聴覚教育連盟

①役員理事研究協議会　　６月29日㈬

・令和３年度　事業報告及び決算報告

・令和４年度　事業計画及び予算案審議

・埼葛学視連78発行について

・埼葛学視連視聴覚教育実践発表会について

②時報発刊に伴う実践の収集

実践発表資料

・「義務教育学校と ICT」

～学びをつなぐ情報機器の活用～

春日部市立江戸川小中学校　教諭　相沢　侑児

・「越谷市・本校における情報機器の活用と取り組み」

越谷市立増林小学校　教諭　東　将太郎

・「久喜市東中学校における GIGA スクール構想を踏まえた学校行事の展開」

久喜市立東中学校　教諭　木村　弘明

・「効果的な情報機器の活用」

～深い学びの実現に向けた授業改善～

白岡市立篠津中学校　教諭　大塚　聡

・「タブレット端末を活用した学習機会の確保」

松伏町立松伏中学校　教諭　船形 智志

寄稿資料

・「吉川市におけるICT機器の活用と取り組み」

吉川市立中曽根小学校　教諭　中島　健人

・「本校におけるICT機器の活用状況」

杉戸町立杉戸中学校　教諭　塩澤　雄基

③令和４年度埼葛学校視聴覚教育実践発表会の開催・時報の配布　　令和５年２月28日㈫

先に挙げた五つの実践を、埼葛地区の教員に広く知ってもらうために毎年行っている。本年度はオンライン開催とし、理事役員の他にも各小中学校・義務教育学校等から参加できるよう、事務局の配信環境整備を進めている。課題として、「Zoom」の無料会員の場合、配信時間や、同時視聴人数に制限があるため、アカウントのアップグレードが必要になる。費用を予算から計上するが、今後どのように対処していくか検討中である。２月中に印刷会社に依頼し、時報を発刊する。各市町の理事を通して、埼葛地区小中学校・義務教育学校へ行き渡るようにする。

⑵　入間地区学校視聴覚・情報教育研究会

①第１回幹事研究協議会　　６月14日㈫

飯能市立飯能西中学校

②定期総会並びに第1回理事研究協議会

飯能市立飯能西中学校

オンライン開催　　５月26日㈭

③第１回専門委員・幹事合同研究協議会

オンライン開催　　６月29日㈬

活動計画についての研究協議

一人一台体制でのICT機器を活用した授業の在り方についての研究協議

④ICT活用研修会　　８月９日㈮

鶴ヶ島市立鶴ヶ島第一小学校

指導者：鶴ヶ島市立鶴ヶ島第一小学校

河上　彬　教諭

「プログラミング教育を知ろう！体験しよう！」というテーマで、プログラミング教育のねらいやプログラミング的思考、体験すること等を通してプログラミング教育について考える研修会

⑤第2回理事研究協議会　　11月４日㈮

飯能市立飯能西中学校

⑥視聴覚実態調査

入間管内全13市町の全公立小・中学校においてGIGAスクール構想で配備された機器やその活用状況、デジタル教科書の活用状況等についての調査

⑦第２回専門委員・幹事合同研究協議会

２月中に実施予定

⑧研究委嘱

・小学校　鶴ヶ島市立鶴ヶ島第一小学校

研究テーマ「児童同士がつながり、学び合い、高め合う授業の実現に向けて」

・中学校　飯能市立飯能西中学校

研究テーマ「国際交流におけるコミュニケーションツールの活用」

⑶　**熊谷地区学校視聴覚教育連盟**

主任会【全３回】

①第１回主任会　　５月６日㈮

・会　場　熊谷ドーム

・内　容　・研究主題の設定「児童生徒の情報活用能力の育成」～情報教育の体系的な実施と情報モラル教育の充実～

・組織決め及び第２回、第３回の計画

②第２回主任会　　10月26日㈬

・会　場　熊谷市立新堀小学校　体育館

・内　容　「熊谷市GIGAスクール構想に関する調査究部会」提供　授業実践

・授業者　新堀小学校　　小川　祐太郎　教諭

・題　材　「展開を考え、表現を工夫して物語を書こう『物語を作ろう』」

③第３回主任会　　２月８日㈬

・形　態　Teamsにおけるオンライン研修

・内　容　・研修報告（Microsoft GIGA Start Program 推進リーダー向けの研修会）

熊谷市立江南中学校

高木　聰　教諭

・本年度の振り返り

⑷　**児玉郡本庄市学校視聴覚・情報教育連盟**

①役員研修会　　６月24日㈮

・実施方法　オンライン開催

・内　　容　パソコン研修会の内容について

② パソコン講習会　　８月１日㈪

・実施方法　オンライン開催

・講師　埼玉県教育局県立学校部ICT教育推進課

川島　尚之　先生

・講習内容　①情報モラルについて

②ICT機器の効果的な活用について等

Ⅲ　今後の課題

現代社会では、日々多くの情報が発生し、さまざまなメディア媒体を通じて溢れかえっている。これからの社会を生き抜いていく児童生徒はこのような多くの情報の中から、自分にとって必要なものを選び取り自らの責任で真偽を精査して活用する能力が求められている。また、GIGAスクール構想によって整備された環境により、遠隔共同学習の実現が可能になるとともに、一人一端末を前提として利用する事を前提としたコンテンツを導入することで、個別最適化された多様な学びを一層効果的に展開できるであろうという期待がもたれている。教育に於ける情報端末の活用については、世界中のICT先進国に比べると大きな遅れをとっていることを否めない。

３年前コロナウイルス感染症の拡大に伴い休校措置がとられた際、欧米などではオンラインリモート授業への移行がスムーズ行われたのに対し、我が国においては学習プリントや授業のビデオを作成して配付する作業に追われるなど、大変混乱したのは記憶に新しい。その後、行政の尽力もありICT機器の浸透は目覚ましいものがある。特に、学習者用のデジタル教科書をはじめとしたさまざまなアプリの活用について研究を深め、効果的な活用方法を共有していくことが喫緊の課題とも言える。

今後も、オンラインによる会議や録画資料を用いた授業研究会の増加が予想されるが、著作権・肖像権等に関わる配慮事項を含め、オンラインにおけるメリットをより広く共有し・デメリット・リスク等を回避する策を講じる等、効果的な利用について研究を推進することで、子供たちの学力向上を目指すとともに、安心安全に学べる環境の構築を進める必要がある。

埼玉県放送教育研究会

Ⅰ　研究主題

「だれもが考える力を育み

世界観をひろげる　埼玉の放送教育」

～ひろがる・つながる・深まる～

Ⅱ　活動内容

⑴　日々の授業や研究活動（授業研究）を充実させ、研究主題に迫る放送活用を推進する。

①放送教育の理念を追求する。

②個々の授業実践力を高める。

③実践者を増やしていく。

⑵　研究活動（授業研究等）の研究成果を広く発表していく。

⑶　ＮＨＫ杯全国中学校放送コンテストの県予選大会を通して、校内放送の普及・充実とその活用を図る。

⑷　オンライン授業研究会、全国大会を通して放送活用の普及・充実を図る。

⑸　他の県内外の情報教育関係研究会と連携し、組織改革を推進する。

⑹　冊子　『続　なぜ教室にはテレビがあるのか！？－学ぶ喜びのもてる放送教育－』の編集検討をし、研究内容をより改善、深化させる。

Ⅲ　活動状況

１　役　員

会　　長　清水　　肇
（さいたま市立大宮南小学校校長）
副 会 長　石川　秀治
（さいたま市立大宮南小学校教諭）
佐藤　寿朗
（志木市立志木宗岡第四小学校教頭）
事務局長　四方　孝明
（八潮市立八條北小学校教諭）
次　　長　関口麻理子
（新座市立第二中学校教諭）
武井　佑樹
（川越市立霞ヶ関東小学校教諭）

２　主な活動

⑴　定例会　毎月第３土曜日、リモート会議
及びNHKさいたま放送局にて定例会
⑵　関東甲信越放送視聴覚教育研究大会
栃木大会、鹿沼市　　12月８日㈭
※オンライン開催
⑶　NHK杯全国中学校放送コンテスト
⑷　放送教育研究会全国大会　　11月22日㈯
※オンライン開催
⑸　夏期研修（草津合宿）

３　活動の様子

本年度も、コロナ禍のため、授業研究会は中止、定例会は、リモート会議と、ＮＨＫさいたま放送局内のスタジオでの定例会を並行して行うハイブリット形式で行った。

全国大会については、オンライン配信による発表（内山教諭）とワークショップセミナーによる研修会（それぞれ）を行った。

Ⅳ　研究成果（大会発表、実践など）

１　第26回視聴覚教育総合全国大会ブロック大会
第73回放送教育研究会全国大会合同大会

⑴　期日、発表形式
11月12日㈯・・・オンライン公開
⑵　提案内容
GIGAスクール構想時代の番組活用③
「考える力を高め、心を育てる放送教育」
～NHK for school「もやも屋」の活用～
⑶　提案者
草加市立栄小学校　　内山　真美　教諭
○道徳　「ハナとふしぎな黒いあな」
・道徳の学習と放送教育について
・視聴後の話合いと板書の結び付け
・振り返りの仕方
・研究の成果と課題
・今後に向けて
○指導講評
大阪教育大学　　教授　木原　俊　行　氏

２　活動の成果

本年度は、オンライン会議で他の都道府県の先生方とも交流できる機会が増えた。

また、放送教育の理論に合わせた、ICT機器の有効活用が推進できてきた。

Ⅴ　今後の課題

１　コロナ禍でのオンライン授業の在り方

⑴　放送活用の方法の模索
⑵　授業実践の交流の仕方

２　令和５年度の活動計画ついて

⑴　開催方法の検討
⑵　実践報告の形式の検討
⑶　ICT機器の有効活用

３　役員人事と人材確保

県内で一人一台のタブレット端末の配備が進んできた状況であり、これまで以上に多種多様なICT機器や、放送教材等の教育メディアを積極的に活用した授業実践の準備が推進されている。質の高い学習ができるよう、効果的な実践例を共有し、活用や指導の方法を考えて、児童生徒の学力向上に努めることが今後の課題である。

さらに、タブレットを活用した番組利用やGoogleフォーム、スクールタクト、ジャムボード、ミライシード、ロイロノートなどのアプリケーションの活用法を研修しつつ、オンライン会議の実践を生かして、他県の先生方とも情報交換ができるように、活動の様子を広めていく。

ただ、タブレット端末の活用が定着してきた今、安易にそれらの機器と使用するのではなく、放送教育にとって、より有効に活用できる方法を模索していく必要がある。

そのため、アナログとデジタルを融合した活用法についても研究を深めていく。

埼玉県教育機器研究会

＝　休会中　＝

14　教育心理・教育相談

埼玉県教育心理・教育相談研究会

Ⅰ　研究主題

「通常の学級における発達障害児童生徒等の指導支援
～社会性を育むスキル教育の実践と定着～」

Ⅱ　研究の概要

1　主題設定の理由

⑴　平成17年４月に発達障害者支援法が施行され、さらに、平成18年度から通級による指導の対象として新たにLD、ADHDが加わったことにより、LD、ADHD、自閉症に対する発達障害・情緒障害通級指導教室の新設や増設が県内で進んでいる。

このような状況の下、発達障害のある児童生徒が、通常の学級に籍を置き学校生活を送るケースも増えてきた。

一方、指導支援する教職員にあっては、このような障害のある児童生徒に対する理解が十分とはいえず、「どのような学級経営を行ったらよいのか」、「児童生徒を支援する関係機関や支援員との連携協力の在り方について」などの課題が生じている。

これらの課題に対して、本研究会としてどのように取組を進めたらよいのか協議を重ね、活動方針を固めるとともに必要な資料収集や事例研修会を実施することになった。

⑵　昨今の大幅な教職員の世代交代の中、教育相談主任の役割や教育相談室運営について知りたいというニーズが高くなっている。

本専門委員会では、この現状を踏まえ令和３年度に「困った時の対処法レシピ」を完成させ、県内に広めることができた。

本年度は、専門委員のメンバーが、新たなプロジェクトに取り組む。

2　研究方針

⑴　通常の学級等において、発達障害を有する児童生徒をどう理解し、指導支援していくか、先行事例に学び、研究を深め、実践事例等を広める。

⑵　社会性を育むスキル教育の実践と定着を図るため、各地区の事例や情報に基づいた研究を進める。

⑶　定例の理事会・専門委員会において、教育心理・教育相談の課題等について研究協議を行う。

3　研究計画

⑴　教育心理・教育相談講演会

教育心理及び学校教育相談等で活躍している専門家の講演会を通して、教師が、いじめの背景や具体的な対処方法などを学び、望ましい人間関係や心を育む教育について理解を深め、実践に役立てる。

夏季研修会（夏季休業中に、東部、西部、南部、北部、さいたま市で実施）

冬季講演会（11月の理事会の後に開催）

⑵　理事研究協議会

本研究会の運営について協議するとともに、国や県内の動向を知り、各地域における学校の実態に応じた研究の在り方を検討する。

また、有効な手立てや情報を各地域に持ち帰り、研究活動の啓発及び各学校に活かせる取組を行う。

⑶　専門委員会

学級の中で、支援を要する児童生徒の割合が年々増加の傾向にあることを痛感しており、その対応に苦慮している学校も少なくない。

そこで、専門委員会では、その困り感ごとの対応集を作成することで、先生方の参考になることを目標として、レシピ集を３年計画で作成している。

Ⅲ　活動状況

1　総会及び第１回理事研究協議会

⑴　期　日　令和４年６月３日㈮

⑵　会　場　埼玉県県民活動総合センター

⑶　内　容

・令和３年度事業報告
・令和３年度決算報告及び監査報告
・令和４年度役員承認
・新役員紹介及びあいさつ
・令和４年度活動計画

本年度の基本方針
夏季研修会、講演会、理事会等の計画、専門委員会活動計画
・令和４年度予算案
・夏季研修会について

２　令和４年度役員

会　長　金井　健治（坂戸市立住吉中学校　校長）
副会長　小崎　賢司（草加市立新田小学校　校長）
　　田嶋　直美（東松山市立白山中学校　校長）
　　清水　愛子（熊谷市立江南北小学校　校長）
　　鈴木　恵子（杉戸町立広島中学校　校長）
　　緒方　健二（さいたま市立田島小学校　校長）
監　事　塩原　憲孝（吉見町立吉見中学校　校長）
　　岡﨑　康友（吉見町立西小学校　校長）
代表幹事
南　部　川越　弘一（草加市立新田中学校　教諭）
西　部　神田めぐみ（小川町立西中学校　養護教諭）
北　部　浅見　将吾（小鹿野町立小鹿野小学校　教諭）
東　部　斎藤　佑亮（久喜市立鷲宮西中学校　教諭）
さいたま市　上村　　朗（さいたま市立大東小学校　教頭）
事務局　五十嵐晴彦（坂戸市立住吉中学校　教諭）
専門委員
顧　問　小崎　賢司（草加市立新田小学校　校長）
委員長　小沢　範子（さいたま市教育委員会）
南　部　萩原　邦彦（草加市立瀬崎中学校　教諭）
　　岡村　由依（北本市立宮内中学校　教諭）
　　濱野　恵子（上尾市立瓦葺中学校　教諭）
西　部　徳永　智美（ふじみ野市立東原小学校　養護教諭）
　　小貫　晶子（所沢市立泉小学校　教諭）
北　部　笹澤　有香（本庄市立児玉小学校　教諭）
　　阿部　秀人（寄居町立城南中学校　教諭）
　　浅見　将吾（小鹿野町立小鹿野小学校　教諭）
東　部　柏　ひとみ（三郷市立早稲田中学校　主幹教諭）

・地区別協議
・役員打合せ

３　夏季研修会

⑴　南部地区
①期　日　令和４年８月８日㈪
②会　場　オンラインによる動画配信
③内　容　講演会
演　題
『脳科学の視点から考える教育・心理的支援
～脳を育てる「生活」支援～』
講　師
文教大学教育学部　特別支援教育専修
教授　成田　奈緒子 氏

⑵　西部地区
①期　日　令和４年８月３日㈬
②会　場　松山市民活動センター
③内　容　講演会
演　題
『子どもの神経発達からみた児童生徒理解と授業改善』
講　師
共立女子大学　家政学部　児童学科
非常勤講師　坂本　條樹　氏

⑶　北部地区
①期　日　令和４年７月27日㈬
②会　場　オンラインによる動画配信
③内　容　講演会
演　題
『通常学級における気になる子への支援』
講　師
埼玉純真短期大学　こども学科
准教授　原口　政明　氏

(4) 東部地区

①期　日　令和４年８月３日㈬

②会　場　彩の国いきいきセンターすぎとピア

③内　容　講演会

演　題

『不登校の予防と支援を再考する』

講　師　文教大学教育学部

准教授　桑原　千明　氏

(5) さいたま市（夏季）

①期　日　令和４年８月19日㈮

②会　場　さいたま市立教育研究所

③内　容　講演会

演　題

『不登校と登校しぶりへの対応

～子どもと保護者への配慮を中心に～』

講　師　特別支援教育ネット

代表　小栗　正幸　氏

(6) さいたま市（秋季）

①期　日　令和４年11月17日㈭

②会　場　プラザイースト

③内　容　講演会

演　題

『不登校児童生徒への理解と保護者支援の実際』

講　師　開善塾教育相談研究所

所長　藤崎　育子　氏

４　第２回理事研究協議会

(1) 期日　令和４年11月４日㈮

(2) 会場　埼玉県県民活動総合センター

(3) 内容

・専門委員会活動報告

・夏季研修会報告

・冬季講演会について

・研究集録について

・夏期研修会諸経費について

・地区別協議

・役員打合せ

５　冬季講演会

(1) 期　日　令和４年11月４日㈮

(2) 会　場　埼玉県県民活動総合センター

(3) 講　師　開善塾教育相談研究所

所長　藤崎　育子　氏

(4) 演　題

『不登校児童生徒の理解と保護者支援

～教師による家庭訪問・教育相談のすすめ方の実際～』

６　第３回理事研究協議会

⑴　期　日　令和５年２月３日㈮

⑵　会　場　埼玉県県民活動総合センター

⑶　内　容

・令和４年度事業報告

・令和４年度専門委員会報告

・令和５年度専門委員会計画

・研究集録について

・地区別協議

７　代表幹事連絡会

⑴　期　日　令和５年２月３日㈮

⑵　会　場　埼玉県県民活動総合センター

⑶　内　容

・令和５年度役員推薦について

・令和５年度理事の報告について

Ⅳ　専門委員会の活動

専門委員会では、平成29年度から、教育界の世代交代の中、教育相談主任としての役割と教育相談室運営などのニーズが高い現状を踏まえ、オリエンテーション版として、その指針となる趣旨の配布物を作成し、平成30年度、配布するに至った。

本年度、学校という場において、様々なトラブルの状態を把握し、カテゴリーごとに分類し、トラブルを起こす児童生徒に対して具体的な短期・長期の対処方法を出し合い、対応レシピ集が完成させ、配布することができた。

１　第１回専門委員会

⑴　期　日　令和４年６月３日㈮

⑵　内　容

・昨年度の活動内容確認と本年度の計画立案

・本年度の活動内容確認

２　第２回専門委員会

⑴　期　日　令和４年11月４日㈮

⑵　内　容

・教育相談主任としての役割と教育相談室運営についての情報交換

・冊子発行のための準備

３　第３回専門委員会

⑴　期　日　令和５年２月３日㈮

⑵　内　容

・本年度の反省と次年度の確認

Ⅴ　今後の活動

夏季の講演会等を通して発達障害を有する児童生徒への指導支援の重要性が認識されるとともに、具体的に学んだことを生かし、効果的な指導が実施されるようになっている。

本年度、各地区での研修会は、それぞれの地区で実施できた。多くの教員が参加をし、教職員アンケートの結果や課題を検討する中で、「発達障害」、「いじめ」、「不登校」等への継続的な対応から、保護者とのコンサルテーション、教職員の世代交代に関わること、校内教育相談体制全般に関わること、その他多くの話題が報告された。どれも学校現場からの切実な背景が込められていた。

昨年度配布した「困った時の対処法レシピ」は、通常学級の中で、集団適応が難しい児童生徒への対応の仕方をカテゴリーごとに分け、項目を１ページずつで編集した特別編として発行した。

「教室を飛び出してしまう子」、「こだわりのある子」等、学校現場ですぐに役立つものに仕上がった。

本年度以降も、本研究会での活動が、本県の教育心理・教育相談分野の発展に寄与できるように研究を重ねていく。

15　特別支援教育

埼玉県特別支援教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

1　研究主題

「幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを踏まえ、自立と社会参加につながる指導・支援の充実を求めて～全特連埼玉大会の成果のまとめ～」

2　研究活動方針

令和の新たな時代を迎え、特別支援教育の推進は、特別支援学級・通級指導教室・特別支援学校ではもちろんのこと、幼稚園、小・中学校、高等学校の全ての学校において、なお一層その重要性が増してきている。

平成の時代より、「障害者の権利に関する条約」が批准されるとともに、「障害者差別解消法」が施行され、共生社会の実現に向け、インクルーシブ教育システム構築の動きが加速している。各学校においては、必要な幼児児童生徒に合理的配慮の提供が求められ、ユニバーサルデザインを取り入れた授業改善の取組が進められている。

本研究会では、特別支援学級における教育課程や学級経営の在り方をはじめ、通常の学級に在籍する特別な支援の必要な幼児児童生徒への指導・支援などの課題を明らかにし、その解決方策について、研究協議を行ってきている。さらに、幼・小・中・高・特全ての学びの場において、全ての教職員が特別支援教育を理解し、実践できるように寄与したい。

これらのことを踏まえ、私たちは、より高い専門性を身に付けるとともに、幼児児童生徒が志をもち夢と自信に満ちて社会で活躍できるよう、自立に向けた指導・支援を推進する必要がある。

本研究会は、これらの特別支援教育推進に係る諸課題解決に向け、学校及び教職員が抱える今日的課題を踏まえて研究を推進する。そして、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育の一層の充実を目指して、全国大会の成果を生かし、教職員の指導力の向上と本県特別支援教育の振興に寄与する。

令和２年度で本研究会は、発足して70年となり、今まで積み重ねてきた特別支援教育に関する知見を生かし、これからの特別支援教育の在り方を提案していけるよう今後の研究活動につなげていきたい。

Ⅱ　活動状況

1　研究組織

本研究会は、小学校・中学校の特別支援学級を母体とする本部と障害種・学校別の三つの部会（難聴・言語、発達・情緒、特別支援学校）で構成している。

2　本部事業

⑴　令和４年度総会

［令和４年６月10日㈮］

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、本部役員は対面、理事はオンライン参加での開催とした。議事は画面共有にて説明を行い、対面、オンライン双方の意見や質問の受付を行って審議した。記念講演として、「特別支援教育の現状と課題」という演題で埼玉県教育局県立学校部特別支援教育課指導主事　若月　雅子　様にご講演いただいた。

⑵　第61回埼玉県特別支援教育研究協議会

県内の特別支援教育の一層の充実を図ることを目的に、本研究会の組織全体で毎年取り組んでいる事業である。本年度は幸手市北公民館をメイン会場に、オンラインにて開催した。

・申 込 数　226名

・内　　容　シンポジウム、分科会

① シンポジウム

テーマ　「埼玉の特別支援教育の未来」

シンポジスト

埼玉県特別支援教育研究会

歴代会長　　伊藤　道雄　様　　服部　純一　様

小山　　悟　様

埼玉県特別支援学級等設置校長会

会長　田野　信哉　様

コーディネーター

埼玉県特別支援教育研究会

会長　内河　水穂子　様

現会長をコーディネーターとし、歴代会長、小・中学校特別支援学級等設置校長会会長によるシンポジウムは、県の特別支援教育の歴史についても学ぶことができた。これからの特別支援教育について、教育の原点としての視点とともに、未来にも対応する教育の在り方について意見が述べられた。

② 第61回埼玉県特別支援教育研究協議会　分科会について

No.	分　科　会	指導者	参加人数
1	特別支援教育コーディネーターの役割とセンター的機能 校内資源や地域ネットワークを生かした支援と連携	山村学園短期大学子ども学科 教授　宇田川　和久　様	34
2	各教科を合わせた指導　（作業学習）	埼玉大学 教授　山中　冴子　様	26
3	高等学校における特別支援教育	星美学園短期大学 客員教授　服部　純一　様	26
4	交流及び共同学習	星美学園短期大学 教授　中内　麻美　様	15
5	特別支援学級の授業づくり入門	埼玉大学教育学部附属教育 実践総合センター 教授　長江　清和　様	52

各分野でご活躍されている指導者の方々から、的確なご指導と貴重な情報を提供していただけた。コロナ禍の研究協議会として、提案者を立てることよりも、実践的な指導をいただいたことが日々の実践に役立つものとなった。

③ 全体を通して

特に、中高の連携について、ニーズが高まってきていることが感じられた。参加者アンケート、実行委員のまとめ等で、開催方法が高評価であった。これからの研究協議会の方法の一つとして考えていきたい。

⑶　提案者等の推薦

第56回関東甲信越地区特別支援教育研究協議会

長野大会　（８月５日㈮：誌上発表）

第３分科会「幼児期の特別支援教育と幼保小連携」

提案者　中沢　朋宏（幸手市立さかえ小学校）

第14分科会「教科指導②（中学校段階）」

提案者　安藤　剛史（上里町立上里北中学校）

⑷　研究委嘱

年度	学校名	研究主題
3・4年度	吉川市立中曽根小学校	一人一人の学びを大切にする特別支援教育の推進 ～交流及び共同学習の研究を通して～
	久喜市立清久小学校	全員が「わかる」「できる」を実現できる授業づくり ～一人一台タブレットの導入による個別最適化の学習～
	川越市立古谷小学校	すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくり
	戸田市立戸田中学校	気付き・考え・深める特別支援教育 ～特別支援教育を科学する～
3・4年度	戸田市立戸田南小学校	「通常学級におけるインクルーシブ教育のあり方」 ～安全・安心の学級経営を通して～
4・5年度	新座市立第三中学校	生徒の言語理解を支えるICTを活用した支援方法の研究
	吉川市立美南小学校	自立と社会参加を目指した授業づくり

本年度は、７校に研究委嘱を依頼し、「交流及び共同学習」、「インクルーシブ教育」、「ICTの活用」等の時代のニーズに沿った研究活動が推進された。

来年度より研究委嘱と並行して、本部事業として全県のニーズに沿った研究研修も実施していく予定である。

⑸　第50回埼玉県特別支援教育研究発表大会

期　日　令和５年１月13日㈮

会　場　埼玉大学附属特別支援教育臨床センター【オンライン】

研究発表

①埼玉県立上尾特別支援学校　鈴木　康之　先生

「ABAの手法を活用した自立活動授業の推進～知的障害特別支援学校における自立活動活性化への一方策～」

②さいたま市立美園中学校　髙野　千華　先生

「キャリア教育の視点から見た授業づくり進路指導～生徒の主体的な学習を目指して～」

講演

埼玉県教育局県立学校部特別支援教育課

教育環境整備推進担当

主任指導主事　藤原　卓也　様

「知的特別支援学校の自立活動と高校内分校」

３　難聴・言語障害教育研究部会

⑴　具体的な研修内容

【第１回全体研修会】

期日　令和４年４月26日㈫

会場　川越市立川越小学校

講演「特別支援教育の現状と課題」

講師　埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課学びの支援担当　指導主事　　小野塚　雄彦　様

【第２回グループ別研修会】

期日　令和４年６月17日㈮

会場　草加市立松原小学校

①構音グループ

②吃音グループ

③教室経営グループ協議

④難聴グループ

【第３回全体研修会】

期日　令和４年11月11日㈮

会場　埼玉県立坂戸ろう学園

講演「きこえの授業やグループ学習に関する内容」

講師　埼玉県立坂戸ろう学園　　高波　一博　様

【役員研修会】

期日　令和５年２月14日㈮

会場　鴻巣市吹上生涯学習センター

情報交換会

近隣市町の担当同士での情報交換

全体協議

①本年度の事業報告、会計報告

②本年度の各グループ別研修内容の報告

③新年度の役員について

④令和５年度全国大会埼玉大会の準備作業

難聴・言語障害研究部会では、「児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援のあり方を求めて」を研修テーマにして、本年度は全体研修会（２回）、グループ別研修会、役員研修会を行った。新型コロナウイルス感染症防止の対策も充分に講じながら２年ぶりに集合型研修を実施することができた。

埼玉県・さいたま市の75校、約130名の担当者にとって本研究部会は貴重な研修の場である。本研修は、難聴・言語障害に関する専門性向上の一助となっている。

４　発達・情緒障害教育研究部会

⑴　具体的な研修内容

【第１回研究協議会】

期日　令和４年12月６日㈫

会場　所沢市立並木小学校

参加　105名

演題「発達の気になる子の・・・
楽しく運動・学習ができるよう
になるビジョントレーニング」

講師・指導

米国オプトメトリスト　　北出　勝也　様

ビジョントレーニングの知名度と特別支援教育におけるニーズの高さから、令和元年度の研修会と同様に多数の申し込み希望があったため、受付はグーグルフォームを用いて先着100名で締め切り、感染症対策を施した体育館で実施した。

５　特別支援学校部会（九つの研究部会）

特別支援学校部会では、九つの研究部会に分かれ各研究テーマの基に活動しており、本年度のその活動概況は以下のとおりである。

⑴　国語研究部会

「生活を豊かにする国語の指導」

第１回　７月29日㈮　書面開催

○本年度研究テーマの決定、活動計画立案　等

第２回　12月２日㈮　【オンライン】

○和光南特別支援学校教諭
中川　秀晃による講演

第３回　12月26日㈪　【オンライン】

○実践報告及び来年度の役割分担、活動についての協議

⑵　算数・数学研究部会

「新学習指導要領に基づいた指導法について」

第１回　７月１日㈮　書面開催

○令和３年度活動報告、令和４年度の活動について

第２回　８月24日㈬　【オンライン】

○埼玉大学教育実践センター
教授　長江　清和　氏による講演

第３回　12月26日㈪　【オンライン】

○順天堂大学スポーツ健康学部
准教授　尾高　邦生　氏による講演

⑶　自立活動研究部会
「一人一人の障害特性・ニーズを踏まえた自立活動の充実」
第１回　７月25日㈪　書面開催
○令和4年度研究テーマ及び活動計画について
第２回　10月28日㈮　【オンライン】
○事例報告会（越谷特支事例報告・協議）
第３回　１月実施　【オンライン】
○学識経験者による講演
⑷　体育研究部会　新学習指導要領に基づくより良い授業づくり」～新型コロナウイルス感染症防止対策を踏まえて～
第１回　７月19日㈫　書面開催
○令和４年度活動計画・研究テーマ・担当校
○各校の取組について
第２回　12月２日㈮　【オンライン】
○実践発表
○令和５年度活動計画・研究テーマ検討・実技研修等
⑸　日常生活の指導研究部会　「一人一人の意欲や生活する力を育む日常生活の指導」
第１回　７月26日㈫　【オンライン】
○本年度の担当確認・活動計画・研究テーマについて
第２回　12月16日㈮　【オンライン】
○授業の意見交換（班別事例発表）・令和５年度の活動計画　等
⑹　音楽研究部会　「主体的に音楽に関わり、豊かに表現できる力を育てる音楽教育」
～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた音楽の授業について～
第１回　８月22日㈪　【オンライン】
○本年度の研究テーマの確認・活動計画の検討、情報交換　等
第２回　12月１日㈭　【オンライン】
○研究授業（動画視聴）、研究協議、情報交換
第３回　12月20日㈫
川島ひばりが丘特別支援学校
○講師による講演、実践報告、情報交換　等
⑺　作業学習研究部会
「生徒の実態に即した作業学習」
第１回　７月19日㈫　書面開催
○本年度の研究テーマ及び活動計画について
第２回　８月26日㈮
埼玉県立職業能力開発センター
○研修「知的障害者職業訓練について」諸連絡
第３回　12月21日㈬
入間わかくさ高等特別支援学校
○令和４年度活動報告、情報交換、諸連絡　等
⑻　図工・美術研究部会　「図工・美術における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた取り組み」
第１回　７月19日㈪　書面開催
○研究テーマの設定
○活動計画・主査・副主査の決定　等
第２回　８月24日㈬　深谷はばたき特支
○矼　秀年　先生によるすず合金鋳造のワークショップ
第３回　12月16日㈮　環境科学センター
○研究テーマに沿った実践紹介、次年度の研究テーマ　等
⑼　生活単元学習研究部会　「各教科等を合わせた指導の特色を活かした、生活単元学習の授業作り」
第１回　８月２日㈫　【オンライン】
○令和３年度の研究テーマ、各校の取組等についての情報交換　等
第２回　８月４日㈭　【オンライン】
○第60回埼特研研究協議会本庄大会の特別講演の視聴　等
第３回　12月23日㈮　書面開催
○本年度の活動の振り返り、令和４年度の研究テーマの確認　等

６　今後の課題

本会の研究協議会・各種研修会への参加者は、幼・小・中・高の校種、特別支援学級、特別支援学校、通常の学級の教員や管理職まで幅広い。

今後も、様々な教育現場からの特別支援教育に関わるニーズに最も応えられる団体として、国や県の動向、新型コロナウイルス感染症拡大状況等を把握しながら、さらに研究を推進していきたい。

また、今後もオンラインを活用し研修の一層の充実を図っていきたい。

16 学 校 図 書 館 教 育

埼玉県学校図書館協議会

Ⅰ　研究主題

「豊かな心と確かな学びを育む学校図書館の創造」
～主体的・対話的で、深い学びを支える
学校図書館教育～

Ⅱ　主題設定の理由・方針

急激に変化する社会状況を踏まえ、10年後を見据えて改訂された学習指導要領では、受身型から探求型の学習への転換が強く求められている。これまでも学校図書館は、「学校図書館法」で示されている教育課程の展開への寄与と児童生徒の健全な教養の育成を具現化すべく、児童生徒の学びを支える重要な役割を担ってきた。①主体的な学びに必要な「学習センター」機能、②探究活動に欠かせない能力を育む「情報センター」機能、③読書体験・感動体験から豊かな心を育む「読書センター」機能、これら三つの機能を偏ることなく発揮できる学校図書館づくりと利活用は、学習指導要領が示している理念の実現に不可欠である。

社会のデジタル化に伴って、学校においても「GIGAスクール構想」の下、ICT環境の整備が加速されている。中教審答申に示された「令和の日本型教育」とは、すべての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現することであり、一人一台端末などのICTの活用が急務である。新たな生活様式の導入など、今後、私たちの生活はさらに大きく変化していくことが予測される。未来社会を切り開くための資質・能力の育成を求めた学習指導要領の趣旨を踏まえ、「主体的・対話的で、深い学び」についての理解と学校図書館の果たすべき役割について研究を深め、情報を発信していくことは喫緊の課題である。

令和４年１月には、第６次「学校図書館図書整備等５か年計画」が策定され、「学校図書館ガイドライン」を引き続き活用し、全ての公立小・中学校等で学校図書館図書標準の達成を目指すとともに、計画的な図書の更新、学校図書館への新聞の複数紙配備及び学校司書の配置拡充が求められた。

そこで本年度は、新学習指導要領の趣旨に基づき、「豊かな心と確かな学びを育む学校図書館の創造」を研究主題に設定するとともに、読書感想文コンクールをはじめとする諸事業の一層の充実を図ることとする。

１　活動方針

⑴　管理運営：学習・情報センターとしての学校図書館の充実
①学校図書館全体計画
②年間経営計画
③小中・地域連携全体計画の見直し

⑵　利用指導：学び方を学ぶ情報活用能力を育成する指導の在り方
①学び方指導計画、情報メディアを活用する学び方体系表
②利用指導年間指導計画の見直し
③学校図書館活用事例を付記した各教科等年間指導計画例の提案

⑶　読書指導：生きる力と豊かな心を育む読書活動の指導の在り方
①読書指導の全体計画体系表
②読書指導年間指導計画
③小・中連携の系統表

⑷　地域連携：学校、家庭、地域社会等の連携による読書活動の推進の在り方
①学校・家庭・地域等（図書館ボランティア等）の連携の体系表
②家庭教育との連携
③公立図書館等との連携推進

２　各部の事業概要

⑴　事務局……事業の計画・実施・評価、各会議の開催手続き、年度資料ファイル管理、一般会計、会計監査等

⑵　総務部……読書感想文コンクール、読書感想画コンクールの企画・運営

⑶　研究部……活動方針と努力点の計画・実施、研究員協議会、研究大会、授業研究会の企画・運営・管理・記録、研究刊行物の再編集

⑷　情報部……広報誌のための基礎資料収集と速報版の発行

⑸　出版部……研究集録・感想文集「真珠」の編集・発行、刊行物の企画・運営・管理等

３　活動状況

５月７日㈯　第1回本部役員研修会
会場：ウエスタ川越南公民館

６月１日㈬　新旧役員研修会（総会）・理事会本部役員会・第１回研究員研究協議会
会場：越谷市中央市民会館
７月25日㈪　埼玉県学校図書館研究大会
会場：ウエスタ川越　共催：埼玉県図書館協会
８月３日㈬　全国学校図書館研究大会
～５日㈮　オンライン開催へ参加
発表者：川越市立新宿小学校　中島　晶子　教諭
内容：探究的な学習～ICT活用と学校図書館～
発表者：越谷市立富士中学校　櫻井 亜莉沙 教諭
内容：読書感想文の指導
10月14日㈮　授業研究会（小学校）
会場：川越市立南古谷小学校
授業者：冨澤　浩子　教諭
指導者：全国SLAスーパーバイザー
徳田　悦子　氏
11月16日㈬　第68回読書感想文コンクール
県中央審査会
会場：さいたま市立与野本町小学校
来賓：毎日新聞さいたま支局長　坂口　雄亮　氏
１月19日㈬　第34回読書感想画コンクール
県中央審査会
会場：さいたま市立与野本町小学校
来賓：毎日新聞さいたま支局長　坂口　雄亮　氏
さいたま市教育委員会
指導主事　山岸　啓介　氏
上里町立上里中学校長　勝山　寛美　氏
２月10日㈭　第２回理事会・研究員研究協議会
会場：越谷市中央市民会館
３月４日㈯　第２回本部役員会
会場：ウエスタ川越
☆研究集録　発行
☆感想文・感想画集　「真珠」発行
☆広報誌「埼玉SLA」発行

Ⅲ　本年度の主な研究内容

１　埼玉県学校図書館研究大会

令和４年７月25日㈪ウエスタ川越にて、埼玉県学校図書館協議会・埼玉県図書館協議会の共催による「埼玉県学校図書館夏季研究大会」を、埼玉県教育委員会・さいたま市教育委員会の後援を受け開催した。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、午後からの開催となった。絵本作家の　はた　こうしろう　先生を招致し、講演会を行った。その後、「豊かな心と確かな学びを育む学校図書館の創造」のテーマから管理運営部会、利用指導部会、読書指導部会、地域連携部会の四つの分科会に分かれて研究会を行った。小・中学校の司書教諭や学校図書館・公立図書館の関係者が多数参加し、有意義な大会となった。

＜講演会＞
「じぶんの目で見て　じぶんのことばで話す」
絵本作家　はた　こうしろう　氏

＜分科会＞
分科会Ａ（管理運営）
「学習・情報センターとしての学校図書館の運営と充実」
《提案発表者》
富士見市立鶴見小学校　江原　美華　教諭
越谷市立富士中学校　櫻井亜莉沙　教諭
責任者・司会
和光市立新倉小学校　校長　土井　純子　氏
《主な内容》
・学校図書館づくり、図書だより、掲示の工夫と実践
・魅力的な委員会活動と質の向上
・読書感想文の指導について
・図書購入、図書委員会の活性化
・学習情報センターとしての工夫
指導助言：全国SLA　對崎美奈子　氏

図書資料と言えば紙類だけだと思われがちだが、幅広い種類がある。『学校図書館はデジタルもアナログも』と６年前から学芸大で提唱している。この中で、発達の段階に応じた情報活用学習を一覧にまとめている。小学校低学年では具体物やアナログを活用することを中心とした学習をし、学年が上がるにつれてデジタルの活用が増え、中学校ではデジタル活用の割合が具体物よりはるかに大きくなる。しかし、アナログ（紙媒体など）の活用はすべての発達の段階において

同じような割合で必要とされているということが注目すべき点である。タブレット端末活用の利点としては、持ち運べること、学習履歴が残せることが挙げられる。紙の資料活用の利点としては、多様な資料の比較が容易で、制作上の工夫ができることなどが挙げられる。それぞれのツールの長所短所を見極めて使い分けできると良い。電子書籍が増え、タブレットを使って読書をする人も増えている。「学校図書館ガイドライン」では、校長が「学校図書館の館長としての役割」も担っていると明示されている。

分科会Ｂ（利用指導）

「学び方を学ぶ情報活用能力を育成する指導の在り方」

《提案発表者》

川越市立大東東小学校　佐藤　悠美　教諭

越谷市立東中学校　古舘　恵里　教諭

責任者・司会

三郷市立彦糸小学校　校長　宮﨑　正子　氏

《主な内容》

・情報活用能力の育成～本とICT～

・情報活用能力育成系統表の活用

・国語科と関連させた授業と司書教諭の役目

・調べ学習のスキルや情報リテラシーの指導法

・レファレンスブックの利用指導

指導助言：埼玉SLA　福満　芳枝　氏

結論から言うと、いかに教師の資質を高めるかということである。今の時代だから紙のよさを伝えるのが大事である。情報化社会ではあるが辞典・辞書を活用することで知識が広がることもある。「授業が命」。本やICTを使うことは手段であって、活用自体が目的ではない。モラルを教えるときは「作った人や作品を大切にする」という意識をさせることが大切である。本とICTは互いに補い合う関係のもの、使い分けできるように指導することである。情報センターとしての機能を持たせること、系統付けられた指導を継続して行うことで学びが身に付く。調べる理由をはっきりさせて課題意識をもったテーマ決めをすることなど、教師の意識を高めて指導していくことがある。

分科会Ｃ（読書指導）

「生きる力と豊かな心を育む読書活動の指導の在り方」

《提案発表者》

さいたま市立春岡小学校　澤浦　美砂　教諭

越谷市立大相模中学校　上野　歩美　教諭

責任者・司会

川越市立南古谷小学校　冨澤　浩子　教諭

《主な内容》

・読書環境の整え方とその重要性

・「ビブリオバトル」「ブックトーク」の手立てと指導

・魅力ある図書、読書月間の取り組み方の紹介

・読書月間の取り組み方

・GIGAスクール構想と図書

指導助言：越谷市教育センター　堀山　邦明　氏

コロナ禍ではあるが、読書を推進している熱意が感じられる。本を読む機会、本を手に取る機会を教師がどのように設けるかという視点では、ビブリオバトルはコミュニケーション能力を高め、興味・関心を広げるのに有効なものなので、ぜひ実践した方がいいし、継続する体制を整えるといい。他の教員を巻き込んで読書活動を推進していくことが大切である。どんな実践をするにしても、まず自校の実態を把握し、実践したらどうなったかを振り返り、次の実践につなげていくことが重要である。

分科会Ｄ（地域連携）

「学校、家庭、地域社会等の連携による読書活動の推進の在り方」

《提案発表者》

鴻巣市立田間宮小学校　手島　博美　教諭

越谷市立千間台中学校　佐々木菜摘　教諭

責任者・司会

川口市立安行小学校　教頭　高橋　義樹　氏

《主な内容》

・公共図書館との連携：セカンドブック事業、調べる学習コンクールに関わる図書の団体貸出、出張授業

・ボランティアとの連携：読み聞かせ、図書館整備

・保育実習と関連させた幼稚園での読み聞かせ活動
・家庭との連携：家族読書、家読ゆうびん
指導助言：埼玉SLA　　福田　孝子　氏

主体的・対話的で深い学びを実現させるためには学校司書の存在は不可欠であり、学校司書が入ることで効果が上がっているという声をあげることが重要である。市立図書館からの配送車についても同様のことが言える。いずれはAIが人を超えるとも言われる時代であり、今後人間には一層の創造力が求められる。子どもにとって創造力を育むために読書は重要であり、多くのものを得るために欠かせない。子どもの読書は大人の読書とは違い、ただの趣味にとどまるものではない。また、読書の大切さを保護者や地域に啓発する方法としては、保護者会や入学説明会で直接伝えるほか、インターネットの活用が挙げられる。一人一台端末時代を迎え、情報を得ることが身近で簡単な手段となっている。学校のホームページに学校図書館のページをつくるなど、さまざまな工夫をしながら広報活動をしていくことが、家庭や地域と連携しながら読書活動を進めることにつながっていく。

2　授業研究会（小学校）

期　日：10月14日㈮
会　場：川越市立南古谷小学校
内　容：パラリンピックについてしらべよう
　　百科事典の使い方
授業者：司書教諭　冨澤　浩子　教諭
指導者：全国SLA　徳田　悦子　氏

3　第68回読書感想文コンクール県中央審査会

期　日：11月16日㈫
会　場：さいたま市立与野本町小学校

最優秀賞受賞者≪読書感想文≫
◎課題読書
小　低　久喜市立栗橋小学校　　２年　篠原　　剣
　　作品名　おすしがいっぱい
小　中　川越市立高階北小学校　３年　廣瀬　煌也
　　作品名　ためいきの先には
小　高　さいたま市立大谷場東小学校
　　６年　丸山　紗弥
　　作品名　命のバトン
中学校　越谷市立富士中学校　　３年　安発沙友里
　　作品名　「セカイ」を創る
◎自由読書
小　低　さいたま市立木崎小学校１年　遠藤　涼葉
　　作品名　きせきのおこしかた
小　中　川口市立十二月田小学校３年　猪村　颯真
　　作品名　ぼくは、い村家のかんきょう大じん
小　高　草加市立高砂小学校　　６年　小山　結愛
　　作品名　犬達の明るい未来を願って
中学校　川口市立元郷中学校　　３年　吉田　亘佑
　　作品名　「良心」の軸を持って

4　第34回読書感想画コンクール県中央審査会

期　日：１月18日㈬
会　場：さいたま市立与野本町小学校

最優秀賞受賞者≪読書感想画≫
◎指定読書
小　低　三郷市立吹上小学校
　　３年　ブイトリン　ミーヴァン
小　高　川口市立新郷東小学校　６年　斎藤　采莉
中学校　越谷市立武蔵野中学校　１年　田村　美和
◎自由読書
小　低　本庄市立秋平小学校　　１年　竹沢　優稀
小　高　春日部市立粕壁小学校　４年　上野　祐輔
中学校　上尾市立西中学校　　２年　伴　　梛紗

Ⅳ　成果と今後の活動

本年度は、新型コロナウイルス感染防止を考慮した開催ではあったが、短時間・少人数で協議会を行った。対面で互いの意見を出し合うことで、リモートとは違い、効果的な話合いをすることができた。

「主体的・対話的で深い学び」に果たす学校図書館と読書活動の役割について多様な視点から学ぶことができた。

令和５年度の関東地区川越大会に向けて、研究の推進と各部の活動の連携が今後の課題だ。役員・研究員のネットワークを工夫し、改善することが急務である。来年度も、各地区理事や研究員と綿密に連携し、学校図書館教育の充実をなお一層図っていきたい。

17　中学校技術・家庭科教育

埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会

Ⅰ　はじめに

コロナ禍による参集制限が依然として行われる中、少しずつ組織の体制を整えながら参集による活動を試行し、新学習指導要領に沿った技術・家庭科のねらいの具現化に向けた研究を推進した。専門委員会を機能させ、指導・評価計画の検討及び実践研究を進め、その研究成果を県内各中学校の教育活動に広げ、生かすべく取組を行った。

また、研究大会の全国大会と国内７ブロックの研究大会を中心とする教科研究と、生徒の学習成果の発表の場として設定されている「全国中学生創造ものづくり教育フェア」の開催・運営を活動の両輪として教育実践を進める形が全国的な動きとなっている中で、本県でも同様に運営と広報の体制を整備し、フェア関係事業の拡張を意識した取組を行っている。

本年度は、昨年度に引き続きフェア内で大きなウェイトを占める「創造アイデアロボットコンテスト」の一部門を加須市立大利根中学校を会場としてオンラインで主管・運営するとともに、「あなたのためのおべんとう」コンクールを、春日部市立豊野中学校を本部会場として、同様にオンラインで主管・運営した。

Ⅱ　研究主題

本県研究テーマ
「未来社会を切り拓くための資質・能力を育む学習指導の研究」

昨年度に引き続き、これまで関ブロ等で積み重ねてきた研究を生かしつつ、表現を精査して「未来社会を切り拓くための資質・能力を育む学習指導の研究」というテーマで指導の評価を見据えた研究を推進した。

Ⅲ　本年度の研究内容・活動状況

１　研究方針・研究体制

⑴　県内11支部から、それぞれ技術分野・家庭分野の専門委員を選出し、東西南北＋さいたま市の５地域に再編成して、それぞれに研究主任・副主任を置き、関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会埼玉大会の実施・発表に向けた準備も含めて、研究テーマを追求し、資質・能力を育むために適切な評価を活用した学習指導について検討を行った。

⑵　専門委員会の活動を中核とし、各支部が専門委員のリーダーシップにより技術・家庭科教育の充実を図る体制作りを進めた。

⑶　これまでの研究成果と課題を基に、新学習指導要領に沿った題材計画・配列や診断的評価・形成的評価を基にした総括的評価について検討を行った。

⑷　各校の授業実践に生かせる資料を可能な限り検討及び作成・収集した。

⑸　各部会＜①材料と加工の技術部会、②生物育成の技術部会、③エネルギー変換の技術部会、④情報の技術部会、⑤家族・家庭生活部会、⑥衣食住の生活１（食生活）部会、⑦衣食住の生活２（衣・住生活）部会、⑧消費生活・環境部会＞ごとに、新学習指導要領の再確認及び分析を進め、それに見合った年間指導計画及び評価について検討しつつ、授業実践を行った。

また、ものづくりフェア部会を別に組織して、県内はもとより、関東・全国の「中学生創造ものづくり教育フェア」運営の充実を図った。

２　研究経過・活動の概要

⑴　専門委員会

①第１回専門委員会

６月22日㈬　【オンライン】

○令和３年度　活動報告

○令和４年度　研究概要の説明・周知

○組織作り・研究推進について

②第２回専門委員会　（研究主任会）

８月24日㈫　【オンライン】

○全体会（今後の研究の見通しについて）

○各分科会の研究協議

（今後の研究の方向性と推進方法の検討）

○SAITAMA創造ものづくり教育フェアの運営について

③第３回専門委員会

12月７日㈮　拠点校参集型

さいたま市：さいたま市立植水中学校

東 部 地 区：加須市立加須東中学校

西 部 地 区：川越市立東中学校

南 部 地 区：新座市立第三中学校

北 部 地 区：深谷市立幡羅中学校

本部事務局：蓮田市立黒浜中学校
○全体会
これまでの流れ・今後の方向・教員研究発表会に向けて
○各分科会の研究協議
研究のまとめと今後の課題について
④教員研究発表会
令和５年２月15日㈬　蓮田市総合文化会館
○専門委員会全体研究発表　専門委員長
○各分科会研究発表　各研究主任
○指導講評　埼玉県立総合教育センター
指導主事　大山　方住　氏
○講演会「技術・家庭科の動向
～関ブロ埼玉大会に期待すること～」
国立教育政策研究所教育課程研究センター
研究開発部教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官　渡邊　茂一　氏

専門委員会を中心とする本会の研究成果を広く県内の技術・家庭科担当者に発表することで情報を共有し、今後の研究推進に生かすとともに、関係機関からの指導を直接いただける貴重な機会として発表会を開催している。コロナ禍で中断していたが、本年度より再開することができた。

専門委員会の運営については、オンラインによる意思疎通や情報共有を最終手段としながら、地域ごとに拠点校へ集合し、全体はオンラインとする形態等を取り入れて、完全参集型へ会の運営を戻していく方向で研究推進の加速を図った。より効果的な会議の運営や体制について検討を行う。

⑵　支部長研修会
①支部代表者会
５月13日㈮　【オンライン】
○理事会・総会
○研究について
○関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会
埼玉大会に向けた発表内容の分担について
②支部長研修会
９月14日㈬　【オンライン】
○２学期以降の諸事業運営検討
○関ブロ栃木大会に向けた準備
○専門委員会について
○SAITAMA創造ものづくり教育フェアの運営について
○研究会の運営組織について
③支部長研修会
３月10日㈮　県民活動総合センター
○令和４年度事業報告
○令和４年度会計報告・監査報告
○令和５年度事業計画

⑶　SAITAMA創造ものづくり教育フェア
11月11日㈮
第１会場：県民活動総合センター
・生徒研究発表会
・創造アイデアロボットコンテスト　他
第２会場：拠点校・春日部市立豊野中学校
＋オンライン
・あなたのためのおべんとうコンクール
＜後援＞埼玉県教育委員会　さいたま市教育委員会
＜趣旨・目的＞
○ものづくりの発表を通して、生徒が知識や技術を習得・活用することにより、ものをつくることの喜びを味わう機会とする。
○技術・家庭科で習得した知識や技術を生かし、生徒がつくる喜びや仲間と共同して競技をする喜びを味わう機会とする。
また、発表の場を通して、他校生徒との交流を図り、併せて知識や技能の向上を図る。

「創造アイデアロボットコンテスト」、「豊かな生活を創るアイデアバックコンクール」「あなたのためのおべんとうコンクール」「生徒作品コンクール」の４部門を県民活動総合センターにて実施し、本年度、東京都が主管・運営する関東甲信越地区中学生創造ものづくり教育フェアへの埼玉県代表生徒・作品を選出した。関東甲信越地区大会は、第22回全国中学生創造ものづくり教育フェア（全国大フェア）へ繋がる大会となるが、全国フェアの「創造アイデアロボットコンテスト」の基礎部門と、「あなたのためのおべんとうコンクール」は、埼玉県が主管・運営に当たった。また、埼玉県独自の取組として継続している「生徒研究発表会」を開催した。おべんとうコンクールのみ、全国大会の運営準備を兼ねて、春日部市立豊野中学校を本部・拠点校としたオンライン形式で運営を行った。

①生徒研究発表会
身近な問題や、タイムリーな話題となっている事柄から研究テーマを設定し、県内各支部の代表生徒による研究発表会が行われた。生徒が日々直面している生活の中から、疑問に思っている事柄の解明や生活する上での工夫等が多く取り上げられた。３年ぶりに発表形式による実施となったが、各支部ともしっかり資料を準備して、参観者

の視線・興味を集める発表ができた。研究内容が受け手にわかりやすく伝わるよう各自が工夫し、しっかりと準備をして発表に臨む姿を見ることができた。

指導講評：行田市教育委員会教育部教育指導課
指導主事兼主幹　須永　章宏　氏

②創造アイデアロボットコンテスト

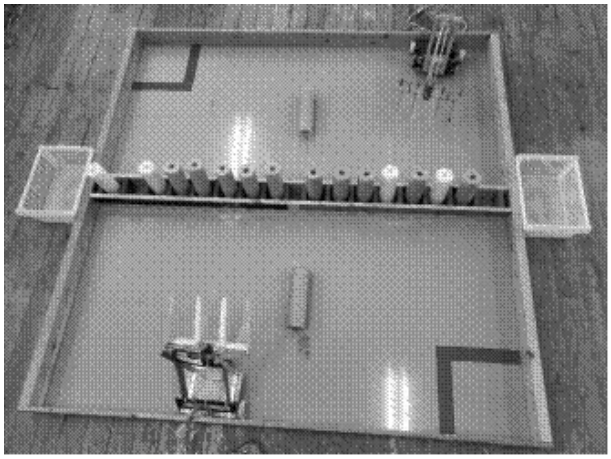
本年度は、全国大会へつながるコンテストのみ県民活動総合センターで実施し、埼玉県ロボットチャンピオンシップ大会（県内のみ）の部門は、開催中止となった。

トーナメント部門　※開催中止

A　ワン・ツー・チャンス
B　あっち行けポイ
C　ロボット・オリエンテーリング
D　コンピュータ制御プログラミング
E　ロボサッカー

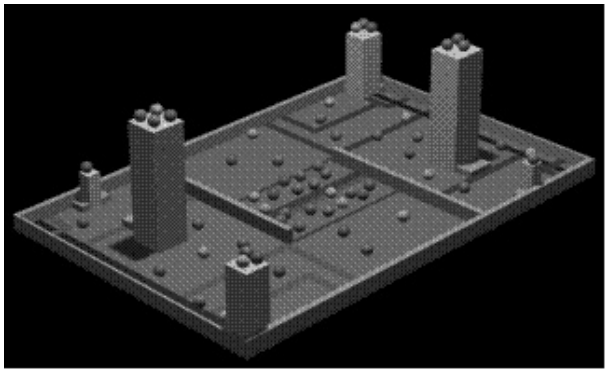
全国部門　オンライン開催

F　全国基礎部門　「Ace in the hole２」



G　計測・制御部門
「ドキドキ！ロボット収穫祭
～「スマート農業」に挑戦！～」

H　応用・発展部門
「支援物資を運搬せよ！」



F・G・Hの各部門については、部門ごとに３チームが、関東甲信越地区東京大会への埼玉県代表としてそれぞれ出場することになった。

勝利至上主義に走らず、「互いの良さやアイディアを評価し合おう。」というスローガンを掲げ、勝敗にこだわらず、お互いのアイデアを認め、学び合いの場となるよう配慮している。

＜審査員＞
白岡市教育委員会教育指導課
指導主事　石島　隆志　氏
越谷市教育委員会指導課
主任指導主事　鶴見　祥之　氏

③生活を豊かにするアイデアバックコンクール

これまで生徒が身に付けてきた知識と技術を生かして製作した作品とレポートを基に審査を行い、関東甲信越地区東京大会への代表選考が行い代表作品の選出と上位大会へのエントリーを行った。

＜審査員＞
入間市立新久小学校　校長　　酒本　希朱　氏

④あなたのためのおべんとうコンクール

食材や献立を、弁当を作る対象に合わせて思いやり、工夫して調理に当たるコンクールである。オンライン形式でレシピや工夫点を発表し、その内容を基に審査を実施した。最優秀作品を全国大会へエントリーした。

＜審査員＞
松伏町立松伏中学校　教頭　　山﨑　京子　氏

⑤　生徒作品コンクール部門

全県から作品を募集し、県民活動総合センターに展示して技術分野と家庭分野でそれぞれに審査して県代表の作品を選出し、上位大会へエントリーした。限られた時間と材料で、より良い作品が出品できるよう、いかに質と量を高めていくかが今後の課題である。

＜審査員＞
行田市教育委員会教育部教育指導課
指導主事兼主幹　須永　章宏　氏

SAITAMA創造ものづくりフェア全般において、以前は、一般の商業施設を借用して大々的に実施できたが、コロナ感染症拡大防止対策により、オンラインの開催や活動場所・人数等を制限しての運営となっていた。本年度は制限はあるものの、３年ぶりに参集型の１日開催ができ、保護者や関係者にフェアの様子を直接見ていただく機会ができたことが大きな収穫であった。運営上の

様々なノウハウが途切れてしまう危惧があったが、今回の実施によって今後の運営に大きな光を得た状況である。技術・家庭科の取組を広く地域・社会に公開し、育成すべき生徒像について理解協力をいただくために引き続き、工夫と努力を継続したい。

また、働き方改革に伴う出張の制限等に伴い、スタッフの確保等、運営が難しい状況になっている。生徒にとって、一生に一度となるかもしれない活躍の機会を確保するために、引き続き工夫をする必要がある。

(4) 第22回全国中学生創造ものづくり教育フェア

関東甲信越地区大会　東京大会

令和４年12月４日(日)

会場　東京都中央区立銀座中学校

加須市立大利根中学校

「創造アイデアロボットコンテスト」について、関東フェアを主管する東京都の運営補助を行った。

(5) 第22回全国中学生創造ものづくり教育フェア

（全国フェア）

１月28日(土)・29日(日)

会場　東京都中央区立総合スポーツセンター他

＜趣旨・目的＞

○中学生が知識や道具を駆使していろいろな条件の下に最適解を見付け、進んで生活を工夫し創造することを学んだ技術・家庭科の実践発表の場とする。

○未来への飛躍を実現する人材を養成するために、多様な体験と切磋琢磨の機会を増大し、学習意欲やものづくりへの製作意欲の向上を図る。

○優れた能力と多様な個性を伸ばす技術・家庭科の学習内容を広く国民に知らせるとともに、全国の技術・家庭科教員の指導力向上を目指す研修の場とする。

各都道府県の大会からブロック大会を経て、全国大会に至る一連の流れの最高位となるフェアの全国大会が東京都中央区を中心に開催された。本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインを活用した競技会を行った。埼玉県は、加須市立大利根中学校を会場として「創造アイデアロボットコンテスト」と、春日部市立豊野中学校を会場として「あなたのためのおべんとうコンクール」を、オンラインで運営した。盛大に技術・家庭科の学習成果発表ができた。

Ⅳ　成果と今後の課題

本年度も、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じる中での活動となり、参集型の開催を予定していたものがオンラインでの開催となった。しかし、昨年度に比べると組織としての活動が次第に元に戻せつつあり、これまでの経験を基に新たな方法や環境を作ることで、よりよい活動へ繋げられる状況も見られるようになってきている。オンラインでの研修会は、通信環境等に左右されるために諸条件の整備等で課題はあるが、移動時間の削減やペーパレス会議に向けて印刷・丁合の準備時間が削減できる等、利点も多くあった。

逆に、異動等に伴うメンバー変更で引き継ぎの連絡が取りにくいという課題があった。さらに、県内各地区における研修会や授業研究会等も中止となり、研究成果を共有することが難しくなったり、リモート会議では画面上での意思疎通が対面ほどうまくできないことから、意見のまとめに時間がかかったりする等の課題も確認された。

今後も、コロナ禍による制限や運営上の工夫が求められることを考え、リモートによる研究会の能率的な体制づくりや、研究を進める上で安定した通信を行うための環境を整備する必要性を感じている。

また、生徒の活躍を広く社会に発信したり、各地区の教職員に対して各部会で研究された内容、特に、実践事例や評価の方法等を広範囲に伝達したりすることができるよう、有効なコンテンツを揃えて整理し利用できるようにしておくために、本年度より、クラウドストレージの導入を行うこととした。研究物や活動の記録の作成・集約・記録・保存を行い、必要なものを必要な時に、必要なところから入手して活用できるよう、印刷・製本の予算をICT環境の整備・借り上げ・運用等に充てることで今後の活動に関する省力化や利便性を増すことが期待できる。コロナ禍を転機と捉え、これまで研究会の在り方も見直している。

何より新学習指導要領に則り、生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育成するための教育活動が県内で実践できるよう研究を推進する。

18　小学校家庭科教育

埼玉県小学校家庭科教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

1　研究主題

学びをつなぎ、家庭生活をよりよくしようと工夫し実践する児童の育成

副主題

衣生活への関心を高め、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら主体的に生活を工夫する児童の育成

2　方針

本研究会は、昭和58年度に「第１回関東ブロック大会」、昭和63年度に「第25回全国大会、第６回関東ブロック大会」、平成11年度に「第17回関東ブロック大会」、平成24年度に「第29回関東ブロック大会」を開催した。その成果は、年度を追って充実、発展しつつ今日に受け継がれている。

本年度の研究を推進するに当たり、昨年までの本研究会の研究成果と課題を踏まえながら、豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育を目指し、入間地区を研究指定地区とし研究を推進することとした。

具体的には、入間地区の家庭科教育研究会を核とし、授業研究を中心とした実践的な研究を展開していく。

3　研究主題について（埼玉県研究主題）

⑴　児童の実態と課題

令和３年度と令和４年度に行った調査結果では、「家庭科が好きですか。」の問いに肯定的な回答をしている児童は約８割であった。また、興味・関心のある学習内容については、「調理」や「製作」と答えた児童が多く、いわゆる「実習」を楽しみにしている様子が伺える。

一方で、家族の一員として協力することへの関心が低いことや家庭での実践や社会への参画が十分でないなどの課題が本校においても見られる。

そこで、コロナ禍であっても、布を用いた製作については、感染症対策を講じつつ実践的・体験的な学習を継続させてきたことから、児童の関心が高い「製作」に視点を当て、主題について研究を深めることとした。

⑵　家庭科で育みたい児童の姿

本研究では、学習指導要領家庭科の内容Ｂ（５）「生活を豊かにするための布を用いた製作」の学習を通し、衣生活への関心を高め、学び合う中で主体的に生活を工夫する児童の育成を目指している。

指導においては、各題材で育成を目指す資質・能力を踏まえ、問題を見いだし、「題材を貫く課題」を設定し、解決していく学習を展開する。その中で、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、自身の考えを広げたり、深めたりしながら、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成につなげていく。どのようによりよい生活を送るかを考えながら学ぶことは、社会を生き抜く力へつながると考える。さらに、それぞれの生活の問題を解決して、よりよくしようとするだけでなく、生活を楽しもうとする態度の育成にもつなげていきたい。

学習の過程で、衣生活への関心を高め、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら主体的に生活を工夫する児童を育みたい。

⑶　研究主題の設定

入間地区は、埼玉県の南西部に位置し、10市３町からなる地区で構成されている。古くから荒川の支流である新河岸川等、舟運にて江戸との地域産物の流通が栄えた地である。今日でも全国に名高い「味の狭山」と称される狭山茶をはじめ、入間ゴボウ、川越イモ等地場野菜の産地を有する地域でもある。

入間地区には小学校が170校あり、入間地区小学校家庭科教育研究会では、年一回授業研究を行い、教員の指導力向上に努めている。

本年度は、令和３年度の関東甲信越地区小学校家庭科教育研究大会埼玉大会での研究成果を受け、副主題を「衣生活への関心を高め、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら主体的に生活を工夫する児童の育成」と設定し、研究を進めている。

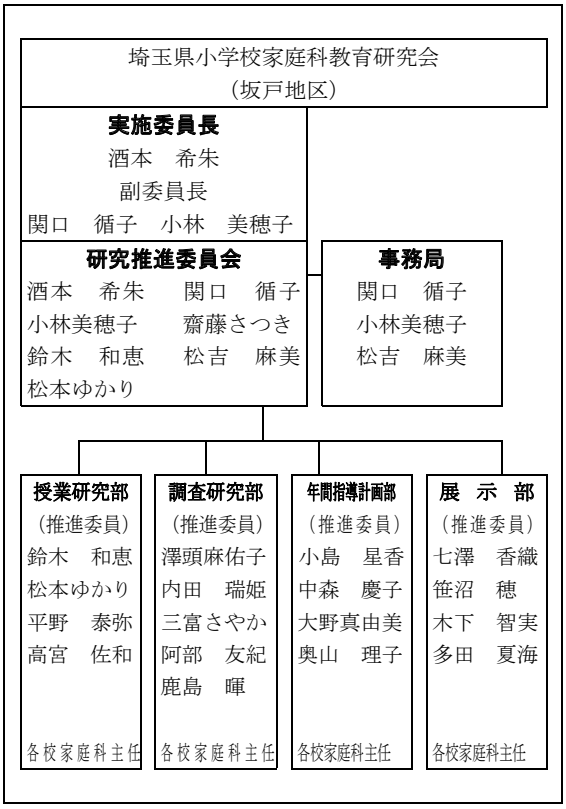
Ⅱ　研究概要について

1　研究の方法

⑴　研究の基本的な考え方

研究主題及び副主題に迫る実践的な研究をする。

⑵　研究組織



２　研究の内容

＜目指す児童像＞

○日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けている子

○自ら生活の中の問題を見いだし、課題を設定し、解決できる子

○家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫し、実践しようとする子

＜研究の視点＞

視点１　実践的な態度を育むことを重視した指導計画の工夫

手立て①　他学年や他教科等との系統的・横断的な学びのつながりを明確にした年間指導計画

学校生活や家庭生活等で役に立つ布製品を工夫して製作したり、目的に合った袋を環境の視点を加え工夫して製作したりする。その際、他教科等の関連のある学習内容を洗い出し、家庭科での系統的・横断的な学びを明確にした。教師が意図的に既習の学習と結び付け、児童への指導や働き掛けをどのようにするかを考えられるようにした。

手立て②　よりよい生活を創り出そうとする実践的な態度を育成することを重視した指導計画

中学校の学習につながるように指導計画を意識するとともに、ポートフォリオ・学びの足跡を活用し、今後の生活に生かしたいことをしっかりと捉えられるようにした。

さらに、「内容・項目・事項チェック表」により、すべての指導事項が網羅されているかを確認するとともに、衣生活における小中の技能の系統性を確認する「製作に関する小・中学校５年間の技能系統表」を作成し、計画の中に実践できる場を位置付けた。

視点２　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業展開の工夫

手立て①　「見方・考え方」を働かせた課題設定の工夫

これまでの学びを生かし、生活を見つめ直し、気が付いたことや改善したいこと等を見いだした問題から、「題材を貫く課題」を設定し、解決していくために、相手意識や目的意識等を明確にできるようにした。また、ガイダンスの学習で児童が気付いた「見方・考え方」の視点について作成した掲示物を活用することを通して、児童が「見方・考え方」を常に働かせながら、課題の解決に向けて工夫することができるようにした。

手立て②　学びを深めるための学び合いやICTの効果的な活用の工夫

製作過程では、製作段階ごとに写真に撮り、タブレット端末で共有しながら、教師が意図的に解決させたい課題について交流させた。その際、自己評価や相互評価を記録させ、ポートフォリオや学びの足跡を残し、製作意欲を持続させるとともに課題解決に向けて粘り強く取り組んだり、見通しをもったりすることができるようにした。

視点３　成長を実感できるようにする評価の工夫

手立て①　主体的に学習に取り組む態度の評価の工夫

ポートフォリオや学びの足跡を活用し、次時につながる手立てを考えた。課題の解決に向けて工夫したことや自己評価、相互評価と同時に、振り返りの記述や行動観察から主体的に学習に取り組む態度の評価を行い、ポートフォリオや学びの足跡での振り返りにおいて、できるようになったことや粘り強く取り組んだことを意識させることで、自分の成長を実感できるようにした。

手立て②　多様な評価方法の工夫

授業の中で、評価する時期や場面を精選した。知識・技能においては、具体的な実物見本を作成し、評価規準として活用を図った。また、個・ペア・グループでの学び合い活動を効果的に取り入れることで、子供たちの「課題の解決に向けた思考」の深まりを図る

とともに、その過程における児童の学びを見取り、評価につながるよう工夫した。

さらに、「ポートフォリオ」を活用し、テストや作品など学習の結果のみでなく、それぞれの過程における多様な評価を積み重ね、記録に残す評価につなげるようにした。

視点４　家庭・地域との連携の工夫

手立て①　家庭・地域と連携を図った題材の工夫

製作過程での安全を確保するために、保護者に「ミシンボランティア」を募った。また、学年便りや家庭科通信等で、家庭科の学習内容や児童の思いや考えを伝え、保護者の協力や理解を求めた。製作過程や製作後の実践報告会で保護者の方からコメントをいただくことにより、地域や家庭との連携を深め、学びを広げていけるようにした。

また、製作後に自分や家族が使用し、布製品のよさや特徴を確認しながら、家族との関わりをさらに深めていけるようにした。

手立て②　地域の特色や教育力を生かす学習活動の工夫

地域とのコラボレーションによる学習活動を工夫した。狭山茶農家との連携では、茶摘みが終わった後の色が濃くなった茶葉を児童が摘み、その茶葉を煮詰めて染液にし、生地を染める活動を行った。５年生ではマスクの茶染めをし、その後マスクに基礎縫いを行い、生活の中で活用できるようにした。６年生では茶染めをした布で、袋物の製作に取り組んだ。衣生活の授業以外にも食生活の学習において、大学やガス会社、地域の農家との連携等も行った。

地域の特産物を理解し、地域のよさを感じられる題材を工夫した。さらに、専門的な知識・技能に触れることで、家庭科への興味・関心をより高められるように学習活動の工夫をした。

３　研究の成果と課題

＜研究の成果＞

○教科の特質を踏まえ、他学年や他教科等との関連を意識して年間指導計画を作成したことにより段階的・系統的に指導することの重要性が顕著になった。また、「学びをつなぐ」という視点が明確になった。

○主体的・対話的で深い学びを実現させるために、児童に個・ペア・グループで考えさせる場面を設定することで、課題解決に粘り強く取り組む姿が見られた。

○題材の始めに、育成を目指す資質・能力を踏まえ、児童から出てきた問いを整理して「題材を貫く課題」を設定したことで、題材を通しての学びのつながりができた。

○「生活の営みに係る見方・考え方」の四つの視点を常に掲示物として目に触れさせ、教師がそれに関わる発問をすることで児童が自分の考えを広げたり、深めたりすることに効果的だった。

○主体的に学習に取り組む態度の評価においては、適切な評価場面を設定し、ポートフォリオ（ワークシート・振り返り）で児童が１時間ごとに活動を振り返り、見通しをもって自分の学習を把握することができた。

＜研究の課題＞

○本年度も、新型コロナウイルス感染症対策等により授業研究会等で大人数での研究協議をすることができなかった。そこで、どのように対策をしていくかを考えたり、課題を共有したりすることが必要であると感じた。特に、題材の指導計画、授業の指導過程と評価を合わせてPDCAサイクルで見直すことがより必要である。また、どの教員が家庭科を担当しても変わらない指導を目指せるよう情報交換をし、指導の改善や工夫をしていきたい。

○一人一台のタブレット端末を学習の道具として活用できるようになった。ICTを使うことが効果的な場面を見極め、さらに研究を深めていきたい。また、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた効果的な活用方法を研究し、広めていくことは今後も課題である。

○家庭科の特徴である「生活を工夫し実践していく」という点を意識し、家庭・地域との連携を継続しながら、実生活で生かせる家庭科の授業改善を一層図る必要がある。

Ⅲ　令和４年度埼玉県小学校家庭科教育研究会の活動

１　令和４年度　研究組織

会　　長	小峯由起子（東部）	
所属研究部	副会長（部長）	監事（副部長）
研　修　部	影山　葉子（南部）	佐藤　朋子（南部）
調査研究部	酒本　希朱（西部）	棚村かおり（北部）
広　報　部	渋谷　恵子（さいたま市）	新坂　一美（東部）
庶務会計部	永沼　清美（東部）	小笠原泰代（西部）
専門委員会	田野智恵子（北部）	井上　千春（南部）
	幹事 蓮井　望　渡邉さや香　渡邊はるか	

地区理事　63名
（常任理事24名含　常任理事は研究部に所属する）
専門委員　14名

研　修　部　部長：影山　葉子
・研修会の計画及び運営
・児童研究発表会の計画及び運営
・研究集録の編集及び発行

調査研究部　部長：酒本　希朱
・全国調査の協力

広　報　部　部長：渋谷　恵子
・小家研会報の作成

庶務会計部　部長：永沼　清美
・文書作成及び発送
・総会、常任理事会、研修会等の要項作成

専門委員会　委員長：田野智恵子
・学習指導の実践に関する研究

２　研究会活動状況

⑴　令和４年度役員研修会
（オンライン開催）
令和４年６月15日㈬
①役員研修会
・令和３年度事業報告
・４部会・専門委員会の活動報告
・令和３年度決算報告・監査報告
・新役員の承認
・令和４年度事業計画、令和４年度予算案
・４部会・専門委員会の活動計画
・全小家研の入会について
・研究指定地区の研究の概要
②講演会（中止）

⑵　夏季研修会・各部研修会・専門委員会（中止）

⑶　第53回埼玉県小学校家庭科教育研究協議会
（本部役員のみ）
令和４年８月５日㈮
＜会場＞　with youさいたま
（規模を縮小して開催）
・４部会・専門委員会の活動の確認
・指定地区（入間）研究の進捗状況
・４部会の役割分担（1/19の発表）
・専門委員会の冊子
・次年度指定地区（埼葛）の確認

⑷　第53回埼玉県小学校家庭科教育研究協議会
令和５年１月19日㈭
＜会場＞　坂戸市立坂戸南小学校
①研究授業及び研究協議会
・題材名「ミシンでソーイング」
５年２組授業者　　天貝　美結　教諭
・題材名「生活を豊かにソーイング」
６年１組授業者　松本　ゆかり　教諭
②記念講演
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官　　熊谷　有紀子　先生
演題「小学校家庭科における資質・能力の育成を目指して」
③研究集録第53集の発行
平成２年度から研究指定地区研究の成果のまとめと埼玉県小学校家庭科研究会の組織・活動状況の２部構成で編集している。

⑸　地区別授業研究会（４地区）
①北部・秩父地区
令和４年10月26日㈬　　横瀬町立横瀬小学校
②東部・北埼玉地区
令和４年11月18日㈮　　行田市立桜が丘小学校
③さいたま市
令和４年11月17日㈭
さいたま市立大砂土小学校
④南部・南部A地区
令和４年12月１日㈭　　志木市立志木小学校

⑹　埼玉県発明創意くふう展
新型コロナウイルス感染拡大防止のため、庶務会計部としての協力は無し。

⑺　本部役員会・第３回役員研修会
（常任理事・理事会）
令和５年２月15日㈬
＜会場＞　with youさいたま
・令和４年度の反省と次年度の展望
・会報の配付

19　生活科・総合的な学習の時間教育

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会

Ⅰ　研究主題と方針

「思考力・判断力・表現力を高める支援の工夫」

＜方針①＞　授業研究会の開催

本年度は、上尾市立鴨川小学校、小鹿野町立三田川小学校、松伏町立松伏第二小学校で研究を深めることを目的に授業研究会を開催する。

＜方針②＞　指導法の研究と指導事例集の刊行

「構造的な板書」「発話分析」「探究の過程」の三つの視点を掲げ、生活科・総合的な学習の時間の事例を基に指導法の研究を行う。

Ⅱ　活動状況

1　活動内容

⑴　事務局幹事打合せ会

○期日　令和４年４月４日㈪

○会場　埼玉大学教育学部附属小学校

○内容　常任理事会の原案作成
各地区理事の調査用紙発送
講演会の講師の依頼

⑵　常任理事会

○期日　令和４年５月18日㈬

○会場　Zoom会議

○内容　令和３年度決算報告
令和４年度の役員案
令和４年度事業計画及び予算案審議
各地区理事の確認
専門部の決定
総会の開催について
研究発表会の開催について
授業研究委嘱校の研究授業について
指導事例集の執筆について

⑶　講演会及び総会

○期日　令和４年６月14日㈫

○会場　Zoom会議

○内容

①総会　常任理事の決定
専門部組織決定
令和４年度の事業計画及び日程
令和４年度の予算案の決定

②講演会

演題　「生活科・総合的な学習の時間の指導と評価について」

○講演　文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官
齋藤　博伸　氏

⑷　第1回指導法研究委員会

○期日　令和４年６月29日㈬

○会場　Zoom会議

○内容　委員の委嘱
研究の進め方

⑸　生活科・総合的な学習の時間研究発表会

○期日　令和４年８月２日㈫

○会場　Zoom会議

○内容　研究発表及び協議

⑹　第２回指導法研究委員会

○期日　令和４年８月22日㈪

○会場　Zoom会議

○内容　指導方法の研究

⑺　第３回指導法研究委員会

○期日　令和４年10月26日㈬

○会場　Zoom会議

○内容　指導方法の研究

⑻　授業委嘱校研究発表会

○期日　令和４年11月21日㈪

○会場　上尾市立鴨川小学校

○内容　詳細はP.77を参照

⑼　授業委嘱校研究発表会

○期日　令和４年11月22日㈫

○会場　小鹿野町立三田川小学校

○内容　詳細はP.78を参照

⑽　授業委嘱校研究発表会

○期日　令和４年11月30日㈬

○会場　松伏町立松伏第二小学校

○内容　詳細はP.79を参照

⑾　常任理事会

○期日　令和５年２月15日㈬

○会場　Zoom会議

○内容　令和５年度の役員案
令和５年度事業計画及び予算案審議
各地区理事の選出
専門部の確認
授業研究委嘱校について

⑿　事務局幹事打合せ会

○期日　令和５年３月10日㈮

○会場　埼玉大学教育学部附属小学校

○内容　　令和５年度事業計画について
　　令和５年度指導法研究委員会について

２　運営組織

本研究会の事業は、三つの専門部会において、具体的に進められている。それぞれ、各地区理事が所属し、生活科・総合的な学習の時間教育の発展に大きな役割を果たしている。

⑴　総務部
○地区活動全体の総轄
・総会・理事会・講演会の計画及び実施
・通知文書の発送・受理
・予算案・決算書の作成

⑵　研修部
○生活科・総合的な学習の時間研修に関する総轄
・研究発表会の計画及び実施
・授業研究会の計画及び実施
○研究会編集物に関する総轄
・研究集録の作成

⑶　指導法研究部
○生活科・総合的な学習の時間教育の指導法に関する総轄
・指導法の研究
・研究成果の編集

Ⅲ　研究内容

１　生活科・総合的な学習の時間指導法研究委員会

生活科・総合的な学習の時間の授業における指導方法の研究と各単元における指導の在り方について研究し、学習指導に役立てることを目的とする。

研究の視点として、生活科は「構造的な板書」「発話分析」、総合は的な学習の時間は、「探究過程」に視点を当て、生活科・総合的な学習の時間の事例を基に研究を深めた。

その成果物として「生活科・総合的な学習の時間指導事例集　第31集」を発行した。

２　生活科・総合的な学習の時間研究発表会

○期日　　令和４年８月２日㈫
○会場　　Zoom会議
○内容

⑴　実践発表
①深谷市立川本北小学校　　教諭　松下めぐみ　氏
テーマ「気付きの質を高める生活科学習指導」
②久喜市立栗橋西小学校　　教諭　髙柳　太一　氏
テーマ「カリキュラム・マネジメントによる学びのSTEAM化の推進～ESDの視点で地域とつなぐ～」
③寄居町立男衾中学校　　教諭　高松あすか　氏
テーマ「「探究と協働」の視点で生徒一人一人の学びをつくる」

⑵　指導講評
共栄大学教育学部　　教授　小川　聖子　氏

３　生活科・総合的な学習の時間教育研修委員会

役員一覧、生活科・総合的な学習の時間指導事例集、研究組織一覧、支部だより、事業報告などを主な内容として編集した。

○研究刊行物　「生活・総合」　第33号

Ⅳ　授業研究委嘱校の発表概要

本年度は、上尾市立鴨川小学校、小鹿野町立三田川小学校、松伏町立松伏第二小学校の３校に授業研究の委嘱をした。それぞれの公開授業等の概要について紹介する。

上尾市立鴨川小学校

１　日　時　令和４年11月21日㈪
２　授業者　第５学年　　教諭　大枝　順美　氏
　　教諭　梶田　雄也　氏
３　単元名　「よりよい暮らしをつくろう
　　～私たちがつくる未来～」
４　授業の概要

本単元は、プログラミングツールを活用して学校や地域のために働いている人の助けとなるものを作ることで、自分たちの手でよりよい生活を築いていく力を育むことを目標としている。児童たちは、１年生の頃からプログラミング的思考を取り入れた学習に取り組み、３年生からは実際にプログラムを組む経験を重ねてきた。

本単元では、はじめに、ゲストティーチャーとして、校務員、地域ボランティア、PTA、教員等の話を聞いたり、企業の機械化の理念を調べたりして、「機械化を取り入れることで身の回りの人々を助けることはできないか」という思いをもって課題を設定した。本時は、ゲストティーチャーを相手に行う最終発表に向けて、児童同士で発表のリハーサルを行った。児童が、自分たちの作品のよさや強みが伝わる発表の仕方などを互いに見合うだけでなく、作品自体についてもフィードバックをもらい、最終発表に向けて改善できる点を見付けることができるように指導を行った。

５　授業を振り返って

児童は、３年生ではプログラミングの初歩を学んで地域の自然について考え、４年生では、プログラミングの

考え方や技能を活用して、福祉の課題を解決する学習に取り組んできた。その上で、さらに視点を広げるために、解決する課題の対象を学校から地域まで広げ、伝えたい相手や解決するためのツールも選択肢も広げた。児童は、一人一人が「誰にとってのどのようなよりよい暮らしなのか」という目的意識、相手意識をもって、ツールを選んだり組み合わせたり、ときにはロボットに自作の付属品を付けたりしながら、ものづくりを進めることができていた。「誰のために」「どのようにして」「いかなる点で」助けていくのかを明確にして授業に取り組んでいた。

発表では、作品の機能やプログラムの内容だけでなく、作品に込めた思いや願いも伝えようとする意識が感じられた。また、最終発表ではゲストティーチャーにプレゼンすることを念頭に置いて、発表に対するアドバイスを行う様子も見られた。児童が発表の仕方についてフィードバックを行い、発表本番に向けて改善点を見いだすためには、本時の先にある発表本番を意識した活動の工夫が必要である。例えば、似た内容のグループで組み、ゲストティーチャーの立場で発表を聞き合ったり、振り返りに視点を与え、思考のゴールを明確化させたりすることなどである。また、日頃から様々な教科で発表活動を意図的に行い、発表した後に聞き手から様々な質問が出たり、次の活動につなげるための感想を伝えられたりする力を育てる必要も感じた。「聞く力」を育てることで、発表力の向上につなげていきたい。

6　指導講評

（上尾市教育委員会学校教育部指導課
指導主事　森　正典　氏）

授業を「どのように学ぶか」の視点で見ていくと、まず、第一に成果としていえるのは、一つ一つの発表に想いがあり、自分事として学びを進められていたことである。児童は、「誰を」「どのように」助けてあげたいのかが明確になっており、そのゴールに向けて活動を進めてきていることが伝わってきた。プログラミングも含め、ICT活用を積極的に行っている点もよい。グループの振り返りと個人の振り返りをパソコンを使って行うことで、これまでの活動の蓄積を残すとともに、児童がそれを基に活動を振り返ったり、立ち戻ったりすることができる点が効果的である。学年単位で学習を進めることにより、グループ単位での指導と学年全体への指導を行う場面を作ることができたこともよかった。児童の振り返りの内容を見ると、自身の発表の技能が向上したことや発表を通して学んだことを振り返っていた児童がいた。今回の授業の意図を児童が理解し、次の学習への課題を見いだしていた。ただ、全員が目標を達成するには、子供が「何ができるようになったのか」を教師が把握する必要がある。児童の振り返り・感想に必ず目を通して、記録に残す必要のあるものは記録し、見取ったことを次の指導に生かすことができるようになるとよい。

小鹿野町立三田川小学校

1　日　時　令和４年11月22日㈫
2　授業者　第６学年１組　　教諭　北原　直　氏
3　単元名　「私が継承する～地域の伝統文化～」
4　授業の概要

本単元では、地域で行われている小鹿野歌舞伎について調べ、学習後も地域に伝わる伝統文化に誇りをもつことができるようにしたいと願い設定した。児童は、５年生までに地域・福祉・環境等のテーマで総合的な学習を進めており、課題や疑問を解決するために調べ、分かったことをまとめる力が身に付いている。しかし、探究課題を自分事として捉え、調べたことや考えたことを学習後の生活に生かそうとする児童は少ない状態にある。そこで、今まで以上に探求課題へ向き合い、学習後も生活に生かそうとする態度を養うために、総合的な学習の時間のサイクルを重視するだけでなく、文献的調査の他に実際の歌舞伎の稽古や指導者である保存会の方々からの聞き取りを通して、自分なりに小鹿野歌舞伎を捉え直していけるようにした。

学習物の掲示

個人での整理・分析

本時では単元のまとめとして、調査したことや体験を通して得た情報を整理・分析したり友達の考えと比較したりしながら、小鹿野歌舞伎の価値について見いだす活動を行った。

5　授業を振り返って

○今までの学習の流れや、学習の中で気付いたこと、分かったことを全体に掲示しておくことで、児童自身が多様な視点から考える様子が見られた。

共有・比較

○個人活動からグループでの話合い、グループ同士

の話合いと段階を踏むことで、考えを比較したり関係付けたりすることができた。

○グループで話し合う際に、付箋紙法の他にベン図の考え方を示すことでグルーピングをスムーズに行うことができた。

○単に歴史的な文化財というだけでなく、そこに携わる人々の願いや地域の発展等複数の観点から価値付けを行うとともに、歌舞伎という存在に対して非常に親近感を抱き、自分事として考えることができていた。

6　指導講評

（寄居町立男衾中学校 校長　市川　篤史　氏）

○必ず扱わなくてはならないテーマという物はなく、教師自身が楽しめる題材を扱うのでよい。

○評価規準として、単元全体のものもあれば具体的な１時間のものもあるが、今回の評価する対象の思考を見取るために、授業中に使用した思考ツールが利用できる。

○学校の学びと社会での学びを結び付けることが重要である。今回の学習でも単に歌舞伎を体験しているだけでなく、伝統というものを考えたり身に付けたりすることができている。

○インターネット等の調べ学習だけでは見えない物が実体験を通して見付けることができる。

○歌舞伎が一生の趣味、身近な存在だという視点が子供から出ているのは、素晴らしい。クラス全体としてのまとめだけでなく、一人一人に探究課題に対する思いを是非書いてほしい。

松伏町立松伏第二小学校

1　日　時　令和４年11月30日㈬

2　授業者　第３学年１組　　教諭　鈴木　茉莉　氏

　　２組　　教諭　田村　浩基　氏

3　単元名　園児となかよく交流しよう

　　～楽しみ100倍大作戦！～

4　授業の概要

本単元は、本校の近くにあるこども園に通っている園児と仲良くなったり、楽しませたりするための交流活動を通して、「人のために力を尽くす喜び」を実感する子を育てたいという思いで設定した。本時までに２度交流会を行った。第１回は、おにごっこやかるたなど、３年生がやりたいと思う遊びを園児と行った。第２回は、季節（秋）をテーマに「ハロウィンパーティー」を行った。第３回は、園児を新１年生という視点で捉え、目的を「新１年生の入学が楽しみな気持ちを100倍にする！」にした。

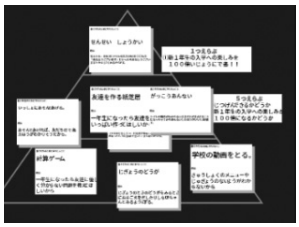
そこで本時は、実際に新１年生が不安なく、安心して、楽しみな気持ちで入学するためには何をすればよいか決めるために、ピラミッドチャートを活用した話合い活動を行った。

5　授業を振り返って

○単元名の確認、課題設定、見通しを丁寧に行うことで、「園児の入学が楽しみな気持ちを100倍にするために今日は話し合う」という相手意識と目的意識を明確にして学習に臨むことができた。

○新１年生が映る動画を見て感じたことを書く活動を取り入れたことで、一人一人が「新１年生に対する自分の思い」を自覚し、その後の話合い活動に意欲的に取り組むことができた。

○話合い活動ではピラミッドチャートの活用を行うことで、より観点を明確にして話し合うことができた。また、自分の意見も友達の意見も尊重しながら話し合うことができた。



○振り返りで、「次は、今日決めた意見をどうやって実現させるか話し合いたい。」「今日決めた意見をアップグレードしてさらにいいものにしたい。」など、問いを見付け、次の探究に向かおうとする言葉が聞かれた。

6　指導講評　（元文教大学　教授　嶋野　道弘　氏）

○新１年生の映像を、見せるだけでなく、その後に「どんな気持ちで入学してほしいか」書かせたことがよかった。他者意識（映像）と自己意識（気持ちを書く）を同じくらい大切にしていくことが必要。

○思考ツール（ピラミッドチャート）が有効的に使えていた。思考ツールは、個人やグループの考えを可視化することができる。また、何をするためにそのツールを使うのか明確にすることが重要である。

○「納得解」や「最適解」を求める話合いをすることが重要。話合いの中で悩んでいて決まらないグループは立派だった。それを、教師が肯定的に受け止めることが大切である。

○「まとめ」では、決定した意見を板書したり、紙に書いて貼ったりするとよかった。その上で、「何通りの意見が出たのか」「どんな意見が多かったのか」などを話し合い、交流すると学習の手応えを実感できる。

○３年生と園児の相互交流を１年間何度も行うことで、探究の過程を発展的に繰り返すことができている。「園児が喜んでくれたか」外部の評価を受けることも重要である。

20　本校の研究の取組について

埼玉大学教育学部附属小学校

Ⅰ　本校の研究概要

1　研究主題

「学びをつくる」（３年次）

～子供たちが自覚と自己決定をくりかえすために～

2　研究主題について

⑴　主題設定の理由

「学びをつくる」とは、児童が問題解決の過程で主体的に取り組み、よりよく問題を解決することである。

本校は、令和元年度まで思考力、判断力、表現力等に絞って研究を行ってきた。その際、思考力、判断力、表現力等を用いて問題を解決できるだけでなく、その過程で自ら進んで問題を発見したり、試行錯誤しながらねばり強く取り組んだりするなどの主体性や、効率よく解決したり、他者と関わりながら考えを深めたりするなどのよりよく問題を解決することについての課題が見られた。また、主体性やよりよく解決することは学習指導要領で求める「学びに向かう力、人間性等」に当たるものとして、これからの教育課題に沿ったものであると考えた。そこで、本研究主題を設定した。

⑵　「学びをつくる」児童の姿

進んで問題を見いだし、 よりよい解決に向けてねばり強くやり抜く子

児童は、学習活動の中で問題と出会い、思考を巡らせて解決に向けて進んでいく。本研究ではこの問題解決の過程において、進んで問題を見いだしたり、ねばり強くやり抜いたりする主体的な姿や、見通しをもって取り組んだり、他者と関わったりしながらよりよく問題解決したりする姿を「学びをつくる姿」であると捉えている。

3　研究内容について

⑴　研究１年次（令和２年度）の取組

「学びをつくる」児童の姿が見られるようにするためには、「学びに向かう力、人間性等」が必要である。これらは元々、人間の内にあるものであるが、「学びをつくる」児童の姿に変容する過程で何が必要であるかを考えた際に、「内的動機付け・外的動機付け」「学習目標志向」であると捉えた。

そこで、研究１年次では、「内的動機付け・外的動機付け」「学習目標志向」を高める手立てを打つことで、「学びをつくる」児童の育成に取り組んだ。

また、手立ての有効性については、児童の具体的な姿の変容から行う質的評価と質問紙調査から行う量的評価により検証していくこととした。

①「内的動機付け・外的動機付け」

知的好奇心や達成感、挑戦心など自分自身の内的な要因・本人以外の外的な要因や条件によって誘発されるものであり、主に児童の心の部分に関わるものとして捉えている。

②「学習目標志向」

粘り強さや協同性、競争心など学習に対して促進的に作用する目標志向であり、主に学習をよりよく進めるための力であるとして捉えている。

③「質的評価・量的評価」

質的評価とは、授業を通して継続的に児童の姿を記録し、具体的な児童の姿から変容を捉えていくことである。また、量的評価とは、本校独自の質問紙について得点化し、その得点から変容を捉えていくことである。量的評価については、質的評価を補助するものとして活用していく。量的評価のために、視覚的には捉えにくい内面の部分について問う児童用質問紙を作成した。「内的動機付け・外的動機付け」や「学習目標志向」を構成する観点について問い、四件法でそれぞれの項目を得点化し、量的に児童の変容を捉えている。

⑵　研究２年次（令和３年度）の取組

１年次の授業実践、質的評価の中から「自覚」と「自己決定」というキーワードが見えてきた。そこで「学びをつくる」ための視点として「『自覚』と『自己決定』をくりかえすこと」を設定した。２年次も授業実践を通して、「自覚」している姿、「自己決定」している姿、それを繰り返す姿を質的に見取っていくことに取り組んだ。また、質的に見取った姿と質問紙調査の量的な見取りとの関連を図り、「学びをつくる」姿を示すことができるようにした。

そのため、「自覚部会」「自己決定部会」「分析部会」という三つの部会に分かれて研究に取り組んだ。

①自覚部会の取組

自覚部会では、「自覚」を「今の『自分』を捉えること」とした。「自分」については、「できること」「できないこと」「学習の達成度」「身に付けた学び方」「生活経験」「学習経験」「興味・関心」など、広く捉えている。また、多くの実践に取り組み、協議する中で、児童が「自覚」するためには、今までの自分やこれからの自分と比べたり、他者と比べたりすることが必要であると考えた。

②自己決定部会の取組

自己決定部会では、「自己決定」を「自分の思いをもって選択、決断できること」とした。特に、「自分の思いをもって」という点を重視した。また、自分の行動、現在の考え、結論について、自分自身がどのように感じているか、十分に納得できているかを見直す瞬間・場面や、ふと立ち止まって、客観的な視点や意見を基に自分の行動、考え、結論を見直す瞬間・場面を設定することも必要であると考えた。つまり、「自覚」との関連は大きく、切り離せるものではないという考えに至った。

③分析部会の取組

分析部会では、大きく二つの分析に取り組んだ。

一つ目は、研究１年次に作成した質問紙調査による分析である。この調査は、学期ごとに実施をしている。これにより、「学びをつくる」児童の傾向を探り、授業を参観する際の視点として活用し、授業を通して見取った児童の姿（質的評価）を、数値を用いて（量的評価）客観的に捉えるようにした。

二つ目は、授業を参観する際に活用する分析シートである。質問紙調査は、大きな傾向はつかめるものの、この授業でどんな「自覚」や「自己決定」があり、どんな学びをつくったのかを見取ることは難しい。そこで、児童の発言や行動、変容などを分析し、授業レベルで見取ることができないか調査した。

⑶　本年度の取組

３年次の研究として、前年度までの経緯を踏まえ、副題を「自覚と自己決定を繰り返すために」とすることとした。特に、教師が「子供の側に立って」授業を行うことが重要であると共通の認識をもって実践に取り組むようにした。

具体的には、低、中、高学年の指導法改善部会３部会を設定し、授業実践に基づいた教師の働き掛けや学びをつくる児童の姿の検証を行った。

４　研究の成果

実践を行った成果として、以下の点が挙げられた。

○どの学年においても児童や学級の実態に応じて教師が子供の側に立って働き掛けを行うことで子供が主体的に学習に取り組む姿が見られた。

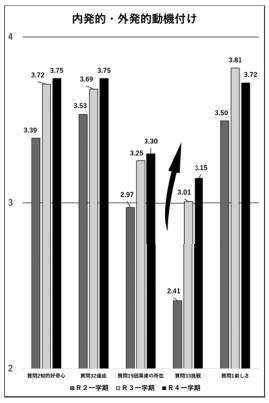
○個別の問題意識を大切に進めることや他者と関わりながら解決するよさを感じさせることで、よりよい解決に向けて取り組む姿が見られた。

また、令和２年度～４年度の一年ごとの調査結果を分析すると、次のような変容が見られた。

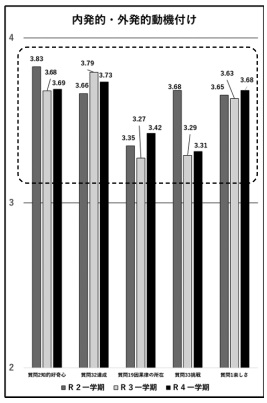
内発的・外発的動機付けに関わる質問項目

中学年において、「挑戦」の項目が上がっていることや他の質問に対する得点が向上しているところを見ると、学びに対して前向きに取り組む姿勢となっていると考えられる。また、高学年においては大きな変容は見られないが、高い得点で推移している。

特に、「知的好奇心」、「達成」、「楽しさ」が高い状態にある。これらの項目は、児童が学びに「達成」や「楽しさ」を感じていて、学びに向かう姿勢が維持されていると考えられる。



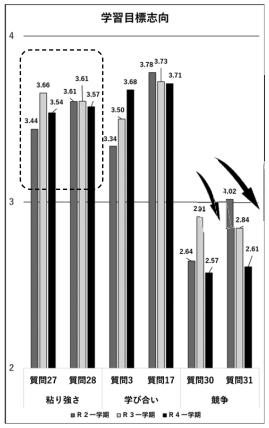
「中学年の調査結果」



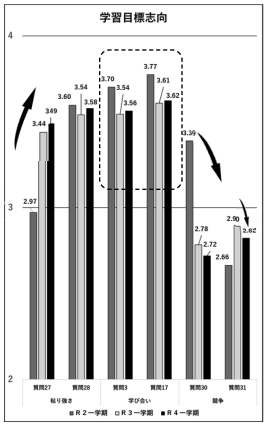
「高学年の調査結果」

学習目標志向に関わる質問項目

「粘り強さ」に関わる項目について、中学年においては高い得点で推移している。高学年においては、得点が向上している。また、中学年、高学年でも、「競争」の項目の得点が下がっている。これは、他者比較ではなく、動機付けの要因が内発的に行われていることを示している。さらに、他者との関わりについては、「学び合い」の得点が高くなっている。



「中学年の調査結果」



「高学年の調査結果」

これらの変容から、児童の学びに対する動機付けが高まり、学びに向かう姿勢が維持されていること、学習内での他者に対する関わり方がよくなっていることなどが成果として見えてきた。

Ⅱ　活動内容

1　第90回小学校教育研究協議会について

⑴　期　日　令和４年10月18日㈫、19日㈬

⑵　会　場　埼玉大学教育学部附属小学校
（人数制限を行った対面開催）

⑶　主　題　「学びをつくる」（３年次）
～子供たちが自覚と自己決定をくりかえすために～

⑷　趣　旨
教科や自身の研究テーマに基づいて公開授業を行い、研究協議を通して小学校教育の充実を図る。

⑸　後　援
埼玉県教育委員会　　さいたま市教育委員会
埼玉県連合教育研究会　埼玉県公立小学校校長会

⑹　公開授業　　36授業提案

⑺　分科会
本年度は、研究３年次として教科分科会を設定した。学校研究主題と各教科等の研究主題を基に、具体的な方策を考え、授業を通して提案し、研究協議を行った。

◎教科の研究主題
①提案者　②公開授業　③指導者　④司会者

【国語科】

◎未来を拓く言語能力を育成する学びのプロセスの構築

①吉野　竜一　②４年「自分の学びをつくろう」
①笠原　雅広　②６年「何をどのように学ぶか」
（『鳥獣戯画』を読む・日本文化を発信しよう）
②１年「何をどのように学ぼうかな」
（じどう車くらべ）
①波戸内友基　②３年「自分の読みをつくる『ちいちゃんのかげおくり』」
②５年「自分達の読みをつくる『たずねびと』」
③埼玉大学・飯泉　健司　県教育局・近藤　正紀
④上尾・大谷小・長本優莉子
草加・八幡小・加藤　良太

【社会科】

◎社会がわかり、社会にかかわる児童を育てる指導の工夫

①鈴木　一徳　②４年「世界とつながるまち川口」
①村知　直人　②６年「世界の未来と日本の役割」
②５年「これからの工業生産」
①村橋　直樹　②５年「情報を生かす産業」
③埼玉大学・桐谷　正信　県教育局・伊藤　敏郎
④越谷・明正小・小倉　和彦

【算数科】

◎問題を見いだす児童を育てる指導

①関口　泰広　②３年「分数」
①藤田　明人　②１年「かたち　づくり」
②６年「データの活用」
①下村　怜史　②４年「変わり方調べ」
②２年「かけ算」
③埼玉大学・二宮　裕之　県教育局・中里こず恵
④坂戸・上谷小・内田謙太郎

【理科】

◎自然事象を通して、科学を語る児童を育てる指導の工夫

①塩盛　秀雄　②５年「電流がつくる磁力」
①肥田　幸則　②６年「てこの規則性」
②４年「人の体のつくりと運動」
①関根　達也　②３年「物の重さをくらべよう」
③埼玉大学・小倉　康　県教育局・柿沼　宏充
④深谷・花園小・大工廻朝晴
さいたま・中尾小・清野　玄太

【生活科】

◎学びを自らの生活に生かす生活科の学習指導

①横田　典久　②１年「こうえんの　すてきをつたえよう」
①鈴木　康平　②２年「生きものと　なかよし」
②１年「ぼく　わたしに　できること」
③埼玉大学・宇佐見香代　県教育局・小峰　元
④松伏・松伏第二小・田村　浩基

【音楽科】

◎自らの見方で音楽に向き合う児童の育成

①納見　　梢　②６年「日本や世界の音楽に親しもう」
①三橋　博道　②３年「ちいきにつたわる音楽でつながろう」
②４年「日本の音楽でつながろう」
①遠山　里穂　②１年「みのまわりのおとに　みみをすまそう」
③埼玉大学・森　薫　県教育局・佐藤　太一
④富士見・ふじみ野小・小林　理沙
横瀬・横瀬小・西本　史子

【図画工作科】

◎自分の思いを豊かにし、表現しきる児童を育てる

①坂井　貴文　②６年「デジタルアート研究所」
①安藤　健太　②５年「プロジェクション物品グ」
②３年「ぽよよん王国へようこそ！」
①荒川　祥輝　②１年「けずって　ふしぎはっけん」
②４年「紙の箱大変身」
③埼玉大学・石上　城行　県教育局・釆澤　敬
④さいたま・宮原小・真田　幸

【家庭科】

◎よりよい生活に向けて学びを実践し、未来に生きる力を育む指導の工夫

①蓮井　　望　②５年「ミシンにトライ！手作りで楽しい生活」

①渡邉さや香　②６年「まかせてね　今日の食事」

③埼玉大学・川端　博子　県教育局・笹嶋　京子

④飯能・美杉台小・小島　星香

【体育科】

◎小学校体育授業において、すべての子どもが学習を自分で進め、運動への有能さを高められる指導の工夫

①首藤祐太朗　②６年「ネット型」

①浅間　聖也　②５年「フラッグフットボール」

③埼玉大学・石川　泰成　県教育局・亀山　友宏

④滑川・宮前小・浅見　大幾

加須・高柳小・三村　博紀

【健康教育】

◎生涯を通じて健康な生活を送る基礎を培う指導の工夫

①渡邊　法子　②３年「けんこうな生活」

①中司なつみ　②６年「健康によい食べ方を考えよう」

③埼玉大学・戸部　秀之

県教育局・澤村　文香、坂上三四郎

④上尾・大谷中・木村　紘子

さいたま・大牧小・小田　泰之

２　校内授業研究会について

個人の研究主題を基に、授業を通して検証を試み、全員で研究協議を行った。研究会には、文部科学省及び埼玉大学から指導者を招聘した。

本年度は、八つの教科で授業研究会を実施した。

①教科等（学年）　②授業者　③指導者

⑴　令和４年６月９日㈭

①音楽科（３年）

②三橋　博道

③埼玉大学・森　薫

⑵　令和４年６月13日㈪

①図画工作科（６年）

②坂井　貴文

③埼玉大学・小澤　基弘

⑶　令和４年６月20日㈪

①生活科（２年）

②鈴木　康平

③埼玉大学・宇佐見　香代

⑷　令和４年６月30日㈭

①音楽科（６年）

②納見　梢

③埼玉大学・森　薫

⑸　令和５年２月６日㈪

①健康教育（３年）

②渡邊　法子

③埼玉大学・戸部　秀之

⑹　令和５年２月９日㈭

①理科（６年）

②塩盛　秀雄

③埼玉大学・小倉　康

⑺　令和５年２月13日㈪

①体育科（４年）

②首藤　祐太朗

③埼玉大学・石川　泰成

⑻　令和５年２月20日㈪

①社会科（６年）

②村知　直人

③埼玉大学・桐谷　正信

Ⅲ　今後について

本年度は、第90回小学校教育研究協議会や校内授業研究会において、学校研究主題を具現化した授業を提案することができた。特に、コロナ禍において３年ぶりの対面開催ができた研究協議会では、参加者から今後も対面開催、授業公開を希望する声が多数寄せられた。研究の発信という側面からも、授業を見て、子供たちの姿で研究を語ることができる場を用意し続けることも続けていきたい。

また、これまでの研究の成果を今後に生かすためには、課題を的確に捉え、整理していくことが重要である。研究を通して、前述のような成果があった一方で、解決しなければならない課題も見えてきた。これからも児童が「学びをつくる」ために、さらに研究を推進していきたい。

21　埼玉大学教育学部附属中学校

Ⅰ　研究主題と方針

1　研究主題

「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現
～挑戦心を引き出す学習指導と生徒の個別最適な学びの在り方～」

2　方針

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して　～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（令和３年１月26日　中央教育審議会）では、

①新学習指導要領の着実な実施が重要である。

②「個別最適な学び」と、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、「協働的な学び」とを一体的に充実する。

③学校における働き方改革やGIGAスクール構想を強力に推進する。

ということが述べられており、全国的に、学校教育を支える全ての関係者がそれぞれの役割を果たし、この改革を進めようとしているところである。

本校においても、「令和の日本型学校教育」の実現に向けて様々な取組を積極的に進めていく必要があることや、本校生徒の実態として、「挑戦心」や「自己肯定感」の育成に課題があることがわかっており、生徒だけでなく、教員も様々なことに挑戦していくことが求められる。以上のことから、「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」を研究主題とし、副題を「挑戦心を引き出す学習指導と生徒の個別最適な学びの在り方」と設定した。

具体的には、下記の研究の視点により、生徒の資質・能力の育成を図り、令和の日本型学校教育の実現をめざした。

視点１：挑戦心を引き出す学習指導の工夫
生徒一人一人がどのように課題をとらえ、取組を進めているかを見取り、適切な形成的評価を行うことが必要となる。また、生徒が自らの学習を振り返り、変容を自覚できるような工夫をも求められる。以上のことから、指導と評価の一体化を充実させ、生徒の挑戦心を引き出す単元・題材計画を作成した。

視点２：個別最適な学びの工夫
課題に取り組むために多様な方法を生徒に提供したり、生徒の理解を促す情報提示の方法を工夫したり、生徒が課題に対する行動を起こし、教師が見取ることができるようにしたりするなどの工夫を行った。

Ⅱ　活動状況及び研究内容

1　令和４年度中学校教育研究協議会

⑴　発表主題（上記研究主題と同じ）

⑵　主催　埼玉大学教育学部附属中学校

⑶　後援　埼玉県教育委員会･さいたま市教育委員会

⑷　期日　令和４年５月24日㈫・25日㈬

【国語科】

研究主題「実社会や実生活に生きて働く国語の資質・能力を育成する授業の創造」

指 導 者　埼玉県教育局　御菩薩池好行　先生
埼玉大学　本橋　幸康　先生
司 会 者　越谷市立大袋中学校　岩田ひろの　先生

本年度は以下の２点を重点として、研究・実践を行った。

①自ら言葉を吟味する必要がある言語活動を創意工夫し、身に付けたい力を高める方法について研究・実践を行うこと。

生徒が自分の言葉に対する価値を捉え直し、試行錯誤しながら言葉との関わり方を模索することができるような単元や課題設定を行った。

②個別最適な学び・協働的な学びについて、研究・実践を行うこと。

自分自身で現在身に付けている資質・能力を捉えさせ、その解決のための方法を考え、実践する場を設定することで、それぞれに合った学習活動を設定した。

成果としては、主に次の２点が挙げられる。

①言葉を吟味するという国語科における「挑戦心」を引き出すためには、吟味した言葉を表現したいと思える場を適切に設定することと、その行為にどのような価値があったのかを言葉のもつ機能や働きとともに生徒に自覚させることが肝要であること。

②生徒自身の経験に沿った学習課題を設定することによって、より深い読みを行う生徒が見られた。これは、自らが読む箇所を選択する学習活動を行ったからこその学びであった。「学習者が選択する機会を設ける」ことは、個別最適な学びを実現する上で重要であること。

課題としては、言語活動を設定する際に、具体的にどのように生活の場に生かすことができるのか、単元によっては曖昧になってしまったことが挙げられる。また、ICTを有効に活用しながら個別最適な学びをより充実させる指導の工夫も検討していく。そして、本年度の成果と課題を踏まえ、今後も効果的な言語活動を追究していきたい。

【社会科】

研究主題「公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習～生徒が自ら問い続ける単元計画の工夫～」

指 導 者　埼玉県教育局　歌代　圭介　先生
埼玉大学　谷　謙二　先生
清水　亮　先生
宮崎　文典　先生

司 会 者　さいたま市立城北中学校
高野　　隼　先生

本校社会科部では、研究主題を受け、研究を深める具体的な手立てとして次の二つについて取り組んだ。
①挑戦心を引き出す学習指導の工夫
②個別最適な学びの工夫

①について、生徒が自ら問い続ける単元計画の工夫に取り組んだ。学習する単元を通してどのような資質・能力を生徒に身に付けさせるか、どのような力の身に付いた生徒になってほしいかを明確にし、力を身に付けた生徒の姿から単元を捉え、構想し、問いの工夫を行い設定した。「逆向きの授業設計」を行うことで、育成したい資質・能力を単元の中にどのように位置付けていくか、教師側が見通しをもつとともに、生徒も見通しをもつことができた。

②については、生徒の自らの体験から得た興味・関心に応じて、教師が生徒一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供した。その生徒の学びの自己調整を見取り、支援するために、「社会科学びの地図」というポートフォリオ形式のワークシートを活用した。小単元ごとに、生徒が一枚作成したワークシートを評価し、ICT機器を用い蓄積させた。「社会科学びの地図」には、学習の内容、学習後の振り返り等を記述させた。小単元が終わるごとに評価を行い、生徒の記述に教師がICT機器を用いて支援する記述等を書き込み返却し、変容を見取った。生徒の変容を教師が把握し、学習の支援を適切に行う形成的な評価の役割をもたせるよう、工夫・改善を行ってきた。

これらを研究の柱として、第１学年地理的分野「世界と日本の地域構成」、第２学年歴史的分野「近世の日本」、第３学年公民的分野「人間の尊重と日本国憲法の基本的原則」を題材に研究授業に取り組んだ。

【数学科】

研究主題「統合的・発展的に考察する力を育成する数学学習指導 ～挑戦心を育成する発問と単元デザインに焦点を当てて～」
指 導 者　埼玉県教育局　松本　信寿 先生
埼玉大学　二宮　裕之 先生
司 会 者　上尾市立大石南中学校　冨田　昌芳 先生

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、研究主題及び副題を設定した。

研究を進めていく上での手立てとして、次の三つを柱とした。

一つ目は、本校数学科における「挑戦心」を、「算数・数学の学習過程のイメージ」を基に、具体的な生徒の姿として示した。

二つ目は、それぞれの学習過程の中で、生徒の挑戦心を引き出す発問の工夫を行った。片桐（2017）を参考に発問を整理した上で、単元計画の中でも数学的活動や発問のつながりが見えるように工夫した。

三つ目は、学びのつながりの中で生徒の挑戦心を引き出す単元デザインの工夫を行った。特に、「学びの足跡シート」等を中核として位置付け、生徒が学習に主体的に臨み問題解決後にさらに統合的・発展的に考察を深め、新たな問いを見いだせるようにした。

本研究を通し、統合的・発展的に考察する力と挑戦心の育成につながる成果と課題が得られた。

【理科】

研究主題「OPPA論に基づく授業のデザイン ～学習者による「学習目標」の形成と個人内評価に注目して～」
指 導 者　埼玉県教育局　大澤　正樹　先生
埼玉大学　中島　雅子　先生
司 会 者　川口市立岸川中学校　福原　　天　先生

本年度の研究は、授業において学習者がもつ「学習目標」と個人内評価に注目して、OPPA論に基づく授業と学習者の挑戦心の醸成との関係を明らかにすることを目的とし、以下の方法を用いて行った。

順	方法の概要
1	対象単元におけるOPPシートを作成
2	１で作成した「本質的な問い」を踏まえた単元指導計画を作成 その際、単元の当初では学習者の「学習目標」の形成を促す「自由試行」を導入した。
3	２で作成した計画に基づき、授業を実施 その際、OPPA論に基づき、以下の点を重視 ①教師は、OPPシートの記述から、学習者の「学習目標」を把握し、それらを基に授業やその後の授業計画を改善した。 ②OPPシートだけでなく、授業において、学習者が自ら設定した「学習目標」に基づく自己評価を行う場面を設定した。なお、毎授業では、OPPシートを活用し、学習者の記述に対してコメントを付して返却するとともに、その内容に基づき、適宜、授業改善を行った。
4	学習者のOPPシートの記述内容を分析し、上記により行われた授業が学習者の資質・能力の育成、特に挑戦心の醸成にもたらす効果を考察した。

これらの取組から、①「学習目標」の形成は、学習者が困難に向き合い、粘り強く試行錯誤するために必要な要素の一つであること、②学習者各々に形成される「学習目標」を教師が把握するためには、OPPシートの活用が有効であること、③学習者の「学習目標」の形成を促すためには、「本質的な問い」を活用した「自由試行」を導入した授業が効果的であること、が考えられた。

【音楽科】

研究主題「音楽とより豊かに関わっていくための資質・能力の育成と形成的評価の工夫」 ～思考・判断のよりどころとなる要素を捉えるための、効果的なフィードバックの研究～
指 導 者　埼玉県教育局　佐藤　太一　先生
埼玉大学　竹澤　栄祐　先生
司 会 者　狭山市立狭山台中学校　田沢友香莉　先生

指導の個別化と学習の個性化とを図りながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をしていくことで、音楽科における生徒の三つの資質・能力を育成していきたいと考える。そこで、本校の音楽科の研究主題を、個別最適な学びの充実に向けた、効果的なフィードバックによる形成的評価の工夫を柱として研究を行うこととした。

また、本校の研究主題でもある挑戦心を引き出す学習指導として、①他者と協働しながら音楽とより深く関わっていこうとすること、②音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わっていこうとすること、以上二点を本校音楽科が捉える「挑戦心」として定義し、本年度の研究主題を設定した。

成果として、とくに創作分野においては、課題に対してもっと音楽を追究したい生徒や、ほとんど何も思い浮かばない生徒など、様々な生徒が見られるため、一人一人の生徒に合ったフィードバックをICTを活用して行うことができることは、今後の様々な音楽科の学習指導に役立てることができると考えている。

課題として、音楽科の一人一台端末を使用した学習では、ICTありきの授業になりがちであり、生徒が思考・判断している過程がわかりにくい点も多々見られることである。ICTが中心となるのではなく、あくまで音楽を中心に添えた、音楽科の授業の本質を忘れることなく指導に当たることが大切である。また、音楽と豊かに関わっていくための資質・能力の育成には今後の検証が不可欠であり、引き続き様々な題材の学習を通して、生徒の資質・能力の育成に努めていく。

今後は、身に付けさせたい思考力、判断力、表現力等が、生徒の思考・判断にどのように関連し合い、題材におけるどの活動によって育成されたのか、またそれらが関連することで、どのような相乗効果があるかについても研究していきたい。

【美術科】

研究主題「生徒が自らの理想を追求し続ける授業の創造」

指 導 者　埼玉県教育局南部教育事務所　新居　良介　先生
　　埼玉大学　内田　裕子　先生

司 会 者　さいたま市立東浦和中学校　石神　憲二郎　先生

本年度は、「学習環境の充実」と「３年間を見通した題材計画の作成・実施」を中心に研究・実践を行った。

「学習環境の充実」については、美術室そのもののデザインを見直した。生徒が様々な材料や用具を試すことができるように、机、材料・用具の配置や動線を考え、生徒がより自由に活動を行えるような環境を目指した。描画材料なども豊富にそろえ、制限なく使える環境を設定した。

また、「３年間を見通した題材計画の作成・実施」については、学習指導要領にも示されているとおり、第１学年と第２・３学年をそれぞれのまとまりとして題材計画を作成・実施した。第１学年では、より多くの描画材料に出会い、自分らしい表現や自分で考えた表現を「やってみる」ことを大切にした題材を設定した。基本的な技能の習得は狙うが、教師が教え込むのではなく、生徒が活動の中で自分で見付けていくことができるように教師が働き掛けることを大切にした。

課題として、物品の管理や安全面の指導のさらなる徹底を図る必要がある。また、試行錯誤しながら熱心に取り組むものの、必ずしも生徒の達成感につながっていない場面も見られたので、個々への支援の方法を検討していきたい。

今後は、３年間の生徒の表現活動の様子を見取り、第１学年での学びが、第２・３年生での表現活動のどのような効果をもたらすかについて追いながら、題材計画をさらに練り直していきたい。

【保健体育科】

研究主題「豊かなスポーツライフを実現する資質･能力の育成へ向けた授業改善」～課題の合理的な解決に夢中になる生徒の育成に向けて～

指 導 者　埼玉県教育局　新井　知章　先生
　　埼玉大学　有川　秀之　先生
　　石川　泰成　先生
　　菊原　伸郎　先生

司 会 者　上尾市立太平中学校　大山　智史　先生

本校保健体育科では、研究主題を「豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成へ向けた授業改善」～課題の合理的な解決に夢中になる生徒の育成に向けて～とし、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成に向けて新学習指導要領の着実な実施を令和の日本型学校教育の実施という視点をもって積極的に進めていく必要があると考え、生徒が主体となって変化に対応していく力の育成が必要だと考える。そこで、生徒が夢中になる授業づくりの中にこそ、生徒の主体性の育成や資質・能力三つの柱の育成を効果的に進めることができる鍵があると考え、次の２点について、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度のそれぞれの観点からを行った。

成果として、生徒主体の授業づくりが生徒の夢中を引き出す授業づくりに影響を与えると考えられた。しかし、生徒自身にそれぞれの資質・能力が伴うことや、生徒の精神的安全を確保できる環境があることが生徒の主体的な活動を促すためには必要であると認識した。よって今後は、多面的に安心感を得られる学習環境や、習得した知識をより汎用的な知識として広げ、学び得たものに対し、より思考を深める手立てを準備し、授業改善に努めていきたい。

【技術・家庭科】

研究主題「未来を切り拓く資質・能力の育成～『一人ひとり』の資質・能力を育むための学習指導～」

指 導 者　埼玉県教育局　林　裕人　先生
　　笹嶋　京子　先生
　　埼玉大学　山本　利一　先生
　　名越　斉子　先生
　　荻窪　光慈　先生
　　島田　玲子　先生

司 会 者　所沢市立美原中学校　船橋　秀太　先生
　　吉川市立南中学校　田崎　祥子　先生

本年度は、より不鮮明な世の中になっていることを踏まえ、これまでの研究主題であった「社会で生きる」というキーワードを不透明な未来を開拓できるように、という意味を込めて「未来を切り拓く」に変更して、研究を進めることとした。「個別最適な学び」を柱として、「未来を切り拓く資質・能力」を「一人ひとり」の子供が身に付けられるようになることを目指し、「『一人ひとり』の資質・能力を育むための学

習指導」という副題を設定し、以下のアプローチを行った。

一つは、「生徒が授業にやる気をもって取り組むことができる環境を作ること」、もう一つは、「生徒自身が自らの課題を設定でき、解決しようとすることができる指導過程を構築すること」である。それらを実現するために、「UDL」のフレームワークを用いて題材を計画し、生徒に必要だと思われるオプションを提供し、検証を行った。

成果として、生徒一人一人が授業に目的意識をもち、見通しをもって取り組むことができるようになったことや自らの課題に対して、諦めずに取り組むことができるようになったことが挙げられる。しかし、個別最適な学びという点においては、全ての生徒に対して適した学びを提供することができておらず、課題が残る。次年度以降の研究でも、UDLのフレームワークを活用した学習指導を継続し、研究主題の実現を目指していく。(※UDL:Universal Design for Learning)

【英語科】

研究主題「コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫～相手意識を大切にしてコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成～」

指 導 者　埼玉県教育局　二口　法子　先生
　　埼玉大学　及川　賢　先生
司 会 者　戸田市立笹目中学校　北村　謙弥　先生

英語科では、前年度に引き続き学校研究主題から、「コミュニケーションの質の向上」に関する研究を基盤として、学習指導をより効果的にするための指導法の工夫・改善について、実践研究を進めた。

具体的には、生徒のコミュニケーションの質の向上を図る指導の手立てとして、「挑戦心を引き出す学習指導の工夫」と「個別最適な学びの工夫」という二つの視点から研究主題に迫った。前者は、目的・場面・状況に基づき「理解や表現することが難しい内容でも、何とかして他者とコミュニケーションを図ろうとする様子を授業で意図的・計画的に設定すること」を柱とした。後者は、「教師が設定した学習到達目標に対して、どのような準備をして達成を目指すかということも生徒に考えさせ、生徒の課題への取組状況を把握すること」を柱とした。

研究の成果として、目的・場面・状況等を明確に設定し、相手に応じて英語による表現方法を選択して、相手がより理解しやすいように言い換えたりする場面が多く見られるようになってきた。

今後の課題として、コミュニケーションの中で自身の意見や考えがどのように変容していったのか見とっていく手段、協働的な学びがどのように個の変容に関わっていくのかなど、振り返り及びワークシートの工夫をする必要がある。

【学校保健】

研究主題「一人ひとりの質の高い学びの実現に向けた健康教育～これからを創造し、多様な選択を尊重して支え合う力を養う～」

指 導 者　埼玉県教育局　澤村　文香　先生
　　埼玉大学　七木田文彦　先生
司 会 者　上尾市立大石中学校　丑木　紅音　先生

本校の研究主題を受け、学校保健では、上記の研究主題を設定した。急激に加速する社会の変化とともに子供たちを取り巻く状況もめまぐるしく変化している。

そうした中で、学校における健康教育では、子供たちが生涯にわたって健康で安全な生活を送るための資質・能力を育み、安心・安全な社会づくりに貢献できるようにすることが求められている。

本年度は、子供たちの「挑戦心」を引き出す健康教育の工夫として、子供たち一人一人の具体的な経験や生活と接点が生まれるような状況設定を行った。また、個別最適な学びの工夫として、様々な個に対応できるよう、例えばICTを活用し、探究学習のツールや健康相談のツールとした。

成果として、生徒一人一人が健康教育での学びを自他の生活に関連付けて生かす様子や一人一人に応じた対応を実現することが出来た。

今後は、生徒一人一人の質の高い学びの実現に向けてよりよいICTの活用方法を模索するなど、研究を進めたい。さらに、予測困難な時代において生徒が直面するであろう様々な出来事にも柔軟に対応できる力を身に付けられるよう指導の工夫をしていきたい。

２　令和５年度の研究概要

⑴　研究主題

「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」
～挑戦心を高め、思考を深める協動的な学びのデザイン～

⑵　研究内容

「令和の日本型学校教育」の実現を進める中で、以下の四つの手立てについて全教科共通の視点をもつとともに、各教科等で重点を設定し研究実践を行うこととした。

手立て１：生徒の実態の把握の工夫
手立て２：困難に向き合い、試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計
手立て３：生徒自らの「挑戦心」の意識化
手立て４：教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て

⑶　研究経過

①研究全体会

全教員で研究内容について議論を重ね、共通理解を図った。年間で５回実施し、研究の基礎理論、研究主題の設定、研究推進の実務について検討した。

②研究情報の収集

国立大学附属学校等の研究発表や「教育展望セミナー」などへの参加を通して、研究情報を集めた。

③夏季教員研修会

期　日　令和４年８月19日㈮
講　師　埼玉大学教育学部教授
　　庄司　康生　先生
演　題「挑戦する学びを保証する学習指導」

④ 校内授業研究会

第１回　美術　小西　悟士　年７月４日㈪
第２回　国語　碓氷　愛実　年12月２日㈮
第３回　体育　阿部　健作　年１月26日㈭

令和４年度

研究集録

Ⅱ　関東地区教育研究発表大会
埼玉大会の報告

1　第56回関東地区小学校道徳教育研究大会埼玉大会
第61回埼玉県道徳教育研究大会さいたま大会 ……90

第56回関東地区小学校道徳教育研究大会 埼玉大会
第61回埼玉県道徳教育研究大会さいたま大会

1　研究主題

「人としての生き方について考えを深め、
よりよく生きる児童を育てる道徳教育の創造」
～学習指導要領が求める道徳教育の実践を通して～

2　期　日

令和４年11月11日㈮

3　会　場

さいたま市立本太小学校

4　大会概要

＜心の木をさかせよう＞

人間は本来、人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。この願いの実現を目指して生きようとするところに道徳が成り立つ。道徳教育は、人間が本来もっているこのような願いや、よりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動であるといえる。

このような道徳教育本来の在り方を重視し、内なる自己との対話を通して、他者や人間社会集団、自然、そして、目に見えない崇高なものとの関係性においてよりよい生き方を求め、実践できる子供たちを育む視点を重視し、本大会研究主題を設定した。

【全体会】

○全国小学校道徳教育研究会会長　あいさつ
○関東地区小学校道徳教育研究会会長　あいさつ
○埼玉県教育委員会教育長　あいさつ
○さいたま市教育委員会教育長　あいさつ

【公開授業】

本太小学校における研究大会では、特別支援学級を含めた全学級で13本の公開授業を行った。

それぞれの授業で参観の視点を設定し、協議会ではその視点を中心に協議を深めた。

【本太小学校 研究の内容】

○目指す児童像
・多様な意見や考えを出し合い、自分と異なる立場や考えを認めようとする子
・自己を見つめ、他者と豊かにかかわれる子
○研究の視点（要旨）
①ねらいとする価値にせまるための指導方法の工夫
タブレットやゲストティーチャーの活用、心情の可視化、自我関与させやすくする導入の工夫
②児童が考え、議論するような発問の工夫
発問（中心・補助）・問い返しの精選、
学習指導要領の読み込み、授業構想の練り上げ
③児童の意欲を引き出し、指導に生かすための評価の工夫
アンケートの再提示、振り返りの活用、考えの変容の認識及び記録に残すこと、教師の見取り
○各パートの取組
①調査研究パート
・意識調査、道徳性にかかわる実態把握
・教材教具の工夫・活用、指導方法の研究
②地域連携・情報発信パート
・校内環境の整備、家庭地域への情報発信
・教員間での授業実践の共有

＜道徳授業の様子＞

【分科会】

第１・２分科会　道徳科を要とした道徳教育の工夫
提案：三鷹市立第二小学校、入間市立豊岡小学校
千葉市立幕張西小学校、さいたま市立柏崎小学校

第３・４・５分科会　道徳科における指導の工夫
提案：川崎市立はるひ野小学校、加須市立志多見小学校
城里町立桂中学校、寄居町立男衾小学校
益子町立益子西小学校、さいたま市立上木崎小学校

第６分科会　道徳科における評価の工夫
提案：前橋市立城東小学校、和光市立第五小学校

【記念講演】

演題『子供一人一人の可能性を引き出す道徳教育』
講師　文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター
教育課程調査官　浅見　哲也　先生

【引継ぎセレモニー】

○大会実行委員長、会場校校長あいさつ
○次期開催地区紹介、あいさつ（東京都）

5　成果と課題

本大会は、参集型での開催となった。関東各地から多数の参加をいただき、コロナ禍の不安も残る中、無事に開催することができた。公開授業では、道徳授業を要とした道徳教育の実践を積み重ねてきた成果もあり、思いを出し合い、自分と異なる立場を認めたり、友達の考えを聞き、仲間と話し合って納得解を見付け出そうとしたりする児童のいきいきとした姿が見られた。

また、各分科会では、各地域の道徳教育の推進の状況や工夫を凝らした実践について情報を共有することができ、大変有意義な時間となった。発表は研究の大きな節目となったが、これからも日々の実践を大切にするとともに、１時間１時間の授業を大切にし、研鑽を重ねながら、児童生徒にとってよりよい教育活動を目指していくことが重要である。学習指導要領の更なる具現化を目指し研究を深めていく。

令和４年度

研究集録

Ⅲ　地域教育研究団体の研究

1　さいたま市教育研究会 …… 92
2　川口市教育研究会 …… 94
3　草加市教育研究会 …… 96
4　新座市教育研究会 …… 98
5　伊奈町教育研究会 …… 100
6　飯能市教育研究会 …… 102
7　日高市教育研究会 …… 104
8　越生班教育研究会 …… 106
9　玉川班教育研究会 …… 108
10　川島教育研究会 …… 110
11　秩父教育研究会 …… 112
12　児玉郡本庄市教育研究会 …… 114
13　熊谷市教育研究会 …… 116
14　加須市教育研究会 …… 118
15　春日部市教育研究会 …… 120
16　八潮市教育研究会 …… 122
17　宮代町教育研究会 …… 124

1　さいたま市教育研究会

Ⅰ　さいたま市教育研究会の概要

会員と専門部

さいたま市教育研究会は、「さいたま市各学校の教育指導の充実、教職員の資質の向上に寄与し、さいたま市の教育振興に期する」ことを目的に、小学校105校、中学校58校、特別支援学校２校、中等教育学校１校、国立中学校１校、私立中学校１校の計168校5,544名で構成されている研究会である。

本会では、①「授業研究会、講演会、実技講習会の開催」　②「教育に関する視察、調査、研究」　③「その他必要と認めた事項」の三つの活動を目的とし、21の各専門部が研究テーマを設定し、計画に沿った活動を展開している。

「その他必要と認めたもの」の中には、コンクールや展覧会といったものだけでなく、児童生徒の学習を取り入れた活動を展開したり、行政機関との連携を図った活動を展開したりしている専門部もある。

Ⅱ　主な事業

1　運営委員研究協議会　　年４回
2　評議員研修会及び研究協議会　　（例年５月）
3　専門部長研究協議会　　年３回
4　全体研修会【教育講演会】　　（例年８月）
5　研修大会　　（例年11月）

全専門部が、各学校などを会場に授業研究会や講演会等を実施し、研修を行っている。

本年度は、以下を参考に各専門部で工夫して行った。

・コロナ禍が続いていたことを鑑み、研修大会では、オンサイト、オンラインの両面から参加を可能とした。
・各専門部が授業研究会を行い、成果を共有した。
・会員名簿、研究紀要等を発行した。

Ⅲ　重点・努力点

各専門部における充実した運営を通し、課題の解決を目指した実践的な研究・研修等を一層推進する。

Ⅳ　特色ある活動

1　さいたま市教育研究会研修大会

さいたま市では、11月に市内一斉に教職員が希望する教科等について研修する「研修大会」を開催している。

本年度は、21部会で実施した。参加者は約4,600名（参加率83％）であった。公開授業を行った専門部は次のとおりである。

（※ 参加者数は役員･会場校の教職員を除いている。）

・国語　・社会　・算数数学　・理科
・生活　・音楽　・図工美術　・技術家庭
・GS【英語】　・保健体育　・道徳
・特別活動　・総合的な学習の時間
・情報教育　・書写　・特別支援教育
・学校図書館　・教育心理　・学校保健
・学校事務　・学校食育

2　特色ある各研究部の活動紹介

⑴　社会科専門部

【臨地研修会】

学芸員の方から展示品や史跡の価値、多様な仮説を聞くことができた。

歴史について理解を深めるとともに、博物館と学校とのつながり、地域の歴史を社会科の学習に活かす手立てについて考える契機となった。

研修大会については、感染症予防対策を講じながら、体育館をお借りしての授業参観やオンラインでの授業参観など、工夫しながら研究授業・研究協議会を実施することができた。

今後、社会部研究集録や「教師力」パワーアップ講座などの機会を捉えて成果を広めていく。

⑵　GS専門部【英語専門部】

各学校で、一人一台端末を効果的に活用しながら、指導方法の工夫・改善を進めた。ICT機器の効果的な活用により、児童生徒の主体的な活動が多く見られるようになった。

今後とも、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して主体的に表現したり伝え合ったりすることができる児童生徒の育成を目指していく。

⑶　学校保健専門部

【研修大会】

＜演　題＞「保健室改造計画　～子どもと向き合う時間を増やすための整理収納～」

＜講　師＞

整理収納アドバイザー　加藤　真由美　氏

内容例【居心地のいい保健室に必要な三つの間】

①　すっきりとした癒しの空間

②　効率的な時間が過ごせること

③　信頼できる養護教諭＝人間がいること。

元養護教諭で整理収納アドバイザーの講師より、保健室や自分が管理する部屋の整理収納を行うことの意義や具体的な方法について教えていただいた。実践意欲のわく講演会であった。

整理収納を実践し、子どもと向き合う時間の確保につなげるための学びを得ることができた。

⑷　特別活動専門部

【研修大会】

○西原小学校会場

４学年　「４年３組のお祭りをしよう」

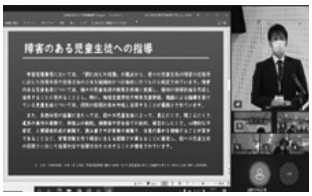
○ 三橋中学校会場

３学年　「『最高の卒業プロジェクト』をしよう」

自主的・実践的な活動を通して、互いのよさや可能性を発揮しながら、学級や学校生活の充実と向上を目指す児童生徒の育成を図った。

⑸　特別支援教育専門部

【研修大会】



研修大会は、本年度も部会ごとに開催し、他校の実践から学び、専門性を高めることができた。

作品展を区ごとに開催し、地域への特別支援教育の理解啓発につなげることができた。

Ⅴ　高校の授業公開

さいたま市は、市立高等学校４校（中等教育学校を含む）が設置されている。小・中・高等学校の「12年間の学びの連続性」を踏まえ、市立高等学校が授業を公開するとともに、高等学校の教職員が小・中学校へ授業参観を行っている。

Ⅵ　今後の活動について

令和５年度の活動については、各専門部長、会員からの意見を踏まえた活動方針に基づいて活動を推進する。

引き続き「日本一の教育都市」を目指すさいたま市の研究会として政令指定都市に止まらず全国へ活動展開することを目指す。

２　川口市教育研究会

Ⅰ　はじめに

川口市教育研究会は、令和４年度、再編53周年を迎えた。会員数も2,300名を超え、県内でも最大級の教育研究会となっている。本研究会の活動は、各研究部の授業研究会や講演会、実技研修会を主な事業とし、市内の教育研究活動の中心を担っている。研究活動のみならず、“開かれた市教研活動の展開と促進”をめざして、教育講演会や 授業研究会に地域住民・保護者の参加も進め、本研究会への理解と支援の裾野を広げている。「 子どもから出て 子どもに還る 」という、基本理念に結び付いたものとなるよう、会員一人一人が熱意をもって活動している。

本会は、教育基本法、その他学校教育に関する諸法規に基づき、会員の研究を保障し組織的教育活動を充実させて、川口市教育の民主的な発展に寄与することを目的としている。

上記の目的を達成するために、例年次の事業を行っている。

１　会員の個人、共同研究の援助
２　研究会、講演会、講習会
３　発表会、研究物の刊行
４　その他必要な事項

Ⅱ　本会の組織

１　研究活動組織

本会は、専門領域の研究を深め研究活動を進めるため次の研究を置いている。

⑴　国語研究部
⑵　社会科研究部
⑶　算数・数学研究部
⑷　理科研究部
⑸　音楽研究部
⑹　図工・美術研究部
⑺　書写研究部
⑻　保健体育研究部
⑼　技術・家庭研究部
⑽　外国語研究部
⑾　生活科・総合的な学習の時間研究部
⑿　道徳活動研究部
⒀　特別活動研究部
⒁　生徒指導研究部
⒂　進路指導・キャリア教育研究部
⒃　特別支援教育研究部
⒄　視聴覚教育研究部
⒅　学校図書館研究部
⒆　教育心理・教育相談研究部
⒇　健康教育研究部
(21)　学校事務研究部
(22)　食育研究部

研究部は次の事項を行っている。

⑴　専門領域の研究
⑵　部会事業の計画実施
⑶　評議員会及び部役員会付託事項の処理
⑷　研究部記録・研究物の保管
⑸　その他必要な事項

２　役員

⑴　①会長１名　②副会長２名　③事務局長１名
　　④会計１名　⑤庶務２名　　⑥会計監査２名
⑵　評議員　各校１名
⑶　①研究部長１名　②副部長　若干名

Ⅲ　本研究会の主な活動

１　本部の活動

⑴　定期総会
　４月　第53回定期総会　　（紙面による審議）
⑵　評議員会
　６月～７月　第１回評議員会（紙面による審議）
　２月　　第２回評議員会（紙面による審議）
⑶　正副部長会議
　７月　第１回部長・副部長会議
　　（紙面による審議）
⑷　研究部総会
　５月　参加対象　各研究部員
⑸　本部役員会議
　年３回（５月、11月、１月）

２　各研究部の活動

⑴　理科研究部

９月　川口市教育研究所

・令和４年度川口市児童生徒科学展審査

１月　川口市教育研究所

・令和４年度川口市小中学校児童生徒理科研究発表会の運営・審査等

⑵　音楽研究部

１月　川口市立戸塚西中学校

・音楽研究部役員会

・令和５年度音楽鑑賞教室について

⑶　図工・美術研究部

10月　オンライン開催

・第１回主任会兼研修会

・各展覧会出品について

・令和５年度関東甲信越静地区造形教育大会運営準備について

⑷　書写研究部

６月　川口市立舟戸小学校

・県硬筆展出品作品審査について

１月　川口市立芝富士小学校

・書きぞめ展審査

⑸　外国語研究部

８月　川口市立神根中学校

・第１回主任会

・第74回川口市中学生英語弁論暗唱大会実施要項の検討について

・第74回川口市中学生英語弁論暗唱大会について

⑹　道徳教育研究部

12月　オンライン開催

・講演会（東京学芸大学講師）

⑺　学校図書館研究部

９月　川口市立元郷南小学校

・読書感想文コンクール市審査会について

⑻　学校事務研究部会

11月　オンライン開催

・千葉工業大学准教授を講師に招いての研修会

・「川口市就学援助の概要」について

Ⅳ　今後の課題

１　授業研究会の一層の充実

本研究会の中心活動である「授業研究会」は、一層の充実と発展が望まれますが、昨年度と同様に本年度も、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、必要な活動のみの開催となりました。

しかし、「授業研究会」を本研究会の大きな柱の一つと捉え、実施時期や形態、広報活動の充実、参加しやすい体制づくりをゼロベースから見直すよい機会だと考えました。

さらに、会員一人一人の実践の成果を集結し、創造的かつ建設的な視点で、教職員の資質向上と専門職としての課題意識の高揚を図っていく。そして、新学習指導要領や埼玉県の教育振興基本計画等の実践的研究に取り組んでいく。

２　豊かな経験と新しい力を合わせて

毎年多くの初任者が採用される中、これまで授業研究会へは多くの若手・中堅教員が参加するようになってきた。今後も若い力を結集し、教育実践の積極的な交流・伝達を推進していく。そして、「知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成」の実現に向け、知恵を出し合い、良いものを継承しながら新しいものを取り入れていく。そして、本会員が主体的に関わり合うことで、本研究会を活性化し保護者や地域、市民の期待に応えていく。

３　適正な会計処理

本研究会は、市民に開かれ市民に信用される活動を目指している。本研究会運営の隅々まで行き渡る、責任ある行動に努めていく。とりわけ、会の会計執行においては、より綿密な運営を求めていく。

Ⅴ　おわりに

本研究会は、各研究部の活動を中心に、チームワークを大切に、川口の教育を支えてきた。しかし、教育講演会をはじめ、各研究部の多用な研究活動、長期休業中の実技研修会等、本年度も昨年度と同様に、コロウイルス感染拡大防止のため活動の中止や大幅削減が余儀なくされた。

このような中でも、本研究会の伝統である「自主・民主・公開」の原理を堅持し、日々進歩してきた。教育にめぐる今日的な課題は、なお厳しいものがあるが、本研究会に集い、熱い情熱をもって、子供たちのために全力を尽くしていきたい。

３　草加市教育研究会

Ⅰ　はじめに

本会は、草加市小学校21校、中学校11校の計32校の教職員1,013名を会員として組織されている研究団体である。

本会は、教職員相互の職務の向上と親睦を図り、草加市教育の振興を期することを目的とする。

Ⅱ　本会の組織及び運営

1　組織

⑴　運営委員（11名）
　会長１名、副会長２名、学校長代表２名、
　学校代表２名、研究部代表２名、幹事２名

⑵　監事（２名）
　小・中学校各１名

⑶　評議員（94名）
　小・中学校長32名、学校代表32名、
　各研究部部長30名

2　総会員数　1,013名

3　会費　1,000円（年額）
　（ただし、令和３・４年度はコロナ禍による
　活動自粛があり、500円としている。）

4　市補助金

5　研究部

本会は、次の研究部会（30部会）を置き、部員の構成は、各小・中学校の主任とし、各研究部の事業を執行するための部長及び副部長を置く。

国語、書写、社会、算数・数学、理科、生活科、総合的な学習の時間、音楽、図工・美術、保健体育、技術・家庭、家庭科、英語、道徳、外国語活動、特別活動、情報・視聴覚、学校図書館教育、養護教諭、教育心理・教育相談、給食、教育課程、進路指導、安全教育、特別支援教育、人権教育、学校事務、保健主事、学校栄養士、生徒指導

Ⅲ　本年度の活動方針

草加市教育委員会が定める基本理念「生きる力を共に教え育てる草加の教育」の基、学校・家庭・地域が、互いに信頼し、絆を深め、連携して支え合う、「笑顔かがやく草加の教育」を目指している。

また、平成28年度に策定された「第二次草加市子ども教育連携推進基本方針・行動計画」に基づき、０歳から15歳までの「学び」「心」を結ぶ幼保小中を一貫した教育を推進している。

さらに、「草加っ子の基礎・基本」を基盤として、知（自ら学び）、徳（心豊かに）、体（たくましく）のバランスのとれた、目指す「草加っ子」（15歳の姿）の実現に向け、一人一人を大切にした信頼される学校教育に取り組んでいる。

本研究部も、常に課題意識をもち、研究部相互の連携と会員相互の協力のもと、積極的に研究と実践を行い深めながら、指導力の向上と生まれてから義務教育終了まで、草加の子供たちを支え、育む教育活動を続けている。

Ⅳ　本年度の本会の重点目標

1　重点目標

『幼保小中を一貫した教育を通して、指導力の向上を図る』

生徒指導：「いじめ撲滅・不登校・暴力行為への積極的な対応」

学習指導：「学力の向上を図る指導の在り方」

Ⅴ　本年度の重点教科・領域

生徒指導研究部、国語研究部、道徳研究部

Ⅵ　具体的な取組

１　合同主任会（４月）

・教科主任会の部、領域主任会の部に分け、前年度の成果と課題を基に、本年度の重点目標と取組について検討し、意識を高める。

２　新旧評議員会（４月）

・総会に向け、前年度の事業報告と会計報告及び本年度の事業計画案と予算案の審議

・前年度の反省と本年度への引き継ぎ

３　総会・研究発表会（５月）

⑴　総会の部
　・前年度の事業報告及び会計報告
　・新役員の承認
　・本年度の事業計画案及び予算案の審議

⑵　表彰の部
　・永年勤続者の表彰

⑶　研究発表の部
　・前年度の重点教科・領域（３部会）の１年間の研究の取組を発表する。

〔令和４年度　重点教科・領域の研究テーマ〕

○　生徒指導研究部
　「社会の変化に健全に適応できる児童生徒の育成を目指す」

○　国語研究部
「自ら学ぶ意欲を高め、感性を育む国語科教育の創造」
○　道徳研究部
「ICTを活用した、豊かな心を育む授業の工夫」

４　各部会

・研究部ごとに、年間を通して、研究協議会、授業研究会、実技研修会等を開催する。

５　運営委員会・評議員会

・本会の活動が適切に活動できるよう開催する。

６　教育講演会

・本会の目的に沿った、講師・講演内容を運営委員会で選定し、隔年で実施する。本年度の教育講演会は、コロナの影響を考慮し中止とした。

７　「実践記録」づくり

・重点教科等の活動報告（成果と課題）をまとめ、冊子を作り、全会員に配付した。

Ⅶ　本年度の各研究部の研究テーマ

○書写研究部
「確かな書写を身に付け、生活に生かす書写指導」
○社会研究部
「主体的に生きる資質を育てる社会科教育」
○算数・数学研究部
「主体的・対話的で深く学ぶ算数・数学の学習指導」
○理科研究部
「確かな学力の定着を図る指導の在り方」
○生活科研究部
「自ら考え、人とかかわり、自然にはたらきかける力を身に付ける指導の在り方」
○総合的な学習の時間研究部
「自ら課題を設定し、意欲的に追求する総合学習の在り方」
○音楽科研究部
「進んで音楽と豊かに関わる資質・能力の育成」
○図工・美術研究部
「きらめく感性　つくりだす喜び」
○保健体育研究部
「運動の特性や魅力を味わわせ、資質・能力をバランスよく育む授業の工夫」
○技術・家庭研究部
「進んで思いを実現し、生きる力を育む指導の工夫」
○家庭科研究部
「自ら学び、生活に生かす指導法の研究」
○英語科研究部
「習得した知識や経験を生かしコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じ表現し合う指導の工夫」
○外国語活動研究部
「子供たちが外国語に親しむことができるような授業の研究」
○特別活動研究部
「児童生徒からの思い、願いを生かした特別活動」
○情報・視聴覚研究部
「一人一台端末を活用した授業の実践」
○学校図書館教育研究部
「行こう　読もう　学ぶ図書館」
○養護教諭研究部
「子供たちが生き生きと学べる健康教育を目指して」
○教育心理・教育相談研究部
「児童生徒への具体的な教育支援・保護者への対応について」
○給食研究部
「生きる力を育む学校給食」
○教育課程研究部
「幼保小中を一貫した教育をさらに深め、学力向上とよりよい教育課程の編成を目指す」
○進路指導研究部
「啓発的な経験を生かした進路指導・キャリア教育」
○安全教育研究部
「児童生徒の安全意識を高める」
○特別支援教育研究部
「将来の自立と社会参加を目指した、小学校と中学校の円滑な連携の在り方」
○人権教育研究部
「一人一人の人権が大切にされ、明るく活気あふれる学校を」
○学校事務研究部
「グループ研究による学校事務の資質の向上」
○保健主事研究部
「生きる力を育む保健教育」
○学校栄養士研究部
「食育の環（わ）を広げよう」

Ⅷ　今後の課題

草加市では、幼保小中を一貫した教育を推進している。その中で、自ら学ぶ「草加っ子」の育成を最重要課題の一つとして捉え、「草加っ子の学びを支える５か条」等を策定し、誰一人取り残すことのない教育の実現を図っている。

このような課題をさらに改善・推進するために、各研究部での研究協議会、授業研究会、実技研修会等を充実し、研究推進及び指導力向上の取組を行っていく。

４　新座市教育研究会

Ⅰ　新座市教育研究会の概要

本会は、新座市小学校17校、中学校６校の教職員686名を会員として組織された教育研究団体である。

本会は、会員の資質向上と豊かでたくましい児童生徒の育成を目指し、「学力向上」、「規律ある態度の育成」、「体力向上」を重点に研究活動を進めている。

Ⅱ　本会の組織

本会は、次の教科領域等主任研修会から構成されている。

国語、書写、社会、算数・数学、理科、生活、音楽、図工・美術、家庭・技術家庭、体育・保健体育、特別の教科　道徳、外国語活動・外国語、特別活動、総合的な学習の時間　生徒指導　進路指導、学校人権教育、　特別支援学級等担当、学校図書館教育、栄養教諭・学校栄養職員、養護教諭、学校事務職員

主任研修会は、担当校長、担当教頭、研究協力員が市教委の指導・助言の下に、運営している。

Ⅲ　本会の主な事業

1　主任研修会
2　授業研究会
3　ブロック研修会（中学校単位等）
4　実技研修会
5　臨地研修会
6　教職員全体研修会

Ⅳ　各教科領域主任研修会の活動

1　国語
　主任研修会（６月）　　授業研究会（11月）
2　書写
　主任研修会（６月）　　実技研修会（10月）
　硬筆・書きぞめ審査会　　（６月・１月）
3　社会
　主任研修会（７月）　　授業研究会（１月）
4　算数・数学
　主任研修会（６月）　　授業研究会（11月）
5　理科
　主任研修会（７月）　　授業研究会（11月）
6　生活
　主任研修会（７月）　　授業研究会（12月）
7　音楽
　主任研修会（４月）　　授業研究会（２月）
8　図工・美術
　主任研修会（６月）　　授業研究会（１月）
9　体育、保健体育
　主任研修会　　（体育：４・７・２月）
　　（保健体育：５・２月）
　授業研究会　　（体育：11月　保体：２月）
10　家庭、技術家庭
　主任研修会（７月）　　授業研究会（２月）
11　外国語活動・外国語
　主任研修会（５月）　　授業研究会（10月）
12　特別の教科　道徳
　主任研修会（７月）　　授業研究会（１月）
13　特別活動
　主任研修会（６月）　　授業研究会（１月）
14　総合的な学習の時間
　主任研修会（７月）　　授業研究会（12月）
15　生徒指導
　主任研修会　　（６月・２月）
16　進路指導
　主任研修会　　（７月）（10月）
17　学校人権教育
　主任研修会（５月）　　授業研究会（11月）
18　特別支援学級等担任
　主任研修会（６月）　　授業研究会（11月）
19　学校図書館教育
　主任研修会（７月）　　授業研究会（12月）
　読書感想文選定会議　　（９月）
20　栄養教諭・学校栄養職員
　打合わせ会　　（４・７・９・12・３月）
21　養護教諭
　全体研修会　（５・７・10・12・２・３月）
22　学校事務職員
　全体研修会　　（４月・11月・２月）

Ⅴ　特色ある活動の紹介

１　教職員全体研修会

新座市では、８月下旬に市内教員が一同に介する「教職員全体研修会」を実施している。

本年度は、軽井沢風越学園校長　岩瀬　直樹　氏に講演を依頼し「子どもも大人も学び続ける学校を目指して」というテーマで講演いただく予定であったが、感染状況を鑑みて中止となった。

２　算数・数学科

算数・数学科では、研修テーマを「思考力・判断力・表現力を身に付ける授業の創造～ICTの活用と数学的活動の充実を通して～」とし、第３学年「考える力をのばそう『間の数に注目して』」の研究授業を新堀小学校にて実施した。ICTを活用して図に表して考えたり、ロイロノートを活用して個々の考えを広めたり深めたりする活動につなげ、児童の思考力・判断力・表現力の育成を図った。

研修会では、アメリカのイリノイ州シカゴにあるデポール大学教授　高橋　昭彦　氏をお招きし、ご指導いただいた。考えの違う児童同士で説明させ、「相手を納得させられる力」を身に付けさせることや、多様な児童の多様な解き方で問題解決したものを、話合いでまとめさせていくことが、教師の腕の見せどころであることをご教示いただいた。「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」という考え方の大切さについても学ぶことができた。国際的な視点からの大変貴重なお話を伺うことができるよい機会となった。

３　体育科

体育科では、研究主題を「運動の特性や魅力に応じた楽しさや喜びを味わうとともに、資質能力をバランスよく身に付ける授業の工夫」とし、新座小学校、東北小学校を会場に研究授業を行った。新座小学校で実施した研究授業（第２学年・第６学年）は、朝霞四市の小体連の研究発表会を兼ねて実施し、参加人数も多くなることから、感染症対策を十分に行いながらの実施となった。

４　書写

書写主任研修会では、書きぞめ展に向けて毛筆指導の向上を目指し、講師に元池田小学校教頭の小山田　彰　氏（小学校担当）と埼玉県書写書道連盟常任理事　佐久間　大輔　氏（中学校担当）をお招きし、実技研修会を実施した。

若手教員の増加を受け、書道入門期である３年生への指導として、文鎮や墨入れ、筆のレイアウト等、基本的な指導についても、今回具体的にご指導いただいた。止め、はらい等、指導者の筆の運びを見た後、各自が実際に書き、更に指導をいただき、技術の習得につながる会となった。

５　おわりに

コロナ禍の中、本年度もいくつかの主任研修会がオンライン開催となったが、授業研究会や実技研修会等「教職員の学びを止めない」という視点の基、感染対策を講じながら実施することができた。次年度も感染対策を講じながら充実した活動になるよう取り組んでいきたい。

５　伊奈町教育研究会

Ⅰ　はじめに

伊奈町教育研究会は、伊奈町立小学校４校、中学校３校、埼玉県立伊奈学園中学校、私立国際学院中学校に在籍する教職員を会員として組織されている教育研究会である。

本会では、会員の主体的な研究によって、教育全般の振興を図るとともに、会員相互の理解を深め、資質の向上をめざし、伊奈町生涯学習社会の構築、教育・文化の向上発展に貢献することを目的としている。

上記の目的を達成するために、以下の事業を行う。

・教育課程及び指導法の研修
・各教科等の研修・研究・調査
・研究発表会、講演会、展覧会、音楽会、講習会等
・その他目的の達成に必要とする事業

Ⅱ　基本理念

「生涯にわたり学び続ける
笑顔あふれる学校づくり」

Ⅲ　本会の組織

１　役員

・会長１名　・副会長２名　・参与１名
・監事２名　・評議員18名　・幹事２名

２　組織

・本会に教科等研究部をおき、会員はいずれかの研究部に所属するものとする。
・各研究部は、小・中学校各教科等の主任及び部員並びに希望する会員をもって構成する。
・小・中学校の校長及び教頭は、研究部の顧問として指導・助言にあたる。

３　研究部

⑴ 国語　⑵ 書写　⑶ 社会　⑷ 算数数学
⑸ 理科　⑹ 生活・総合的な学習の時間
⑺ 音楽　⑻ 図工美術　⑼ 技術家庭
⑽ 保健体育　⑾ 英語　⑿ 道徳　⒀ 特別活動
⒁ 学校保健（保健主事部会、養護教諭部会）
⒂ 学校事務　⒃ 視聴覚　⒄ 特別支援教育
⒅ 図書館　⒆ 給食　⒇ 教育相談

Ⅳ　主な事業

⑴　国語研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑵　書写研究部
・硬筆実技講習会・書写主任会（地区展打ち合わせ）
・伊奈地区硬筆展準備（搬入・審査・展示）
・伊奈地区硬筆展（受付）
・主任会（地区展搬出、反省会、県展搬入準備）
・県展（搬入、審査、搬出）
・書きぞめ実技講習会、主任会（地区展打ち合わせ）
・伊奈地区書きぞめ展準備（搬入・審査・展示）
・伊奈地区書きぞめ展（受付）
・主任会（地区展搬出、反省会、県展搬入準備）
・県展（搬入、審査、搬出）

⑶　社会授業研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑷　算数数学研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑸　理科研究部
・科学教育振興展覧会
・授業研究会、反省会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑹　生活・総合的な学習の時間研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑺　音楽研究部
・伊奈町小・中学校音楽会
・南部・北部地区音楽会（小針小が参加）
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑻　図工美術研究部
・身体障害者福祉のための児童生徒美術展
（出品、審査）
・郷土を描く児童生徒美術展（出品、審査）
・埼玉県小中学校児童生徒美術展（出品、審査）
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑼　技術家庭研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑽　保健体育研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑾　英語研究部
・桶川・伊奈中学校英語弁論暗唱大会代表者会議
・桶川・伊奈中学校英語弁論暗唱大会
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⑿　道徳研究部
・授業研究会、研究協議
（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⒀　特別活動研究部
・授業研究会、研究協議
（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⒁　学校保健（養護教諭研究部、保健主事研究部）
養護教諭研究部
・研究の推進（健康診断の反省）
（就学時検診の反省）
・次年度の計画
保健主事研究部
・研究のまとめ

⒂　学校事務研究部
・事例検証
・実務研修
・１年間の反省

⒃　視聴覚研究部
・実践研究
・情報交換

⒄　特別支援教育研究部
・伊奈町特別支援学級交流会（７校交流会）の実施
（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）
・伊奈町文化祭合同作品展
（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）
・伊奈町小学校４校合同校外学習
（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⒅　図書館研究部
・読書感想文審査（審査、表彰）

⒆　給食研究部
・授業研究会（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

⒇　教育相談研究部
・県教育心理・教育相談研究会参加（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）
・第１回理事研究協議会参加（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）
・理事研究協議会参加（新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動中止）

Ⅴ　おわりに

・新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和２年度から授業研究会を中心とする活動を自粛せざるを得ない状況となっている。
・感染防止の観点と、教職員の自主的活動の継続の観点から、適宜、連絡（オンライン、資料提供、その他）を取りながら活動を継続してきた。
新型コロナウイルス感染症の今後の動向を踏まえて、活動を復活させていきたい。
・また、学校現場における業務改善・働き方改革の観点から、伊奈町教育研究会の在り方について、議論することで、真に必要な活動やあるべき姿について改善してくことができると考えている。
今後は、負担軽減を図り、長期に渡り持続可能な組織へと変化していきたい。

６　飯能市教育研究会

Ⅰ　はじめに

本研究会は、飯能市立小・中学校19校の教職員で組織し、26の研究部をもって活動している。

Ⅱ　活動概要

各部会は、研修会や授業研究会、講演会を通して、指導力の向上を目指している。

１　本部の活動

⑴　理事会　（４月・６月・９月・11月・２月）
⑵　総　会　（５月）
⑶　評議員会　（４月・３月）
⑷　部長会　（４月・１月）
⑸　教科・教科外合同主任研修会　（４月）
⑹　合同研究発表会　（10月）

①加治小学校
研究主題「自己のよさを知り、お互いを認め合える児童の育成」

②双柳小学校
研究主題「教室のすべての児童の質の高い学びを実現する授業の創造」

③飯能第一中学校
研究主題「ICTを活用した協働学習の実践による主体的で対話的な深い学びの実現」

④飯能西中学校
研究主題「学びに向かい、未来を切り拓く生徒の育成」

２　各研究の活動（部会名・テーマ・活動）

⑴　国語
「言語活動の充実と児童生徒一人一人を生かす指導方法の工夫」
・主任会　（４月・２月）
・指導者講習会開催予定

⑵　書写
「生活に生かす書写教育」
・主任会　（４月・５月・11月・12月）
・市内硬筆展覧会　市民活動センター　（６月）
　作品搬入・審査・展覧会・片付け・搬出
・県硬筆展覧会　（８月）
・市内書きぞめ審査会　（１月）
　作品搬入・審査・片付け・搬出

⑶　社会
「社会が分かり社会に関わる子どもを育てる社会科学習」
・主任会　（４月・２月）
・社会科研究展覧会　（９月～10月）
・授業研究会

⑷　算数・数学
「小中の連携をはかるための指導法の研究」
・主任会　（４月）
・授業研究会　（12月）
　授業者　宮崎　陸　教諭　（加治中）
　指導者　学校教育課
　　指導主事　大澤　章孝　先生

⑸　理科
「児童生徒の驚きや発想を生かした理科教育の研究」
・主任会　（４月・７月）
・科学教育振興展覧会　（９月）
　作品搬入・審査・搬出

⑹　生活
「生活科・総合的な学習の時間を通して、意欲的に取り組む児童生徒の育成を図る」
・主任会　（４月・２月）

⑺　音楽
「感動する心を育てる授業展開」
・主任会　（４月・５月・６月・９月）
・仲よし音楽会　（11月）
　飯能市民会館　大ホール

⑻　図工・美術
「子どもが興味をもって取り組める題材や導入の方法」
・主任会　（４月）
・身障者展　（７月）
・郷土展　（９月）
・児童生徒美術展　（１月）

⑼　家庭
「２年間を見通した調和のとれた指導計画を活用し、習得した基礎的・基本的な知識及び技能を生活で活用する力の育成を図る」
・発明創意くふう展　（９月）

⑽　技術家庭

「学習指導要領に示された教科及び分野の目標を踏まえた指導と評価の一体化の実現」

・主任会　（４月・８月）

・発明創意くふう展審査

⑾　保健体育

「運動の楽しさや喜びを味わい、自ら運動に親しむ児童生徒の育成」

・主任会　（４月・６月）

・研修会　駿河台大学ホッケー場　（11月）

指導者　駿河台大学　講師　邑木　隆二　先生

⑿　英語

「ICTを活用した授業展開と評価～４技能の特性を活かして～」

・主任会　（４月・６月・９月）

・飯能・日高地区弁論大会　（９月）

日高市生涯学習センター

指導者　飯能市教育委員会

指導主事　加藤 貴美恵　先生

⒀　道徳

「心に響く道徳授業の工夫～児童生徒のよさを生かす展開の工夫～」

・主任会　（４月）

・授業研究会　（11月）

授業者　廣原　美奈子　教諭（加治東小）

指導者　富士見小学校

校長　小野　加津美　先生

授業者　坂本　佑介　教諭（南高麗中）

指導者　原市場中学校　校長　渡部　毅　先生

⒁　特別活動

「生徒会活動の充実を図る指導の工夫」

・主任会　（４月・２月）

・小中連絡会　【いじめ０会議】　（８月）

⒂　教育相談

「コロナ禍の学校における課題をかかえる児童生徒の支援」

・主任会　（４月・２月）

⒃　学校保健

「学校保健活動の充実」

・主任会　（４月）

・主任会　（８月）

授業参観・研修　南高麗中学校　（12月）

講師　安川整骨院　柔道整復師

⒄　学校図書館

「広がる学校図書館の役割」

・主任会　（４月）

・読書感想文審査会兼主任会　（９月）

作品審査　飯能第一小学校

⒅　視聴覚・情報教育

「ICTを活用した学習活動の充実」

・主任会　（９月）

・授業研究会・研修　奥武蔵中学校　（11月）

・県ICT活用プロジェクト授業モデル研修プログラムへの参加及び授業研究会

⒆　生徒指導

「各学校の現状と課題」

・主任会　（４月）

⒇　学校食育

「豊かな心を育てる食育指導」

・主任会　（４月・８月）

㉑　安全教育

「安全な生活を営む態度や習慣の育成」

・主任会　（４月）

㉒　学校事務

「事務処理に係る諸課題について」

・主任会　（４月）

㉓　人権教育

「差別の現実に学び、人権教育の充実を図る」

・主任会　（４月）

・授業研究会　（10月）

授業者　水澤　直樹　教諭（富士見小）

指導者　原市場中学校

校長　渡部　毅　先生

㉔　進路指導・キャリア教育

「９年間を見通した生きる力をつける進路指導」

・主任会　（４月）

㉕　学校栄養

「学校給食の充実と食育の推進を図る」

・主任会　（４月）

・指導者講習会　飯能第一中学校　（８月）

㉖　特別支援教育（通級指導教室を含）

「一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な教育の推進」

・主任会　（４月・９月・11月・２月）

・研修会　ヴェルペン栄町スマイルプラス（８月）

Ⅲ　終わりに

新型コロナウイルス感染症予防策を実施し、集まることのできなかった研究発表会・主任会が感染症予防策を講じ対面形式にて再開することができた。

今後も研修や授業研究会を通し、教職員の指導力向上を推進していく予定である。

7　日高市教育研究会

Ⅰ　日高市教育研究会の概要

日高市教育研究会は、「日高市の公立小・中学校教職員が主体となって、職能の向上と教育の振興・発展を図ること」を目的とした、小学校６校、中学校６校、計12校、会員数は274名の研究会である。

研究会の中には、27の研究部があり、各研究部では、子供たちがよりよい力を身に付けるために必要な指導を行うためのテーマを設け、研鑽に励んでいる。そして、年度末に振り返りを行い、成果と課題を確認することで、次年度によりよい研究が行えるよう、引継ぎを行っている。今日まで、こうして先人の研究を脈々と受け継いできた。

Ⅱ　主な活動

・評議員研修会及び総会　（４月）
・理事研修会　年５回
（４月、６月、12月、２月、３月）
・専門部長会議　（４月）
・全体研修会・教育講演会　（８月）
・教育研究会研修大会（11月）※本年度は、中止

Ⅲ　特色ある活動

１　研究部

⑴ 国語	⑵ 書写	⑶ 社会
⑷ 算数・数学科	⑸ 理科	⑹ 生活科・総合
⑺ 音楽	⑻ 図工・美術	⑼ 家庭
⑽ 技術・家庭	⑾ 体育	⑿ 英語
⒀ 道徳	⒁ 特別活動	⒂ 特別支援教育
⒃ 教育相談	⒄ 学校保健	⒅ 学校図書館
⒆ 視聴覚・情報教育	⒇ 生徒指導	㉑ 学校食育
㉒ 安全教育	㉓ 事務	㉔ 人権教育
㉕ 進路指導	㉖ 学校運営	㉗ 学校経営

それぞれの研究部が「未来を創る　こどもたち」に生き抜くことのできる力を付けられるよう、日々研修に励んでいる。それぞれの部では、授業研究会を開いたり、研修会を行ったりして、よい取組を検討し、日々研鑽に励んでいる。

また、年に一度、11月に日高市教育研究会研修大会を開催し、各校の先進的な取組や日頃の研修の成果を共有している。これからも子供たちのよりよい成長のために、努力を続けていきたい。

２　小中一貫教育

本市の特色として、それぞれの校区に小学校、中学校、そして公民館があることが挙げられる。

本市では、その特色を生かして各地区に学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育に取り組んでいる。令和５年度には、武蔵台小・中学校が校舎を統合し、同じ校舎で学ぶこととなる。令和６年度には、高根小・中学校が校舎を統合する予定となっており、これを機に小中一貫教育のよさやよりよい在り方を模索していきたい。

Ⅳ　研究部の主な取組（道徳部）

１　研究概要

⑴　テーマ

人としての生き方についての考えを深め、よりよく生きる児童生徒を育てる道徳教育

⑵　ねらい

「考え議論する授業」への改善を図るたの授業の在り方の検討

2　授業研究会について

⑴　期　　日　令和５年１月18日㈬

⑵　会　　場　日高市立高萩小学校

⑶　主　　題　子供たちと共に学び、よりよい生き方を探る道徳授業の実践

⑷　趣　　旨

教師自身の研究テーマに基づいて公開授業を行い、研究協議を通して道徳授業の充実を図る。

⑸　公開授業

提 案 者　日高市立高萩小学校

教諭　小林　伸介（教務主任）

公開授業　４年２組

指 導 者　川口市立並木小学校

教頭　原　　卓範　氏

参 観 者　19名

3　研究仮説

明確な指導観を設定し、発問、問い返し、話合い、教師の説話などの指導に、教師と子供たちが共に学ぶための工夫を行う。そうすることで教師と子供たちの間に信頼関係ができ、感じ方や考え方が引き出せ、よりよい生き方を探る道徳授業ができるであろう。

4　内容

⑴　主題名　きまりを守るために大切な心

【C　規則の尊重】

⑵　ねらい　約束やきまりを守るときに大切な心について、多面的・多角的に考える学習を通して、約束やきまりを進んで守ろうとする心情を育てる。

⑶　教材名　「日曜日のバーベキュー」

出　典　「新しいどうとく　４年生」

東京書籍

5　考察

・児童観を重視して、指導観を明確にした。

・子供たちの道徳的価値観を把握するため、アンケートを行う。その結果を、ICT機器を活用して提示し、共有した。

・子供たちが主体であるが、教師が主導して児童の考えをつなぎ、紡いで考えを深めさせた。

・多様な考えに触れさせるために、話合いを行い、ICT機器を使って考えを書かせもした。

・ICT機器を用いて振り返りを書かせることで、児童がお互いの考えを共有し、友達の考えを知ることで自身の考えを深めることができた。

・多面的、多角的に考えさせた。

・教師の説話では、本時において子供たちと共に学んだことを伝えた後、教師の体験談を話した。

6　成果と課題

・指導観を明確にすることで、芯の通った授業、子供たちと共に学ぶ授業を行うことができた。

・アンケートの活用の仕方が効果的だった。苦手な子の気持ちに寄り添ったのがよかった。

・ICTを効果的に使い、多様な考えに触れさせ、考えを深めることができた。

・教師の説話を子供たちが真剣に聞いていた。教師と子供たちの信頼関係のよさが伝わった。

・ICT機器を使う際の時間管理に課題があった。

・ねらいとする道徳的価値を支える道徳的価値を出させたが、深めることができなかった。

Ⅴ　おわりに

日高市教育研究会では、コロナ過においても学びを止めない、学び続ける教育活動や研究を推進してきた。ここにきてその取り組み方も柔軟性を増し、各研究部の授業研究会もオンライン等を利用し、活発に行われるようになってきた。

これからも、子供たちのよさをさらに伸ばせるよう、日高市教育研究会一丸となって指導に当たりたい。

８　越生班教育研究会

Ⅰ　はじめに

本研究会は、越生町及び毛呂山町の小・中学校９校の教職員で組織する29の教科・領域部会をもって組織する。

Ⅱ　本会の組織

１　役員

会長１名　副会長２名　監事２名　幹事若干名
理事各校３名　研究部長（各研究部長１名）

２　研究部

⑴ 国語　⑵ 書写　⑶ 社会　⑷ 算数・数学
⑸ 理科　⑹ 生活・総合　⑺ 音楽
⑻ 図工美術　⑼ 小学校体育　⑽ 中学校体育
⑾ 小学校家庭科　⑿ 中学校技術・家庭
⒀ 小学校外国語活動　⒁ 中学校英語
⒂ 道徳　⒃ 視聴覚　⒄ 図書館
⒅ 特別支援教育　⒆ 特別活動
⒇ 進路指導・キャリア教育　㉑ 生徒指導
㉒ 保健　㉓ 事務研究　㉔ 食育
㉕ 人権教育　㉖ 安全教育　㉗ 教務
㉘ 保健主事　㉙ 教育相談・教育心理

Ⅲ　活動概要

各部会は、主任研修会や授業研究会を通して教職員の指導力向上を目指している。

１　本部関係

４月　理事会・一斉主任会・新理事部長会
（一部オンライン実施）
５月　総会（書面決議）理事部長研究協議会

２　各研究部

⑴　国語
＜言語活動の充実による伝える力の向上＞
①県学調結果分析・課題把握　（８月）
②県学調の課題に対する取組　（９月～）
③主任研修会　（２月）

⑵　書写
＜整字意識を高める指導法の研究＞
①主任研修会（硬筆展審査会）　（６月）
②主任研修会（書きぞめ展審査会）　（１月）

⑶　社会
＜児童生徒の実態に即した指導と評価の工夫＞
・主任研修会　（７月）

⑷　算数・数学
＜児童生徒の実態に即した適切な指導と評価計画を作成し、児童生徒一人一人を伸ばす授業の工夫＞
①入間地区算数学力調査　（４月）
②主任研修会　（２月）

⑸　理科
＜児童生徒の実態に即した適切な指導評価計画を作成し、児童生徒一人一人を伸ばす授業＞
①主任研修会　（７月）
②越生班科学展　（９月）
③授業研究会　（11月）

⑹　生活・総合
＜地域の特性を生かした活動や生きる力を育む体験的な学習を通し、児童生徒の気付きの質を高めるための授業展開の工夫＞
①入間地区研究発表会授業発表　【川角中】

⑺　音楽
＜音楽性を培い、豊かな感性を育てる学習活動をめざして＞
①主任研修会　（８月）
②教材研究会　（10月）
③主任研修会　（11月）
④主任研修会　（２月）

⑻　図工美術
＜一人一人のよさや可能性を十分に生かし、作り出す喜びを味わわせ豊かな情操を養う＞
①身障者福祉のための美術展・主任会　（７月）
②郷土を描く美術展・主任会　（９月）
③主任研修会　（11月）
④児童生徒美術展・主任会　（１月）

⑼　小学校体育
＜資質・能力の三つの柱の育成がバランスよく実現できる学習過程を工夫し、運動の楽しさや喜びを味わえる授業の実践＞
①授業研究会　（９月）
②授業研究会　（11月）
③地域スポーツ交流大会　（11月）

⑽　中学校体育
＜中学校保健体育　授業力の向上＞
①越生班体力向上推進委員会研究授業　（11月）
⑾　小学校家庭科
＜未来を創りだす豊かな心と確かな実践力を育む家庭科教育＞
①発明創意くふう展・主任研修会　（９月）
⑿　中学校技術・家庭
＜生活や技術の見方・考え方を働かせ、工夫し創造する力を育成する学習指導の工夫＞
①発明創意くふう展・主任研修会　（９月）
⒀　小学校外国語活動
＜児童の実態や学習段階を考慮した指導と評価の工夫＞
①主任研修会　（２月）
⒁　中学校英語
＜四技能のバランスのとれた指導と評価の工夫＞
①主任研修会・弁論大会　（９月）
⒂　道徳
＜道徳的な実践力を高めるための授業の工夫･改善＞
①入間地区道徳教育研究会夏季研修会　（８月）
⒃　視聴覚
＜タブレット及びその他視聴覚機器のよりよい活用の情報共有＞
①タブレットの活用（各校）　（４月～）
②主任研修会　（11月）
⒄　図書館
＜図書館利用の活性化を目指して＞
①第２回主任研修会（読書感想文班審査）（９月）
②第３回主任研修会（読書感想文集作成）（２月）
⒅　特別支援教育
＜一人一人の特別なニーズに応じた適切な就学支援の充実＞
①交流授業　（６月）
②主任研修会　（７月）
③合同遠足　（12月）
⒆　特別活動
＜豊かなかかわりの中で、自尊感情を高める特別活動＞
①入間地区特別活動研究会　（７月）
②主任研修会　（３月）
⒇　進路指導・キャリア教育
＜キャリア教育に関する小中連携について＞
①進路指導・キャリア教育研究発表　（６月）
(21)　生徒指導
＜積極的な行動連携に基づく生徒指導体制の充実＞
①主任研修会　（６月）
②入間地区実践研究発表会
(22)　保健
＜タブレット使用における保健教育＞
①主任研修会　（７月）
②主任研修会　（２月）
(23)　事務研究
＜学校事務の効率化を目指して＞
①主任研修会　（６月）
②主任研修会　（９月）
③主任研修会　（12月）
④主任研修会　（３月）
(24)　食育
＜学校給食の衛生管理や献立作成の工夫について理解を深める＞
①主任研修会　（７月）
(25)　人権教育
＜人権意識の高揚を図り、人権についての正しい理解を深め、様々な人権問題を解決しようとする児童生徒の育成＞
①授業研究会　（12月）
②主任研修会　（２月）
(26)　安全教育
＜安全意識を高め自ら的確に判断し、主体的な行動がとれる児童生徒の育成＞
①スクールガード養成講習会　（８月）
(27)　教務
＜新学習指導要領における教育課程の編成と小中一貫教育の推進＞
①主任研修会　（８月）
②主任研修会　（12月）
③主任研修会　（２月）
(28)　保健主事
＜学校保健の推進向上を図るための組織的な活動の充実＞
①情報交換　（２月）
(29)　教育相談・教育心理
＜日常の教育活動に計画的に教育相談を取り入れる＞
①主任研修会　（２月）

Ⅳ　おわりに

本教育研究会は、今後も越生町･毛呂山町の連携を図りながら、会員一人一人の指導力の向上を目指すとともに、子供たちのための教育研究を推進していきたい。

９　玉川班教育研究会

Ⅰ　玉川班教育研究会の概要

１　会員と専門部

玉川班教育研究会は、比企郡鳩山町とときがわ町の２町に属する小学校６校、中学校３校の計９校、会員数は132名（令和４年度）をもって組織される研究会である。その歴史は古く、会則の施行は昭和39年に遡り、58年余の歴史を誇る、伝統ある研究会である。

本会は、「教育の振興と会員の資質向上に努め、あわせて相互の親睦を図ること」を目的に活動しており、この目的を達成するために、

⑴　教育に係る調査研究
⑵　研究会、講演会、研究発表会、展覧会、体育会、音楽会等の開催
⑶　会員の学術文化に関する研究助成
⑷　その他本会の目的達成のために必要な事業

の四つの事業を行っている。

組織としては、教育研究会長１名、副会長２名の他、教科・領域等の計31の研究部を有し、小・中学校全９校から各部に１名ずつ部員を出している。各研究部には９校の学校長の中から１名の顧問校長を置くとともに、部員から選出した正・副の研究部長を選び目的の達成を目指して部会を運営している。

各校から１名の理事を選出し、年３回各部の運営状況や予算の執行状況の確認など、運営上の課題について話し合う機会を設けている。

班内すべての学校が小規模校で、職員数も限られることから、１人の職員が２～３の研究部員を兼ねている。

年々、学校規模が小さくなっていることやコロナ禍であることからも活動内容は精選、縮小しているものの、小規模の利点を活かし風通しのよい運営を行っている。

２　主な活動

⑴　年間行事

・一斉主任会	（４月）
・新旧理事会	（５月）
・第１回理事会	（７月）
・全員協議会・夏季研修会	（８月）
・管理職人権教育研修会	（８月）
・音楽祭・特別支援学級交流遠足	（10月）
・理科研究発表会・校長会研修会	（11月）
・第２回理事会	（11月）
・第３回理事会	（３月）

※校長会、教頭会は８月を除く毎月開催。
※各部会は、年２～３回開催。本年度はオンラインでの開催も可とした。

⑵　研修助成事業

職員研修助成規定を設け、教育の資質向上に意義のある研究に取り組んでいる個人またはグループに対して研究助成金を交付している。なお、助成対象は、１年以上の継続的な研究であること、埼玉県教育委員会、埼玉県連合教育研究会の指定を受けた研究であることのいずれかである。

Ⅱ　特色ある活動

１　夏季研修会

玉川班教育研究会では、夏休みの期間を利用して全会員対象の研修会を開催している。主に、講演会形式であることが多い。参加率は95％を超える、本会の最も大きな研修会である。

その時々で、学校運営上の課題や教育界で話題となっていることなどを取り上げて、その分野の有識者の方にご講演いただく。原則として、隔年で義務教育関係者と関係者以外の方に交互にご講演いただくこととしているが、近年の講演内容は以下のとおりである。

令和４年度	子供のよさや可能性を引き出す教師の指導 ～学級経営の充実を通して～ 前東松山市立松山第一小学校 校長　稲垣　孝章　先生
令和３年度	元気の出る学校づくりのために ～学校での接遇ポイントと保護者からのクレームの対応について～ インソース　中島　史絵　先生
令和２年度	（コロナ対応で中止）
令和元年度	明るく元気の出る道徳科の授業づくりと評価 開智国際大学 准教授　土井　雅弘　先生
平成30年度	段階的な性教育で子供たちの生きる力を育む ～包括的な性教育とは～ 埼玉医科大学　高橋　幸子　先生
平成29年度	通常の学級における合理的な配慮 立教大学教授　大石　幸二　先生

令和３・４年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインでの開催とした。今後、アンガーマネジメント、ヤングケアラー等の講演を予定している。

２　特別支援学級交流会（遠足）

毎年10月に実施され、東松山市の埼玉県こども自然動物公園に行っている。玉川班の各学校には、１～２学級の特別支援学級が設置されているが、各学校とも人数の少ない学級ばかりである。そこで、児童間の交流を図ることを第一の目標として開催される。大型バスを貸し切り、班内9校を回って対象児童全員を迎えて現地に行く。ここから児童は、他校の児童と交流を図ることになる。現地でも学校の枠を超えて班をつくり行動する。

また、この行事は、担当する教員間の情報交換の場としても大変有意義な場となっている。玉川班は各学級とも少人数であることから担当者が臨時的任用であることが多い。交流会は、児童に対する指導方法を経験豊富なベテランから直接学ぶ機会ともなっている。

令和元年度は日程の関係から、ときがわ町せせらぎホール（体育館）でレク大会を行った。

教員は、周到な準備と細かな役割分担、児童は意図的な班分けをして取り組んだことで「交流」の目的を達成することができた。交流会の新たな形を模索するきっかけとなっている。

３　音楽祭

音楽祭は、10月下旬に鳩山文化会館ホールを会場として行われ、班内９校から各校１団体が参加する。埼玉県音楽教育連盟の事業である西部・北地区音楽会への参加は鳩山町・ときがわ町の各町で小・中学校各１校であることから、毎年の班内全校の発表の場として位置付けられている。特徴的なのは、班内各校が小規模校であることから複数の学年を組み合わせての出場があったり、地域との結び付きが強いことから伝統芸能（太鼓など）を披露する学校があったりすることである。

令和４年度は、３年ぶりの開催となり、各学校ともマスクをしたままの発表であった。例年よりも合奏が多かったこと、会場内の入場者数を制限したこと、小・中学校の演奏時間で児童生徒を入れ替えたことなど、感染対策を講じての開催だった。

４　校長会研修会

11月の班校長研究協議会に合わせて実施する。これまで玉川班でのご勤務を最後に退職された元校長や、鳩山・ときがわ両町及び周辺市町村の退任教育長様に講演を依頼してきた。

講演者は、多くが教育現場を離れた（離れている）OBであることが多く、自身の経験を踏まえた実践的なお話を聞くことができる。少人数での研修会であることや、大変身近な先輩のご講演であることから、多くの質問が出されたり、和やかに歓談する機会があったりと有意義な研修会になることが多い。

昨年度は、近隣の元教育長様にご講演をいただいた。県教育委員会の要職を経験された方であり、自身の校長の時、県教育委員会の時、そして教育長の時と、それぞれの立場で管理職としての心構えや自身の反省に立ったご示唆を頂戴した。

５　管理職人権教育研修会

本研修会は８月中旬に、鳩山町・ときがわ町の両教育委員会と協力して実施する研修会である。出席者は両教育委員会教育長及び９校18名の管理職である。例年、教育委員会事務局人権教育担当指導主事が講演者を依頼する。内容としては、主に同和問題を扱う。

Ⅲ　今後の活動について

玉川班９校とも児童生徒数が減少傾向にある。教員数も減っており研究部員を一人が複数兼ねる状態である。また、ここ２・３年、コロナ禍で諸活動の制限も見られた。教科部会のオンライン開催、理科研究発表会の事前録画による開催、特別支援学級の交流遠足中止など、諸活動の有用性を考える時と捉えている。

班の児童生徒や教職員にとって、より有意義な研究組織になるよう活動全体の精選と活性化を図っていくことが今後の課題である。

10　川島教育研究会

Ⅰ　はじめに

本教育研究会は、埼玉県比企郡川島教育研究会といい、事務局を会長所在の学校に置く。

本会は、川島町内の小・中学校に籍を置く教職員が会員となって組織されている教育研究団体である。

学校数は、小学校４校、中学校２校の計６校、教職員会員数は113名である。

本会は、班内における教職員が主体となり、教育の振興と会員の資質向上に努め、併せて相互の親睦を図ることを目的とする。

この会は、上記の目的を達成するため、次の事業を行う。

１　研究会、発表会、後援会等
２　教育に関する調査研究
３　会員の学術文化に関する研究の助成
４　レクレーションの開催
５　その他目的達成に必要な事項

Ⅱ　本教育研究会の組織

１　役員

会長１名、副会長１名、理事18名、
常任理事６名、代表理事６名、監事２名、
幹事若干名、研究部長（研究部に置く）

２　会員

正会員（町内勤務の現職教職員）、賛助会員（この会の趣旨に賛同する個人または団体）

３　会議

会議を分けて、総会、理事会、常任理事会、代表理事会、研究部会とする。

総会は、年１回会長が招集する。但し、必要に応じて臨時に招集することができる。

また、常任理事会をもってこれに代えることができる。

４　研究部

本会は、次の研究部をおく。

⑴ 国語	⑵ 書写
⑶ 社会	⑷ 算数・数学
⑸ 理科	⑹ 生活
⑺ 音楽	⑻ 図工・美術
⑼ 家庭・技術	⑽ 体育
⑾ 外国語活動・英語	⑿ 特別の教科道徳
⒀ 特別活動	⒁ 特別支援教育
⒂ 教育心理・教育相談	⒃ 視聴覚・情報教育
⒄ 図書館教育	⒅ 養護
⒆ 給食・食育	⒇ 安全教育
㉑ 保健主事	㉒ 生徒指導
㉓ 人権教育	㉔ 進路指導・キャリア教育
㉕ 学校事務	㉖　教務主任会
㉗ 国際理解教育	㉘　環境教育
㉙ 総合的な学習の時間	

各研究部は、部の事業を執行するための部長及び副部長を置く。

部長及び副部長は、主任会で選出し、各校は、研究部ごとに主任を置く。

Ⅲ　本年度の主な事業

１　本部の活動

・教科等主任研修会	コロナ禍のため中止
・総会	コロナ禍のため中止
・教育講演会	コロナ禍のため中止
・会計監査	３月17日㈮

２　各教科等研究部の活動

⑴　国語

・授業研究会	中山小	10月18日㈫
		11月９日㈬
	つばさ北小	11月18日㈮
	西中	２月３日㈮
	中山小	２月24日㈮

⑵　書写

・主任研修会　　５月６日㈮・10月12日㈬

⑶　社会

・主任研修会　　６月13日㈪

・授業研究会　　西中　　11月９日㈬

⑷　算数・数学

・主任研修会　　４月22日㈮

・授業研究会　　川島中　　７月13日㈬

　　中山小　　12月６日㈫

⑸　理科

・主任研修会　　10月14日㈮・11月11日㈮

・授業研究会　　川島中　　11月10日㈭

⑹　音楽

・授業研究会　　川島中　　12月７日㈬

⑺　図工・美術

・主任研究会　　11月30日㈬

⑻　家庭・技術

・主任研修会　　６月15日㈬・９月14日㈬

・授業研究会　　つばさ南小　　11月22日㈫

⑼　体育

・授業研究会　　伊草小　　11月17日㈭

⑽　外国語活動・英語

・授業研究会　　川島中　　10月31日㈪

⑾　特別の教科　道徳

・授業研究会　　伊草小　　7月４日㈪

　　10月26日㈬

　　つばさ北小　　12月１日㈭

　　伊草小　　12月12日㈪

⑿　特別活動

・授業研究会　　つばさ南小　　11月２日㈬

　　西中　　１月16日㈪

⒀　特別支援教育

・主任研修会　　９月13日㈫・９月27日㈫

・川島班特別支援学級交流会　　11月17日㈭

⒁　学校図書館教育

・主任研修会　　８月18日㈭

⒂　養護

・主任研修会　　６月３日㈮・10月12日㈬

　　１月12日㈭

⒃　人権教育

・主任研修会　　４月11日㈪

⒄　学校事務

・主任研修会　　１月16日㈪

⒅　教務主任

・主任研修会　　12月12日㈪

【授業研究会にて（11月９日　西中）】

Ⅳ　成果と課題

町の「学び合い交流事業」により、異校種間での授業参観及び研究協議の場を多くもつことができた。それにより、町全体での研修意欲が向上するとともに、教師一人一人の指導力の向上を図ることができた。

また、小中一貫教育校を見据えて、９年間のカリキュラム作成を進めることができた。

一方、コロナ禍において、一斉主任会や講演会、実技研修会等を行うことができなかった。

次第にコロナ禍の前に戻りつつある状況であるので、それらを以前のように開催できるようにすることが喫緊の課題である。

11　秩父教育研究会

Ⅰ　はじめに

本会は、秩父教育研究会と称し、事務局を会長所属の学校に置く。

本会は、秩父市、横瀬町、小鹿野町、皆野町、長瀞町１市４町の小･中学校の教職員をもって組織されている教育研究団体である。教職員の資質向上と地域教育の振興に寄与することを目的としている。

学校数は、小学校23校、中学校12校の計35校、教職員会員数は625名である。

本会は、上記の目的を達成するために、教育関係機関及び諸団体と連携し、次の事業を行う。

１　教育に関する研究会･講習会･発表会･展覧会等の開催
２　教育に関する研究調査
３　教育に関する実践的研究の委嘱
４　教育に関する図書雑誌の編集・刊行・斡旋
５　その他、教育に必要な事項

Ⅱ　本教育研究会の組織

１　役員

会長１名、副会長２名、理事（代議員）各校１名、監事３名、幹事若干名

２　任務

本会の役員の任務は次のとおりとする。

⑴　会長は本会を代表し、会務を掌理し各種会議を招集し、その議長となる。
⑵　副会長は会長を助け、会長に事故あるときはその職務を代理する。
⑶　理事は理事会を組織し、本会事業の企画運営に関して審議し、会務の執行にあたる。また、代議員として学校を代表し総会に出席する。
⑷　監事は、本会の会計を監査する。
⑸　幹事は、会長の命を受け、本会の庶務会計にあたる。

３　任期

役員の任期は２か年とする。しかし、再任を妨げない。補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。

４　会議

毎年１回総会を開催し、会務の報告、会長･副会長･監事の選出、予算決算、その他重要事項につき審議決定する。会長が必要と認めた場合または会員の３分の１以上の要求がある場合は、臨時に総会を開くことができる。

総会は、代議員による総会とする。各種会議の議決は、出席人数の過半数の賛成を必要とする。

５　経費

本会の経費は、会費及び補助金、その他をもってこれにあてる。会費は、１人年額1,000円とし、６月に全額納入する。

補助金は、１市４町より500円×学級数分をいただいている。

６　研究部

研究部は次のとおりとする。

⑴国語　⑵社会　⑶算数･数学　⑷理科
⑸生活　⑹音楽　⑺図工･美術　⑻保健体育
⑼技術･家庭　⑽家庭　⑾外国語
⑿書写　⒀総合学習　⒁道徳教育
⒂生徒指導 ⒃教育心理・教育相談
⒄学校図書館教育　⒅放送・視聴覚教育
⒆特別支援教育　⒇学校経営　㉑学校事務
㉒特別活動　㉓学校給食
㉔進路指導･キャリア教育　㉕養護
㉖人権教育　㉗教務　㉘安全教育

各研究部には部長･副部長を置く。部長は、本採者から選出する。役員の任期は、１か年とする。

しかし、再任を妨げない。また、部長は、次年度第１回の研究部会を主催する。

Ⅲ　本年度の主な事業

１　事務局主催の活動

⑴　総会　書面による実施
　５月６日㈮　事務局から各学校へ通知
⑵　第１回研究部（教科）研修会
　５月26日㈭　一部実施
⑶　第１回研究部（教科外）研修会
　６月１日㈬　一部実施
⑷　第１回理事研修会　書面による実施
　７月８日㈮　事務局から各学校へ通知
⑸　教育講演会　オンラインによる実施
　８月９日㈫　長瀞第一小学校
　「ICTとリズムで躍動感溢れる授業実践」
　講師　MASAKing　氏
⑹　第２回理事研修会
　３月９日㈭　長瀞第一小学校

２　各研究部主催の活動

⑴　国語
　研修会　中止

⑵　社会
　研修会　中止

⑶　算数・数学
　授業研究会　高篠小学校　　２月７日㈫
　授業者　上野　琢也　教諭
　　５年「割合をグラフに表して調べよう」
　指導者　埼玉大学　教授　　二宮　裕之　先生

⑷　理科
　研修会　中止

⑸　生活
　研修会　中止

⑹　音楽
　音楽研究部研修会
　横瀬小学校　　11月25日㈮
　「児童生徒が最後まで聴きたくなる鑑賞指導事例」
　指導者　　粟飯原　喜男　氏

⑺　図工・美術
　研修会　中止

⑻　保健体育
　授業研究会　中止

⑼　技術･家庭
　研修会　中止

⑽　家庭
　①研修会　　尾田蒔小学校　　８月２日㈫
　②研修会　　尾田蒔小学校　　９月22日㈭
　③授業研究会　横瀬小学校　　10月26日㈬

⑾　外国語
　研修会　中止

⑿　書写
　研修会　中止

⒀　総合的な学習の時間
　研修会　中止

⒁　道徳教育
　①研修会　　長瀞第二小学校　　８月17日㈬
　②授業研究会　長瀞第二小学校　　11月29日㈫

⒂　生徒指導
　研修会　中止

⒃　教育心理・教育相談
　研修会　中止

⒄　学校図書館教育
　①研修会　　大田小学校　　９月14日㈬
　②研修会　　大田小学校　　９月27日㈫

⒅　放送・視聴覚教育
　研修会　中止

⒆　特別支援教育
　研修会　　秩父特別支援学校　　８月22日㈪
　「特別支援教育の理解」
　講師　埼玉大学教授　　長江　清和　先生

⒇　学校経営
　研修会　中止

(21)　学校事務
　研修会
　　皆野文化会館　　２月22日㈬

(22)　特別活動
　研修会　中止

(23)　学校給食
　研修会　中止

(24)　進路指導・キャリア教育
　研修会　中止

(25)　養護
　研修会
　横瀬町民会館　　11月22日㈫
　「変わる変わる自己効力感いっぱいの学校に！」
　講師　一般社団法人アルバ・エデュ
　　蝦　真理子　氏

(26)　人権教育
　研修会　中止

(27)　教務
　研修会　中止

(28)　安全教育
　研修会　中止

Ⅳ 成果と今後の課題

本年度は、新型コロナウイルス感染症による様々な配慮が求められるなか、本研究会は、感染症拡大防止対策を講じた上で、可能な限りできる事業の実施に努めた。

５月の総会は、参集して行うことができず、書面評決にて、昨年度の決算報告・行事報告・役員・年間行事計画・予算について承認をいただいた。

しかし、教育講演会においては、オンラインながらも３年ぶりに開催することができ、会員一同、喜びもひとしおであった。感染状況により、中止とせざるを得なかった部会も多かったが、再開できた研修会や授業研究会、講演会もあった。

来年度は、新型コロナウイルス感染症が終息し、より一層充実した本研究会の活動を通じ、教職員の資質向上と地域教育の振興に寄与することができるよう願っている。

12　児玉郡本庄市教育研究会

Ⅰ　はじめに

本研究会は、児玉郡・本庄市内の小・中学校32校、30の教科等研究会をもって組織する。

Ⅱ　活動概要

各研究会は、授業研究会や講演会を通して、指導力の向上を目指している。

⑴　国語教育研究会
①児玉郡本庄市国語教育授業研究会
本庄市立金屋小学校　11月25日㈮
授業者　同校　田中　裕子　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事
根岸　侑紀　様

⑵　書写教育研究会
①第60回硬筆展地区審査会
本庄市立藤田小学校　６月10日㈮
②実技研修会　※中止
③第76回児玉郡本庄市書きぞめ展覧会
本庄市立共和小学校　1月14日㈯・15日㈰

⑶　社会科教育研究会
①夏季研修会　本庄市立児玉小学校　８月26日㈮
指導者　北部教育事務所　指導主事
丸橋　直樹　様
②授業研究会　本庄市立藤田小学校　11月15日㈫
授業者　本庄市立藤田小学校　飯田　慧　教諭
指導者　本庄市教育委員会　指導主事
栗原　完　様

⑷　算数・数学教育研究会
授業研究会　神川町立神川中学校　11月22日㈫
授業者　神川町立神川中学校　荻野　大樹　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事
中田　朋絵　様
埼玉大学教育学部付属中学校
奥田　勇司　様

⑸　理科教育研究会
①児玉郡・本庄市小中学校理科担当者代表者会議
②埼玉県小中学校科学コンクール児玉地区審査会
９月27日㈫
会場　上里町立賀美小学校（小学校の部）
本庄市立児玉中学校（中学校の部）
出品点数　小学校60点、中学校21点、合計81点
※　埼玉県科学教育振興展覧会出品作品
理科教育研究発表会児童・生徒の部
③児玉地区理科授業研究会　（中止）

⑹　音楽教育研究会
①夏季実技研修会　８月４日㈭
会場　本庄市立本庄東中学校
講師　戸田市立戸田東小学校　小梨　貴弘　教諭
②埼玉県小・中学校北部西地区音楽会
11月11日㈮
指導者　熊谷市立成田小学校長　新井　麻起　様

⑺　図工・美術教育研究会
①夏季実技研修会　８月１日㈪
講師　本庄市立本庄南小学校長　岡村　和美　様
②身体障害者福祉のための児童生徒美術展
中央展覧会　11月５日㈯～６日㈰
会場　本庄市民文化会館（来場者数　2,479人）
③第63回埼玉県児童生徒美術展（児玉地区展）
１月21日㈯～22日㈰
会場　本庄市立金屋小学校（来場者数3,200人）
指導者　北部教育事務所指導主事
星野　哲郎　様
本庄市立本庄南小学校長
岡村　和美　様

⑻　保健体育教育研究会
①小学校体育実技講習会　６月８日㈬・９日㈭
②小学校体育授業研究会　10月27日㈭
③小学校体育研究協議会　１月27日㈮
④中学校体育授業研究会　10月13日㈭
⑤中学校体育研究協議会　２月10日㈮

⑼　技術・家庭科教育研究会
①授業研究会
本庄市立本庄東中学校　11月15日㈫
美里町立東児玉小学校　12月６日㈫
本庄市立本庄東中学校　12月８日㈭
②指導者　北部教育事務所指導主事
笠原　浩史　様
総合教育センター指導主事
大山　方住　様
本庄市立本庄西中学校教頭
櫻井久美子　様

⑽　生活科・総合的な学習の時間研究会
授業研究会　神川町立青柳小学校　10月24日㈪
第２学年「うごく　うごく　わたしのおもちゃ」
授業者　青木　沙織　教諭
指導者　北部教育事務所教育支援担当社会教育主事兼指導主事　陽遊　真史　様

⑾　外国語活動・英語教育研究会
①授業研究会
上里町立上里中学校　１月16日㈪
授業者　金澤　葵　教諭
指導者　本庄市教育委員会
指導主事　梶塚　真理子　様

⑿　道徳教育研究会
①本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止ため、予定していた活動は中止とした。
⒀　特別活動教育研究会
①授業研究会　本庄市立児玉中学校　９月28日㈬
授業者　本庄市立児玉中学校　渡邉　拓也　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事　篠原　剛　様
②授業研究会　神川町立丹荘小学校　11月９日㈬
授業者　神川町立丹荘小学校　安田亜弥子　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事　篠原　剛　様
⒁　生徒指導教育研究会
本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定されていた活動は中止とした。
⒂　教育相談教育研究会
①講演会　７月27日㈬
深谷市立教育研究所からの配信　各学校リモート
講師　埼玉純真短期大学　原口　正明　先生
演題「通常の学級における気になる子への支援」
⒃　進路指導・キャリア教育研究会
①授業研究会　上里町立長幡小学校　11月30日㈬
授業者　白石　千加子　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事
笠原　浩史　様
②授業研究会　上里町立上里中学校　12月13日㈫
授業者　内藤　栄一　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事
笠原　浩史　様
⒄　学校視聴覚・情報教育研究会
①郡市教育研究パソコン講習会　８月１日㈪
内容　情報モラルとICT機器の効果的な活用
講師　埼玉県教育局県立学校部　川島　尚之　様
⒅　学校図書館教育研究会
①講演会
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。
②読書感想文コンクール
・読書感想文コンクール審査会
９月28日㈬　美里町コミュニティーセンター
⒆　学校緑化教育研究会
本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定されていた活動は中止した。
⒇　学校食育研究会
①夏季研修会　７月28日㈭
場所　美里町立大沢小学校
内容　掲示物作成
「朝ごはんでスイッチオン」
指導者　児玉郡市内栄養教諭
(21)　保健主事教育研究会
①研修会
（オンラインによる養護教諭との合同研修会）
７月28日㈭
演題「コロナと共に生きる子どものこころ
輪とレジリエンスの視点から」
講師　子どもの虐待防止センター
山口　有紗　様
(22)　養護教諭研究会
①夏季研修会　７月28日㈭　オンライン研修会
戸田市養護部会との保健主事･養護教諭合同研修会
講演「コロナと共に生きる子どものこころ
－輪とレジリエンスの視点から－」
講師　子どものこころ専門医　山口　有紗　様
(23)　学校安全教育研究会
本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定されていた活動は中止とした。
(24)　特別支援教育研究会
①夏季研修会　８月３日㈬（オンライン）
埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
講師　長江　清和　様
②児玉郡本庄市特別支援教育児童生徒作品展
11月26日㈯・27日㈰　児玉セルディ
(25)　学校事務研究会
①研究発表会　12月２日㈮
美里町コミュニティーセンター
「これからの学校事務職員」
担当　美里班研究発表会
(26)　人権教育研究会
①郡市人権教育研究会
②授業研究会　美里町立東児玉小学校
日時　11月25日㈮
授業者　近藤　一輝　教諭　林　昌子　教諭
指導者　北部教育事務所指導主事
星野　哲郎　様
(27)　主幹教諭・教務主任研究会
①郡市教育研究会主幹教諭・教務主任研修会
日時　12月２日㈮
会場　本庄市立本庄南中学校
講師　株式会社セイワ　社長　斉藤　一英　様
演題　「地域から教育現場へ」
(28)　学校栄養教諭研究会
①第１回研修会　６月17日㈮
場所　本庄上里学校給食センター
内容　掲示物作成について協議
②第２回研修会　７月28日㈭
場所　美里町立大沢小学校
内容　掲示物作成・食育担当者へ指導
(29)　環境教育研究会
①夏季研修会　８月１日㈪
内容　エネワンソーラーパーク寄居の視察
（※新型コロナウイルス感染防止のため中止）
(30)　国際理解教育研究会
本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定していた活動は中止とした。

13　熊谷市教育研究会

Ⅰ　熊谷市教育研究会の概要

1　会員と組織

熊谷市教育研究会は、現在、会員1,022名の研究団体である。

役員は、会長１名、副会長５名、理事として校長部代表４名、教頭部代表４名、各教科等研究部長、各校学校代表１名で構成されている。

会長校が本部事務局を担当し、５名の副会長校は、会計事務局、会報事務局、学習指導研究協議会事務局、研究要録事務局、教育文化講演会事務局を担当する。

⑴　本会の目的

学校教育各般の研究により、会員の資質の向上を図り、熊谷市の学校教育の振興を図ることである。

⑵　研究組織

・校長部
・教頭部
・教務主任部
・学校事務部
・教科研究部
　国語、書写、社会、算数・数学、理科、生活、音楽、図工・美術、体育・保健体育、家庭、技術家庭、（技）、技術家庭（家）、英語、外国語活動、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、進路指導・キャリア教育、学校食育、安全教育、生徒指導、人権教育、特別支援教育、学校教育相談、情報教育、学校図書館、養護、保健主事、環境教育、国際理解教育

2　基本方針（令和４年度）

⑴　「熊谷教育」の発展のために、会員の意見を尊重しながら、教育研究活動の充実・改善を図る。

⑵　会員一人一人の研修意欲を高めるとともに資質の向上を目指し、全員が参加する全体研修会を実施する。

⑶　研究部は、新学習指導要領の趣旨に基づいた日常の指導実践や長期を見通した研究課題を設定し、その解決を図るため質の高い教育研究活動を行う。

⑷　生命の尊重や人権意識・防災意識の高揚を目指し、道徳教育・人権教育・防災教育の推進、充実を図る。

⑸　「新熊谷プロジェクト」で学力日本一を目指し、くまなびスクール、ラウンドシステムの考え方を生かした授業、教科横断的な視点を含んだ授業、オーセンティックな授業、道徳の「見える化」、運動量を増やし、汗をかかせる体育授業等を通して「知・徳・体」のバランスのとれた学力を身に付けさせ、熊谷の子どもたちに「生きる力」、「未来の社会を生き抜く力」の育成向上を図る。

⑹　「熊谷の子どもたちは、これができます!『４つの実践』と『３減運動』」、「スマホ使い方宣言」、「いじめ撲滅宣言」、「タブレット端末の約束５ヶ条」を基盤とし、子供たちの健全育成に向けた実践を行う。

3　実施事業

⑴　研究課題に基づく調査研究活動の実施
⑵　研究要録・会報の発行
⑶　研究論文の募集
⑷　研究会・講演会・実技研修会等の実施
⑸　音楽会・競技会等の実施
⑹　各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動の年間指導計画の作成並びに研究推進
⑺　学習指導研究協議会の実施と助成
⑻　各学校における各教科の研究への協力

Ⅱ　令和４年度　事業計画

1　事業名・期日・会場

⑴　新旧正副会長候補・幹事候補者会　４月12日㈫
　会場：熊谷市立妻沼東中学校

⑵　正副会長候補・幹事候補者会　４月19日㈫
　会場：熊谷市立妻沼東中学校

⑶　主任研修会・理事研修会　５月６日㈮
　会場：彩の国くまがやドーム体育館

⑷　部長会並びに、正副会長候補・幹事候補者会　５月６日㈮

⑸　総会（代議員）　５月30日㈪
　会場：熊谷市立妻沼東中学校

⑹　小学校陸上フェスティバル　６月３日㈮
　会場：熊谷スポーツ文化公園

【　熊谷市小学校陸上フェスティバル開会式　】

⑺　研究論文募集依頼　　６月中旬

⑻　教育文化講演会　　８月４日㈭

会場：熊谷市立大里学習センター（あすねっと）

講師：熊谷市立江南文化財センター

学芸員　山下　祐樹　氏

演題：「熊谷の先人たちと渋沢栄一」

～熊谷の近代化と渋沢栄一の人物

交流史を主題として～

【　教育文化講演会講師　山下　祐樹　氏　】

⑼　熊谷市中学校音楽会　　11月９日㈬

会場：熊谷文化創造館 さくらめいと

講師：声楽家　　原田　勇雅　氏

【中学校音楽会　】

⑽　会報33号発行　　11月30日㈬

⑾　熊谷市小学校音楽会　　11月10日㈭・11日㈮

会場：熊谷文化創造館 さくらめいと

講師：声楽家　　原田　勇雅　氏

【　小学校音楽会　】

⑿　本部役員会　　２月14日㈫

会場：熊谷市立妻沼東中学校

⒀　会報34号発行　　２月中旬

⒁　理事会　　３月１日㈬

会場：熊谷市立江南総合文化会館ピピア

⒂　研究要録発行　　３月上旬

⒃　役員選考委員会　　３月23日㈭

会場：熊谷市立妻沼東中学校

Ⅲ　熊谷教育の指導の指針

「新熊谷教育プロジェクト」で、「学力日本一」を目指します！

指針を受け、熊谷市教育研究会は、これまで取り組んできた教科横断的でオーセンティックな学びを礎とし、加えてICT機器を効果的に活用することにより知力・徳力・体力の三つの力のバランスのとれた学力を身に付けさせ、子供たちに「生きる力」、未来の社会を「生き抜く力」を育成するため全力で取り組んでいる。

Ⅳ　今後の活動について

子供たちに「生きる力」、未来の社会を「生き抜く力」を育成するためには小学校間、中学校間、小・中学校間の横と縦の深い繋がりが重要である。

熊谷市教育研究会の各事業は、「繋がりの強化」の一端を担っている。ここ数年、コロナ禍で教育活動・本事業も中止、制限されていたが、コロナ禍の負の側面だけを捉えるのではなく発想を転換するチャンスと捉え、「不易流行」を念頭に置き、今後も全力で取り組んでいく。

14　加須市教育研究会

Ⅰ　はじめに

本研究会は、公立の幼稚園13園、小学校22校、中学校８校の教職員641名を会員とし、30の教科等研究部で組織された教育研究団体である。

加須市内の公立幼稚園及び小・中学校の教育研究活動の振興を図るとともに、相互の連絡を緊密にし、職能の向上を図ることを目的とする。

また、この目的達成のため、「未来社会を切り拓くための資質・能力を育む教育の実践」をテーマに設定し、次の事業を行う。

1　会員の研修のための講演会、講習会
2　発表会、研修会、視察調査等
3　幼児、児童生徒の発表会、展覧会、競技会等
4　会員や公立幼稚園、小中学校の研究助成
5　各種教育関係団体、機関との連絡、提携
6　その他、必要事項

Ⅱ　本会の組織

1　役員

会長１名、副会長５名、監事３名、幹事２名
理事（各校長30名、幼稚園代表１名、
教頭代表５名、研究部代表６名、
学校事務職員代表１名）

2　会計（令和４年度予算）

会　費　641,000円　　助成金　450,000円
繰越金　348,660円

3　研究組織

会議は、総会・理事会とする。
研究部の組織は、次のとおりとする。

⑴ 国語教育　⑵ 書写教育　⑶ 社会科教育
⑷ 算数・数学教育　⑸ 理科教育
⑹ 生活科・総合的な学習の時間
⑺ 音楽教育　⑻ 図画工作・美術教育
⑼ 家庭科・技術家庭科教育
⑽ 体育・保健体育教育
⑾ 外国語活動・外国語教育　⑿ 道徳教育
⒀ 特別活動　⒁ 生徒指導
⒂ 進路指導・キャリア教育
⒃ 教育心理・教育相談　⒄ 安全・防災教育
⒅ 学校食育　⒆ 学校図書館教育
⒇ 人権教育　(21) 特別支援教育
(22) 国際理解教育　(23) 視聴覚・情報教育
(24) 環境教育　(25) 福祉教育　(26) 幼児教育
(27) 教務主任　(28) 保健主事　(29) 養護教員
(30) 学校事務

Ⅲ　本会の主な事業

1　本部の活動

⑴　各教科等主任研究協議会　（年２～３回）
※年度当初の主任会は、オンラインで実施
⑵　教科等部長会　（年１回）
⑶　理事会　（年２回）
⑷　全員協議会・講演会　※書面開催　（５月）
⑸　教育講演会　（７月）
※感染症拡大防止ため、本年度は中止
⑹　研究発表会
①加須市立礼羽小学校　１月20日㈮
「主体的に問題と向き合い、解決しようとする児童の育成～数学的に考える資質・能力を育成する算数科学習を中心に～」
②加須市立加須南小学校　２月１日㈬
「自分の考えをもち、深めることができる子の育成～思考力・判断力を高める算数の学習指導法の工夫～」
③加須市立鴻茎小学校　10月28日㈮
「自己を見つめ、ともによりよく生きようとする児童の育成～互いの思いを伝え合い、豊かに関わり合う道徳教育を目指して～」
④加須市立豊野小学校　11月11日㈮
「論理的思考力を高める国語科指導の追求～実生活に生かせる読む・書く力の育成～」
⑤加須市立加須東中学校　12月16日㈮
「豊かな心をもち、自他共によりよく生きようとする生徒の育成～人間としての生き方について考えを深める道徳科の授業づくりをとおして～」
⑥大越幼稚園　公開保育　10月19日㈬
⑦加須幼稚園　公開保育　11月17日㈭
⑧個人・グループ研究　２グループ
⑺　研究委嘱
※ 令和５年度研究発表５校、公開保育２園

2　各教科等主任研究協議会の研究テーマ

⑴　国語科教育研究部
「生活に生きてはたらく国語の能力の育成」
⑵　書写教育研究部
「確かな書写力を身に付ける書写教育」

⑶　社会科教育研究部
「基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着とそれらを活用して考える社会科学習の工夫～主体的・対話的に学ぶ学習の推進～」
⑷　算数・数学教育研究部
「数学的に考える資質・能力を育成する算数・数学指導」
⑸　理科教育研究部
「ICTを効果的に活用する授業の実践および、学習指導要領の確実な実施と、授業改善のための指導・評価サイクルの確立」
⑹　生活科・総合的な学習の時間研究部
「学校の創意工夫を生かし、体験活動・探究活動を重視した評価の在り方」
⑺　音楽教育研究部
「音楽性の基礎を培い、豊かな感性を育てる学習活動を目指して」
⑻　図画工作・美術教育研究部
「思考力・創造性を高め、豊かな人間性をはぐくむ造形活動の研究」
⑼　家庭科・技術家庭科教育研究部
「生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成する題材及び指導、評価の工夫・改善」
⑽　体育・保健体育教育研究部
「３つの資質・能力をバランスよく育み、運動の楽しさや喜びを味わえる体育授業の研究」
⑾　外国語活動・外国語教育研究部
「コミュニケーション能力を伸ばす授業の創造　児童生徒一人一人を生かす評価の工夫～学び方指導の工夫～」
⑿　道徳教育研究部
「未来社会を切り拓く力をはぐくむ考え、議論する道徳授業の研究」
⒀　特別活動研究部
「多様な他者と協働する力を育む特別活動」
⒁　生徒指導研究部
「心豊かな児童生徒の育成を目指す『校内生徒指導体制の充実』」
⒂　進路指導・キャリア教育研究部
「未来を展望し『今』を生き生きと磨く進路指導・キャリア教育」
⒃　教育心理・教育相談研究部
「児童生徒に必要な『資質・能力の育成』を支援する指導の工夫」
⒄　安全・防災教育研究部
「未来社会を切り拓くための安全・防災教育の実践～『未来へつなげる加須防災ノート－自分の命は自分で守る－』の活用をとおして～」
⒅　学校食育研究部
「豊かな人間関係を深める食育指導」
⒆　学校図書館教育研究部
「豊かな人間性を育む学校図書館の充実」
⒇　人権教育研究部
「自他のよさを認め、主体的にあらゆく人権問題を解決しようとする児童生徒の育成」
(21)　特別支援教育研究部
「一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実を図る」
(22)　国際理解教育研究部
「思考力、判断力、表現力等の育成を目指した国際理解教育の推進」
(23)　視聴覚・情報教育研究部
「GIGAスクール構想における、ICT機器の効果的活用による児童生徒の資質・能力の育成のための授業改善」
(24)　環境教育研究部
「環境問題に気付き、環境を守ろうとする心と態度の育成」
(25)　福祉教育研究部
「福祉について関心と理解を深め、支え合い豊かに生きようとする心と態度を育てる福祉教育の推進」
(26)　幼児教育研究部
「互いの育ちを考えた幼小の連携～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に視点をあてて～」
(27)　教務主任研究部
「教育課程の編成・実施についての改善・充実」
(28)　保健主事研究部
「学校保健活動のマネジメントについて」
(29)　養護教員研究部
「未来社会を切り拓くための資質・能力を育む健康教育の実践～感染症対策を講じた救急処置について～」
(30)　学校事務研究部
「学校事務に関する研修及び教職員福利制度に関する研修」

Ⅴ　おわりに

本研究会では、「未来を切り拓くための資質・能力を育む教育の実践」を目指し、教育研究活動を行ってきた。本年度も、感染症拡大防止のため、授業研究会への参加者をオンラインでの参加と集合型の参加者に分ける等、できる対策を取りながら、会員の知恵と努力により、各部が創意工夫した取組を実践してきた。

今後も、本市の地域性や特長を生かした組織的・継続的な研究活動を推進し、加須市の教育の充実と職能の向上のために力を尽くしていく。

15　春日部市教育研究会

Ⅰ　はじめに

春日部市教育研究会は、小学校22校、中学校11校、義務教育学校１校に在籍する教職員981名を会員として組織されている教育研究会である。本会では、日頃の教育活動の充実を図るとともに、教職員の資質・指導力の向上、人間性豊かな児童生徒の育成をめざすとともに、春日部市の教育振興をはかることを目的している。

Ⅱ　本研究会の組織

１　役員

会長　１名　副会長　３名
理事　各校１名　評議員　各校１名
幹事　３名　監事　３名

２　研究部会

29の研究部を置き、部の構成は各校の主任を中心に構成する。

Ⅲ　主な事業及び活動

１　事務局

・教科等主任研究協議会　（４月）
・役員選挙　（４月）
・理事・評議員会　（５月）
・総会・講演会　（５月・オンライン）
・第１回教科等部長会議　（６月）
・第２回教科等部長会議　（11月）
・理事・評議員会　（２月）
・監査・役員研修会　（３月）

２　各教科等研究部

⑴　国語
・主任研究協議会　（４月）
・授業研究協議会【春日部中学校】　（９月）
新型コロナ感染症の影響で中止

⑵　書写
・主任研究協議会　（４月）
・市内硬筆展審査及び展覧会（６月・オンライン）
・毛筆実技研修会　（10月）
・市内書きぞめ展審査及び展覧会
（１月・オンライン）

⑶　社会
・主任研究協議会　（４月）
・授業研究協議会【内牧小学校】　（10月）
・ＩＣＴ研修会　（２月）

⑷　算数・数学
・主任研究協議会　（４月）
・授業研究協議会【葛飾中学校】　（10月）
・授業集録発行　（３月）

⑸　理科
・主任研究協議会　（４月・７月）
・実技研修会　（オンライン・７月）
・科学教育振興展覧会オンライン審査　（９月）
・授業研究協議会【葛飾中学校】　（11月）

⑹　生活科
・主任研究協議会　（４月）
・授業研究協議会【武里小学校】　（10月）

⑺　音楽科
・主任研究協議会　（４月・９月）
・授業研究協議会【武里中学校】　（10月）
・春日部市小・中・義務教育学校音楽会
【春日部市民文化会館】（11月）

⑻　図工・美術
・主任研究協議会　（４月）
・第64回身体障碍者福祉のための児童生徒美術展
（７月）
・第57回郷土を描く美術展　（９月）
・授業研究協議会【武里南小学校】　（10月）
・第63回小・中学校児童生徒美術展埼葛地区展
【久喜市毎日興業アリーナ】　（１月）

⑼　保健体育
・主任研究協議会　（４月）
・小学校陸上競技大会　（６月）
・小学校体育実技講習会　（７月）
・小学校授業研究協議会
【武里小学校・江戸川小中学校】　（10月）
・中学校授業研究協議会
【東中学校・春日部中学校】（９月・10月）

⑽　家庭科
・主任研究協議会　（４月）
・実技研修会　（８月・オンライン）
・発明創意くふう展　（９月）

・授業研究協議会【川辺小学校】　(11月)

⑾　技術・家庭

・主任研究協議会　(４月)

・市内発明創意くふう展　(９月)

・授業研究協議会【東中学校】　(10月)

⑿　小学校英語

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【南桜井小学校】　(10月)

⒀　英語

・主任研究協議会　(４月)

・市内中学校英語弁論大会
【春日部市教育センター】(９月)

・授業研究協議会【飯沼中学校】　(10月)

⒁　道徳

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【江戸川小中学校】　(12月)

⒂　特別活動

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【江戸川小中学校】　(２月)

⒃　総合的な学習の時間

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【八木崎小学校】　(11月)

⒄　学校保健

・主任研究協議会　(４月)

・実践発表　【粕壁小・中野小・葛飾中】

⒅　学校安全

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【南桜井小学校】　(６月)

⒆　特別支援教育

・主任研究協議会　(４月)

・主任研究協議会及び講演会　(11月)

・主任研究協議会及び講演会　(１月)

・春日部市特別支援学級ふれあいアート展(１月)

⒇　学校教育相談

・主任研究協議会　(４月)

・主任研究協議会・事例発表研修会
【武里西小学校】　(11月)

(21)　情報教育

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【飯沼中学校】　(７月)

(22)　学校図書館

・主任研究協議会　(４月)

・主任研究協議会及び読書感想文市内審査会
【東中学校】　(９月)

・主任研究協議会　(２月)

(23)　生徒指導

・主任研究協議会　(４月)

・ブロック別研修会　(９月～11月)

(24)　進路指導・キャリア教育

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【豊春中学校】　(12月)

(25)　人権教育

・主任研究協議会　(４月)

・授業研究協議会【内牧小学校】　(12月)

(26)　学校運営

・主任研究協議会　(４月)

・研修会（講演会）【春日部市教育センター】
(12月)

・主任研究協議会　(２月)

(27)　養護

・主任研究協議会　(４月)

・研究協議会
（６月・７月・８月・11月・１月・２月・３月）

・夏季研修会
（８月・熊谷支部と合同・オンライン開催）

(28)　学校給食・栄養士

・主任研究協議会　(４月)

・研究協議会　(11月)

(29)　学校事務

・主任研究協議会　(４月)

・全体研修会①（オンラインで見る執務環境）
(８月)

・全体研修会②（学校職員の服務）　(12月)

・全体研修会③（就学援助について）　(１月)

Ⅳ　おわりに

少しずつ以前の活動に戻りつつあるが、本年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、制限があった。しかし、そのことでICT機器を活用した展覧会や発表、研修が一般的なものになりつつある１年間であった。

デジタル上では、距離と時間の概念がほとんどないため、すぐに、いつでも学び合うことができる。この学び方は、これからの子供たちが、学ぶ学び方であるため、このような形での教育研究を続けていくことが必要であるとともに、今後も本研究会が推進役となり、学校相互の連携と会員の資質・能力の向上に努め、本市の教育の振興と充実に寄与していきたい。

16　八潮市教育研究会

Ⅰ　はじめに

本会は、八潮市の小学校10校、中学校５校、計15校の教職員489名で組織される教育研究団体である。

研究主題 「学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進」のテーマの基、八潮市立小・中学校教育の振興を図ることを目的とし、次の事業を行っている。

1　教育に関する研究調査
2　市内各校及び教育関係機関との連絡提携
3　展覧会、音楽会、科学展等の開催
4　教職員の研修
5　その他目的達成に必要な事項

研究会は、28の教科領域の部会から組織され、各教科領域等部会で研究主題を毎年度決め、研究に取り組んでいる。また、各部会が八潮市小中一貫教育推進検討部会と連携して活動し、ボトムアップを図る八潮の小中一貫教育を支えている。

Ⅱ　主な活動

1	教科等主任研究協議会	（４月）
2	旧役員研究協議会	（４月）
3	新旧理事会研究協議会（書面）	（４月）
4	総会準備打合会（総会書面につき中止）	（５月）
5	総会・研究協議会・講演会（書面）	（５月）
6	八潮市中学生英語弁論大会	（８月）
7	市内科学展	（９月）
8	埼葛地区英語弁論大会	（９月）
9	埼葛科学展	（９月）
10	市内小中学校音楽会（中止）	（10月）
11	なかよし学習発表会（※各中学校ブロック）	（12月）
12	役員研究協議会	（２月）
13	なかよし作品展	（２月）
14	会計監査	（３月）

Ⅲ　コロナ禍での活動について

◎コロナ感染症状況による行事開催・方法・内容検討
・総会の書面表決
・教科等主任会の開催方法の検討
　各小・中学校分散開催またはオンライン開催へ
・各行事開催の可否、実施方法や内容検討
　（各研究団体や関係機関との連携のもと）
・授業研究会・各教科等研究協議会の持ち方
　時期や感染状況に応じ各部会授業研究会や研究協議会の持ち方を弾力化（オンライン等活用）

Ⅳ　コロナ禍での活動の実際

1　年度初めの教科等主任会を市内15校に会場提供してもらい、午後を前半・後半の２部制で割り振り、少人数の会議とする。（昨年度同様）
2　総会を書面決議とし、事前に意見等を吸い上げ課題解決や新年度の運営に活かす。
3　諸行事の実施については、作品展や審査会等、作品や代表者の選出のある行事については、各校担当や児童生徒に無理のないよう練習や行事の実施の仕方、会場等をここ３年間工夫してきている。
　○書写：硬筆展・書きぞめ競書会、読書感想文
　○理科：科学展
　○音楽：東部南地区音楽会
　　（市内音楽会は中止）
　○図工・美術：東部・県児童生徒美術展他
　○技術・家庭・家庭：発明創意くふう展　他
　　・小学校はオンラインによる市内審査会
　　・東部の中学校研究発表の部は録画電子データ
　○学校図書館教育：読書感想文コンクール 他
　○人権：人権標語、人権を考えるつどい 他、
　○保健・養護：健康・歯科コンクール､標語 他
　○英語：英語スピーチコンテスト
　　（体育館実施に）
　○その他
4　授業研究会、研究協議会の実施例
　(1)　各教科等部会では、研究協議会の持ち方をコロナ感染症の状況に合わせ、内容や開催方法、会場等を工夫しながら実施している。
　　○授業公開時・・公開クラスでの参観
　　＋別教室でオンライン参観
　　または、後日オンデマンド参観
　　○研究協議・・・授業と別日に実施
　　研究協議・指導者指導
　　（自校でオンライン協議参加）
　(2)　研究協議会・実技伝達等：講師指導者の有無資料・内容によりオンライン協議する等弾力化
　(3)　本年度のブロック研究発表校の授業参観

Ⅴ　八潮市小中一貫教育との関わりから

１　小中一貫教育推進６部会の組織体制

八潮市では、教育委員会や校長会・教頭会代表者22名からなる小中一貫教育推進委員会を設置、その下に六つの推進検討部会が設置されている。校長会、教頭会から各１名顧問を加え、各校１名ずつの15名が代表として市全体約２割の教職員が参加している。

教育研究会の各教科等主任他が所属することで、現場教職員の声を吸い上げる中、施策の実現に向け、小中一貫教育の原動力ともなっている。

「けいかく部会」・・・・・主幹教諭・教務主任
「まなび（学力）部会」・・各校の学力向上推進者
研究・教科主任など
「まなび（体力）部会」・・体育主任・体力向上担当
「こころ部会」・・・生徒指導（道徳も協力）主任
「しえん部会」・・・特別支援教育主任・通常学級担任
「ICT部会」・・・・視聴覚・放送・情報教育主任他

２　上記の６部会の取組と各部会の連携協力

⑴　「八潮スタンダード」○○編（各教科）編の作成
「八潮スタンダード」は、すべての教科で活用できるように作成し、授業改善の基礎となっているが、各教科編スタンダードの作成で、「各教科の特性」を踏まえた、より質の高い授業実践を目指している。　（教科等各部）

⑵　「新体力テスト攻略ハンドブック」（児童生徒向け・教師向け）の活用や正確な測定による実態把握と授業改善　（体育部）

⑶　「いじめ撲滅」の授業実践とキャリア教育
○「いじめ撲滅」に向けた指導案作成と年一回の「いじめ撲滅」全校・全学年授業　（低学年・中学年・高学年・中学校で発達の段階に応じた指導をし、全市フォルダで共有）※ 道徳・特別活動
○「ハッピーこまちゃん夢パスポート」（キャリア形成と自己実現）、「不登校対策の手引き」（全教職員配付）活用　（生徒指導部）
（道徳部・特別活動部）
（進路指導・キャリア教育部）

⑷　「はばたきファイル」による切れ目のない支援
「はばたきファイル」（個別支援の情報共有）　の電子化と義務教育９年間で「児童生徒の困り感」や「効果的な支援方法」をつなぐ。
（特別支援部・教育心理・教育相談部）

⑸　「GIGA端末」等の活用と「情報活用能力」育成
「八潮スタンダードによるGIGA端末の活用」体育や道徳におけるICT活用事例集・ICT活用指導案・プログラミング教育・各教科での活用
（教科等各部・視聴覚・放送・情報教育部）

３　中学校ブロックでの実践

八潮市小学校２校、中学校１校でブロックを編成し「施設分離型」での小中一貫教育を推進している。中学校を中心とした各５ブロックで毎年、研究発表会を実施し、ブロックごとの独自性を活かした取組を推進するとともに、各ブロックの情報を各教科等主任会や小中一貫教育推進６部会へ持ち寄りブロックの実践を共有する機会を設け、タテ・ヨコにつなげている。
（主幹教諭・教務主任がブロック計画立案、実践、評価の中心となり、６部会との連携・集約や校内周知を行う。教科等各部と連携協力）

４　各ブロック研究の場を活かした実践

⑴　各中学校ブロックの研修会（夏季休業中）
例：八潮中ブロック オンライン研修
①全体会（中学校教員のブロック小学校交流授業報告、ブロック研究の方向性他）
②各教科・担当ごとのグループに分け、グループオンライン研修・情報共有

⑵　「なかよし学習発表会」（特別支援）
コロナ前は八潮メセナでの全支援学級発表会を、昨年度は、各ブロックでのオンライン発表交流、本年度は、各ブロック中学校を会場に開催した。

Ⅵ　おわりに

コロナ禍・働き方改革の中、各研究部会が小中一貫教育推進の取組を活かし、各事業や授業研究を工夫して行ってきた。「ピンチをチャンス」に替え、新たな八潮市小中一貫教育発展の機会としたい。

17　宮代町教育研究会

Ⅰ　はじめに

本会は、宮代町立小・中学校７校に勤務する教職員を会員として組織されている教育研究団体であり、31の専門部会をもって活動している。

Ⅱ　研究概要

本会は、公教育の理念に基づき、教育に関する深化・発展を図り、宮代町教職員の資質及び学校教育の向上を図ることを目的とする。

各専門部会は、授業研究会や研究協議会、講演会、各種展覧会等を通して、指導力の向上を目指している。

1　国語部会
- ・活動主題「主体的･対話的で深い学びの視点から言語活動を充実させ、児童生徒の学びの質の向上を図る指導と評価の工夫」
- ・授業研究会　須賀中　１月24日㈫

2　書写部会
- ・活動主題「実生活に生かせる書写指導の工夫」
- ・町内硬筆審査会　笠原小　６月９日㈭
- ・町内書きぞめ実技研修会　前原中　11月７日㈪
- ・町内書きぞめ審査会　百間小　１月13日㈮
- ・町内書きぞめ展　百間小　１月14日㈯・15日㈰

3　社会部会
- ・活動主題「基礎的・基本的知識の定着と主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の展開」
- ・授業研究会　須賀中　12月14日㈬

4　算数・数学部会
- ・活動主題「算数・数学的活動の充実と学ぶことの楽しさや意義を実感できる学習展開の工夫」
- ・研究協議会　オンライン　11月30日㈬

5　理科部会
- ・活動主題「自ら課題を見付け、主体的に学習活動に取り組む児童生徒の育成」
- ・町内科学コンクール審査会　百間小　９月９日㈮
- ・授業研究会　東小　11月４日㈮

6　音楽部会
- ・活動主題「児童生徒の感性を高め、主体的に学び、思考・判断・表現する学習指導の充実」
- ・町小中学校音楽会（中止）　笠原小　11月８日㈫
- ・研究協議会　須賀中　１月30日㈪

7　図工・美術部会
- ・活動主題「ICTを効果的に活用し、児童生徒の資質・能力を高める指導と評価の計画の活用と改善・充実を図る」
- ・研究協議会兼町内児童生徒美術展審査会　各校　11月25日㈮
- ・研究協議会　百間中　２月３日㈮

8　保健体育部会
- ・活動主題「運動の特性にふれる魅力や楽しさを味わわせ、体力と運動の技能を高める指導法の工夫」
- ・小学校町内陸上大会＜各校にて記録会＞
- ・研究協議会兼体力向上授業研究会　東小　１月25日㈬

9　技術・家庭科部会
- ・活動主題「生活の中から問題を見出し、解決しようとする生徒の育成 ～ＩＣＴを効果的に活用した授業の実践～」
- ・生徒発明創意くふう展及び研究発表作品審査　白岡市保健福祉総合センター　９月９日㈮
- ・授業研究会　百間中　１月26日㈭

10　小学校家庭科部会
- ・活動主題「生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成する題材及び指導計画の工夫」
- ・研究協議会、町内発明創意くふう展作品審査　須賀小　９月９日㈮

11　生活部会
- ・活動主題「学校や地域の特色、児童の実態を生かし、ICTを効果的に活用した授業の実践」
- ・授業研究会　須賀小　10月14日㈮

12　英語・外国語活動部会
- ・活動主題「コミュニケーション能力の育成を図る指導法の工夫」
- ・研究協議会、英語弁論大会打合せ　須賀中　６月15日㈬
- ・英語弁論大会　日本工業大学　９月５日㈪

13　道徳部会
- ・活動主題「考え、議論する道徳授業」に向けた指導方法の工夫・改善」
- ・授業研究会　百間中　11月16日㈬

14　特別活動部会
- ・活動主題「よりよい集団づくりを通して児童生徒一人一人の自信と活動意欲を高める特別活動の在り方」
- ・研究協議会　オンライン　１月20日㈮

15　総合的な学習の時間部会
・活動主題「各学校の特色を生かし、目標や育成する資質・能力を明確にした学習活動の工夫と改善」
・授業研究会　須賀小　11月16日㈬
16　特別支援教育部会
・活動主題「児童生徒一人一人の障害の状態及び特性等に応じた指導の工夫～ICTを効果的に活用した授業の実践～」
・交流遠足　東武動物公園　10月19日㈬
・なかよし作品展　図書館　12月１日㈭～９日㈮
・研究協議会、なかよし交流会　（オンライン）　12月６日㈫
17　教育心理相談部会
・活動主題「日常的な教育相談活動の活性化を図る」
・研究協議会　東小　11月８日㈫
18　情報・視聴覚教育部会
・活動主題「主体的・対話的で深い学びを実現する１人１台情報端末の目的に応じた活用」
・研究協議会　（オンライン）　11月16日㈬
19　学校図書館部会
・活動主題「学校図書館を利用した教育活動の充実及び読書活動の推進」
・研究協議会、読書感想文審査会　百間小　９月29日㈭
20　生徒指導部会
・活動主題「積極的な生徒指導の推進」
・杉戸町宮代町学校警察連絡協議会　（４回）　杉戸広島中
21　進路指導・キャリア教育部会
・活動主題「一人一人の個性を生かし、伸ばす進路指導・キャリア教育」
・研究協議会　（オンライン）　２月７日㈫
22　安全教育部会
・活動主題「学校や家庭の実態に即した指導計画の作成と組織的な安全教育の推進」
・研究協議会　須賀中　12月２日㈮
23　食育・学校給食部会
・活動主題「学校や家庭・地域の実態に即した望ましい食習慣の形成と食事環境の充実」
・研究協議会、講演　百間小　７月27日㈬
24　人権教育部会
・活動主題「人権問題を正しく理解し、人権感覚を身に付け、様々な人権問題を解決しようとする児童生徒の育成　～人権感覚プログラムの活用～
・研究協議会　（オンライン）　６月23日㈭
25　環境教育部会
・活動主題「環境の保全に向けて、主体的に行動できる実践的な態度や資質・能力の育成を図る」
・研究協議会　（オンライン）　１月27日㈮
26　国際理解教育部会
・活動主題「国際社会における、児童生徒のコミュニケーション能力を向上させる国際理解教育の推進」
・島村盛助を顕彰する英語発表会　（オンライン）
・研究協議会　（オンライン）　２月３日㈮
27　ボランティア・福祉教育部会
・活動主題「家庭・地域社会と連携したボランティア・福祉教育の推進」
・研究協議会　（オンライン）　１月31日㈫
28　学校保健部会
・活動主題「家庭・地域社会と連携した保健活動の推進」
・研究協議会　須賀中　１月31日㈫
29　養護教員部会
・活動主題「情報端末を活用した健康教育の推進」
・研究協議会　宮代町役場　８月30日㈫
30　学校事務部会
・活動主題「学校事務の効率化及び今後求められる事務職員像についての研究～実務研修を通して学校事務職員の資質向上を図る～」
・研究協議会　宮代町役場　８月26日㈮
31　主幹教諭・教務主任部会
・活動主題「児童生徒の人間として調和のとれた育成を目指し、新学習指導要領に準じた教育課程の確実な編成と実施」
・研究協議会　笠原小　１月24日㈫

Ⅲ　全体研修会

⑴　宮代町教育研究会総会

４月28日㈭　オンライン

講演「宮代町の教育について」
講師　宮代町教育長　中村　敏明　先生

⑵　教職員人権教育全体研修会

８月19日㈮　宮代町立図書館

講演「差別の現実から学ぶ」
講師　埼葛郡市人権施策推進協議会　理事　水島　輝彦　先生

⑶　宮代町教育研究会教職員全体研修会

８月26日㈮　オンライン

講演「現場で使えるコミュニケーション」
講師　一般社団法人日本スポーツコーチング協会　認定コーチ　詫摩　浩一　先生

Ⅳ　終わりに

本研究会の研究テーマは、「主体性・多様性・創造性を育み、未来につながる学びの展開」である。

今後も、子供たち一人一人のよさや生きる力を伸ばすために、宮代町教職員の資質及び学校教育の向上を推進していく。

令和４年度

研究論文集

Ⅰ　令和４度研究論文入賞者・応募者等一覧 …… 128

＜　最 優 秀 賞　＞《個人研究》
「ＳＯＳの出し方に関する教育」の実践
～児童・保護者を対象とした「自殺予防教育」の研究～【学級活動】…… 130
上尾市立東小学校　教諭　大久保　裕和

＜　入　　選　＞《個人研究》
小学校外国語科の「話すこと（発表）」における「思考・判断・表現」の評価に関する研究
～比較可能性に基づいたより信頼性の高いルーブリックの開発を目指して～【外国語科】…… 136
さいたま市立下落合小学校　教諭　有江　　聖

＜　佳　　作　＞《個人研究》
小学校第３学年における投能力向上の実践
～「走・跳の運動」領域に横断的に取り入れたヴォ―テックスフットボールの有効性の検討～【体育】…… 142
吉川市立三輪野江小学校　教諭　楠　聖次郎

＜　佳　　作　＞《個人研究》
運動好きを育て、学習機会の保障と協働的な学びを実現する
～カリキュラム開発と評価基準表（ルーブリック）の作成～【体育】…… 148
越谷市立越ケ谷小学校　教諭　寺川　耕平

＜　新人奨励賞　＞《個人研究》
「書く意欲」と「書く技能」を高める指導法の研究
～意見文の授業実践を通して～【国語科】…… 154
熊谷市立新堀小学校　教諭　小川　祐太郎

Ⅱ　令和５年度研究論文募集要領等 …… 160

Ⅰ　令和４年度研究論文入賞者・応募者一覧

１　入賞者

⑴　最優秀賞　【１名】　【敬称略】

No.	氏　　名	所　属　校　名	職　名	教科等	形　態
		研究テーマ			
1	大久保裕和	上尾市立東小学校	教　諭	学級活動	個人研究
		「SOS の出し方に関する教育」の実践 ～児童・保護者を対象とした「自殺予防教室」の研究～			

⑵　入　　選　【１名】　【敬称略】

No.	氏　　名	所　属　校　名	職　名	教科等	形　態
		研究テーマ			
1	有江　　聖	さいたま市立下落合小学校	教　諭	外国語科	個人研究
		小学校外国語科の「話すこと（発表）」における「思考・判断・表現」の評価に関する研究 ～比較可能性に基づいたより信頼性の高いルーブリックの開発を目指して～			

⑶　佳　　作　【２名】　【敬称略】

No.	氏　　名	所　蔵　校　名	職　名	教科等	形　態
		研究テーマ			
1	楠　聖次郎	吉川市立三輪野江小学校	教　諭	体　育	個人研究
		小学校３学年における投能力向上の実践 ～「走・跳の運動」領域に横断的に取り入れたヴォーテックスフットボールの有効性の検討～			
2	寺川　耕平	越谷市立越ヶ谷小学校	教　諭	体　育	個人研究
		運動好きを育て、学習機会の保障と協働的な学びを実現する ～カリキュラム開発と評価基準表（ルーブリック）の作成～			

⑷　新人奨励賞　【１名】　【敬称略】

No.	氏　　名	所　蔵　校　名	職　名	教科等	形　態
		研究テーマ			
1	小川祐太郎	熊谷市立新堀小学校	教　諭	国　語	個人研究
		「書く意欲」と「書く技能」を高める指導法の研究 ～意見文の授業実践を通して～			

２　入賞者を除く応募者　【13名】

【敬称略】

No.	氏　　名	所　属　校　名	職　名	教科等	形　態
		研究テーマ			
1	石川　裕貴	三郷市立栄中学校	教　諭	音　楽	個人研究
		音楽教育の「Universal Design」R.M. シェーファーの「サウンド・エデュケーション」を切り口として			
2	坂　　和磨	台北日本人学校（上尾市立太平中学校）	教　諭	数　学	個人研究
		授業の動画配信における生徒の視聴実態の検証～ YOUTUBE 配信による視聴率の変化とその効果について～			
3	庄司　真樹	志木市立宗岡小学校	教　諭	体　育	個人研究
		思いやりと思考力・表現力・判断力を育むアダプテーション・ゲーム			
4	小口　佑介	上尾市立東町小学校	教　諭	体　育	個人研究
		児童の表現力を高め、かかわり合いながら学ぶ集団づくり～小学校５年生マット運動の授業を通して～			
5	釆澤　輝義	鶴ヶ島市立栄小学校	教　諭	特別支援	個人研究
		特別支援学級（自閉症・情緒障害学級）における指導実践～日課表と WISC-Ⅲ、WISC-Ⅳから見る児童の変容～			
6	比嘉　亮太	三郷市立早稲田小学校	教　諭	特別支援	個人研究
		学校生活における困難を支援する ICT 活用～中学校進学への不安の解消を目指して～			
7	恩田　ルイ	毛呂山町立毛呂山中学校	主幹教諭	道徳科	個人研究
		言葉の力をつけ、他者と学び合う「道徳科」の授業			
8	松村　祐一	越生町立越生中学校	教　諭	英　語	個人研究
		効果的な Small Talk の活用			
9	用皆　英樹	さいたま市立常盤小学校	教　諭	体　育	個人研究
		児童が自ら思考判断する「主体的・対話的で深い学び」を具現化した授業づくり～体つくり運動の実践を通して～			
10	鈴木　慎一	越谷市立富士中学校	教　諭	社会科	個人研究
		ICT で育成する思考力～社会科の授業づくりの変化～			
11	井形　哲志	埼玉県立伊奈学園中学校	教　諭	教育心理・教育相談	個人研究
		自己肯定感を高め、社会を生き抜く生徒の育成～教員、生徒、保護者への支援を通して～			
12	菊池　健一	さいたま市立植竹小学校	教　諭	NIE（国語、算数、社会）	個人研究
		GIGA スクール構想に対応した NIE の実践～小学校新聞デジタル版の活用を通して～			
13	宮田　信良	川口市立芝富士小学校	講　師	道徳科	個人研究
		道徳教育についての一考察			

「SOS の出し方に関する教育」の実践

～児童・保護者を対象とした「自殺予防教育」の研究～

埼玉県上尾市立東小学校　教諭　大久保　裕　和

Ⅰ　研究題目設定の理由

令和２年度の児童生徒自殺者数は、499名を記録した。これは、過去５年間の記録の中で最多人数である。下記の表は、校種別における自殺者数の推移である。

	小学生(人)		中学生(人)		高校生(人)
2021	14	10.4倍	146	2.3倍	339
2020	8	14倍	112	2.5倍	279
2019	7	17.7倍	124	1.9倍	238
2018	9	11.1倍	100	2.7倍	269
2017	12	6.6倍	81	2.4倍	196

引用：「児童生徒の自殺者数に関する基礎資料集」【文部科学省】

上記のように、中学生になり、自殺者数が大幅に増加していることが分かる。

（※　倍率においては、小数点第二位を四捨五入）

次に、児童の自殺の原因・動機について考察した。

【2021 年】

小項目	人数	大項目
親子関係の不和	３人	家庭問題
家族からのしつけ・叱責	３人	家庭問題
学業不振	２人	学校問題
病気の悩み・影響(その他の精神疾患)	１人	健康問題
その他交際をめぐる悩み	１人	男女問題
いじめ	１人	学校問題

【2020 年】

小項目	人数	大項目
その他学友との不和	３人	学校問題
家族からのしつけ・叱責	３人	家庭問題
その他進路に関する悩み	１人	学校問題
学業不振	１人	学校問題

引用：「児童生徒の自殺者数に関する基礎資料集」【文部科学省】

上記の表を見ると、過去２年間の自殺原因・動機の上位は、「学校問題」となり、次いで「家庭問題」であることが分かる。厚生労働省が作成した「自殺の統計：各年の状況」を見ても、小学生における自殺の原因・動機は、「家庭問題」が 2017 年～ 2019 年も上位を占めている。

こうした状況から、

> 1　小学生から「自殺予防教育」を行うことは、児童生徒の自殺者数を減らすことにつながる。
> 2　児童生徒の自殺者数を減らすために、保護者への啓発を行う取組が必要である。

と考え、研究題目を設定した。

Ⅱ　「SOS の出し方に関する教育」とは

「自殺総合対策大綱（文部科学省）」に

> 児童生徒が命の大切さを実感できる教育に偏ることなく、社会において直面する可能性のある様々な困難・ストレスへの対処方法を身に付けるための教育（SOS の出し方に関する教育）、心の健康の保持に係る教育を推進するとともに、児童生徒の生きることの促進要因を増やすことを通じて自殺対策に資する教育の実施に向けた環境づくりを進める。

とある。また、「I's 2019 ～いじめ・自殺・暴力行為対応ハンドブック～（埼玉県教育委員会）」に、自殺予防教育とは、

> ア　命の大切さを実感できる教育
> イ　様々な困難・ストレスへの対処方法を身に付けるための教育（ＳＯＳを出す教育）
> ウ　心の健康の保持に係る教育
>
> （波線、太字は、大久保加筆）

と定義されている。アとウは、道徳や保健の学習で取り扱う。イにおいては、実践されている学校は極めて少ない。今回の実践では、学級活動に位置付け、

> 1　自分が危機に直面した時に、他者に助けを求めることのできる力の育成
> 2　友達の危機に気付いた時に、傾聴し心配していることを伝え、大人につなげる力の育成

をねらいとした。この二つの力を「I's 2019」では、「援助希求的態度」と定義している。

「SOS の出し方に関する教育」とは、自殺予防教育の一環を担う「援助希求的態度の育成」をねらいとした教育である。児童の自殺の原因・動機の結果から、対象を児童のみならず、保護者も含め実践した。

Ⅲ　調査研究

1　質問調査の結果

＜児童対象（6 年生：N ＝ 141　5 年生：N=128）＞

(1) もし、困った時や悩みがあるときに、自分から誰かに相談しますか。
必ずする・・・・27.9%
ときどきする・・61.3%
しない・・・・・10.8%

(2) 一人でいる友達を見つけた時に、声を掛けようと思いますか。
思う・・・・・・・・・・・・・・・・42%
どちらかと言えば思う・・・・・37.2%
どちらかと言えば思わない・・・13.4%
思わない・・・・・・・・・・・・7.4%

(3) 一人でいる友達を見つけた時に、声を掛けることができていますか。
できている ・・・・・・・・・・・・32%
どちらかと言えばできている・・・32.7%
どちらかと言えばできていない・・21.2%
できていない・・・・・・・・・・・9.7%
そのような場面を見たことがない・・4.5%

(4) 親といると安心しますか。
とても安心する ・・・・・・・・・ 68%
どちらかと言えば安心する・・・・28.6%
どちらかと言えば安心しない・・・ 2.6%
全く安心しない・・・・・・・・・・ 0.7%

(5) 悩みごとや困ったことを、相談機関に相談したことはありますか。また、これから相談しようと思いますか。（6年生N=81　5年生N=61）
※ 相談機関を知っている児童のみを対象とした。
相談したことがある・・・・・・・・ 2.8%
相談するかもしれない・・・・・・・・24.6%
相談したい気持ちはあるが、相談しない・・10.6%
相談しない・・・・・・・・・・・・・62%

＜保護者対象（N=79）＞

(1) 悩みごとが相談できる相手として、誰が該当しますか。【複数回答可】
家族・・・92.4%　　友人・・・69.6%
ご自身の親・兄弟・姉妹・・・・59.5%
相談機関・・・・・・・・・・・・15.2%
誰にも相談しない・できない・・・2.5%

(2) 困ったことや悩みごとを抱えたら、相談機関を利用しようと思いますか。(N=70)
※ 相談機関を知っている保護者のみを対象とした。
利用したい・・・・・・・・・・・・・31.4%
どちらかと言えば利用したい・・・・・57.1%
どちらかと言えば利用したくない・・・・10%
利用したくない・・・・・・・・・・・・1.4%

(3) 子供の不登校・非行行動・自殺・自傷行為等の予防対策として効果的だと思うことは何ですか。【複数回答可】
家庭でのしつけ・・・・・・・・24.1%
子供とのコミュニケーション・・98.7%
学校における教育活動・・・・・・62%
相談機関の周知・活用・・・・・31.6%
その他・・・・・・・・・・・・・5.1%
○問題を抱える子供のためのサークル活動
○担任との信頼関係
○周りの大人や友達とのコミュニケーション
○周囲の気付き

2　調査研究結果における考察

＜児童対象＞

○ 困った時や悩みがある時に、必ず誰かに相談すると回答した児童は30％未満だった。また、「しない」と回答した児童もいる。
○ 一人でいる友達に対し、自分から声を掛けることができていない児童がいる。
○ 90％以上の児童が「親といると安心する」と感じている。一方、「どちらかと言えば安心しない」「安心しない」と感じる児童もいる。
○ 相談機関に「相談したい気持ちはあるが相談しない」「相談しない」と感じている児童が半数以上を占めている。

＜保護者対象＞

○ ほぼ全員、相談相手を挙げることができていた。相談相手は、家族など身近な人が多く、相談機関を利用する保護者は少ない。
○ 多くの保護者が困ったときに相談機関を利用したいと感じている。一方、利用したくないと感じている保護者も少数いる。
○ 子供の健やかな成長に「子供とのコミュニケーション」が大切であることに多くの保護者が気付いているが、回答率100％に達しなかった。また、「相談機関の周知・活用」については、約30％であった。

3　仮　説

調査研究で明らかになったことを基に、高学年児童対象の授業と保護者への啓発を行う上で、以下の仮説を立てた。

＜児童＞
1　「子供同士の良好な人間関係の構築」を目指した学級経営を行うことで、一人でいる友達に声を掛けようとする意識を高め、行動に移す態度を育成することができるであろう。
2　専門相談機関の方に、行っている援助方法を話してもらうことで、専門相談機関を利用しようとする意識を高めることができるであろう。

<保護者>

1　「子供の自殺原因と」「コミュニケーションを深める声の掛け方」を伝えることで、子供の孤立を防ぐ意識を高めることができるであろう。

2　専門相談機関の方をゲストティーチャーに招き、実施している相談援助方法について話してもらうことで、専門相談機関を利用しようとする意識を高めることができるであろう。

Ⅳ　実践研究

1　児童対象

⑴　学級経営実践

子供の援助希求態度を育成する上で、子供同士の好ましい人間関係を構築させる学級経営は、極めて重要となる。川野健治氏が、『学校における自殺予防教育 GRIP』で、自殺予防教育は「予防教育と子供相互の人間関係」と主張している。さらに、「子供に伝えたい自殺予防（文科省）」に、自殺予防教育の土台として、「下地づくりの教育」を挙げており、この中に「温かい人間関係を築く教育」を入れている。

そこで、早稲田大学教育学部教授　河村　茂雄　氏による「学級集団形成理論」を基に計画的に学級経営を行った。

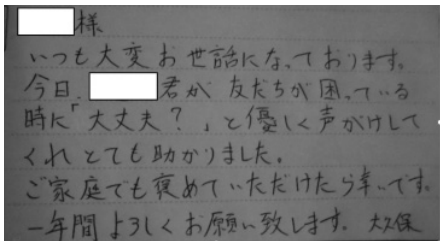
学級集団形成理論

第１段階　混沌・緊張期
第２段階　小集団形成期
第３段階　中集団形成期
第４段階　全体集団成立期
第５段階　自治的集団成立期

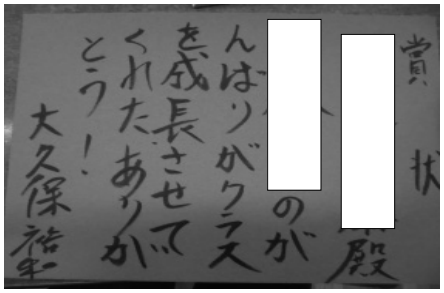
第１段階　「混沌・緊張期」（４月）

この時期、「個を褒める」よう努める。４月、子供たちは、まだ一人一人がバラバラな状態で不安な心境にある。一筆箋やミニ賞状で個人を褒めた。

一筆箋



ミニ賞状（画用紙に筆ペンで記入。短時間で書ける）



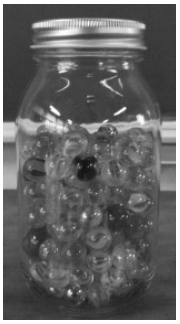
また、この時期に、「ルールの明確化」「いじめに対する決意表明」をした。「いじめは許さない」「こそこそ話はしない」など、趣意説明を行いながら朝の会や道徳の時間を使って語った。

第２段階　「小集団形成期」（５月～７月）

５月から、３名程度の仲良しグループができ始める。この時期から、小集団を褒めた。小集団とは、生活班や会社（係活動）などである。効果的な褒め方として、

写真や動画を活用し、良い行動を具体的に伝える

ことである。朝の会や隙間時間、道徳の終末に扱った。写真や動画等を活用して語った。また、子供たちの良い行動を見付けた時に瓶の中にビー玉を入れていく「ビー玉貯金」も並行して行った。（左写真）良い行動をすると、瓶の中にビー玉が貯まっていく。子供たちは、瓶の中にビー玉が貯まっていく様子を見て、意欲が高まっていく。この時期からみんなで協力し合ってクラスを良くする経験を増やしていった。



第３段階　「中集団形成期」（７月下旬～11月）

２学期明けの８月・９月は、１学期に身に付けたことを再度確認し、定着させることから始めた。

10月辺りから「10人程度で協力できる時期」に入る。「グループで褒める」から「中集団を褒める」へ発展させた。また、自分の行動を振り返らせるため、「学校生活ふり返りカード」を活用した。

学校生活
ふり返りカード

◎・・よくできた
○・・だいたいできた
△・・もう少し

年　組
名前

項目（こうもく）	日にち					
①休み時間や授業中などに、自分から友だちに３回以上声かけができた。　３回以上・・◎　２回・・○　１回以下・・△						
②友だちが話をしている時、いつもうなずいたり反応したりしながら、最後まで聞くことができた。						
③先生が話をしている時、最後まで静かに聞くことができた。						
④友だちと楽しく学校生活を送ることができた。						
⑤友だちと協力し、そうじや当番の仕事に取り組むことができた。						
⑥学校、学級のきまりを守って生活することができた。						

第４段階　「全体集団成立期」（12月～１月）

全員で協力できる時期に入る。「子供同士で声掛けができる空気作り」や「友達との関わりを増やす」ことに心掛けた。教師が児童に渡していた「ミニ賞状」を子供同士のやり取りに変えた。教師が指示するのではなく、児童が主体的に企画し実行するようにさせた。

第５段階　「自治的集団成立期」（２月～３月）

この時期は、「自治的活動を増やす段階」である。児童の主体的な態度を褒めていった。クラスの解散に向け、団結しみんなで楽しい思い出を作る支援をした。

⑵ 「SOS の出し方に関する教育」実践

勤務校の高学年は、5 年生 4 クラス、6 年生 4 クラスの計 8 クラスである。9 月 28 日～ 11 月 19 日に渡って、各クラス 1 回一斉授業を行った。本検証授業は、11 月 19 日に 6 年生を対象に行った。

題材名：「SOS の出し方に関する教育」
～ひとりぼっちの友達にできること～

教　科：学級活動　　内容⑵
日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全

本時のねらい：「ゲートキーパー」の役割を理解し、日頃の生活に生かそうとする態度を育てる

<題材のあらすじ>
級友からいじめを受けていたさくらさんは、先生や友達、家族にその悩みを相談せずにいた。その様子を見ていた同じクラスのひなたさんは、さくらさんのことを心配しながらも、やはり誰にも相談することはできなかった。しかし、ひなたさんはある日、家族と担任の先生に思い切って相談した。その結果、さくらさんへのいじめはなくなった。

発問①：「あなたなら、さくらさんに何ができますか。」

さくらさんが、級友からいじめを受けている場面の動画を見せた後の発問である。ここで勇気を出していじめを止めることも大切であるが、助ける方法はそれだけではないことに気付かせたいと考えた。授業では「（さくらさんに）声を掛ける」「（さくらさんの）話を聴く」「誰かに相談する」などの意見が出た。

発問②：「自分なら、誰に相談しますか。」

全クラスにおいて、児童から相談相手の候補として「親」「友達」「担任の先生」という意見が出たので、

A：自分の親　B：友達　C：担任の先生　D：その他

の四つの選択肢から一つ選ばせ、理由も書かせた。本検証授業（N=36）の結果は、以下のとおりである。

親（N=11）
<理由>（意見が多かったものを抜粋）
① 親を一番信頼しているから
② 親に相談したら、先生に伝えてくれるし、家族でサポートしてくれるから
③ 相談したことが加害者に伝わりにくいから
④ 先生に言ってもばれたらいじめられるから

友達（N=8）
<理由>（意見が多かったものを抜粋）
① 一番相談しやすいから
② 親や先生より心配をかけないから

担任の先生（N=16）
<理由>（意見が多かったものを抜粋）
① 子供だけではどうにもならないから
② 親や友達より話しやすいから
③ 先生に相談すればなんとかなるから
④ 先生は、クラスの様子を知っているから

その他（N=1）「信頼している人」
<理由>
① 信頼している人が一番安心するから

話合い活動：「友達の意見に対し、賛成意見を言ったり、質問したりしましょう。」

コロナ禍で対話活動が制限されていたため、Chromebook を使用した。 Chromebook を使用したことで、クラス全員の意見を理解することができた。

出た意見は次のとおりである。（抜粋したもの）

賛成意見
① S さんの「自分の親、一番信頼できるから」に賛成です。親は産んでくれた人だからです。
② Oさんの「担任の先生、相談しやすいから」に賛成です。いじめのことなど相談しやすいからです。
③ T さんの「友達、安心して相談できるから」に賛成です。友達なら距離も近いし、安心できるからです。
④ Uさんの「担任の先生、学校で起きていることだから」に賛成です。親より先生の方が近くにいるからです。

質問内容
① Wさんの「自分の親、先生に言ったらもっといじめられるから」に質問です。なぜ、もっといじめられるのですか。
<回答>
先生に言ったことでチクったとか言われ、もっといじめられると思ったからです。
② S さんの「自分が一番信頼している人、安心できるから」に質問です。一番信頼している人とは具体的に誰ですか。
<回答>
家族や先生、仲の良い友達です。

発問③：「独りぼっちの友達にできることは何ですか。」

この発問に対し、児童がワークシートに記述した意見と割合である。「誰かに相談する」では、相談相手を記述している児童もおり、「先生」「専門相談機関」「友達」を挙げていた。【表 1】

声を掛ける	22 名（61.1%）
誰かに相談する	19 名（52.8%）
一緒に考える	4 名（11.1%）
話を聴く	3 名（8.3%）
遊びに誘う	3 名（8.3%）
寄り添う	1 名（2.8%）
かげで助ける	1 名（2.8%）

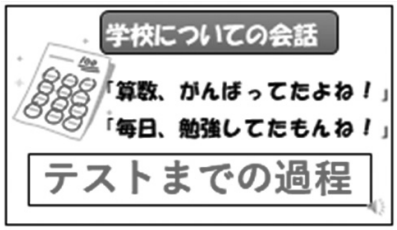
【表１】

２　保護者対象

⑴　動画配信

夏季休業中に高学年児童の保護者を対象に配信した。子供の自己肯定感を高める声掛けや「死にたい」と言われた時の対応について、親自身が悩みを抱えた時に、誰かに相談することの大切さについて、埼玉県内の専門相談機関の方にご協力をいただき、支援方法を話していただいた。

【活用したスライド（一部掲載)】



学校についての会話を例に、子供の自尊心を高める声掛けを紹介した。（左図）

保護者に、悩みを抱えた時、相談機関とつながることも大切ということを伝えた。（右図）

⑵　地域学校保健委員会

12 月上旬に、本校の保護者と学区内中学校の保護者を対象に、地域学校保健委員会にて、啓発活動を行った。動画配信とほぼ同じ内容としたが、専門相談機関の方に来校していただき、具体的な支援方法について、お話をいただいた。

【地域学校保健委員会の様子】

小学生の自殺の原因・動機は、「家庭問題」が上位を占めていることや子供の自尊心を高める声掛けや家族での触れ合いの大切さを伝えた。

専門相談機関の方から、「支援を行う上で大切なのは、アドバイスではなく、傾聴と寄り添い」とのお話をいただいた。

Ⅴ　成果と課題

１　質問調査の結果における成果

＜児童対象　（６年生：N ＝ 141　５年生 :N=128）＞

【数値は、授業前→授業後の割合】

⑴ もし、困った時や悩みがあるときに、自分から誰かに相談しますか。

「必ずする」　**27.8%→33.1%<5.3%UP>**

「どきどきする」**61.3%→56.9%<4.4%DOWN>**

「しない」　**10.8%→10%<0.8%DOWN>**

⑵ 一人でいる友達を見つけたときに、声を掛けようと思いますか。

「思う」　**42%→→44.6%<2.6%UP>**

「どちらかと言えば思う」**37.2%→50.6%<13.4%UP>**

「どちらかと言えば思わない」

13.4%→3.7%<9.7%DOWN>

「思わない」　**7.4%→1.1%<6.3%DOWN>**

⑶ 一人でいる友達を見つけた時に、声を掛けることができていますか。

「できている」　**32%→35.7%<3.7%UP>**

「どちらかと言えばできている」**32.7%→39%<6.3%UP>**

「どちらかと言えばできていない」

21.2%→3.7%<17.5%DOWN>

「できていない」　**4.5%→2.6%<1.9%DOWN>**

「そのような場面を見たことがない」

9.7%→19%<9.3%UP>

⑷ 親といると安心しますか。

「とても安心する」　**68%→68.4%<0.4%UP>**

「どちらかと言えば安心する」**28.6%→30.5%<1.9%UP>**

「どちらかと言えば安心しない」**2.6%→1.1%<1.5%DOWN>**

全く安心しない　**0.7%→0%<0.7%DOWN>**

⑸ 悩みごとや困ったことを、相談機関に相談したことはありますか。また、これから相談しようと思いますか。

授業前(N=142)※相談機関を知っている児童のみ対象

「相談したことがある」　**2.8%(4 人)**

「相談するかもしれない」　**24.6%(35 人)**

「相談したい気持ちはあるが相談しない」**10.6%(15 人)**

「相談しない」　**62%(88 人)**

授業後(N=269)※全児童が対象

「相談したことがある」　**5.2%(14 人)**

「相談するかもしれない」**56.9%(153 人)**

「相談したい気持ちはあるが相談しない」**5.2%(14 人)**

「相談しない」　**32.7%(88 人)**

＜動画視聴における保護者対象（N ＝ 79）＞
【数値は、動画視聴前→動画視聴後の割合】

(1) 悩みごとが相談できる相手として、誰が該当しますか。【複数回答可】

「家族」 92.4%→96.2%<3.8%UP>
「ご自分の親・兄弟・姉妹」 59.5%→64.6%<5.1%UP>
「友人」 69.6%→69.6%
「相談機関」 15.2%→59.5%<44.3%UP>
「誰にも相談しない・できない」 2.3%→1.3%<1.2%DOWN>

(2) 困ったことや悩みごとを抱えたら、相談機関を利用しようと思いますか。

視聴前(N=70)※相談機関を知っている保護者のみ対象
「利用したい」 31.4%(22 人)
「どちらかと言えば利用したい」 57.1%(40 人)
「どちらかと言えば利用したくない」 10.1%(7 人)
「利用したくない」 1.4%(1 人)

視聴後(N=79)※全保護者が対象
「利用しようと思った」 50.6%(40 人)
「どちらかと言えば利用しようと思った」 41.8%(33 人)
「どちらかと言えば利用しないと思った」 3.8%(3 人)
「利用しないと思った」 3.8%(3 人)

(3) 子供の不登校・非行行動・自殺・自傷行為などの予防対策として効果的だと思うことは何ですか。【複数回答可】

「コミュニケーション」 98.7%→100%<1.3%UP>
「相談機関の周知・活用」 31.6%→59.5%<27.9%UP>
「学校における教育活動」 62%→68.4%<6.4%UP>
「家庭でのしつけ」 24.1%→17.7%<6.4%DOWN>
「その他」 5.1%→0%<5.1%DOWN>

２　観察における成果の一例

(1)　友人関係のことで悩みを抱えた児童Ａの変容

９月上旬、Ａの表情が暗いことに気付いた担任がＡに声を掛けるが、「何もない」と返答した。10 月上旬辺りから、Ａが一人でいると、声を掛けてくれる友達が増えていった。授業後（11 月下旬）に、Ａは悩みを養護教諭に相談をもちかけた。今までの悩みを全て打ち明けた。養護教諭に相談した後に、親と担任にも相談した。SNS を活用し、同じクラスの仲の良い友達にも相談した。担任は、すぐに親と面談し、学年の先生や養護教諭と連携しながら、解決の方向に取り組んだ。その結果、問題の改善が見られた。

(2)　児童Ａの保護者の変容

年度当初の親子関係は、良好とは言えない状況であったが、11 月下旬の面談では、Ａに寄り添う様子が見られた。Ａの話に耳を傾け、励ましの言葉や問題解決に向け、行動する様子が見られた。保護者との関係も改善され、Ａから「家族が話を聞いてくれるようになった。家にいると安心するようになった。」との言葉を聞くことができた。

３　課　題

＜児童について＞

(1)　調査研究から、困ったときや悩みがあるときに自分から「相談しない」と回答した児童が 10％いた。理由には、「相談することへの抵抗感」「悩みが解決しない」という意見が多く挙がった。そのため、「相談することで気持ちが楽になるなど相談することの意味」を学習する指導計画を作成する。

(2)　調査研究から、4.8％の児童が一人でいる友達に声を掛けようと「どちらかと言えば思わない・思わない」と回答していた。子供同士の良好な人間関係を構築するための工夫を一層行う必要がある。

(3)　調査研究による「相談機関に相談したい気持ちはあるが相談しない・相談しない」と回答した理由を考察すると、知らない人に相談する抵抗感を感じていることが予想される。今後、相談機関と連携した取組が必要と考える。

＜保護者について＞

(1)　調査研究にて、「悩みごとを誰にも相談できない・しない」と回答している保護者が１名いた。理由は、「言ってもどうにもならない」だった。一方、相談機関の利用については、「どちらかと言えば利用したい」と答えている。今後、相談機関と連携し、挙がった理由を踏まえた講話が必要となる。

(2)　調査研究にて、相談機関の利用を説明したところ６名の保護者が「どちらかと言えば利用しないと思った・利用しないと思った」と回答した。「個人情報の漏洩が心配」や「解決策の提示やアドバイスへの抵抗感」が理由として多く挙がったため、相談機関の支援方法について理解できる取組を行う。

Ⅵ　参考・引用文献

＜参考文献＞
○「学校における自殺予防プログラム－ GRIP －」
川野健治　編　新曜社
○「学級づくり（小学校高学年）」河村茂雄　著　図書文化
○「道徳を核にする学級経営」山本東矢　著　学芸みらい社
＜引用文献＞
○「児童生徒の自殺者数に関する基礎資料集」文部科学省
○「自殺予防大綱」文部科学省
○「Ｉs 2019 ～いじめ・自殺・暴力行為対応ハンドブック～」
埼玉県教育委員会
○「科学的に考える子育てエビデンスに基づく 10 の真実」
和久田学　著　緑書房

小学校外国語科の「話すこと（発表）」における「思考・判断・表現」の評価に関する研究

～比較可能性に基づいたより信頼性の高いルーブリックの開発を目指して～

さいたま市立下落合小学校　教諭　有　江　　聖

Ⅰ　はじめに

令和２年度から小学校での新学習指導要領の全面実施がされた。高学年では外国語活動が教科化され、他教科同様「知識・技能」（以下、「知・技」）「思考・判断・表現」（以下、「思・判・表」）「主体的に学習に取り組む態度」（以下、「主体性」）の３観点で評価を行うことが決められた。それに伴い、評価に関する問題は現在も多岐に渡っている。

Ⅱ　評価を取り巻く現状

中教審（2009）によると、小・中・高等学校の教員対象に行った観点別評価の実施状況調査において「思考・判断」は、最も「円滑に把握ができていない」項目として回答が多いことが分かった（図１）。

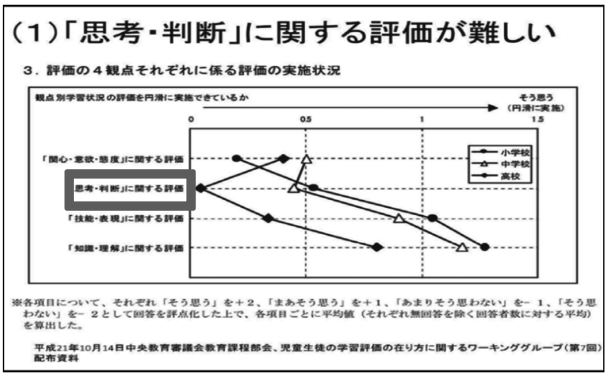


図１　小・中・高教員対象の観点別評価実施状況調査

Ⅲ　小学校外国語科における評価の現状

３－１　先行研究

株式会社イーオンが小学校教員に行った「小学校の英語教育に関する教員意識調査2021」では、「指導が難しいと感じている項目」に「話すこと」がトップに挙がり、小学校英語の教科化・早期化について、「予定どおり進めることが難しかった点・課題と感じた点」では、「児童の評価の仕方」がトップに挙がった（図２）。

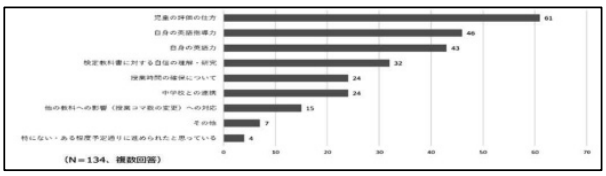


図２　予定どおり進めることが難しかった点・課題と感じた点

３－２　筆者による教員アンケート調査

筆者の勤務校で2021年7月に行った「グローバル・スタディ科（以下GS科）の指導と評価に関するアンケート」（n=34）の結果の一部を掲載する（さいたま市では外国語科の代わりにGS科を設置しており、３年生から観点別評価が導入されている）。

まず、「GS科の評価で困り感を感じたことはありますか」という項目に対して９割以上の教員が「ある」と回答し、先行研究と同様の傾向を示した。

次に、「評価の３観点の内容をどのくらい理解していますか」という項目については、「知・技」は「分かる」と回答をした教員が多い一方、「思・判・表」「主体性」の項目は「分からない」という傾向の回答をした教員が多かった（表１）。

表１　３観点の評価に関する自己評価（単位：人）

	分かる	まあまあ分かる	あまり分からない	ほとんど分からない
知・技	4	26	3	1
思・判・表	0	5	20	9
主体性	0	7	20	7

これらの結果から、小学校教員は外国語科の「話すこと」の「思考・判断・表現」の評価に、特に強い不安を感じていると考えられる。しかし、児童の学習成果を把握し、指導改善を行うために評価は欠かせない。

Ⅳ　「思考・判断・表現」の評価について

西岡他（2201）は、「知識やスキルを課題や場面に応じて自分で考えて総合させて発揮する力（思考力、判断力、表現力等）の評価には、パフォーマンス評価（以下PT）が有効である」と述べている（p.113）。また、「ルーブリックは、思考力や判断力といった高次の目標を質的に把握する評価の方法論である」と述べている（p.116）。この理論を基に本実践では、「思・判・表」の測定のためにPT（プレゼンテーション）を実施し、ルーブリックを用いて評価を行う。

４－１　ルーブリックの分類と記述形式

小泉（2016）によるとルーブリックには以下のような種類があり、タスクを中心とする小学校外国語科においては「総合的・タスク特有型ルーブリック」が、より適しているとされている（表２）。

表２　ルーブリックの分類（小泉《2016》より抜粋）

評価方法による分類	
⑴　総合（holistic）	発話を全体的に評価、１つの得点を出す。
⑵　分析（analytic）	発音、流暢さなど各規準で評価、複数の得点を出す。
測る能力の種類による分類	
⑴　一般型（generic）	広く使用可能で、結果の一般化がより可能。一般的能力を図るのが意図。
⑵　タスク特有型（task-specific）	タスク形式ごとに作成。特定のタスクに限定される能力を測る。

また、ルーブリックの評価基準の記述形式についてダネル他（2014）は、最高到達点（A評価）のみを記載した「採点指針ルーブリック」と、各段階の到達点を記載した最も一般的な「３段階ルーブリック」があると述べている。それぞれの特徴や利点については著書を参考に以下のように整理できる（表３）。

表３　各ルーブリックの特徴（著書を基に筆者が表に整理）

採点指針ルーブリック	３段階ルーブリック
・学生の到達点を常に念頭に置いて採点に集中できる。 ・時間がかからない。 ・採点のブレが少ない。	・各段階の基準が詳細に記述されているため、作文や作品の評価に適している。 ・該当箇所を探すのに手間がかかる。

以上のことを踏まえると、プレゼンやスピーチのように短い時間の中で素早く正確な評価が求められる場面では、採点指針ルーブリックを使用することが適していると考えられる。

４－２　PTとルーブリックによる評価の問題点

鈴木（2019）は「ルーブリックによるPT評価は、一般に評価の妥当性は高いといわれている。（中略）逆に、評価者間信頼性の問題がある。異なる評価者で評価結果がかなり不一致になってしまうことである」（p.25）と述べている。これには、評価基準の曖昧さや評価者個人の先入観が関係している。さらに、宮本（2017）は、「パフォーマンス評価のような総括的評価は選抜の資料として用いられることもあるので、（中略）特に評価者間信頼性が高いことがまず必要である」と述べている（p.30）。

それらの解決の手立てとして近年、西岡（2021）では、信頼性を発展させた「比較可能性」とよばれる概念が提起されている。これは、複数の評価者間で評価規準・基準を共通理解し、同じ採点規則に従うことによって、評価の一貫性が確保されているかどうかを検討する視点である。

外国語科ではPTを実施する機会が非常に多い。児童の到達度把握と指導改善のためには、PTの実施とルーブリックによる評価は欠かせない。一方で、小学校教員の評価への不安度の高さやルーブリックによる評価の信頼性の問題が存在している。信頼性の確保ができないまま、不安感の強い状態で評価をしても、本末転倒ではないだろうか。しかし、小学校外国語科におけるルーブリックの開発や評価の信頼性に関する先行研究は少なく、喫緊の課題である。

Ⅴ　実践研究について

５―１　研究の目的と仮説

本研究は、これまでの経緯を踏まえ、小学校外国語科の「話すこと（発表）」における「思・判・表」のより信頼性の高いルーブックの開発を目的としている。本稿では、小泉（2016）とダネル他（2014）の理論から、「総合的・タスク特有型採点指針ルーブリック」に高い信頼性があるという仮説の基、比較可能性の概念を用い、信頼性の高いルーブリックの開発を目指す。仮説は以下のとおりである。今回は「信頼性＝評価者間信頼性」と定義する。

仮説：外国語科の「話すこと（発表）」において「思考・判断・表現」の評価を比較可能性に基づき、総合的・タスク特有型採点指針ルーブリックを用いることで、より信頼性の高い評価が行えるだろう。

仮説：外国語科の「話すこと（発表）」において「思考・判断・表現」の評価を比較可能性に基づき、総合的・タスク特有型採点指針ルーブリックを用いることで、より信頼性の高い評価が行えるだろう。

なお、本研究は、令和３年度の10月～３月に勤務校の４年生（128名）を対象に行った実践をまとめたものである（筆者は６年生担任）。今回は、G・S科の中の三つの単元における評価の実践について掲載する。

５－２　研究方法

仮説検証のために、鈴木（2019）等で言及されていた「評価者間信頼性」（複数教員による採点の一致度）を判断基準に用いる。今回は担任、ALT、筆者の３者による評価を行い、それをIBM SPSS Statisticsの「信頼性分析」にかけ、クロンバックのα係数を算出する。α係数は１に近いほど評価者間信頼性の高さを示す。一般的に、0.7以上で中程度、0.8以上で高い信頼性、0.9以上で理想的な信頼性と判断される。なお、採点指針ルーブリックの信頼性の高さを検証するために、初めに３段階ルーブリックとの比較検証を行う。

５－３　研究の流れ

本実践は、４年生の「日本の美しい四季」「ふるさと再発見」「大きくなったら」の３単元で行い、研究の流れは比較可能性の概念に基づき、全ての単元を通じて図３のように統一した。

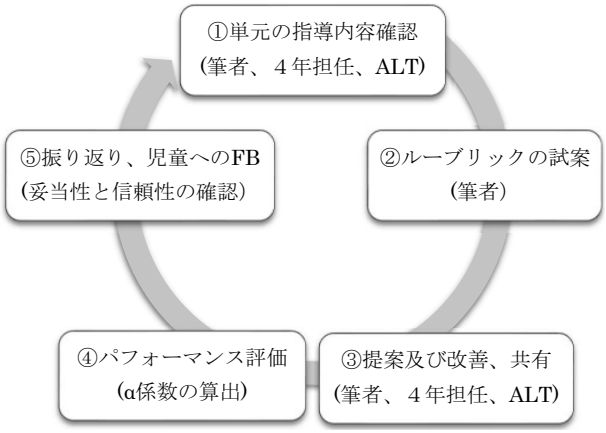


図３　研究の流れ（比較可能性に基づいて）

大前提として、評価のための活動にならないよう、単元導入前に該当単元の目標と指導内容の確認を４年生担任、筆者、ALTで行った。それを踏まえた上で、筆者が単元末プレゼンで使用する採点指針ルーブリックと３段階ルーブリックを試案する。それを４年生担任、ALTに提案及び改善し、到達点と採点基準の共通理解を図る。その後、指導計画の元で授業を進め、２クラスごとに違うルーブリックを用いて単元末のプレゼン評価を行う。なお、担任とALTは授業内で、筆者はプレゼンを撮影したビデオを観て各クラスと同様のルーブリックで評価を行う。そして、それぞれの評定を点数化し（A：３点、B：２点、C：１点）、「信頼性分析」にかけてα係数を算出し、比較検証を行う。使用するルーブリックは以下のとおりである（表４）。

表４　単元ごとに使用するルーブリックの種類

	１組	２組	３組	４組
日本の美しい四季	採点指針ルーブリック		３段階ルーブリック	
ふるさと再発見	３段階ルーブリック		採点指針ルーブリック	
大きくなったら	より評価者間信頼性の高いルーブリックを採用			

これを２単元どちらのパターンも行った後に、２つのルーブリックに関するアンケートを担任とALTに行う。α係数とアンケートの結果から、採点指針ルーブリックの信頼性について考察する。なお、ルーブリックは田村（2021）と瀧沢（2021）を参考に作成した。

５－４　「日本の美しい四季」での実践

まず、「日本の美しい四季」では、自分の好きな季節について理由等を交えながら説明でできるようになることが目標である。しかし、４年生では既習事項が少なく、表現の幅に限界がある。そこで既習事項に加え、内容に関するジェスチャーを「思・判・表」の項目として追加した。作成したルーブリックは以下のとおりである（表５、６）。

表５　「日本の美しい四季」の採点指針ルーブリック

プレゼンテーションルーブリック	
①**好きな季節を**紹介するために、②becauseや③I like ～、I want to ～の表現を活用するとともに、④**既習事項を用いた追加の説明**や⑤**内容に関するジェスチャー**を加えるなどの工夫を通じてその季節の魅力を詳しく説明している。	
下線部が４つ以上入っている	A
下線部が３つ入っている	B
下線部が１～２つ入っている。	C

表６　「日本の美しい四季」の３段階ルーブリック

	プレゼンテーションルーブリック
A	好きな季節を紹介するために、becauseやI like ～、I want to ～の表現を活用するとともに、既習事項を用いた追加の説明や内容に関するジェスチャーを加えるなどの工夫を通じてその季節の魅力を詳しく説明している。
B	好きな季節について、becauseを用いて理由の説明をするとともに、I like ～やI want to ～などの既習表現を活用して、その季節の魅力を詳しく説明している。
C	好きな季節について、becauseやI like ～やI want to ～などの既習表現を用いて魅力を説明することが難しい。

比較検証のために、A評価の記述を同様とし、BとCはAの記述から該当部分を抜いていく形で作成した。このルーブリックと各クラスの名簿を記載した評価シートが以下のとおりである（図４）。

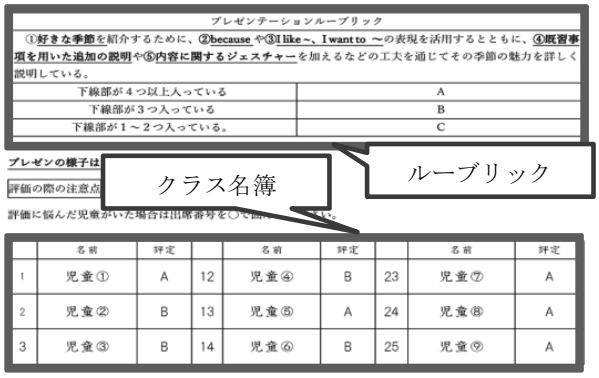


図４　PTで使用した評価シート（採点指針ルーブリック）

５―５　ふるさと再発見での実践

次の「ふるさと再発見」は、埼玉県の名所について調べ学習を行い、行きたい理由や魅力についてプレゼンを行う。本単元では、自分の考えや気持ちを表す表現を学習する。それを踏まえた上で以下のようなルーブリックを作成し、評価を行った。今回は、採点指針ルーブリックのみを掲載する（表７）。

表７　「ふるさと再発見」の採点指針ルーブリック

プレゼンテーションルーブリック	
①**埼玉県の施設や場所**のことをよく知ってもらうために、②I want to go to～や③because を使って名所や理由を話すとともに、④**追加の説明**や⑤**自分の考えや気持ち**などを含めてより詳しく話している。	
下線部が４つ以上入っている	A
下線部が３つ入っている	B
下線部が１～２つ入っている。	C

５－６　評価者間信頼性の分析結果

２単元での３者による評価をクラスごとに分析し、算出したα係数が以下のとおりである（表８）。どちらの単元でも採点指針ルーブリックを活用した２クラスで高いα係数が算出された。

表８　各単元におけるクラスごとのα係数

	１組	２組	３組	４組
日本の美しい四季	採点指針		３段階	
	.928	.754	.719	.741
ふるさと再発見	３段階		採点指針	
	.484	.614	.819	.911

さらに、それぞれのルーブリックを使用した場合の評価者間信頼性ついて、詳細分析をかけた結果が表９、10のとおりである。今回は「ふるさと再発見」の２組（３段階ルーブリック）と４組（採点指針ルーブリック）の結果を一部掲載する。

表９　３段階ルーブリック評価の詳細分析（２組）

項目合計統計量				
	項目が削除された場合の尺度の平均値	項目が削除された場合の尺度の分散	修正済み項目合計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
担任２	4.89	.692	.581	.321
ALT2	4.64	.683	.311	.705
筆者２	4.75	.713	.419	.519

表10　採点指針ルーブリック評価の詳細分析（４組）

項目合計統計量				
	項目が削除された場合の尺度の平均値	項目が削除された場合の尺度の分散	修正済み項目合計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
担任４	4.47	.602	.902	.802
ALT4	4.40	.593	.807	.891
筆者４	4.53	.740	.775	.913

表の一番右にある「項目が削除された場合のCronbachのアルファ」（太枠内）に注目してもらいたい。これはそれぞれの評価者の結果が分析に入らなかった場合、α係数がどのように変化するかを示す数値である。例えば、表10の「担任２」による評価が削除された場合のα係数は.321となり、これはALTと筆者の評価の一致度を表している。それを踏まえた上でこの項目を見ると、３段階ルーブリックを使用した２組は数値にばらつきがあることが分かる（.321～.705）。一方で採点指針ルーブリックを使用した４組は、どの項目を削除しても0.8以上のα係数を維持している（.802～.913）。つまり、採点指針ルーブリックを使用した場合、どの組み合わせで評価をしても高い評価者間信頼性を維持できる可能性を示唆している。

５－７　教員アンケートの結果

また、次に４年生担任４名とALTに行った２つのルーブリックに関するアンケート調査の結果と自由記述の内容を以下に掲載する（表11、12）。

表11　二つのルーブリックに関するアンケート

n=5 単位：人

	採点指針	3段階
①評価がしやすい。	4	1
②時間がかからない。	5	0
③正確に評価できる。	4	1
④フィードバックがしやすい	4	1
⑤指導改善に繋げやすい	4	1
⑥ALTとの連携が図りやすい	4	1

表12　ルーブリックに関する自由記述（一部抜粋）

・基本的に採点指針の方がやりやすかったのですが、最重要項目などの重みがついているとよりやりやすかった。
・採点指針の方が正確で簡単。説明責任を果たせ、児童へのフィードバックにも使える、所見にも使いやすい。

アンケートの結果からも、採点指針ルーブリックは妥当性や信頼性、実施容易性の観点からも使用しやすいと考察される。以上のことから、比較可能性に基づいた採点指針ルーブリック評価には、高い信頼性があるという示唆を得た。ここまでで仮説の立証にある程度の効果があったと考察できる。しかし、採点指針ルーブリックはどの項目ができているか分からず、担任によっては話しぶりなどを無意識に評価に考慮しており（図５下線部）、評価の信頼性に多少なりとも影響を与えている。また、表８からも見て取れるように、採点指針ルーブリックを活用しても.754～.928とα係数にばらつきがあるなどの課題が明らかとなった。

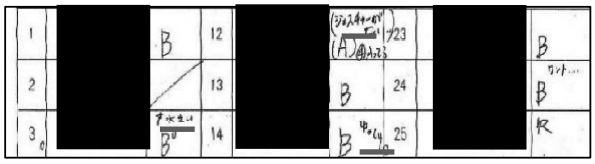


図５　話しぶりを評価に考慮している可能性のある部分（一部抜粋）

Ⅵ　安定した信頼性を実現するために

６－１　チェック式採点指針ルーブリックの開発

前述を踏まえた更なる信頼性獲得のため、ダネル他（2014）で言及されているチェックボックスを取り入れた採点指針ルーブリックを以下のように開発した（図６）。

評価基準	基準	評定
自分の夢を知ってもらうために、①なりたい職業について②"I want to be ~"や③"because"を使って紹介するとともに、④"I want"や⑤"I like"、⑥"It is ~"などの表現を活用して、より詳しく自分の考えや気持ちなどを含めて話している。	下線部が５つ以上入っている	A
	下線部が３～４つ入っている	B
	下線部が１～２つ入っている。	C

できた部分にチェックを付ける（知識・技能は必要に応じて使ってください。＊ジェ＝ジェスチャー）

		知識・技能		思考・判断・表現（太枠は重要項目）						
	Name	声	ジェ	①	②	③	④	⑤	⑥	評定
1	[redacted]									
2										
3										
4										
5										

図６　チェック式採点指針ルーブリック（黒塗りは児童名）

ダネル他（2014）は、「チェック式ルーブリックは、評価のスピードやその容易さという点では最も優れている。これはプレゼンテーションのように短時間で詳細に評価しなくてはならない場合に適している。発表を聴きながら、それぞれの該当項目をチェックすればいい」と述べている。

これまでと同様に、名簿上部に採点指針ルーブリックを掲載する。さらに、名簿には下線部ごとのチェックボックスを設け、できた項目にはチェックを付けることができるようにした。これにより、どの項目ができていたかを可視化でき、児童への具体的フィードバックが可能となる。また、話し振りが評価に混同されぬよう、独立した項目として設定した。このチェック式採点指針ルーブリックを使用し、３学期末の単元である「大きくなったら」のプレゼンテーションの評価を行う。

６－２　「大きくなったら」での実践

研究の流れはこれまでと同様である。「大きくなったら」は、自分の将来の夢について理由等を交えて言えるようになることが目標の単元である。この単元では、これまで学習した表現を駆使して多様な表現をできる。３月上旬に「大きくなったら」の単元末プレゼン評価に上記のルーブリック（図６）を用いて行い、α係数を算出した。なお本単元は、コロナウイルス感染症拡大による学級閉鎖や職員の出勤停止等の事情により、通常実施ができた３クラス分のデータを掲載する（表13）。

表13　チェック式採点指針ルーブリックによるα係数

	２組	３組	４組
大きくなったら	.857	.950	.918

チェック式採点指針ルーブリックを使用して評価を行った結果、どのクラスでも高い信頼性を示すα係数が算出された。また、最低値が.857と安定した評価者間信頼性を示した。

最後に、実際に使用した評価シートを記載し、評価の実際について論じていく。今回は担任A、Bと筆者による評価シートの一部を掲載する（図７～10）。なお、個人情報保護の観点から、担任名と学級名は伏せてＡやＢのように表記する。

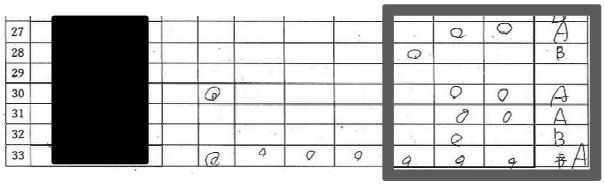


図７　担任Aによる学級Aの児童の評価（一部抜粋）

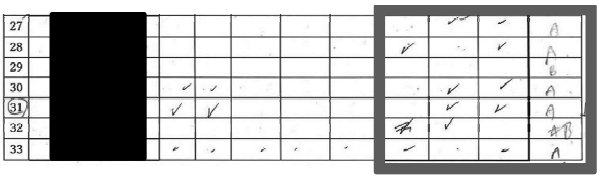


図８　筆者による学級Aの児童の評価（一部抜粋）

担任Aは、①～③の項目ではとりわけ突出した部分のみチェックし、④～⑥の重要項目のできた部分にのみチェックを付けるようにした（太枠内）。筆者も同様の方法を採用しており、太枠内を見ると、チェック部分と評定がほとんど一致していることが分かる。

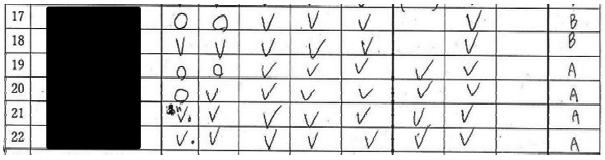


図９　担任Bによる学級Bの児童の評価（一部抜粋）

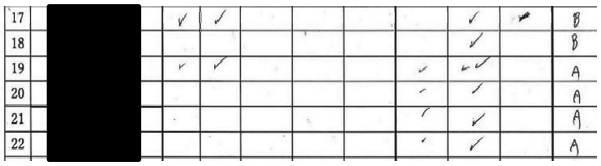


図10　筆者による学級Bの児童の評価（一部抜粋）

次に、担任Bは、できた項目全てにチェックを付け、よくできた項目には○を付けている。この例でも担任Bと筆者のチェックと評定は一致しており、話し振りなど他の要因との評価の棲み分けがされていると考えられる。

以上のことから、教員によって活用方法に多少の違いがあっても、高い評価の一致度が伺えた。

Ⅶ　成果と課題

７－１　成果

今回の実践では、「話すこと（発表）」における「思・判・表」のより信頼性の高いルーブリック開発のために、比較可能性に基づいた比較検証の結果、採点指針ルーブリックによる高い評価者間信頼性が算出され

た。しかし、いくつかの課題も散見され、更なる信頼性獲得のために、評価項目ごとにチェックボックスを設けたチェック式採点指針ルーブリックを開発した。その結果、どのクラスでも安定して高い評価者間信頼性が算出された。これらから、仮説の実証に一定の効果があったと考える。アンケートからも、採点指針ルーブリックは指導改善や説明責任の面からも活用しやすいという示唆を得た。

また、何をもって「思・判・表」を評価するかという議論は尽きないところではあるが、言語的側面を「思考・判断・表現」、非言語的側面（ジェスチャーや声の大きさなど）は「主体的に学習に取り組む態度」の評価に組み入れた。担任群の評価を見ると、無意識のうちに話し振りを考慮してしまうことも見受けられたため、このように棲み分けをすることで、よりクリアな評価ができるのではないかと考える。

このルーブリックを「話すこと（発表）」の評価に導入していくことで、英語を専門としない担任でも高い信頼性の基での評価と指導改善が可能になるのではないかと考える。しかし、そのためには比較可能性の基、単元の目標と指導内容を理解し、評価基準を共有しておくことが欠かせない。主観的な評価に陥らないためにも、基準の共有は重要である。そうした前提でルーブリックを用いることで、より信頼性の高い評価が実現する。これは、どの教科にも言えることだろう。

７―２　課題と今後に向けて

更なる評価の信頼性や妥当性獲得に向け、評価基準の表記について見直す必要がある。既習事項について“it is～”　“I want～”という記載をしたが、この場合、「知・技」に意識が移ってしまう恐れがある。「自分の気持ち」や「したいこと」という概念的記載を採用していく方が、より「思・判・表」の評価記述として適しているだろう。

次に、短い時間の中での評価には限界があり、複数の観点を同時に一人で見取ることはふさわしくない。そこで、今回作成したルーブリックを用いて、担任は「思・判・表」、ALTは「知・技」という評価の棲み分けをするとよいのではないだろうか。

また、評価の信頼性を高めるためには明確な評価基準の作成と並んで、「評価者トレーニング」が欠かせない。今回の研究結果を活用し、教員の不安感解消のためにも、より効果的なトレーニングを校内研修等に取り入れていく必要がある。

今回は「話すこと（発表）」の評価について研究を行った。プレゼンは、ある程度の型があり、評価が「やり取り」と比べて容易である。今後は、教員が最も困難を感じている「話すこと（やり取り）」に適したPTやルーブリックの開発に取り組んでいく決意である。

そして、評価基準や内容は児童と共有し、指導改善に適切に活用してこそ意味を成す。今後は、単元導入時やパフォーマンステスト実施の際に、ルーブリックを児童と共有し、ルーブリックによる波及効果や動機付けについて研究を進めていく必要がある。

Ⅷ　終わりに

繰り返しになるが、評価を研究するに当たり重要なことは、「評価のための活動」にならないことである。身に付けさせたい資質能力を明確にして指導に臨み、評価及び改善を行うPDCAの流れを意識することが何よりも重要である。

今回はあくまでも、短い時間で正確な評価の求められる「話すこと（発表）」の評価には、総合的・タスク特有型チェック式採点指針ルーブリックが適しているという示唆を得た。これは、決して他のルーブリックを批判するものではない。信頼性と妥当性、実施可能性はトレードオフの関係にある。それぞれのルーブリックの特徴や利点を理解し、使い分けることが大切である。

そして、本実践が評価に困り感を感じている先生方や子供たちの更なる育成に少しばかりの一助になることを願い、結びとさせて頂く。

【引用参考文献】

株式会社イーオン.（2021）.『小学校の英語教育に関する教員意識調査 2021』.

小泉利恵.（2016）.「ルーブリックを使ったスピーキングの評価」.『英語教育』12月号, 34-35.

瀧沢広人（著）.（2020）.『小学校英語サポートBOOKS　単元末テスト・パフォーマンステストの実例つき！小学校外国語活動＆外国語の新学習評価ハンドブック』東京：明治図書.

田村学（著）.（2021）.『学習評価』東京:東洋館.

ダネル・スティーブンス/アントニア・レビ（著）.（2014）.『高等教育シリーズ163　大学教員のためのルーブリック評価入門』東京：玉川大学.

中央教育審議会.（2009）.「児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ（第7回）配布資料」.

西岡加名恵・石井英真（編）.（2021）.『教育評価重要語辞典』東京：明治図書.

日本図書文化協会.（2017）.『指導と評価3月号』東京：日本教育評価研究会.

日本図書文化協会.（2019）.『指導と評価9月号』東京：日本教育評価研究会.

文部科学省.（2017）.「小学校学習指導要領解説　外国語編」.

小学校第３学年における投能力向上の実践
～「走・跳の運動」領域に横断的に取り入れた ヴォーテックスフットボールの有効性の検討～

吉川市立三輪野江小学校　教諭　楠　　聖次郎

１　はじめに

児童生徒の体力は、近年多くの項目で横ばいまたは、向上の兆しがみられたものの、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により児童生徒の体力の低下傾向にあり、一層深刻な問題となっている。[1]文部科学省が出した「新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言」（文部科学省、2020）では、「（前略）、学校における感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減しつつ段階的に実施可能な教育活動を開始し、その評価をしながら再開に向けての取組を進めていくという考えが重要である。」と明記されている。つまり、感染予防をしつつ子供たちの学びを保障していかなければならないと考えられる。

この状況の中で、埼玉県内の児童生徒の[3]「令和３年度全国体力・運動能力、運動習慣等」の結果では、小・中学校において体力合計点、総合評価に係る数値は全国と比較して非常に高くなっている。しかしながら、全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果における[4]令和３年度と元年度の埼玉県の平均値と比較すると体力合計点は、全国の平均値と同様に低下している。この中で特に、問題視されているのが「ボール投げ」である。全国的な投能力の低下が問題視されている中で、埼玉県は、全国平均値よりも低い値となっている。すなわち、埼玉県では「投能力」の向上が体力向上の最重点課題と考えられる。

投動作とは、歩く、走るなどの系統発生的な動作とは異なり、繰り返し練習することにより獲得される個体発生的な動作であり、後天的要因による影響が大きい。投動作とは、バイオメカニクス的には下肢、体幹、上肢の動作を連動させることにより、手に保持した物体を加速させて遠くに飛ばす運動であり、ムチ動作（基幹部から末端部へ力学的エネルギーが順次伝達される現象）の獲得が重要であると言われており、他の運動への影響力の大きさも先行研究から報告されている。

また、2020年度から施行されている学習指導要領の中では、走・跳の運動領域の中で「児童の実態に応じて投の運動を加えて指導することができる」と明記された。ここでいう「投の運動」は、「遠くに力一杯投げること」に指導のねらいが置かれており、投の粗形態の習得を目指している。

これらを鑑み、本研究は、「走・跳の運動」領域内で投能力向上に向けた取組として、ヴォーテックスフットボールを児童同士が10分間、投げ合うことにより児童の投能力に対してどのような影響を与えるのかを検証する。本研究でいう、投能力とは、投動作類型と投動作の習熟度、飛距離とする。

２　先行研究の批判的検討

[5]豊島（1980）は、幼児・児童を対象として投動作の発達を検討した。その報告によれば、男子は加齢とともに動作は改善されるが、女子には動作の改善が見られないとしている。加えて、オーバーハンドスローの動作習熟には適時性があるとしている。また、[6]渡辺（1998）は、その遠投能力には性差が認められ、男子は幼児期から続いて小学校期に発達傾向がさらに加速されるのに対して、女子は男子よりその水準が低く、発達速度も緩やかであるとの報告がある。新体力テストから見ても投能力の実態は、他の運動領域に比べ早期から性差がみられ、女子の投能力が劣っている。そして、男子に見られる運動能力測定種目の結果においては、ピークレベル時期の重なりが女子には見られず、最大発育速度の出現時のピークレベル出現時との差が大幅に異なる。同様に[7]Glassow and Kruse（1960）も女子には加齢に伴い投能力の急激な変化がないことを示し、その原因として、投運動学習の不足による投動作の未習熟が挙げられ、幼児・児童期の差が成人まで存続するとしている。加えて、[8]松浦（1969）は、遊びも含めて生活全体で跳んだり、投げたりすることが少なくなり、生活の中で運動経験が少なくなることが投能力低下につながるのではないかと指摘している。

さらに、[9]桜井（1992）によれば、投動作は、練習を繰り返すことによって、はじめて習得される個体発生的な動作であるということや、投動作は遺伝的要因よりも学習経験量などの環境的要因の影響を強く受けているという報告もしている。つまり、上記の先行研究より、小学校期にその動作の獲得が極めて重要であると考えられる。性差により適時性や経験の有無によってオーバーハンドスローの習得には個人差が生まれてしまうため、小学校期に多くの練習機会を得らなければならない必要性が窺え、多くの経験を要する。また、激動する社会や生活の中で運動機会をどれだけ得られるかが小学校段階の子供たちの問題である。

これらの先行研究から、小学校児童の体力低下に歯止めをかけ、中でも向上を急務としているソフトボール投げに関わる投能力を向上させなければならない。また、急激な社会の変化がもたらした、運動する場や仲間、時間の減少という現状から脱却し、子供たちの置かれている状況を理解し、子供たちの適時性を見逃さず投能力を

高めなければならない。加えて、オーバーハンドスローの動作の巧拙は、学校体育や生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成及びその実践において障害となる可能性が示唆される。そのため、生涯スポーツの基盤を養うために学校教育の中で身に付けさせていかなければならないと考えられる。

３　研究方法

(1)　研究対象

埼玉県吉川市立Ａ小学校第３学年児童

《男子 25 名、女子 12 名の計 37 名》

（特別支援学級児童３名含む）

(2)　調査内容及び調査方法

①事前事後【以下、事前：pre、事後：post とする】の[10]投動作７類型の分類（吉田 1983 より引用改変：図１、表１参照）

② pre、post のボール投げの飛距離の比較

③ pre、post の投動作の[11]習熟度の比較（高本ら 2003 より引用改変：表２参照）

④ pre、post の飛距離と投動作の相関関係の比較

※なお、本研究は、日本ソフトボール協会１号ボール（ゴム製）を使用し、文部科学省新体力テストと同様の条件で実施した。また、試技者の投球方向と左右側方 90 度、距離５m、高さ１mにそれぞれカメラを置き撮影を行った。

(3)　実施期間

2021 年 10 月～ 11 月

「走・跳の運動」の授業冒頭 10 分間（10 分×７回）

(4)　使用したヴォーテックスフットボール

NISHI ヴォーテックスフットボール

（全長：約 31.5cm、直径約 8.5cm、重さ約 130g）

【写真１　ヴォーテックスボール】

【写真２　ヴォーテックスボール使用の様子】

(5)　実施方法

10m ～ 25m 程度離れて 10 分間投げ合う。

(6)　指導内容

①毎時間のめあて

第１・２時	おもいっきり腕を振って投げよう。
第３・４時	強くにぎって投げよう。
第５・６時	斜め上に向かって投げよう。
第７時	「ピュー」と音が鳴るには、どんな風に投げたらいいか考えよう。

②教師による全体へ向けての言葉掛け例

・斜め上に向かって投げるよ。
・ロケットが跳んでいくように投げるよ。
・「ピュー」って音が鳴るにはどうしたらいいかな。
・腕を「シュッ」って振るよ。
・「ぎゅっと」としっかり握るよ。
・おもいっきり投げてね。

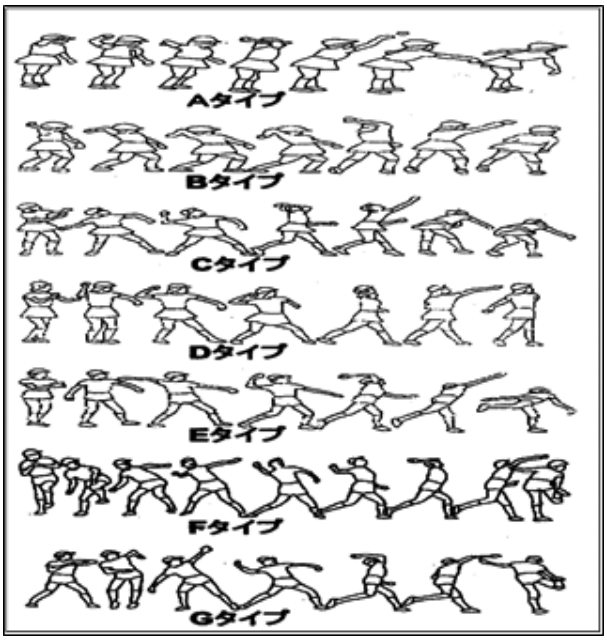
※本授業では、投動作が未習得の児童が多かった。また、小学校３年生という児童の発達の段階を考慮して、「肘を上げて」や「体をもっと回転させて」などの具体的な身体動作における技能指導は行っていない。児童が投げる際にイメージしやすい言葉掛けを行い、主体的に運動に取り組めるようにした。

(7)　統計処理

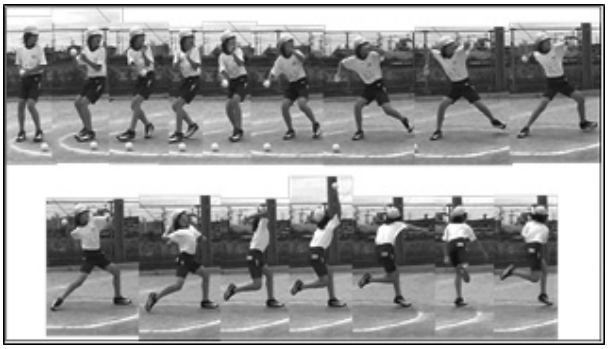
単元前後における投動作習熟度と飛距離を２群間の対応のある t 検定で分析した。

４　結果と考察

(1)　投動作類型について



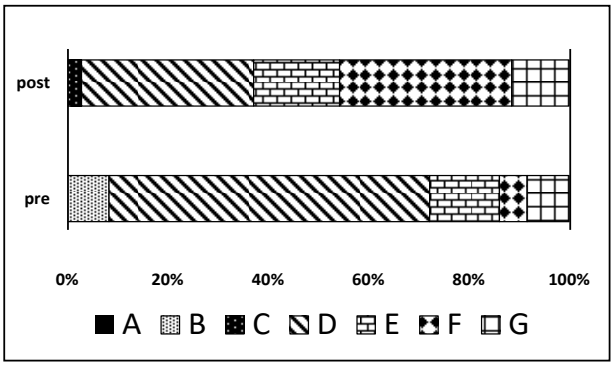
【図１　投動作７類型】



【図２　Ｇタイプの典型例】

【表１　投動作７類型の説明】

タイプ別特徴	
Aタイプ	この投げ方は、腕の振りだけで投げ、他の身体部分がほとんど関与していないことを特徴とするフォームである。投方向に身体の全面を向けて構え、腕の引きだけでバックスウィングをおこなっている。
Bタイプ	この投げ方は、投げ腕を後方に引きながら軸足である右（左）足を前に踏み出して準備局面を作っているところに特徴がある。Aタイプよりは大きなバックスウィングがなされているが、踏み出す足がいわゆる逆足であるため、十分な腰の捻りや回転が使えていない。
Cタイプ	この投げ方は、踏み出し足に軸足を引き寄せ終わるまでに足を入れ換える所に特徴がある。バックスウィングは、両足を揃えた状態から投げ腕を後方に引き左（右）足を前に踏み出して行うので、後方への体重移動が見られない。
Dタイプ	この投げ方は、バックスウィングにおいて軸足を前に出し、身体を投方向に斜めにした構えから、前方に体重を移動しながら投げ出しているところに特徴がある。
Eタイプ	この投げ方は、Dタイプと類似している。しかし、Dタイプに比べて、身体の反りの反動がボールへの加速に利用されていることが特徴である。軸足を前に出し、踏み出し足を前方に踏み出しながら投げ腕を大きく後ろに引き上体を反らせている点はDタイプにはみられない。
Fタイプ	この投げ方は、準備局面において、踏み出し足を軸足に引き寄せ、一端、体重を後方に移してから前方へ移動する所に特徴がある。
Gタイプ	この投げ方の特徴は、踏み出した足に軸足を引きつけ、ホップしながらもう一度踏み出すことである。そのため、前方への移動幅が大きく、助走と同じ効果が得られる。



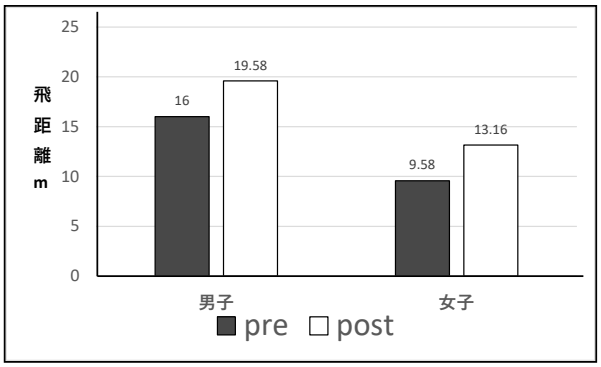
【図３　投動作類型結果】

図１と表１では投動作類型（吉田より引用改変、1983）を示した。これは、A タイプから G タイプ（図２）に向かうほど投動作が向上していることを示している。また、図３では、pre と post の児童の投動作類型の結果を集計した。

図３から pre では、E・F・G タイプが約 30％だったが post では、E・F・G タイプが約 65％に増えていることがわかる。また、pre では、D タイプが約 60％確認されていたが、post では、D タイプの人数が約 35％に減少した。さらに、post では B タイプの人数が減り C・D タイプに移行していることがわかる。

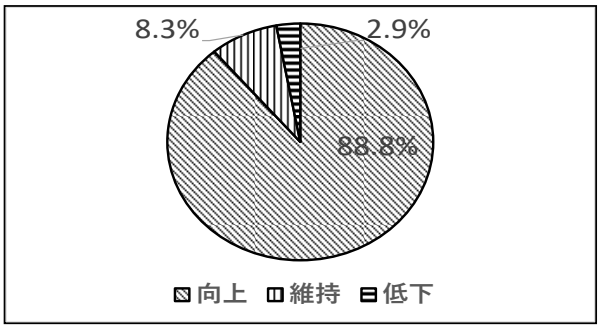
以上のことから、全体的に A タイプから G タイプの方向へ児童の類型が移行していることにより、単元前後で投動作の技能が向上していることがわかる。投動作は、繰り返し練習することにより習得される動作であることから、本授業により技能が向上されたことが考えられる。

(2)　飛距離について



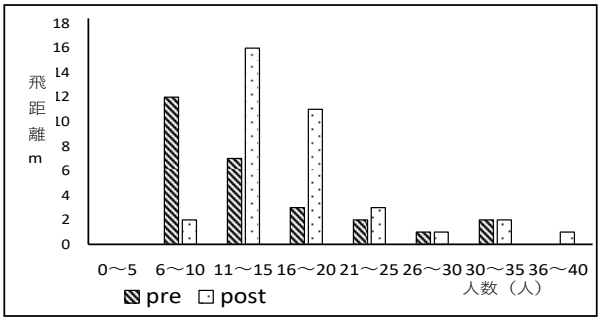
【図４　男女別飛距離（平均記録）】

図４では、男女別の pre と post の飛距離の結果を比較した。男女共に有意差は認められなかったものの、平均記録の向上が見られる。男子では、16m から 19.58m に向上し、女子では、9.58m から 13.16m に向上している。令和３年度埼玉県新体力テストの結果から比較しても、男子では、約４m、女子では、約 3.5m 埼玉県の記録を超えている。また、有意差が出なかった理由として、実施した人数の少なさが考えられるため、今後は実施者を増やす必要がある。



【図５　向上・維持・低下した人数】

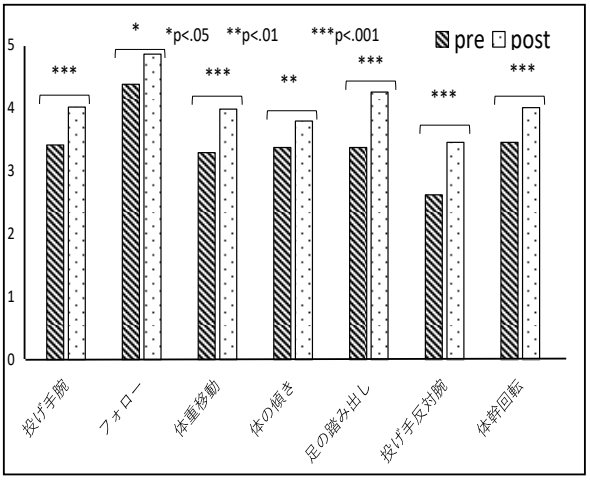
図５には、向上・維持・低下した人数について示した。約 88.8％（33 人）の児童は、記録の向上が見られた。記録が変わらなかった児童が約８％（３人）。記録が低下した児童は約３％（１人）であった。



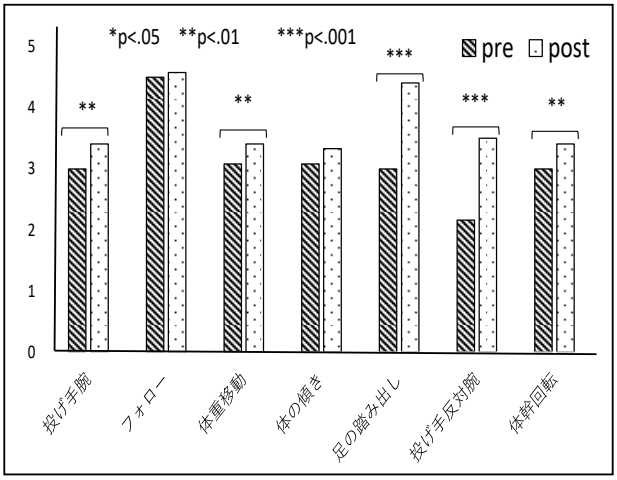
【図６　男女混合の飛距離別ヒストグラム】

図６では、男女混合の飛距離別ヒストグラムを示した。全体的に飛距離が向上していることがわかる。特に、pre で６m ～ 10m に位置していた児童が post では、減少していることがわかる。つまり、低位の児童の飛距離の高まりが顕著に表れている。

(3) 投動作における各局面の習熟度について



【図７　男子の投動作各局面における習熟度】



【図８　女子の投動作各局面における習熟度】

【表２　オーバーハンドスローの観察的動作評価基準】

	習熟度１（１点）	習熟度２（２点）	習熟度３（３点）	習熟度４（４点）	習熟度５（５点）
投げ手腕準備動作	身体前面で肘を曲げた状態から、前下方のに伸展させる	肘を曲げた状態から、上体へ引き上げ、前下方のに伸展させる	肘を屈伸させたまま上腕を外転・水平内転させ後方へ引き上げる	投射時に肘の伸展が不十分であるが、肘・手首にしなりがきいている	手腕が肩を中心に反時計回りに回し、投射時の肘の伸展が十分であり、肘にしなりがきいている
フォロースルー	フォロースルーがみられない	肩のラインと地面を水平にしたとき、フォロースルーが肩のラインより上にある	肩のラインと地面を水平にしたとき、フォロースルーが肩のラインと平行、もしくは下にある	前下方への十分なフォロースルーがみられる	肩を水平内転させながらの投げ手逆側の前下方へのフォロースルーがみられる
体重移動	完全に投げ手側の足に体重が残っている	ほとんど体重移動しない	体重移動は、しているが、投射時、フォロースルー時ともに不十分	投射時の体重移動は十分であるが、フォロースルー時は不十分	全体を通して後方から前方への完全な体重移動をしている
体の傾き	バックスイング時に全く後傾せず、投射時に全く前屈していない	ほとんど後傾せず、投げ手逆側の足に軽く乗る程度	わずかに後傾きが見られ、投射時に十分な前傾姿勢ではない	後傾が見られ、踏み出し足に対し前傾姿勢が保たれている	大きな後傾きが見られ、踏み出し足に対し十分な前傾姿勢が保たれ、
足の踏み出し	両足をそろえたまま投げている	投げ手側足が投射時に踏み出している	投げ手反対側足が小さく一歩踏み出している	投げ手反対側足が前方へステップしている	投げ手反対側足が前方へステップし、大きく一歩踏み出している
投げ手反対腕	下げたまま	前下方へ小さく出す	前方へ突き出すが、投射時の体幹方向への引き戻しは見られない	前方へ突き出し、投射時に体幹方向へ引き戻す	前下方に突き出した時に掌が相手の方向を向き、投射時に体幹方向へ引き戻す
体幹回転	投射方向へ正対したままで、体幹は回転しない	投射方向へ正対したままで、肩がわずかに回転する	バックスイング時に後方へ回転する	バックスイング時に後方へ回転する 投射時の前方への捻り戻しの回転がみられる	バックスイング時に後方へ大きく回転する 投射時に、肩を水平内転させながら、回転する

※　下線部が改変箇所

本研究においては、オーバーハンドスローの動作の類型化のみならず、その動作の観察的評価基準（表２：高本ら、2003 より引用改変）を作成し、身体部位別局面の詳細な分析を行った。なお、本研究では、投げる側の手腕を「投げ手腕」と定義した。

図７と図８には、男女別の投動作各局面における習熟度の変化について示した。身体部位別平均得点（５段階評価による得点化）の pre と post の比較をすると、男子では、７局面すべてで有意差が見られた。特に、「投げ手腕」と「体重移動」、「足の踏み出し」「投げ手反対腕」「体幹回転」で大きな変化が見られた。女子では、５局面で有意差が認められた。しかし、「フォロースルー」と「体の傾き」では有意差が認められなかった。フォロースルーに関しては、検証前から高い数値を示していたため、変化が見られなかったことが考えられる。

先行研究の[12]吉畠（1995）では、「合理的な投動作とは、体のひねり（肩・腰）の回転を用いて力を起こし、全身をムチのように動かして、中心から質量の小さな末端部へ順次力を移動させる。また、作用時間を長くするためボールの移動距離を長くモーションを大きくする必要がある。」と述べている。投動作をうまく行うことのできない者のフォームは、発達の初期段階に見られる腕だけの動作になり、体を有効に使うために必要な腰の回転がなく、モーションも小さい。

加えて、両足が揃い投方向に正対した状態であることや、肘の位置が低く屈曲したままのスイングなど初歩的な欠陥が多くみられるなども報告している。したがって、投動作を指導する際に、腰の回転を使いモーションを大きくするような準備局面の姿勢づくりが有効であると考えられる。

さらに、[13]石井（1975）は、投動作における非投球腕（反対手腕）の役割についての研究を行っている。石井は、「投動作において、非投球腕は、踏み出し足接地前の局面から前方に伸ばされ、体幹の回転が終了する局面では体幹に引き寄せられる。非投球腕の前方への伸展は、上胴の長軸周りの慣性モーメントを増大させるため、先行する骨盤部の回旋を抑える効果をもち、体幹部では上胴と骨盤の間にひねりが生ずると考えられる。」とし、非投球腕の重要性を述べている。そして、[14]塙（2010）は、遠くに投げるために必要な体重移動と体のひねりが習得されにくいと考え、上半身を支える下半身が記録に影響を及ぼすとし、上半身の動きを身に付けさせるために、足の動きに焦点付けた指導をしていくことが初期段階として必要であると報告している。

以上の先行研究では、投動作における各部位の重要性や力を生み出す体の使い方を述べている。つまり、各部位の習熟度の向上（準備動作）は元より、連動性を高めていかなければ投能力は向上しないことが考えられる。

(4) 飛距離と投動作各局面との相関関係について

【表３　pre 時の飛距離と各局面習熟度の相関関係】

	投げ手腕	フォロー	体重移動	体の傾き	足踏みだし	投げ手反対腕	体幹回転	飛距離
投げ手腕								
フォロー	.478**							
体重移動	.821**	.463**						
体の傾き	.727**	.381**	.868**					
足の踏み出し	.730**	.343**	.608**	.599**				
投げ手反対腕	.465**	.338**	.479**	.524**	.487**			
体幹回転	.945**	.494**	.843**	.781**	.801**	.474**		
飛距離	.748**	.254**	.615**	.614**	.755**	.567**	.748**	

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。n=37

【表４　post 時の飛距離と各局面習熟度の相関関係】

	投げ手腕	フォロー	体重移動	体の傾き	足踏みだし	投げ手反対腕	体幹回転	飛距離
投げ手腕								
フォロー	.254**							
体重移動	.719**	.483**						
体の傾き	.583**	.324**	.785**					
足の踏み出し	.393**	.180**	.492**	.488**				
投げ手反対腕	.077**	.188**	.194**	.275**	.185**			
体幹回転	.798**	.302**	.749**	.764**	.355**	.137**		
飛距離	.804**	.265**	.738**	.647**	.374**	.366**	.766**	

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。n=37

表３・表４は、クラス全体の pre と post における飛距離と各局面習熟度の相関関係を示した。なお、表３と表４は、男女別に分けると女子の人数が少なくなり、相関関係の結果を示すことができなくなるため男女混合で統計処理を行っている。

pre では、「投げ手腕」と「足の踏み出し」、「体幹回転」に有意な正の相関が見られた。

post では、「投げ手腕」と「体重移動」、「体幹回転」に有意な正の相関が見られた。

pre と post のどちらでも「投げ手腕」と「体幹回転」には、強い相関が認められた。ビデオ動画から観察すると、pre では、上手く勢いをつけられずに投球時における体の連動性もなく、ボールに力を伝達できていないという問題点が見受けられていたが、post では、改善されている児童が多く見られた。つまり、各部位の習熟度の向上（準備動作）は元より、連動性を高まりによって投能力が向上したことが考えられる。また、「投げ手腕」と「体幹回転」の技能が向上したことにより、その他局面の習熟度も向上したことが推測される。

⑸　児童の感想（手記）について（一部抜粋）
※平仮名は、漢字に修正

・腕を「シュッ」と振ると遠くへ投げられるようになった。
・腕を速く振ると遠くへ投げられた。
・ボールを遠くへ投げられるようになると、楽しくなっていった。
・上手に投げられるとボールから音が鳴るので、それが嬉しかった。
・どうしたら音が鳴るのか考えながら運動に取り組むことができた。
・ロケットが飛んでいくようにボールを投げると遠くへ投げられるようになった。
・友達がアドバイスをしてくれたら遠くへ飛んでいって嬉しかった。
・最初は、上手く投げられなかったけれど、めあてを意識してたくさん投げていたら遠くへ投げられるようになった。
・ボールを「ぎゅっ」と握ると遠くへ強く投げられるようになることがわかった。
・遠くにある、体育館の屋根を狙って投げたら、遠くへ飛んだ。
・遠くの木のてっぺんを狙って投げる時が一番飛んだ。
・上手い人を見てから投げてみたら上手くいった。
・走ってから投げると勢いがついて投げやすかった。
・学校でやっている「とん・くる」投げを意識することができた。

児童の感想からは、腕を速く振ることやボールを強く握ることなどの知識の定着が図れている内容の記述に加え、どうしたら遠くへ投げることができるのかといった思考力・判断力・表現力等の記述も見られた。また、友達からのアドバイスも有効であったという記述が見られたことから、様々な要因によって技能向上が図れたと考えられる。さらに、課題に沿った学習を進めることが、児童にとって「わかる」と「できる」をスムーズにつなぎ合わせていることが推測できた。

5　まとめ

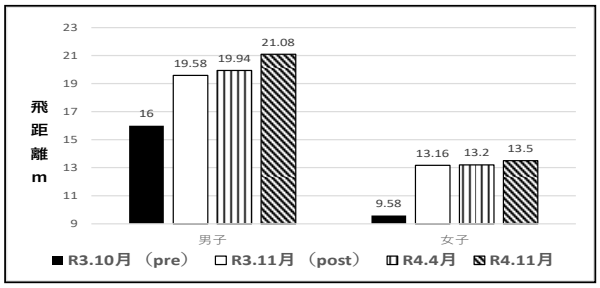
本研究では、新学習指導要領の走・跳の運動領域の中で「児童の実態に応じて投の運動を加えて指導することができる」と明記されたことを踏まえ、限られた時間の中での、ヴォーテックスフットボールの有効性が結果として表れたことに意義があると考える。短い時間であっても、継続した指導を続けることで小学校第３学年児童の投能力には､非常に効果があることがわかった。特に、飛距離の記録が低位な児童には、主体的に運動に取り組む環境を与え、投げる機会を確保することで大きな効果が得られることがわかった。加えて、投動作各局面の習熟度が向上することにより、投動作の連動性という観点でも向上していることが推測できた。さらに、投能力を向上させるためには、投動作の「投げ手腕」と「体幹回転」に重点をおいた指導を行うことで、より一層の教育効果を生むことが窺えた。

図９では、同一児童グループの令和３年度と令和４年度の記録の推移を示した。男子では、記録の向上が見られているものの女子では、微増に留まっている。女子においては、引き続き投げる機会の確保に努め、継続した指導が必要になると考えられる。

オーバーハンドスローの動作の巧拙は、学校体育や生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質、能力の育成及びその実践において障害となる可能性が示唆される。また、オーバーハンドスローの動作習熟には適時性があり、小学校期にその獲得が極めて重要であるとされ、小学校時において児童にしっかりと身に付けさせることが重要である。

以上のことから、本研究の今後の課題として、①全学年に対象を広げて実践すること。②低位に位置する児童の実態に即した指導を継続していくこと。③「投げ手腕」と「体幹回転」に重点をおいた指導を行うこと。④連動性の観点から指導の工夫を行うこと。

以上４項目が最重要課題として挙げられる。また、投動作各局面の角度分析や投動作各局面における経過時間分析、AI 技術の活用も必要に応じて取り入れ、年間指導計画の改善を図っていきたい。



【図９　同一児童グループの令和３年度と令和４年度の記録の推移】

【参考文献】

⑴文部科学省（2020）．新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言.
⑵文部科学省（2017）．小学校学習指導要領解説体育編.
⑶スポーツ庁（2021）．令和３年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査.
⑷埼玉県教育委員会（2021）．令和３年度「全国体力・運動能力，運動習慣等調査」の結果について.
⑸豊島進太郎（1980）．ボール投げと体幹のひねり．体育の科学，30:478-482.
⑹渡辺哲史，正木浩之，千葉生子，平野裕一（1998）．年齢にともなう投能力発達に関する横断的研究．体育の科学，48:845-848.
⑺Glassow, R. B　and Kruse, P（1960）. Motor performance of girls age 6 to 14 years. Res. Quart, 35:pp464-471.
⑻松浦義行（1969）．運動能力の因子構造．不昧堂.
⑼桜井伸二（1992）．投げる動きを教える－格好良く投げるためには－．体育の科学，42:pp627-630.
⑽吉田茂（1983）．小学校児童の距離投におけるスローイング・フォームの発達に関する研究．埼玉大学紀要〔教育学部〕教育科学，32⑵，pp．65-76.
⑾高本恵，出井雄二，尾縣貢（2003）．小学校児童における走，跳および投動作の発達：全学年を対象として．スポーツ教育学研究，Vol，23pp1-15.
⑿吉畠徳孝（1995）．学校体育における投運動の指導に関する一考察．日本体育学会号，46:656.
⒀石井喜八, 中出盛雄（1975）．投球動作にみられる Power．身体運動の科学，Ⅰ，pp111-128 杏林書院.
⒁塙佐敏（2010）．児童の投能力向上のための指導法の在り方について―自作教具“ステップくん”の有効性の検討―新潟医療福祉学会誌，pp62-68.
⒂宇土正彦監修（1995）．学校体育授業辞典，p35，大修館書店.
⒃日下裕弘，加納弘二（2010）．生涯スポーツの理論と実際（改訂版），p2，大修館書店.
⒄佐藤豊，友添秀則編集（2011）．楽しい体育理論の授業を作ろう，p53，大修館書店.
⒅Miyasita, M. T., Tsunoda, S., Sakurai, S., Nishizono, H. and Mizuno, T. (1980). Muscular activities in the tennis serve and overhand throwing. Scan. J. Sports. 2:52-58.
⒆星川保（1982）．大きさと重さの異なるボールの投げ．J. J. Sports sci, 1-2:104-109, 1982.
⒇堀田朋基，鶴賢行，河野信弘，北村潔和（1988）．バレーボールのスパイクにおける上肢の動作の定量解析．J．J．Sports sci，7-4:256-262.
㉑高本恵美，出井雄二，尾縣貢（2004）．児童の投運動学習効果に影響を及ぼす要因．体育学研究，49:pp321-333.
㉒尾縣貢，高橋健夫，高本恵美，細越淳二，関岡康雄（2001）．オーバーハンドスロー能力改善のための学習プログラムの作成，小学校２・３年生を対象にして．体育学研究，46:pp281-294.
㉓高橋健夫，岡澤祥訓（1994）．よい体育授業の構造 高橋健夫（編）体育授業を創る．大修館書店，p22.
㉔深代千之（1988）．幼少期の投動作と指導．体育の科学 38，pp86-92.
㉕赤羽根直樹，澤田浩，黒岩奈穂子，萩原朋子，高橋建夫（2008）．投能力向上をめざしたターゲット型教材の開発とその有用性について，スポーツ教育学研究，Vol.28 No.1, pp.25-34.
㉖丹松由美子, 前田正登（2010）．投運動導入段階の小学生におけるターボジャブを用いた投げ練習の効果，陸上競技学会誌，No．8，pp.22-31.
㉗山西哲郎，安藤正信（1987）．投げ動作の発達と学習効果についての分析的研究，群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編，Vol.22，pp.107-120.
㉘楠聖次郎，梶原洋子（2013）. 小学校児童の投能力向上プログラム開発に関する研究：段差めんこ投げ遊びが投動作と飛距離に及ぼす影響，文教大学教育研究所紀要，㉒:p109-116.

運動好きを育て、学習機会の保障と協働的な学びを実現する

～カリキュラム開発と評価基準表（ルーブリック）の作成～

越谷市立越ヶ谷小学校　教諭　寺　川　耕　平

Ⅰ　はじめに

相互に教え合うことが求められる体育科において、一人一人の学びを充実させるには、子供同士の関係をよりよいものとし、学び合いを成立させなければならないと考える。それは、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す令和の日本型教育でもある。今後も「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、「協働的な学び」を充実することが求められている[1)]。

しかし、近年の子供たちは、コミュニケーション能力の低下が懸念[2)]され、深刻な課題となっている。さらに、幼児期の運動経験が減少し、コミュニケーション能力の獲得がされていない[3)]という問題を抱えている。岩田[4)]も、児童のコミュニケーション能力低下を指摘し、集団で共通の課題に取り組み、相互に教え合い、助け合う中で、規範的、社会的な態度が育まれる社会性の素地をつくる体育科の重要性と可能性を述べている。

令和の日本型教育の「協働的な学び」の実現には、他者との協働を通して課題を解決し、よりよい人間関係を構築する力の育成が求められている。特に、体育科におけるチームの集団的達成に向けた課題解決の過程での、「受容的・肯定的関係」の創出が求められるボール運動領域の指導内容の改善と確立は急務であると考える。

ボール運動の授業においては、児童への平等な学習機会の保障[5)]が重要である。しかし、必ずしも達成されておらず、学習成果も正しく評価されていない[6)]。また、運動への価値観や勝敗への偏った指導により、人間関係の形成に影響を及ぼし、学び合いが成立せず、すべての児童に学習の機会の保障がされていない[7)]。

以上のことから本研究では、筆者の８年間の先行研究を活用し、大学研究機関と連携し、ボール運動領域における児童の学習機会の保障や社会性を高めるカリキュラム開発、教師の指導と評価が図られるボール運動領域の評価基準表を作成し、その検証をした。この検証で、学級経営や他教科での協働的な学びの支えとなる体育科の可能性を見出したい。さらに、三つの資質能力をバランスよく育み、本県課題の運動好きな児童の育成[8)]、学習成果の保障を目指した。なお、体育科における社会性の育成やボール運動の学習機会の保障を目指した授業実践をした小学校の事例は、ほとんどないのが現状である。

Ⅱ　研究の仮説

⑴　子供たちの関わり合いを意図的に豊かにすることで、「できる」と「わかる」を関連付けた指導が可能となり、体育やボール運動に積極的に取り組む児童を育成することができるだろう。

⑵　カリキュラム開発と適切な成果評価ができる基準の作成により、誰もが一定の成果を得ることができる再現性のある授業開発ができるだろう。

Ⅲ　方法

⑴　種目・期間・対象・教師

本研究では、埼玉県越谷市内小学校６年生２学級を対象に、令和３年10月上旬から令和３年10月下旬までのバスケットボールの授業で実施された授業の映像、アンケート及び資料等を収集した。授業者は筆者が担当し、それぞれの学級で９時間ずつ実施した。

⑵　カテゴリー作成及びデータの分析・考察

本研究では、評価基準の作成、カリキュラムの開発、データの分析及び考察等を体育科の有識者３名［体育系大学教授１名、体育系大学助教１名、小学校教諭１名（筆者）］で行った。統計処理には、HAD-105[9)]を使用し、有意水準は５％未満とした。平均の差は、２群間ではｔ検定、３群以上は一元配置分散分析及び多重比較で行った。参加者内評価のため多重比較はHolm法を採用した。HADの特性上、多重比較で有意差がない場合、調整ｐ値が表示されない仕様のため、結果に調整ｐ値の掲載はしていない。

⑶　分析について

①カリキュラムの有効性

髙橋ら[10)]が作成した形成的授業評価、単元前後の児童アンケート、ゲームパフォーマンス分析による学習機会の分析から検証をした。

②評価基準作成とゲームパフォーマンス分析

評価基準表（ルーブリック）は、先行研究[11-12)]を基に３者で作成を行い、４度の加筆修正を行い作成した。ゲームパフォーマンス分析は、GPAI法[10)]と指数[13)]注[2)]を用いた。信頼性を担保するためにゲームの映像の事前分析を実施した。授業で実施されたバスケットボールのゲーム映像から無作為に抽出した１チームの対戦相手が、同一である第３時と第９時の映像からボール保持時と非保持の判断と技能発揮が、作成した評価基準表に即しているかを評価した。３者の評価結果が一致したのは、

250 場面のうち 232 場面で 92.8% と高い値であることを確認した注 1)。評価結果が一致しなかった場面は、相互の評価結果が統一した見解に至るまで合議を行った。

③社会的スキルの育成

児童同士のかかわりと振り返りの様子をナラティブ分析を用いて分析した。さらに、Nvivo を使用して児童の感想文分析を行い、検証した。

④体育授業のおける児童の意識変容

児童の体育授業のおける意識の変容について、高橋ら[10]の形成的授業評価及びアンケート調査を用いて分析を行った。

Ⅳ　実践内容

1　体育授業カリキュラムの開発

授業の単元計画及び授業計画は、筆者と体育科教育学を専門とする大学教員２名が学習指導要領解説[14]及び学習評価に関する参考資料[15]を踏まえて複数回の協議を重ねて作成した。また、授業計画には、スポーツ教育モデル[16]及び協同学習モデル[17]のモデルベースの学習指導を採用した。学習計画には「望ましい競争」の重視、社会的スキルの育成を設定した。

⑴　単元計画の設定

単元は３時間ごとに分け、「仲間や学習を知る」「仲間を支え合う」「チームでの役割を考える」とし、単元初期にチームで学び合う大切さを指導し、合意形成を行った。また、リーグ戦を３回繰り返せるようにし、自分たちの成長を実感できるようにした。主な指導としてボール保持時の判断を「シュート」「パス」として学習し、ボール非保持の判断を「サポート」、「おとり」として学習した。第１時に学習の仕方、第２時にシュートエリア内での状況判断、第３時にシュートエリア内外での状況判断、第４～５時にボール非保持時の状況判断について学習した。特に、第４時では、ボールを受けることのできる場所に移動する状況判断、第５時には、味方と同じ場所にいたり、ボール保持者からみた方向が重なったりしないようにする状況判断を指導した。第６時～第９時は作成した評価基準表を基にした課題選択（図２）をチームの特徴に応じた自己の役割を考えさせ、自己決定させた。タスクゲームやチーム練習は、２チーム合同の兄弟チームで行わせた。タスクゲームでは、ボール操作、ボール保持時の判断、ボールを持たないときの動きを易しい条件下で豊富に練習できることを意図した（表１）。

時間	第１時	第２時	第３時	第４時	第５時	第６時	第７時	第８時	第９時
テーマ〔分〕	仲間と学習を知る時期			仲間と支え合う時期			役割を考える時期		
	オリエンテーション	ボール保持時の状況判断		ボール非保持時の状況判断		チームの特徴に応じた自己の役割の決定			
	学び方	シュート	パス	サポート	おとり	個に応じた課題の決定			
0	あいさつ　健康観察　前時の学習の振り返りとはげまし　準備運動　課題の確認								
10	自己の課題の決定　チームミーティングタイム								
	ドリルゲーム								
20	メインゲーム								
30	チーム課題確認　作戦会議　タスクゲーム								
	メインゲーム								
40	振り返り　ペアで褒め合い活動　学習カードの記入								
45	後片付け　学習のまとめ　整理運動　あいさつ								

表１　単元計画

基本的なルール	攻撃が易しくなるルール	試行数の個人差を軽減するルール
・１ゲーム５分間×２回 ・攻守交代制 ・３対２の攻撃側が有利 ・ドリブル禁止 ・相手ボールまたはシュートをしたらスタートから始める	・ディフェンス２人のうち１人が時間差で試合への参加 ・ゴール補助具の使用 ・保持しているボールを奪うことは禁止	・攻撃、守備ともに、スタートから始める際にローテーションを行う ・試合終了後にシュートした人を確認し、該当児童を生かす次時の作戦を設定する

図１　メインゲームの設定

⑵　ボール運動領域における体育指導モデルの作成

モデルベースの学習指導と児童の実態、各種資料[18-19]を参考に作成した。作成には、体育科教育学を専門とする大学教員２名と筆者で行った。

このモデルの主な構成は以下のとおりである（表２）。このモデルの作成は、市内約 180 名へのアンケート調査で明らかとなった、学習の進め方、子供同士の関係に対する具体的指導、振り返りの仕方等の課題の解決につながるとともに、ボール運動領域の授業の際の単元計画作成の目安となると考える。

表２　ボール運動領域の指導モデル

目安時間	主な流れ
２分間	チームでの話し合い・個人課題の決定
３分間	ドリルゲーム
10 分間	メインゲーム
６分間	作戦会議・タスクゲーム
10 分間	メインゲーム
５～８分間	褒め合い・カードの記入
３分間	まとめ

⑶　メインゲームの工夫

メインゲームでは、すべての児童が最低限の学習機会を保障されるように、攻撃が易しくなるルールと試行数の個人差を軽減させるルールを採用した（図１）。攻撃を易しくするために、攻撃時は攻撃側が数的有利になるアウトナンバーゲームとした。また、外側にいるディフェンスは白チームの最初のパスが完了してからゲーム参加できる（図１）ようにし、バスケットボールでのファーストブレイクを多く経験させ、成功体験を味わえるように工夫した。

加えて、試行数の個人差を軽減させるため、スタートから攻撃を始める際に攻守ともにメンバーのローテーションを指導した。さらに、ゲーム終了時にシュートができなかった仲間を確認し、次の試合では該当者がシュートできるようにする作戦を設定させる指導も行った。

⑷　社会的スキルの意図的な指導

協同学習で指導すべき社会的スキル[17]を参考に学習指導に合うように作成し、指導した（表３）。

加えて、児童質問紙調査では、授業の不安要素として「もめごとやトラブル」、「チームの足を引っ張らないか」が上位を占めていた。

そこで、誰もが失敗を恐れず、活躍できる楽しい体育授業を目指すために参加条件（表３）を第１時に確認、合意形成をし、継続指導をした。

表３　授業参加条件とよい人間関係の設定

授業参加の条件
①　積極的に授業に参加する
②　責任のある行動をとる
③　友達のよいところをたくさん見つけて，はげます
④　全員が活やくできるように思いやる
⑤　ルールやマナーを守る
⑥　よいプレイを認め，相手を尊敬する
上手な話し合いとよい人間関係
①　相手に目線と体を向ける
②　うなづいたり，相づちをうつ
③　自分のがんばったことを先に伝える
④　自分のよいプレイや行いを伝える
⑤　仲間や相手のよいプレイや行いをほめる
⑥　結果だけでなく，挑戦したことをほめる

⑸　意図的な社会的スキル育成の設定

子供同士の関係をよくするためお互いを褒め合う時間（表１）を毎時間必ず設定した。振り返りの時間は学習カード記入を含め８分間程度。褒め合うペアは変えず、単元を通しての成長や変化を感じられるようにした。流れは（表４）のとおり。加えて、丸くなって座り、褒め合いや振り返りをするように関わり方の指導をした。

表４　ペア同士の褒め合いの手順と様子

褒め合いの手順
①　自分の頑張ったことを伝える
②　友達に褒めてもらう
③　友達の頑張ったことを聞く
④　友達のよい所をほめる
⑤　拍手をしてグループで褒められたことを報告し合う
⑥　拍手をして褒め合いを終える
⑦　学習カードを記入する

⑹　リーダーシップとメンバーシップの育成

参加条件（表５）を掲載した宣誓書を作成し、一人一人の学習に対する責任をもたせ、協力し合うことを意識付けた指導を行った。署名を全員がすることで支え合うことを意識させた。

表５　宣誓書の内容

チーム・キャプテン宣誓書
①　キャプテンをそっせんして行動し，チームをまとめること
②　キャプテンは全員が活かつできるように工夫すること
③　キャプテンは望ましい約束や行動をそっせんして実行すること
④　キャプテンは，ローテーションを確認し，継続すること
⑤　チームはキャプテンを支えること
⑥　チームはフェアプレイを率先して実行すること
⑦　チームは全員が学習できるように気づかうこと
⑧　チームは仲間のがんばりを認め，応援すること
⑨　チームはどんなことでも仲間の話を真剣に聞くこと
⑩　対戦相手のよいプレイをほめること
⑪　勝ち負けでなく，相手のよさや自分たちの努力を大切にすること
⑫　授業の約束を守り，よい体育授業にすること

２　評価基準表（ルーブリック）の作成と指導

指導内容の明確化、学習機会の公平性の現状把握と指導内容の修正、指導したことを評価する指導と評価の一体化を実現するため、評価基準表を作成した。作成した評価基準表は、指導内容の決定、児童の学習カード等の作成、学習指導等を通して、教師と子供で共有し、目標とその達成基準を明確化した。

⑴　評価基準表（ルーブリック）の作成

体育科教育学を専門とする大学教員２名と筆者の計３名で､先行研究の作成手続き[11]を基に評価基準表（表６）の作成をした。

表６　ゴール型における評価基準表

プレイ	カテゴリー	成否等	評価基準	評価のタイミング
シュート	状況判断	適切	ゴールとの間に守備がいない。	シュートのリリース時
		不適切	ゴールとの間に守備がいる。	
	技能発揮	成功＋得点	シュートがゴールに入った。	シュートのゴール時
		成功	ボールがリングに上から当たった。	
		失敗	ボールがリングに当たらなかった。	
	シュート機会	機会あり	シュートコースに守備がいない。	シュートエリア内でのボールのキャッチ時
パス	状況判断	適切	フリーの味方にパスをした。	シュートエリア内へのパスのリリース時
		不適切	フリーでない味方にパスをした。	
	技能発揮	成功	受け手の手の届く範囲にパスをした。	シュートエリア内へのパスのキャッチ時
		失敗	受け手の手の届かない範囲にパスをした。パスを守備にカットされた。	
ボール非保持	サポート	成功	守備にボールをカットされないフリーの位置にいる。	シュートエリア内へのパスのリリース時
		失敗	守備にボールをカットされる位置にいる。	
	おとり	適切＋成功	他の味方と 1m以上離れ，守備を自分の 1m以内に引きつけた。	シュートエリア内へのパスのリリース時
		適切	他の味方と 1m以上離れた。	
		不適切	他の味方と 1m未満しか離れていなかった。	

⑵　児童の自己課題設定

個の学びと協働的な学びが両立できるよう、（表６）を基に課題が選択できるカードを作成した。第２時～５時まで「シュート」、「パス」､「サポート」、「おとり」と一つずつ学習した。それぞれの項目ごとに「判断」､「判断＋技能成功」の二つに分け、第６時以降は、自分やチームの状況に応じて役割を意識した課題選択ができるようにした（図２）。

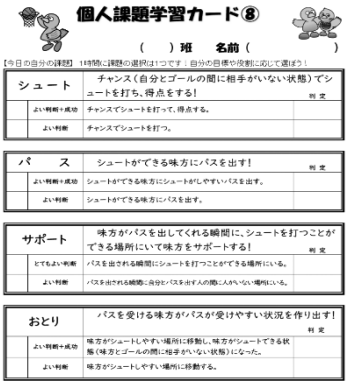


図2　児童の課題選択学習カード

⑶　状況判断の理解と適切な技能発揮の指導

評価基準と学習内容、指導のつながりを生かすため、ボール運動の本質的な学習[4]である状況判断の理解と適切な技能発揮ができるよう以下の関係図に整理し、指導をした（図３）。児童には、よい判断をすることが大切であり、よい判断を全員ができるようになることを目標にした。よい判断に対して教師の称賛と児童同士褒め合いを積極的に行い、誰もが適切な判断のもと技能発揮をする場面を意図的に増加するようにした。加えて、できなくても挑戦する雰囲気を高め、試行数の個人差の軽減も意図した。

さらに、「できる」と「わかる」をつなぐための意図的な学習課題の配列を行い、児童の思考や願いに沿った学習となるよう工夫した（表７）。

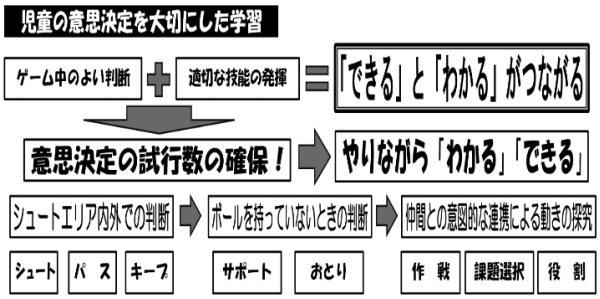


図３　状況判断の理解と適切な技能発揮の関係

表７　学習課題の設定

時	毎時間の課題（ねらい）	評価項目
1	活動するときの約束や学習の進め方を理解し，進んでバスケットボールに取り組もう。	主体的に学習に取り組む態度
2	シュートが打てる場所に動き，パスをもらってシュートを打とう。	知識・技能
3	シュートができる状態を作り出すにはどうしたらよいか考えよう。	思考・判断・表現
4	シュートができる状態を仲間と協力して作り出そう。	知識・技能
5	仲間とさらに連携を深めるためにチームの方針を決めよう。	思考・判断・表現
6	チームの作戦さらに深め，チーム力を高めよう。	知識・技能
7	ゲームで感じた課題を伝え合い，攻め方や方針を工夫しよう。	思考・判断・表現
8	チームに合った攻め方を選び，支え合いながら全員シュートしよう。	知識・技能
9	これまでの学習をいかして，全員が楽しめる学習のまとめをしよう。	主体的に学習に取り組む態度

⑷　成功体験を促進する教具の工夫

児童と共有した評価における成功体験促進のため、シュートエリアの設定（図１）し、状況判断をしやすくした。さらに、使用するボール[注3]、ゴールの補助具注4）を工夫した（図４）。

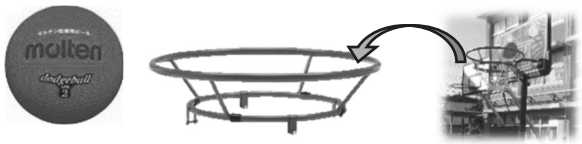


図４　使用したボールとゴール補助具

Ⅴ　結果

1　形成的授業評価の分析

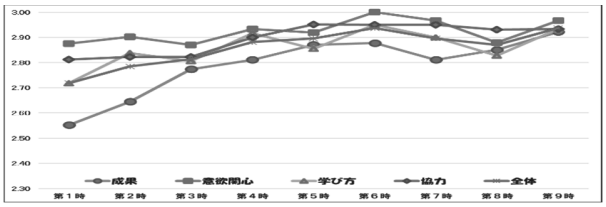


図５　第６学年クラスＡ　形成的授業評価

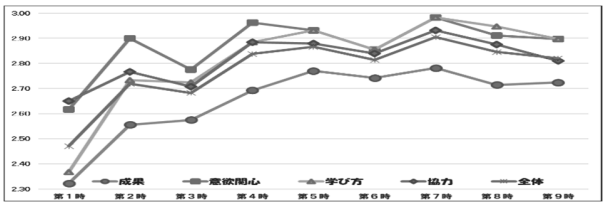


図６　第６学年クラスＢ　形成的授業評価

表8　第1時と第9時の形成的授業評価得点の平均値の差

	第１時 mean(SD)	第９時 mean(SD)	t 値	有意確率（両側）	有意差 *p<.05
１組（n=30）	2.74 (0.50)	2.94 (0.24)	3.693	.002	*
３組（n=28）	2.47 (0.69)	2.82 (0.46)	3.888	.000	*

表９　第９時の形成的授業評価得点の学級間の平均差

	１組(n=30) mean(SD)	３組(n=28) mean(SD)	t 値	有意確率（両側）	有意差 *p<.05
第９時	2.94 (0.24)	2.82 (0.46)	1.992	.060	n.s.

形成的授業評価の結果から評価の数値[注5]は、第４時以降４～５となり安定した（図5-6)。実施したカリキュラムの内容と児童の実態が一致した授業であると推察される。両クラス共に第１時と第９時の平均には有意な差があった。第９時の両クラス間の平均に有意な差はなかった。本授業カリキュラムには、一定の成果と再現性があると示唆される。

2　ゲームパフォーマンス分析

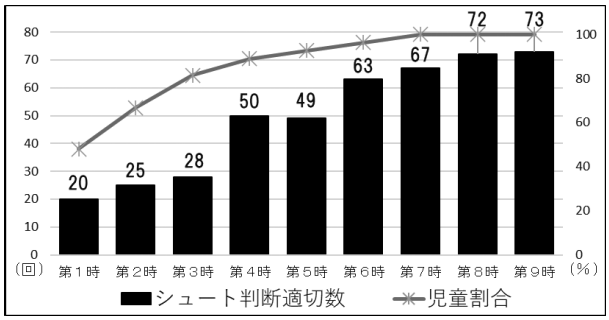


図７　シュート判断適切数と経験児童割合

ゲームパフォーマンス分析（以下 GP 分析）では、シュートでは、よい状況判断から適切な技能発揮ができた児童割合が第７時で 100% となり、適切な技能が発揮できるシュート機会を全員に確保することができた（図7)。また、全員がよい判断での技能発揮をし、ゴールを決める経験をした。

表10　各項目３時間ごとの適切な判断の変容

		シュート			パス			サポート			おとり		
		序盤	中盤	終盤	序盤	中盤	終盤	序盤	中盤	終盤	序盤	中盤	終盤
mean		2.70	6.00	7.85	5.37	11.15	15.07	6.04	15.22	21.93	8.11	17.59	22.52
(SD)		(2.32)	(4.75)	(6.44)	(3.10)	(5.01)	(8.06)	(2.81)	(5.76)	(8.64)	(3.74)	(7.06)	(9.24)
分散分析	F	19.139			1.991			80.471			57.163		
	p	.000		*	.000		*	.000		*	.000		*
序盤～中盤	t	5.114			2.053			10.550			8.279		
	p	.000		*	.000		*	.000		*	.000		*.
	d	0.852		大	1.323		大	1.961		大	1.531		大
中盤～終盤	t	2.325			0.382			4.961			4.115		
	p	.028		*	.001		*	.000		*	.000		*
	d	0.316		小	0.563		中	0.883		大	0.563		中
序盤～終盤	t	4.950			1.442			10.810			8.484		
	p	.000		*	.000		*	.000		*	.000		*
	d	1.028		大	1.537		大	2.391		大	1.977		大

序盤:第１時～３時，中盤:第４時～６時，終盤:第７時～９時　　*:p <.05

表11　各項目の３時間ごとの適切な技能発揮の変容

		シュート(得点+成功)			シュート (成功)			パス		
		序盤	中盤	終盤	序盤	中盤	終盤	序盤	中盤	終盤
mean		1.48	3.52	4.48	0.85	2.44	2.92	5.04	10.22	13.70
(SD)		(1.93)	(3.27)	(3.78)	(1.04)	(2.10)	(2.77)	(3.08)	(4.72)	(7.61)
分散分析	F	21.486			11.002			37.783		
	p	.000		*	.000		*	.000		*
序盤～中盤	t	4.646			3.909			6.433		
	p	.000		*	.000		*	.000		*
	d	0.734		中	0.930		大	1.257		大
中盤～終盤	t	2.149			1.246			3.475		
	p	.041		*	—		n.s.	.002		*
	d	0.263		小	0.189		中	0.531		中
序盤～終盤	t	5.860			3.625			6.994		
	p	.000		*	.001		*	.000		*
	d	0.996		大	0.957		大	1.443		大

序盤:第１時～３時，中盤:第４時～６時，終盤:第７時～９時　　*:p <.05

適切な判断と技能発揮の GP 分析おいては、単元序盤と終盤では有意な差があった。効果量ｄは、水元ら[20]の解釈をもとに評価。有意差がなかった項目も含め、どの項目も効果があったと解釈できる。特に序盤～終盤の効果は大きい。

表12　上位群と下位群の単元終盤の成功数の平均の差

	シュート mean(SD)	パス mean(SD)	サポート mean(SD)	おとり mean(SD)
上位群	5.25(4.41)	18.00(7.96)	25.50(4.57)	24.83(9.72)
下位群	3.36(2.19)	11.00(7.11)	17.40(7.46)	19.00(7.62)
t 値	1.263	1.969	2.778	1.472
p 値	.218	.065	.012	.157
有意確率(両側)	n.s.	n.s.	*	n.s.

単元終盤:第７～９時での成功数の比較　*:p <.05

単元序盤の技能発揮の成功数で上位と下位の二つの群に分けた[注6]結果、終盤ではサポート以外は差がなくなり、下位群も上位群に近いパフォーマンスを発揮できるようになった。

3　感想文およびナラティブ分析

表13　感想文分析カテゴリー

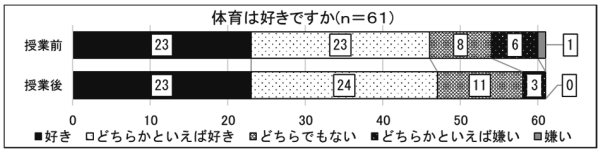
カテゴリー	定　義
自分技能発揮	自分の技能発揮
自分状況判断	自分の状況判断
自己課題解決	自己の課題解決能力
自己理解	自分の知識理解
自己社会技能	自分の用いた社会的スキル，肯定的に話しかける，他人の話を聞く
自己情意技能	自分を受け入れる，表現する，自信，感情の制御
仲間技能発揮	仲間の技能発揮
仲間状況判断	仲間の状況判断
仲間課題解決	仲間の課題解決能力
仲間理解	仲間の知識理解
仲間社会技能	仲間の社会的技能，話しかける，聞く
仲間情意	仲間の情意的スキル，自信，感情の制御

表 14　感想文記載者人数・記載項目数クラス別比較

	記載者人数率		記載項目数比率	
自　己	1組(n=31)	3組(n=32)	1組(n=124)	3組(n=95)
自分技能発揮	45.2%	50.0%	22.6%	25.3%
自分状況判断	22.6%	18.8%	8.1%	6.3%
自己課題解決	41.9%	28.1%	16.9%	10.5%
自己理解	6.5%	15.6%	1.6%	5.3%
自己社会技能	58.1%	68.8%	29.0%	35.8%
自己情意技能	45.2%	43.8%	21.8%	16.8%
仲　間	1組(n=31)	3組(n=32)	1組(n=75)	3組(n=28)
仲間技能発揮	38.7%	25.0%	36.0%	32.1%
仲間状況判断	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
仲間課題解決	6.5%	0.0%	2.7%	0.0%
仲間理解	6.5%	0.0%	2.7%	0.0%
仲間社会技能	58.1%	37.5%	44.0%	64.3%
仲間情意	22.6%	3.1%	14.7%	3.6%

児童の感想文を分析カテゴリーから Nvivo を用いて帰納的に分析、関わり方をナラティブ分析し検証した。技能発揮、課題解決、社会技能、情意技能についての数値が高かった。ナラティブ分析では、第５時以降、教師の介入なしで向かい合って褒め合うことが全員できるようになり、関わりに対する技能の高まりがあった。

4　児童の意識の変容



	授業前 mean (SD)	授業後 mean (SD)	t 値	p 値 (両側)	有意差
全体	4.00 (1.02)	4.10 (0.86)	1.286	.203	n. s.
肯定群	4.50 (0.50)	4.43 (0.61)	1.136	.261	n. s.
中間・否定群	2.46 (0.62)	3.07 (0.68)	2.806	.014	*

*p<.05

図８　児童のアンケート調査及び平均値の差

今回の授業では、肯定的な意見の群は水準を維持し、中間層や否定的な意見の群が肯定的な意見へと変化したと言える結果となり、全体として肯定的な意見増加の底上げが図られた。

Ⅵ　考察

本研究の目的は、カリキュラムの開発や評価基準の作成が社会性・情動性の育成や協働な学習を促進し、個々の学習の機会を保障することであった。

子供同士の関わりに対しての意図的な指導は、社会性を高め､特に､自己や仲間の関わりに関する力の高まりを、多くの児童が実感することができた。振り返りの時間に意図的にペアで褒め合う活動を実施した効果が大きい。

ゲームパフォーマンスの結果から、全児童が技能の成果及び学習機会を得ることができた。特に、単元初期に技能下位児が単元終期には、技能上位児との差が小さくなったことは、大きな成果である。通常、技能下位児童は学習機会を奪われてしまう可能性が高い[21)]。単元初期に技能下位児の技能向上に注力するチームづくりや望ましい競争の学習、社会的スキル学習を併用して行うことで協働的な学びが促進され、個の学びの保障がされやすい関係となった。技能下位児の技能向上の機会を得られる合意形成と社会的スキルの育成を図る共同学習モデルや、スポーツ教育モデルと取り入れた授業カリキュラムは、協働的な学びや個の学びの保障に有効な手立ての一つである。

また、評価基準表の作成及び共有、活用が指導内容の明確化、児童の学びが保障される一助となった。さらに、２学級において同水準程度の成果が得られたことにより、再現性も担保された。これらにより、ボール運動領域における有効的なカリキュラムの開発となったと示唆される。

他方で、単元時数の確保が課題である。高学年の体育は 90 時間と限られている。年間指導計画におけるボール運動の取り扱いは乱立しており、１単元に確保できる時数が少ない現状が市内アンケート調査でも明らかとなった。本研究及び先行研究[22)]から、１単元 10 時間程度が示唆的である。学習指導要領の内容を整理し、年間指導計画を見直していくことが課題である。

注

1）一致率算出は、S-J 法「(一致／一致＋不一致) × 100」(シーデントップ ,1988) を用いて算出。通常 80% 以上の一致率が必要とされる。
2）指数の算出は、Memmert and Harvey（2008）を用いて「(成功数 +10) /（成功数 +10+ 失敗数 +10）× 100」で算出。指数が 50 を超えた場合は、成功数が失敗数と同数超であると解釈できる。
3）使用したボールはモルテン社製のドッヂボール２号球（D2OR)。重さはおよそ 300 g ～ 320 g。大きさは直径およそ 20cm。
4）ゴール補助具はトーエイライト社製のバスケットシュート練習リング（B-6389)。
5）髙橋（2003）形成的授業評価は､項目ごとに５段階の評価数値がある。評価数値５が最大値であり評価数値が４～５であるとよい授業とされている。
6）上位群と下位群は，序盤の指数の上位 10 名を上位群，下位 10 名を下位群に分けることを基本とし，区切る際に，数値が同じ児童がいる場合はその児童も追加して含めることとした。観測数が 10 以上になるようにして分析を行った。

参考文献

1）岡出美則（2022）国際化と土着化からみた令和の日本型教育の球技の授業の可能性
2）文部科学省（2017）コミュニケーション能力に関する指摘・調査等
3）文部科学省（2012）幼児期運動指針
4）岩田（2016）ボール運動の教材を創る
5）Sidentop（1994） p .110
6）奥村ら（2020）ゲームパフォーマンスの評価を踏まえたボール運動系授業の改善の検討
7）髙橋（2003）新しい体育授業の創造
8）埼玉県教育委員会（2022）学校体育必携
9）清水裕二他（2016）フリーの統計分析ソフト HAD: 機能紹介と統計学習・教育・メディア・情報・コミュニケーション研究
10）髙橋（2003）体育授業を観察評価する授業改善のためのオーセンティックアセスメント
11）SHAPE（2019）PE・Metrics 3rd Edition
12）Dyson.et.al（2011）
13）グリフィンら：髙橋ら監訳（1999）戦術アプローチの評価方法と進め方，ボール運動の指導プログラム
14）文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説体育編
15）国立教育政策研究所（2019)「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
16）Siedentop, 髙橋他（1988）体育の教授技術 . 大修館書店
17）Goodyear（2017）p.84 Kagan and Kagen（2017）p.5.9
18）文部科学省（2010）学校体育実技指導資料第８集「ゲーム及びボール運動」
19）埼玉県教育委員会（2018）埼玉県小学校教育課程編成要領
20）水元ら（2010）効果量と検定力分析入門 pp.47-73
21）Otomo,S.andOgawa,T.（2003）The influential factors to lower attitude pupil’s leraning behavior to ward physical education class.
22）鬼澤ら（2007）小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上

「書く意欲」と「書く技能」を高める指導法の研究

～意見文の授業実践を通して～

熊谷市立新堀小学校　教諭　小　川　祐太郎

Ⅰ　児童の実態と主題設定の理由

令和３年度の埼玉県学力・学習状況調査において、本校の第５学年の児童は、「書くこと」に関する問題の正答率が低かった（図１）。「条件に沿って自分の考えを決め、その理由を書く」「目的に応じて理由を挙げながら自分の考えを書く」等の記述式問題の正答率が低く、市平均を下回っている。日ごろの授業のなかでも、自分の考えと理由を結び付けて筋道の通った文章を書いたり、書く内容の中心を明確にして、内容のまとまりで段落をつくったりすることを苦手としている児童が多い。

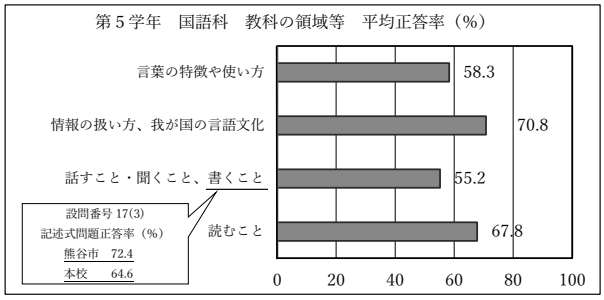


図１　令和３年度埼玉県学力・学習状況調査結果

また、令和３年度に筆者が担任した第５学年の学級において、４月に国語科に関する意識調査を実施した（表１）。

表１　国語科に関する意識調査 令和３年４月実施

質問項目	児童の回答
国語の学習は好きですか。	好き：71%　　嫌い：29%
国語のどんな活動が好きですか。	話す・聞く　好き：52%　嫌い：48% 書く　好き：８%　嫌い：92% 読む　好き：70%　嫌い：30%
書く活動が嫌いな理由	・書きたいことがないから。 ・毎回、どう書いたらいいか分からないから。 ・一人で長い文章を書くのがつらいから。 ・何を書いたらいいのか分からないから。 ・個人の活動が多いから。

その結果、「国語の学習は好きですか」という項目では、７割以上の児童が「好き」と回答した。このことから、児童は国語科の学習を概ね肯定的に捉えていることが分かる。一方、「国語のどんな活動が好きですか」という項目では、「書くこと」の学習活動について９割以上の児童が「嫌い」と回答した。「話す・聞く」「読む」の活動と比べると、極端な結果である。「書くことが嫌いな理由」の記述や今までの授業展開から、児童が書くことを遠ざける要因は次の三つと考えられる。

- ●書きたい気持ちや書きたいことをもつ前に課題が提示され、書く意欲が高まらない。
- ●書き方が分からず書く活動の見通しがもてない。
- ●一人で行う学習活動が多く、文章の質が個人の書く力に大きく左右される。

児童が苦手で嫌いな「書くこと」の学習であるが、そこで育成される資質・能力はすべての教科等の学習を根本から支える重要な力であり、学力の向上には欠かせない。「書くこと」の授業改善は、本校や本学級の喫緊の課題である。そこで、「書く意欲」と「書く技能」を高めることを目指し、研究主題を設定した。また、そこで身に付ける資質・能力が様々な場面で生きて働く汎用的な力となるよう、深い学びの視点からの授業改善を行う。児童の実態を踏まえ、授業実践は、自分の考えを明確にして書く意見文の学習で行うこととした。

Ⅱ　授業改善の視点

本研究では、児童の実態や「書くこと」が遠ざけられる要因等を踏まえ、次の三つの視点から授業改善を行う。

１　書く意欲を高めること

香月（2020, p.17）は書く内容と書く意志について、以下のように言及している。

> 書くことは書く以前から始まっている。当然のことだが、書く内容が見付からなければ書くことはできない。その逆に、書く内容が見付かれば、書こうという意志も湧いてくるし、書きたいとも思える。

つまり、書く内容が見付かれば、児童は書く意欲を高めていくというのである。確かに、書く内容が見付かっていない状態で教師に「書きましょう。」と言われても、児童の書く意欲は高まらないと考える。

そこで、授業では、児童が書きたい内容を見付ける時間を確保する。また、学習や書き方に見通しをもち、学びを実感したり手応えを感じたりできるような工夫を取り入れる。さらに、「書くこと」は個別性の強い学習で

あり、それが児童の負担感を増す要因だと考えられるが、逆にその個別性を生かして児童の意欲を高めたい。自分だけのテーマで文章を書くことで、なんとか相手に考えを伝えようとし、書く意欲が高まっていくのではないかと考える。

２　書く技能を高めること

書く技能を高めるためには、書く活動を繰り返すことが重要だと考える。筆者の「書くこと」の授業は、文章を一度書いて終えてしまうことが多かった。

そこで、相手や目的を意識させながら、単元の中で３回は文章を書かせたい。また、児童が書き方を理解する時間、文章を推敲する時間を確保する。さらに、友達との協働的な活動も積極的に取り入れる。個別性が強い書く活動では、文章を見直すために他者の視点が不可欠だと考える。

３　深い学びを実現すること

様々な場面で生きて働くような書く技能を児童に身に付けさせるためには、深い学びの実現が不可欠だと考える。本研究では、深い学びを『「言葉による見方･考え方」を働かせた、習得・活用・探究の学習過程を通して、国語の学びを自覚し生かせるようになること』とした。目指すのは、児童が学んだことを自分で使える（活用できる）ようにすることである。言葉そのものを学習対象とする国語科では、児童が言葉の意味・働き・使い方等に着目して考え、習得・活用・探究といった学習過程で問題解決をし、学習内容を振り返って知識を結び付けていくことが、深い学びの実現につながると考える。そこで、次の三つに留意する。

⑴　児童が国語科の「言葉による見方・考え方」を働かせる工夫をすること

児童が意見文について、言葉の意味や働き、使い方といった「見方」で着目し、捉える･問い直すといった「考え方」を使いながら、理解・表現することに留意する。表面的な内容に留まらず、文章構成や表現の工夫といった言葉の働きにまで気付き、理解させることで、他の書く場面でもその見方・考え方を働かせ、学びを生かせるようになると考える。

⑵　学習過程のなかで、習得・活用・探究の場面を明確にすること

基礎的・基本的な知識や技能を習得する段階、習得したことを活用して課題解決をする段階等を意識して指導する。探究的な活動は、単元を通して行うようにする。習得した書き方を何度も活用しながら、よりよい文章を探究させることで、より汎用的な書く力が育つと考える。

⑶　児童が知識を結び付け構造化する工夫をすること（知識の構造化）

児童が、一つ一つの授業で学んだ書き方の知識等を結び付け、構造化する工夫を取り入れる。単元の終末には、すべての授業で学んだ書き方の知識等を振り返り、結び付けて整理する活動を設定する。そして、学びを意味付けたり価値付けたりしていくことで、児童は学びを自覚し生かせるようになると考える。

Ⅲ　研究について

１　研究の仮説

仮説１　書きたい内容を見付け、学習に見通しをもちながら、学びを価値付けていく授業展開を行えば、児童の書く意欲が高まるだろう。
仮説２　言葉による見方・考え方を働かせながら、協働的な活動のなかで書き方を習得・活用・探究させることで、児童の書く技能が高まるだろう。

２　研究の方法

熊谷市立新堀小学校の令和３年度第５学年 24 名の児童を対象に授業実践をし、その成果を意識調査や児童の文章、振り返りの記述等をもとに分析する。

３　授業づくりの方法

【仮説１の視点から】

⑴　一人一人が固有のテーマを持てる課題の設定

児童が本当に「自分の文章を読んでもらいたい」と思って学習に取り組めるよう、一人一人が固有のテーマを持てるような課題を設定する。他者が知らない自分だけのテーマであれば、どうにか分かってもらおうと工夫して文章を書いたり、粘り強く書いたりすると考えた。

⑵　書きたい内容を見付ける「０次」の設定

単元の学習が始まる前に、書きたい内容を見付けたり、固有のテーマを決めるきっかけになったりするような活動や取組を行う「０次」を設定する。書く内容に関する掲示物を掲示したり、書きたい内容について詳しく調べさせたりすることで、単元の学習の前から児童の書く意欲を高めておくようにする。

⑶　モデル文と学習計画表による学習内容の明確化

どんな文章を書くのか・どんな書き方が必要なのかを明確にし、児童が学習や書き方に見通しをもてるよう、単元の初めには教師がモデル文を提示するとともに、それを児童が分析する時間を確保する。児童が言葉の意味･働き・使い方等に着目してモデル文を分析することも重視する。さらに、学習計画表を教室に掲示し、児童が常に学習の見通しをもてるようにする。

⑷　学びを価値付け、蓄積するポートフォリオの活用

→【深い学び（３）】

学んだことを振り返り、自分の言葉でまとめる活動を毎時間行う。また、単元の学びを一目で確認できるポートフォリオに記入させることで、児童が学びを実感して

意欲的に学習したり、学んだ知識を結び付けて構造化したりしやすくする。（図２）。

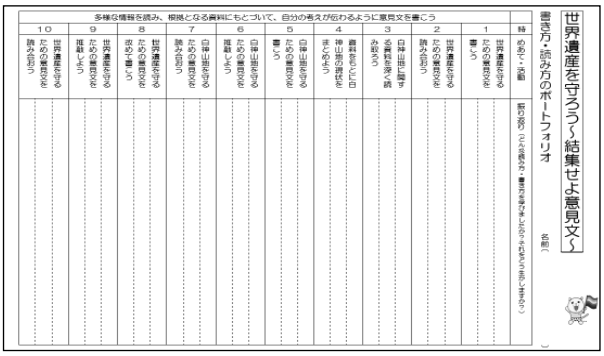


図２　振り返りを記述するポートフォリオ

【仮説２の視点から】

⑸　習得・活用・探究の学習過程を基にした単元構成

→【深い学び（２）】

書く活動を繰り返すことや深い学びを実現することに留意し、探究的な単元計画を作成した（図３）。

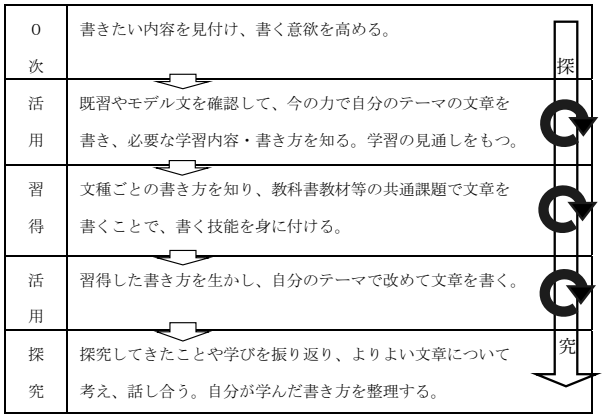


図３　習得・活用・探究の学習過程を基にした単元構成

学習前の「０次」の段階では、１か月程度前から書きたい内容を見付け、書く意欲を高める。単元の初めには、既習やモデル文等をもとに文章を書く「活用」段階を設定する。まず初めに文章を書くことで、何を学ぶ必要があるのかを児童に考えさせ、学習の見通しをもたせる。

「習得」段階では、教科書の教材等を使った全員共通の課題で書き方を習得し、そこでの学びを生かして改めて自分のテーマの文章を書く「活用」段階へ向かう。「探究」段階では、自分がよりよい文章を探究してきたことを振り返り、知識を結び付け、学びを確認するとともに、さらによい文章を考える。

「探究」段階は、単元全体の探究活動を確認する時間である。探究する活動そのものは、単元全体を通して行う。この単元構成は、児童に３回文章を書かせる。学習の見通しをもちながら繰り返し書くことが、書く技能の向上や深い学びの実現につながると考える。

⑹　３色のサイドラインを使った推敲の充実

→【深い学び（１）】

児童が「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉にこだわって文章を練り上げられるよう、３色のサイドラインを使い、推敲を行う。文章の中にサイドラインを引くことで、児童は自然と言葉に着目すると考えた。よい表現や書き表し方には赤、文章の間違いには青、言葉の意味・働き・使い方が気になる部分には黄色のサイドラインを引く。色の使い分けについては掲示で明確に示す（図４）。多様な視点から文章を推敲できるよう、友達と協働する時間も確保する。

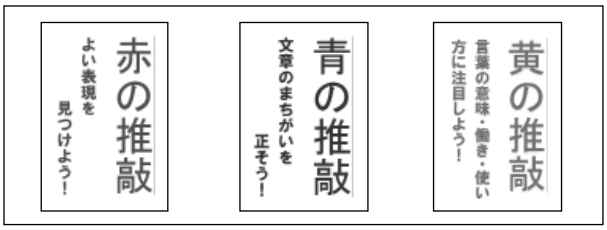


図４　推敲する際の掲示物

Ⅳ　授業実践（令和３年 10 ～ 11 月　第５学年）

１　単元名・教材名

世界遺産を守ろう～結集せよ意見文～

『世界遺産　白神山地からの提言』（教育出版）

２　教材について

教材は、白神山地の概要について書かれた文章と、白神山地の自然保護に関する七つの資料で構成されている。資料には文章、写真、グラフといった多様な情報が書かれており、児童はそれらを関連させながら、意見文を書くための考えを形成したり、考えの根拠となる情報を選んで活用したりする。

３　本研究に関わる単元の目標

・事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（１）ウ

・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。「学びに向かう力、人間性等」

４　本研究に関わる単元の評価規準

思考・判断・表現
①「書くこと」において、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。〔Ｂ（１）ウ〕
主体的に学習に取り組む態度
①粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫したり情報を見付けたりし、学習の見通しをもって、意見文を書こうとしている。

5　単元で取り上げる言語活動

新堀小学校の先生方に向け、世界遺産を守り、未来に残すために必要なことについて意見文を書く。モデル文は教科書教材等を参考に筆者が作成した（図５）。

ぼくは、富士山を守るために、人々の入山を規制することが必要だと考える。

そう考える一つ目の理由は、ごみの不法投棄によって富士山の自然が汚され、「かつては日本を代表する名水と言われていた富士を水源とする忍野八海の水も、今は飲むことが推奨されていません。」（資料１）とあることだ。富士山に捨てられたごみに含まれている危険物質が、土や水を汚していることを初めて知り、ごみを捨てる人々が入らないように入山を規制する必要があると考えた。

二つ目の理由は、山ではトイレが不足し、「対策がとられるようになっていますが、いまだにトイレが少ない一帯では、しばしば大量の汚物が放置されているのが発見されています。」（資料２）とあることだ。トイレに行きたくなってしまうのは仕方がないことである。しかし、富士山が人間の都合で汚されてしまうのは問題である。たとえ富士山を汚すつもりがない人々であっても、入山を規制する必要があるのではないだろうか。

資料３にあるような、市民ボランティアによる清掃活動の取組などを考えると、たくさんの人が入山して富士山を守るべき、という考え方もあるだろう。しかし、危険物質や汚物で汚れた広い範囲の自然を元通りにするのは、一般の人々には難しい。汚れてしまってからでは遅いのである。

以上のことから、ぼくは、富士山を守るために、人々の入山を規制することが必要だと考える。

○段落数…五段落　○文章の型…双括型

・「はじめ」「なか」「おわり」で構成されている。
・「はじめ」の部分では自分の意見を述べている。
・「なか」の部分では、根拠を基にした理由と反論を想定した理由を挙げている。
・根拠を基にした理由は、「一つ目は」「二つ目は」と整理して述べている。
・「おわり」の部分では意見を再度述べ、読み手に意見を強く印象付けている。
・文末表現で事実と感想・意見を区別している。

図５　世界遺産に関する意見文のモデルと特徴

6　単元構成

「自分の考えがよく伝わる意見文の書き方」を単元の探究課題とし、次のような単元構成で授業実践を行った（表２）。児童は、教科書教材の白神山地に関する意見文で書き方を習得し、自分で選んだ固有のテーマ（世界遺産）に関する意見文で書き方を活用する。

表２ 習得・活用・探究に基づく意見文の単元構成

過程	時	学習活動
０次		・掲示物や映像等で日本の世界遺産を知る。 ・興味をもった世界遺産の資料を集め、まとめる。
活用	1	・０次を振り返る。 ・単元の言語活動と探究課題を知る。 ・モデル文で意見文の書き方を知る。 ・自分のテーマ（世界遺産）で意見文を書く。
	2	・自分が選んだ世界遺産についての意見文を、友達と読み合う。
習得	3	・白神山地に関する複数の資料から分かることを整理する。
	4	・資料から分かったことを基に、白神山地の現状をまとめる。
	5	・モデル文等を分析し、白神山地を守るための意見文を書く。
	6	・白神山地を守るための意見文を推敲する。
	7	・白神山地を守るための意見文を友達と読み合う。
活用	8	・自分のテーマ（世界遺産）で改めて意見文を書く。
	9	・自分のテーマ（世界遺産）の意見文を推敲する。
探究	10	・自分のテーマ（世界遺産）で書いた意見文を、友達と読み合う。 ・学習を振り返り、意見文の書き方を整理する。 ・よりよい意見文について考える。

7　授業の実際

本稿では、児童の「書く意欲」と「書く技能」の向上につながったと考えられる時間を取り上げる。

０次　１か月前～

世界遺産マップを廊下等に掲示したり、教師の電子黒板に世界遺産の写真を映したりして、児童の世界遺産への関心を高めた（写真１、２）。児童が世界遺産を見て、「これ、知ってる。」と話している様子が見られた。また、世界遺産に関する家庭学習の課題を３回出し、単元の学習への準備も少しずつ進めた（図６）。

写真１　廊下に掲示した世界遺産マップ

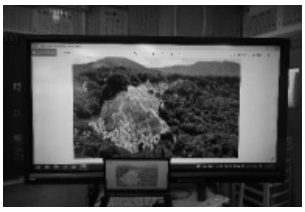


写真２　電子黒板に定期的に映した世界遺産

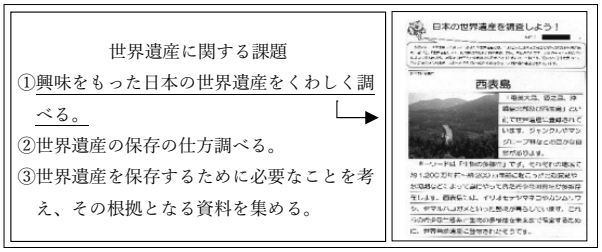


図６　世界遺産に関する課題と児童が西表島についてまとめた課題

第１時

めあて「世界遺産を守るための意見文を書こう」

０次を振り返るとともに、自然破壊等によって登録を抹消された世界遺産があることを説明した。そして、「新堀小学校の先生方に向け、世界遺産を守り、未来に残すために必要なことについて意見文を書く」という言語活動と、「自分の考えがよく伝わる意見文の書き方」という探究課題を明確にした。児童は、既習の確認やモデル文の分析をした後、０次で集めた資料を用いて自分のテーマ（世界遺産）で意見文を書いた。１か月前から書く内容を調べていたため、すべての児童がすぐに書き出すことができた。しかし、意見と根拠を結び付けられなかったり、反論を想定できなかったりする児童が多かった。

第２時

めあて「世界遺産を守るための意見文を読み合おう」

第１時で書いた意見文を友達と読み合い、自分の考えをよく伝えるために必要なことや学びたいことを話し合う活動を行った（写真３）。話合いでは、自分の考えの根拠となる資料を多く集めることや、反論を想定して説得力のある再反論をすることが必要だという意見が多く出た。それは、児童の振り返りの記述からも分かる（図７）。今の力で意見文を書いたり、文章の課題を友達と話し合ったりしたことで、児童はその後の学習に見通しをもつことができていた。

写真３　意見文について話し合う児童

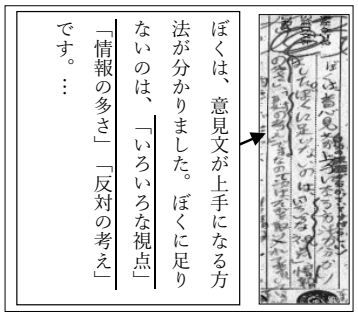


図７　第２時での児童の振り返りの記述

第６時

めあて「白神山地を守るための意見文を推敲しよう」

第５時で書いた意見文を、友達と協働して推敲する活動を行った。教師が推敲の仕方を説明した後、児童は「自分の文章→友達の文章→自分の文章」の流れで推敲し、よりよい意見文について活発に話し合っていた。３色のサイドラインによって、多くの児童が言葉の意味や働き、使い方等に着目できていた（図８）。

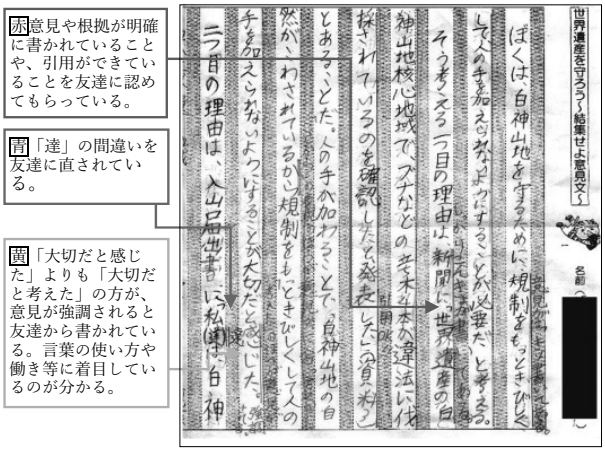


図８　３色のサイドラインで推敲した児童の意見文

第８時

めあて「世界遺産を守るための意見文を改めて書こう」

第３～６時で習得した意見文の書き方を生かして、自分が選んだテーマ（世界遺産）で改めて意見文を書いた。意見文に用いる資料を「習得」段階で並行して集めていたため、どの児童もすぐに書き始めることができた。白神山地の意見文と同じ文章構成で、意見と事実を区別しながら、筋道の通った説得力のある文章を多くの児童が書くことができた。主述を整えることや文末表現の区別は９割以上の児童ができていた。

第10時

めあて「世界遺産を守るための意見文を読み合おう」

児童は、自分が選んだテーマ（世界遺産）についての意見文を読み合い、互いの文章のよさを伝え、さらによい意見文にするにはどんな工夫が必要かを話し合った。そして、ポートフォリオの記述を基に意見文の書き方を振り返って整理し、「意見文の書き方のポイント」として自分の言葉でシートにまとめた。この内容については、**Ⅴ成果３**に記す。

Ⅴ　成果

１　書く意欲について

授業実践後、令和４年１月に国語科に関する意識調査を行った（表３）。

表３　国語科に関する意識調査 令和４年１月実施

質問項目	児童の回答
国語のどんな活動が好きですか。	書く　好き：62%　　嫌い：38%
書く活動が好きな理由	○自分だけのテーマが楽しいから。 ○書いた文章を読み合うのが楽しいから。 ○考えが伝わると達成感があるから。
書く活動が嫌いな理由	△書くときに考えることが多いから。

その結果、書く活動について「好き」と答えた児童は62%となり、４月の結果と比べて大きく増加した。この「好き」と答えた児童は、０次で早くから書きたい内容を決め、情報を集めていた児童が多い。児童の書く意欲を高めるために、書く内容を見付ける時間を確保したのは有効であったと考える。また、児童の理由から、固有のテーマで書く活動や友達と協働して推敲する活動等が、楽しさにつながったと推察する。

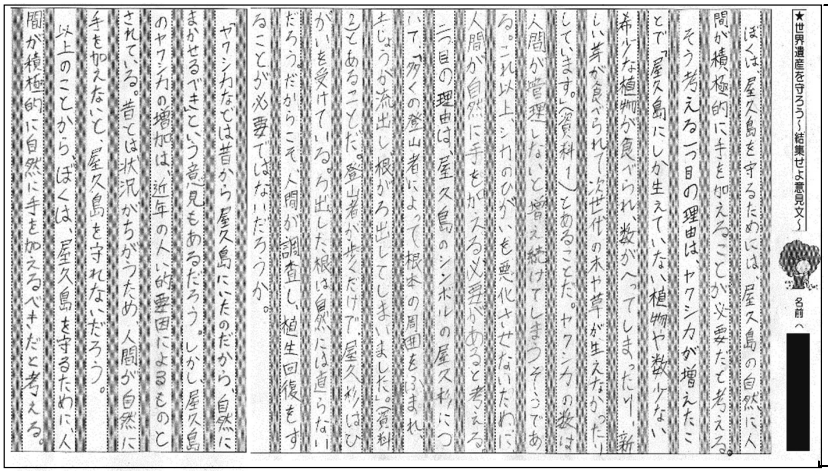
以上のことから、本研究の授業実践は、児童の「書く意欲」を高めることにつながったと考える。

２　書く技能について

授業実践では、「書くこと」に関する思考・判断・表現①の評価を行った。本単元では、自分の考えが伝わるようにするために、事実を客観的に示すこと、事実と感想・意見を関連させて提示すること、事実と感想・意見を文末表現によって明確に区別することが重要であると指導した。以上を踏まえ、次のような評価規準を作成し、児童が書いた意見文を基に評価を行った（表４）。

表４　思考・判断・表現①の評価規準

A	事実を羅列するだけでなく、事実から分かったことをまとめ、接続語を用いて、自分の意見を書いた文章につなげるなど、自分の考えがより伝わるように書いている場合
B	事実が感想・意見の裏付けとなっていて文末表現が適切な場合
C	事実が感想・意見の裏付けとして不十分であったり、文末表現が不適切であったりした場合



第２時
…意見文は根拠と意見がつながっていることが大切だと思いました。あと、意見と事実を文末表現に気を付けて書きたいです。
第５時
引用は根拠を書く段落の最初の方に書くべきだと思いました。そのほうが、根拠の印象が強まるからです。…
第６時
推敲をして、接続語の大切さが分かりました。接続語の働きで、事実と意見がつながって、考えがよく伝わるようになります。…
第８時
…「～ではないだろうか」という表現は、読んでいる人に考えを強く強調できます。小さな工夫で、自分の考えが強調できると思いました。
第９時
…今回の意見文は根拠が二つでしたが、三つあった方が説得力があると思います。

図９　A 児が屋久島をテーマに書いた意見文

図 10　A 児の振り返りの記述

本稿では、日頃は書く活動に消極的で、学力調査等で書く力が標準的なＡ児を例に挙げる。Ａ児は、屋久島を守るための意見文を書いていた（図９）。そして、①文末表現で事実と感想・意見を区別している、②資料の情報（事実）が、人間が自然に手を加えるべきという考え（意見）を裏付けている、③資料の情報（事実）を、接続語を用いて自分の考えを書いた文章につなげている、といった点からＡ評価とした。授業で学んだ意見文の書き方や工夫を生かし、自分のテーマで説得力のある意見文を書くことができていたと考える。さらに、学級のすべての児童がＢ以上の評価となった。これは、言葉や表現に着目し、意見文を３回書いた取組の成果だと考える。どの児童も、意見文を書くたびに自らの課題を自覚し、書き表し方を工夫できるようになっていった。以上のことから、本研究の授業実践は、児童に意見文を書く力を身に付けさせ、書く技能を高めることにつながったと考える。

３　深い学びの視点から

Ａ評価となったＡ児は、本研究が目指した深い学びができていたのかを考察する。Ａ児の振り返りの記述を読むと、単元を通して考えがよく伝わる文章を探究していることが分かる（図 10）。また、表現や言葉の働きに着目し、意見文の書き方を振り返っていることから、「言葉による見方・考え方」をよく働かせていることが分かる。さらに第 10 時には、ポートフォリオの記述を基に一つ一つの授業の学びを結び付け、「意見文の書き方のポイント」として学んだ知識を構造化することができていた（図 11）。

これらのことから、Ａ児は意見文の書き方の学びを自覚し、深い学びができていたと考える。だからこそＡ児は、白神山地の意見文で学んだことを、自分のテーマの意見文でも生かすことができたのだと考える。他のＡ評価の児童にも、Ａ児の学び方と同じような傾向が見られた。

以上のことから、本研究で目指した深い学びの視点での授業改善は、児童が学びを自覚して生かせるようにすることや書く技能を高めることにつながったと考える。

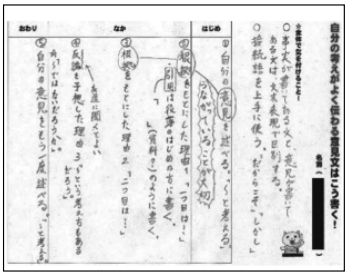


図11　A児が第10 時でまとめた意見文の書き方

Ⅵ　課題

まずは、知識の構造化について、どんな知識をどのような視点で結び付けるのかをより明確にする必要がある。今回の授業実践では、意見文の書き方に関する知識の構造化を図ったが、育成を目指す資質・能力や書く文種によって構造化が必要な知識は違うと考える。

また、単元の学習が長すぎることも課題である。今回の授業実践では、０次を含めると約１か月半の時間がかかっている。異なる文種で授業実践を繰り返し、短縮する方法を考えたい。

Ⅶ　おわりに

本研究では、児童の実態を踏まえ、「書く意欲」と「書く技能」を高めるための授業改善を行った。その中で、教師の本気が児童の本気につながる手応えを感じた。やはり、教師は指導力を磨き続けるべきである。今後も児童と本気で向き合い、実践に励みたい。

引用・参考文献

◎文部科学省 .（2018）.『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　国語編』. 東洋館
◎白坂洋一･香月正登（編著）.（2020）.「『子どもの論理』で創る国語の授業―書くこと―」. 明治図書
◎細川太輔・大村幸子（編著）.（2017）.「深い学びを実現する！小学校国語科『習得・活用・探究』の学習過程を工夫した授業デザイン」. 明治図書

Ⅱ　令和５年度研究論文募集要領

埼玉県連合教育研究会

研究論文を下記の要領で募集いたします。何とぞ奮ってご応募ください。

記

1　目　的

日々の教育実践の中から生まれた研究を会員の皆様から募集し、これを広く発表することによって本県教育の振興に資する。

2　募集内容

教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動、進路指導・キャリア教育、視聴覚教育、教育心理･教育相談、特別支援教育、学校図書館教育等の児童生徒に直接かかわる実践的教育研究として、どのように計画し、仮説を立て実践し、さらに、その結果をどのように評価し、今後の教育実践にどう発展させるか等の研究であることとします。

3　応募資格

応募者は、県内の公立小･中･特別支援学校･義務教育学校等に勤務する教員（会員）の個人及びグループの研究（学校としての研究も含む）であることとします。

4　応募規程

⑴　原稿の書式は、Ａ４判縦長･横書き、横 24 字×縦 46 行×２段組で、パソコン入力（Word）により、４～６枚以内（写真、図表を含む）とし、文体は常体（「である」体）を原則とします。
⑵　研究論文には「表紙」を付け、その上に「応募票」を添付してください。
⑶「表紙」には、①題名　②氏名（グループ代表者名）　③職名　④勤務校を記入してください。

5　応募票

⑴「応募票」は、ホームページの「研究論文応募要領等」からダウンロードしてください。
⑵「応募票」の電子データを希望される方は、下記**電話・E-mail** にて事務局までお申し出ください。
⑶「応募票」は、「個人研究」･「グループ研究」･「学校研究」別に「表紙」に添付してください。

6　応募上の留意点

⑴　応募は、１人・１グループ・１学校１編とします。
⑵　研究論文は、誌上未発表のものに限ります。
⑶「応募票」の『確約事項』の順守し、二箇所の確約事項への ☑ をお願いします。
⑷　応募された原稿は、返却しませんので、あらかじめご了承ください。

7　原稿等の提出

⑴　**令和５年９月８日㈮　必着**
⑵「応募票」及び論文原稿等の提出については、事務局へ電子メールでの送信も併せてお願いします。

8　審査結果

審査結果は、令和５年 12 月中旬に各応募者に書面にて通知します。

9　表彰等

⑴　最優秀賞･入選･佳作等に選ばれた研究論文は、令和５年度『研究集録付研究論文集』及びホームページへの掲載を行い、入賞者には、本会評議員会（総会）後の入賞者表彰式にて表彰を行います。
⑵　研究資料費として入選論文には７万円（最優秀賞は 10 万円)、佳作論文には５万円、選外の応募者にも薄謝を進呈します。
⑶　教職経験 10 年未満の方を対象に新人奨励賞（３万円）を設けています。

10　審査員

本部役員及び編集委員

11　応募先・問い合わせ先

〒 330-0804　さいたま市大宮区堀の内町１－99　さいたま市立大宮東中学校内
埼玉県連合教育研究会事務局　TEL 048-641-0808　　FAX 048-645-1922
E-mail　saitamakenrengoukyouiku@jcom.home.ne.jp
ホームページ URL　https://sairenkyou.jp/

令和５年度研究論文応募票

令和５年度研究論文応募票 【　個人研究用　】				
受付番号	※	※	教科名等	
題　　名				
勤務校	フリガナ			
職・氏名	職　名	フリガナ		
年　　齢		教職経験年数		
※ 確約事項 ☑ をお願いします。	□　他のコンクール等に応募し、入賞された場合は、応募を自ら辞退することを確約します。 □　過去応募した同一また類似した内容の研究論文ではないことを確約します。			

埼玉県連合教育研究会

令和５年度研究論文応募票 【　グループ研究・学校研究用　】						
受付番号	※	※	教科名等			
題　　名						
代表者 勤務校	フリガナ					
代表者 職・氏名	職　名	フリガナ	年齢		教職経験年数	
研究者の構成						
※ 確約事項 ☑ をお願いします。	□　他のコンクール等に応募し、入賞された場合は、応募を自ら辞退することを確約します。 □　過去応募した同一また類似した内容の研究論文ではないことを確約します。					

埼玉県連合教育研究会

研究論文用表紙　必須項目（記入例）

令和５年度研究論文

①　題　名　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
～　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○　～

②　氏　名　○○○　○○○
（グループ等代表者名）

③　職　名　○○○○○○○

④　勤務校　○○○○○○○立○○○○○○○○○○○○学校

令和４年度

○　埼玉県連合教育研究会
役　員　等　名　簿

【 評議員会（総会）】

【 正副会長・常任理事・理事会 】

令和４年度本部役員等

役職		氏名	勤務校
会長		澤田純一	さいたま市立大宮東中学校
副会長		小林正美	さいたま市立大宮八幡中学校
		伊藤潔	上尾市立上尾中学校
		藤井文則	富士見市立勝瀬小学校
		森田健二	熊谷市立籠原小学校
		坪井俊治	吉川市立関小学校
事務局長		渡辺俊行	さいたま市立大宮東中学校
常任理事	さいたま	藤澤美智子	さいたま市立本太小学校
	南部	小出喜代子	川口市立領家中学校
	南部	岩渕健志	草加市立小山小学校
	西部 入間	長谷川陽子	所沢市立南小学校
	西部 比企	下村晴恵	嵐山町立菅谷小学校
	北部 秩父	浅見博美	長瀞町立長瀞第一小学校
	北部 児玉	岡村和美	本庄市立本庄南小学校
	北部 大里	加藤修	深谷市立上柴西小学校
	東部 北埼	樋口成久	羽生市立須影小学校
	東部 埼葛	西田知巳	越谷市立南越谷小学校
理事	書写	堀越敦	行田市立行田中学校
	音楽	藤川英子	戸田市立美谷本小学校
	道徳	藤澤美智子	さいたま市立本太小学校
	心理相談	金井健治	坂戸市立住吉中学校
監事		藤谷健二	富士見市立関沢小学校
		堀川大輔	熊谷市立桜木小学校
		秋山弘幸	越谷市立桜井南小学校
編集委員長		越智宏明	さいたま市立与野西中学校
編集委員		笠原雅広	埼玉大学教育学部附属小学校
		大塚悠希	埼玉大学教育学部附属中学校
		石川和宏	埼玉大学教育学部附属特別支援学校
		小代美智子	さいたま市立道祖土小学校
		大島綾子	蕨市立南小学校
幹事		山口祐貴子	さいたま市立大宮東中学校
		相馬兼人	さいたま市立大宮東中学校

令和４年度教科等研究団体

No.	研究団体名	団体長名 事務局長名	団体長勤務校 事務局長勤務校
1	埼玉県国語教育研究会	金子　正 吉野竜一	久喜市立太田小学校 埼玉大学教育学部附属小学校
2	埼玉県書写教育研究会	堀越　敦 秋野眞由美	行田市立行田中学校 さいたま市立城北小学校
3	埼玉県社会科教育研究会	増田正夫 石高吉記	加須市立加須小学校 埼玉大学教育学部附属中学校
4	埼玉県算数数学教育研究会	今泉達也 関口泰広	上尾市立上尾小学校 埼玉大学教育学部附属小学校
5	埼玉県理科教育研究会	郡　豊 山本孔紀	川口市立芝西小学校 埼玉大学教育学部附属中学校
6	埼玉県音楽教育連盟	藤川英子 納見　梢	戸田市立美谷本小学校 埼玉大学教育学部附属小学校
7	埼玉県美術教育連盟	勝山寛美 坂井貴文	上里町立上里中学校 埼玉大学教育学部附属小学校
8	埼玉県保健体育研究会	中西健二 首藤祐太朗	三郷市立幸房小学校 埼玉大学教育学部附属小学校
9	埼玉県英語教育研究会	青野　保 蓬澤　守	蓮田市立黒浜西中学校 埼玉大学教育学部附属中学校
10	埼玉県道徳教育研究会	藤澤美智子 清水良江	さいたま市立本太小学校 鴻巣市立広田小学校
11	埼玉県特別活動研究会	梅田竜平 野村佐智夫	新座市立東北小学校 狭山市立御狩場小学校
12	埼玉県進路指導・キャリア教育研究会	堀川博基 根本博樹	富士見市立富士見台中学校 富士見市立富士見台中学校
13	埼玉県学校視聴覚教育連絡協議会	清水　肇 四方孝明	さいたま市立大宮南小学校 八潮市立八條北小学校
14	埼玉県教育心理・教育相談研究会	金井健治 五十嵐晴彦	坂戸市立住吉中学校 坂戸市立住吉中学校
15	埼玉県特別支援教育研究会	内河水穂子 仙石大吾	さいたま市立ひまわり特別支援学校 埼玉大学教育学部附属特別支援学校
16	埼玉県学校図書館協議会	天達新一 中井美穂	川越市立寺尾中学校 越谷市立武蔵野中学校
17	埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会	安藤義仁 伊藤　誠	蓮田市立黒浜中学校 春日部市立春日部南中学校
18	埼玉県小学校家庭科教育研究会	小峯由起子 蓮井　望	羽生市立羽生北小学校 埼玉大学教育学部附属小学校
19	埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会	田中京子 横田典久	蕨市立西小学校 埼玉大学教育学部附属小学校

令和４年度地域教育研究団体

旧事務所	No.	地域団体名	団体長名 事務局長名	団体長勤務校 事務局長勤務校
南部	1	埼玉大学教育学部附属小学校	細川江利子 神谷直典	埼玉大学教育学部附属小学校 埼玉大学教育学部附属小学校
	2	埼玉大学教育学部附属中学校	安藤聡彦 山本孔紀	埼玉大学教育学部附属中学校 埼玉大学教育学部附属中学校
	3	さいたま市教育研究会	小林正美 縫正也	さいたま市立大宮八幡中学校 さいたま市立大宮八幡中学校
	4	川口市教育研究会	小出喜代子 若林拓海	川口市立領家中学校 川口市立在家中学校
	5	草加市教育研究会	岩渕健志 岩渕健志	草加市立小山小学校 草加市立小山小学校
	6	蕨市教育研究会	菅原義裕 佐々木透	蕨市立東小学校 蕨市立東小学校
	7	戸田市教育研究会	鈴木薫 大沼公子	戸田市立戸田南小学校 戸田市立戸田第一小学校
	8	志木市教育研究会	阿部剛 佐藤寿朗	志木市立志木小学校 志木市立志木小学校
	9	朝霞市教育研究会	嶋徹 唐松善人	朝霞市立朝霞第七小学校 朝霞市立朝霞第八小学校
	10	新座市教育研究会	金澤勇一 浜田祐加	新座市立東野小学校 新座市立新座小学校
	11	和光市教育研究会	辻英一 丸山陽平	和光市立広沢小学校 和光市立広沢小学校
北部	12	埼玉大学教育学部附属特別支援学校	吉川はる奈 池澤健	埼玉大学教育学部附属特別支援学校 埼玉大学教育学部附属特別支援学校
	13	鴻巣市教育研究会	関根正味 森奈緒子	鴻巣市立鴻巣東小学校 鴻巣市立鴻巣東小学校
	14	北本市教育研究会	大竹達也 井上正博	北本市立中丸小学校 北本市立中丸小学校
	15	上尾市教育研究会	中島晴美 古澤透	上尾市立平方北小学校 上尾市立平方北小学校
	16	桶川市教育研究会	相澤仁志 増田公之	桶川市立加納中学校 桶川市立加納中学校
	17	伊奈町教育研究会	今田利信 黒太剛生	伊奈町立小針中学校 伊奈町立小針中学校
入間	18	川越市教育研究会	天達新一 庄村直子	川越市立寺尾中学校 川越市立寺尾中学校
	19	所沢市教育研究会	長谷川陽子 田中丈仁	所沢市立南小学校 所沢市立中央小学校
	20	飯能市教育研究会	渡部毅 梅村亮	飯能市立原市場中学校 飯能市立美杉台小学校
	21	日高市教育研究会	久米隆寛 小林伸介	日高市立武蔵台小学校 日高市立高萩小学校
	22	狭山市教育研究会	鈴木浩明 田中康裕	狭山市立入間川中学校 狭山市立入間川中学校
	23	入間市教育研究会	浅見信治 大野幸広	入間市立上藤沢中学校 入間市立上藤沢中学校
	24	富士見市教育研究会	武田圭介 鈴木洋	富士見市立鶴瀬小学校 富士見市立鶴瀬小学校
	25	ふじみ野市教育研究会	村越澄子 國井創	ふじみ野市立さぎの森小学校 ふじみ野市立さぎの森小学校
	26	坂戸市教育研究会	鈴木博貴 萩原雄磨	坂戸市立南小学校 坂戸市立南小学校
	27	鶴ヶ島市教育研究会	久保吉則 熊谷千佳子	鶴ヶ島市立藤小学校 鶴ヶ島市立藤小学校
	28	越生班教育研究会	熊田奈緒美 深田陽作	毛呂山町立泉野小学校 毛呂山町立泉野小学校

旧事務所	No.	地域団体名	団体長名 事務局長名	団体長勤務校 事務局長勤務校
入間	29	三芳町教育研究会	宇佐美 宏 一 一水 昌比古	三芳町立藤久保小学校 三芳町立藤久保小学校
比企	30	東松山市教育研究会	鷲巣 明 喜 内田 恵 子	東松山市立新明小学校 東松山市立新明小学校
	31	小川班教育研究会	下村 治 瀧澤 彰 滋	小川町立東中学校 小川町立東中学校
	32	菅谷班教育研究会	下村 晴 恵 荒川 統	嵐山町立菅谷小学校 嵐山町立菅谷小学校
	33	玉川班教育研究会	栗田 秀 人 萩原 幹 夫	ときがわ町立玉川小学校 ときがわ町立玉川小学校
	34	川島教育研究会	佐藤 香 織 児玉 暁 直	川島町立西中学校 川島町立西中学校
	35	吉見教育研究会	小林 克 則 中村 幸 徳	吉見町立南小学校 吉見町立南小学校
秩父	36	秩父教育研究会	浅見 博 美 坂本 浩 朗	長瀞町立長瀞第一小学校 長瀞町立長瀞第一小学校
児玉	37	児玉郡本庄市教育研究会	岡村 和 美 宮田 雄 一	本庄市立本庄南小学校 本庄市立本庄南小学校
大里	38	熊谷市教育研究会	齊藤 豊 江原 誠	熊谷市立妻沼東中学校 熊谷市立妻沼東中学校
	39	深谷市教育研究会	加藤 修 五十嵐 誠	深谷市立上柴西小学校 深谷市立上柴西小学校
	40	寄居町教育研究会	関口 葉 子 飯野 ゆかり	寄居町立用土小学校 寄居町立用土小学校
北埼	41	行田市教育研究会	中居 武 司 杉山 高 音	行田市立泉小学校 行田市立忍小学校
	42	加須市教育研究会	安藤 康 浩 森田 美智子	加須市立大利根東小学校 加須市立大利根東小学校
	43	羽生市教育研究会	樋口 成 久 豊田 英 二	羽生市立須影小学校 羽生市立須影小学校
埼葛	44	春日部市教育研究会	大島 薫 平澤 俊 一	春日部市立緑中学校 春日部市立緑中学校
	45	越谷市教育研究会	佐々木 清 相澤 伸 之	越谷市立蒲生小学校 越谷市立蒲生小学校
	46	久喜市教育研究会	金子 正 天谷 佐知子	久喜市立太田小学校 久喜市立太田小学校
	47	三郷市教育研究会	中村 和 美 小檜山 佳代子	三郷市立丹後小学校 三郷市立丹後小学校
	48	蓮田市教育研究会	的場 敏 幸 武井 理	蓮田市立蓮田南中学校 蓮田市立蓮田南中学校
	49	幸手市教育研究会	野口 祐 人 中根 稜	幸手市立西中学校 幸手市立西中学校
	50	八潮市教育研究会	佐々木 京 子 薄井 好 人	八潮市立松之木小学校 八潮市立松之木小学校
	51	杉戸町教育研究会	但木 和 久 関根 祐 介	杉戸町立杉戸中学校 杉戸町立杉戸中学校
	52	吉川市教育研究会	小山 悟 橋本 隆 弘	吉川市立吉川小学校 吉川市立吉川小学校
	53	松伏町教育研究会	齋藤 明 山崎 京 子	松伏町立松伏中学校 松伏町立松伏中学校
	54	白岡市教育研究会	新井 範 夫 渡辺 伸 介	白岡市立菁莪中学校 白岡市立菁莪中学校
	55	宮代町教育研究会	長井 勝 利 平原 隆 範	宮代町立前原中学校 宮代町立前原中学校
入間地区連合教育研究会			石井 伸 明 谷口 泰 夫	川越市立霞ケ関中学校 川越市立芳野小学校
埼葛連合教育研究会			西田 知 巳 落合 浩 之	越谷市立南越谷小学校 越谷市立南越谷小学校

あ　と　が　き

ここに、令和４年度埼玉県連合教育会の「研究集録付研究論文集」を、まとめることができました。原稿をお寄せくださいました各教科等研究団体及び地域研究団体並びに研究論文入賞者の皆様に、深く感謝申し上げます。

本年度は、18 編の研究論文が県内各地より寄せられました。全て個人による研究論文で、教員経験年数も３年目の方から 47 年目（10 年目以下の方が８名、20 年目以下の方が８名、21 年目以上の方が２名）の方までと幅広い世代の方から、それぞれの世代だからこそ感じられる現代教育への課題と実践について拝読し、深く敬服した次第です。これからの埼玉教育について、多くの方の叡智が結集されるであろうことに、大きな期待を寄せております。

現在、我々教員を取り巻く環境は、大きな転換期に差し掛かっております。学習指導の DX 化、部活動の地域移行、そして教員の働き方改革と、これまでの常識とは大きく離れた価値観やスキルが求められています。今回お寄せいただいた研究論文はどれも、そうした現在の教育事情を踏まえ、自校の課題と照らし合わせながら、児童生徒に何が必要かを具体的なデータを基に分析された貴重な提案ばかりでした。

編集委員会では慎重に審査を行い、この中から「最優秀論文」１編、「入選論文」１編、「佳作論文」２編、「新人奨励賞論文」１編を入賞作としました。

入賞した研究論文に共通した高い評価として、

①　今日的な課題を踏まえ、具体的な理論・実践が述べられているもの

②　仮説、検証、提案が明確で、筋の通った研究であること

③　データがよくとれていて、確かな根拠に基づいた分析をしていること

などが挙げられます。

残念ながら選に漏れた研究論文につきましても、「児童生徒が生き生きと活動する」ための具体的な手立てが明示された意欲にあふれる論文が数多く見られ、教育研究としての価値は高いものがあったと全ての編集委員が認めたところです。

「研究集録付研究論文集」に付しました研究論文をお読みいただき、県内各会員の皆様の明日からの実践にお役立ていただければ幸甚です。

結びに、今回ご応募いただいた先生方に心より感謝を申し上げますとともに、願わくは次年度におきましても、これらの論文に触発され、確かな実践に裏打ちされた貴重な教育研究論文が幅広い年代の先生方から、また、県内各地から結集されますことを期待しております。

編集委員長　越智　宏明　　さいたま市立与野西中学校長

令和４年度　**埼玉県連合教育研究会「研究集録付研究論文集」**

令和５年３月７日　　印　刷
令和５年３月14日　　発　行

発　行　者　埼玉県連合教育研究会
　　会長　澤　田　純　一
印　刷　所　関東図書株式会社
　　ＴＥＬ　048（862）2901

埼玉県市町村マップ

- ○　越生班教育研究会【越生町・毛呂山町】
- ○　秩父教育研究会【秩父市・横瀬町・小鹿野町・皆野町・長瀞町】
- ○　児玉郡本庄市教育研究会【本庄市・上里町・美里町・神川町】
- ○　小川班教育研究会【小川町・東秩父村】
- ○　菅谷班教育研究会【滑川町・嵐山町】
- ○　玉川班教育研究会【鳩山町・ときがわ町】